

---

# 1 2 粒のラブソディー

樹林

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

12粒のラブソニー

### 【Nコード】

N2075F

### 【作者名】

樹林

### 【あらすじ】

ごくごく平凡で、どこにでもいる高校生の森澤和人。和人は平凡を誰よりもこよなく愛すのだが、そんな和人の元にメイド服の美少女が！ちよつとエッチで、ちよつと戦い、ちよつと平凡な日常から離れた話です。

\* 一話がとても長いのでPCをお勧めします。

\* 一話がとても長いので何度かに分けて投稿する場合があります。

その場合は活動報告でお知らせしたいと思います。

## 登場人物 \*ネタバレ有要注意

### 登場人物

もりさわ かずと  
森澤 和人

ごくごく平凡な高校生。何事も長続きしない飽きやすい性格をしている。好きな事は平凡な日常。嫌いな事は予期せぬ展開に自分が巻き込まれること。また、佳奈とは二卵性の双子の兄。ちなみに高校は三日月高校。

もりさわ かな  
森澤 佳奈

和人の妹。和人の平凡な顔つきや性格とは正反対に可愛い顔つきと今時の女子高校生。和人で遊ぶのが好きだったりする。好きな事は兄いじり。嫌いな事はトマトについて話すこと。

むらい たかあき  
村井 貴明

三日月高校にかよう和人の幼馴染。和人ラブで如何なるときでも和人の側にいたいと思っているが、和人が認めない。また、アニメを見たりフィギュアが好き。特技にハッキングがあるが、これをどこで学んだのかは誰も知らない。好きな事は和人と一緒にいる時間。嫌いな事は和人といちゃつく異性を見ること。

むらい ミク  
村井 ミク

貴明の妹。まだ小学校に入ってもいない小さい子ども。貴明同様に和人ラブ。

かまたに みづ  
釜谷 美羽

三日月高校に通い、和人のクラスメイト。誰もが認めるツンデレ娘。さらにはその才能からツンデレ喫茶にスカウトされる始末。

加名盛 かなもり ユイ

三日月高校に通うお嬢さま。毎朝何かと和人に絡み、ヒステリックをおこす。言葉では異性とかかわりの無い和人に仕方なく毎朝話しかけている。そう言っているが、内心では……

西尾 にしお 真琴 まこと NEW

三日月高校のマドンナ的存在。色々な事があり、和人と付き合うようになる。和人を和くと慕っている。

田中先生 たなかせんせい

和人の担任。いかつい。

金田 かねだ 裕輔 ゆうすけ

三日月高校に通い、和人のクラスメイト。和人とは一緒にいることが多い。

石井 いしい 直人 なおと

三日月高校に通い、和人のクラスメイト。和人とは一緒にいることが多い。

京道 きょうみちう 孝介 こうすけ

ゲームを考えた張本人。白い肌に細い体。ヘタレを象徴したかのようなやさ男。イニシャルのK・Kの本人でもある。

一月 睦月 むつき

和人のパートナー。普段着がメイド服のちよつと物忘れが多い子。  
何かと和人とイジルののが好きで、よく本当半分嘘半分の話をする。  
能力は闇。影を自在に操る。

二月 如月きんぎょつき

三月 弥生やよい

四月 卯月うしつき

五月 皐月さつき

パートナー予定をしていた人にイヤミを言われ、契約をしなかった。そのため誰とも契約しないまま和人と睦月に近寄る。ボーイッシュな性格と口が非常に悪いため、ゲームが始まる前から友達はいない。能力は不明。

六月 水無月みなづき

睦月に手を組もうと持ちかける。それ以外は不明。能力は土。土のスペシャリスト。

七月 文月ふみつき

八月 葉月はづき

九月 長月ながつき

十月 神無月かんなづき

十一月 霜月しもつき NEW

情報进行操作する。脳に直接違った情報を流しこみ、それを受けた

人はあたかもその情報が正しいように思える。

十二月 師走<sup>しわす</sup>

## 一月 睦月

0

運命の出会いとは実はあったりする訳だ。

没頭から何ロマンティストみたいなのを言ってやがる。そう思われても仕方がない。俺だってこんな事を白昼同道と言うはずもなければ、誰かがこんな事を言っていたら確実に変な目で見るだろうが、そういった夢見る少女的な事を否定していても、本当にそんな出会いがあれば今まで否定してきた事でも信じてしまう。そう仮に「俺のペット（チワワ）が喋った！」とか友達が言うとしよう。普通ならこいつの頭大丈夫？ とか思ったりする訳だが、実際に喋っているところを見たら幻聴だろうが何だろうが信じなければならぬ。ちよつと表現があれだが、そのところはスルーしてほしい。それはそうと、どうして俺が運命の出会いやら言っていたのかといえば、複雑かつ壮大な理由があったりする。ちよつと興奮（徹夜でカラオケをした時に起きるナチュラルハイのような感じだ）していてそこまでの理由かもしれないが、取り敢えず普通ではありえない出会いがあったのだ。

と、その前に一応自己紹介でもしておこう。

俺の名前は森澤和人。自称学校のアイドルで学校では名の知れたナイスガイだ。……ごめん、嘘です。ごくごく普通で、どこにでもいそうな平凡かつちよつと地味な高校二年生です。ちなみに学校の名前は三日月高校。ちよつと高校の名前にしては少しばかり場違いな名前だ。きつと名前をつけた人は酔っていたに違いない。

その日もごくごく普通な土曜日の夜。

時間は二十一時をまわり、世間の良い子は心地よく眠っている時間帯だろう。もちろん俺は良い子でもなければ悪い子でもない、普通すぎる性格でこれといった特技もなければ趣味もない。まあ、一つだけ特技があるなら自転車のパンクが直せるぐらいだ。それでも特別凄い事でもない。学べば誰だってできる事だしな。

俺の住んでいるところは山の中で、最近はやりの住宅街とかではなく、普通に山の中にある。そのため一番近い家でも家三個分ぐらい離れている。その家を除けば歩いて数分ぐらい距離がある始末だ。そんな山の中に家があるため、コンビニは当然ないし、スーパーといえるような大層な造りをした建物もない。あるのは個人営業の店ぐらいだ。

普通に道はアスファルトで、歩く事にだけは不自由はしない。それでも都会っ子のように夜にちよつとコンビニまで、そんな事はできるはずもなく。さらに夜の山は少々危険で、イノシシやら熊が出てくる可能性がある。そのため消去法で俺は自室で漫画やらテレビを見る以外はすることがない。

俺は少々飽きっぽいところがあるのか、小学生の頃に買ったお小遣い帳は使う前から机の引き出しに封印したぐらいだ。それ以外にも日記やら絵画やら、色々なことに挑戦するが続く事はなかった。それでも唯一日課らしいのがある。

「よつこらしよつと」

そんな掛け声と一緒にベランダの柵（ベランダから落ちないように周りに囲ってあるやつ）に足を乗せて思いつきり屋根に上る。

俺の日課は晴れた日は大抵屋根に上っていることだ。ここにいと嫌な事を忘れさせてくれるし、天然のプラネタリウムのように星が綺麗だからだ。

今日もいつもと同じ星空を見ようと思い、屋根にきてみれば先客がいた。普通ではありえない場所にいる先客に俺は言葉を失った。だってベランダは俺の部屋にあり、そこからじゃないとこの屋上に



はこれないからだ。隣の家から跳び移ろうにも相当の距離があるし、なによりその先客の服装がまた山には不釣り合いで、マニアックすぎる綺麗な女性が立っている。

屋根の上に立っている彼女は全身……なんといいですか、メイド服ってやつ？ それを着込んでいた。いや、本当に彼女は何なのだろうか。つか、シユール過ぎて少し笑えてきた。

クスリと鼻で笑う俺とは裏腹に、彼女はぶつと頬を膨らませる。

「何が可笑しいのですか？」

そう言って彼女は少し頬を赤らめた。

彼女は美しい。サラサラな黒く長い髪。その髪を自然に垂らし、少し風になびかせていた。顔立ちも実に素晴らしい。大きな目に、ずっと見ていると吸い込まれそうな綺麗な瞳。鼻も整っており、さらには小さな口。その申し分ない顔のパーツを引き出している小さな顔。そんな女性を俺は今までに見たことがなかった。

「いや、何でもないよ。……それで、君はだれ？」

メイド服に氣をとられてすっかり忘れていたが、目の前に立っている彼女が誰なのかはつきりさせる必要がある。こんな美人な人が泥棒とかなら話は別だけど。いや、それはありえないか。だってメイド服だし。

さっきまでの顔とは一変し、彼女は凜と俺の顔を見つめる。

「貴方……森澤和人様は私の主です。これから末永くよろしく願っています」

そして四十五度の礼。

いやいや、全く理解できない。これだけで分かることは彼女が美人だという事と、メイド服だって事だけだ。それ以外は何がなんだかサッパリだ。

運命の出会いとは実に唐突である。

……。

……。

いや、まだ出会って数分だ。これを運命とは言わないな。運命とはもっと時間を積み重ねて、最終的に付き合う、または結婚する時に使う言葉だ。

人との出会いは時には唐突である。

そっちの方がしっくりくる。

あと、メイド服は山と一般家庭には似合わない。

これもまた今日学んだ事だ。やっぱりメイド服はそれ同様の場所に似合うもので、ちょっと古ぼけた木造作りの家には決して似合わない。着物を着てどこからどう見てもお淑やかそうな人が日本酒の一升瓶を片手に机の上で暴れているぐらいミスマツチだ。

それはさておき、これが俺と彼女が出会った時だった。

ドラマ（主にサスペンス劇場の主人公が良く口にする言葉）でよく「まさか、これから俺にこんな事が待ち受けているなんて誰が予想していただろうか」とか何とか言っているが、まさに今の俺はそんな感じだ。こんな事を事前に分かっていたら、こんな怪しい人にわざわざ会うために屋根には上らなかった。

だけど一つ今後の事で分かることがある。それは多分だが、今の生活からかけ離れること間違いなしだ。これだけは断言してもいいだって突然「私の主」とか言うほどだからね。

ああ、この人とは違った出会いで会いたかった。そう彼女を見ながら俺はふと感じた事だった。

1

「それで君の名前は？」

場所は屋根の上のままだ。

俺は名前の知らない彼女の隣に腰を下ろし、座ろうとしない彼女を見上げる。

今日は満月だけあり、月の光で軽く照らされているものの、基本ここは山である。そのためにはつきりと表情を見る事はできなかった。「私の名前は睦月といます。睦月とは旧暦で一月の呼び名です。今ではあまり使われていません」

「……そう。それで、睦月さんはここで何を？ それ以前にどうして俺の事を主とか言っていたのさ？」

名前ははつきりしたが、それについてはしつかり聞いておく必要がある。

「それにつきましては……いえ私の口からはお伝えできる事はこれだけあります」

何それ。そんなに重大な事なのか？ それとも言えないような事をしようとしていたのか？ 分かん。

「……まっ、いいや。取り敢えずその敬語と、俺の事を主様って言うのや止めてもらってもいいかな？ できれば普通にしてくれると俺としてはありがたいのだが、どう睦月さん？」

言うまでもないが、俺はごくごく普通な生活を今までに送ってきた。そんな中でメイドさんに主様とか言われるのは気持ちだけお金持ちになった気分になって少し嬉しいが、それでも現実はお金持ちでは談じてない。あるのは畑だけで、そんな俺に敬語を使うのも少し変な話した。できるなら素の睦月と話したいと思っている。

睦月は徐に座り、グターっとそのまま仰向けになった。いや、いったい何をしているのだろうか。ナチュラルすぎだろう。

「あゝ、あのキャラって私に合ってないから疲れた。けど和人としては勿体ない事をしたか思っているでしょ？ あっ、私の事は呼び捨てでいいよ。その代わりに私も和人って呼ぶから」

「……」  
普通にしろと言ったのは他の誰でもなく俺なのは変えられない事実なのだが、いささかこれは普通すぎだろう。もう少し適度があってもいいと思う。

素とキャラの激しすぎるギャップに一瞬俺は言葉を失った。けど

本当に一瞬だった。

俺は漫画やアニメのように上手くいかないと現実を受け止めながら、睦月同様に屋根の上に横になる。

いつも座ったまま空を見上げているため、少し目線を変えてみればまた違った星空を見ているような気がした。

「いや、勿体ないとか思っていないよ。これくらい普通の方が逆に接しやすいからね。それで、もう一度聞くけどどうして睦月はここに？」

「正直に言えば、私も詳しく今の状況を理解してないのよね。何て言うのかな？ 教えられる前に飛び出してきた？ そんな感じかな。できることなら逆に私が教えて欲しいくらいだよ。あつ、一瞬私の事バカとか思ったでしょ？」

「……」

「ご名答。さすがに俺を主と言うぐらいだから、それ相当の理由を知っておく必要があるだろう。それなのに「あたしも詳しく理解していない」それはダメだろう。」

睦月はギロリと俺を一睨みするものの、直ぐに視線を星空に戻す。

「本当の事だから別にいいけどね」

「なあ、どうしてわざわざキャラやらメイド服で俺に会いにきたの？ 疲れるなら今のままでも良かったと思うけど？」

「あゝ、男の子はさっきのキャラと、この服ならイチコロで落とせる。そう教えてもらったから」

あながち嘘ではないかもしれない。けど、キャラとメイド服のコラボは特定の人限定に絶大な人気かもしれないが、全ての健全な男子って訳ではないけど。

「誰がそんな事を？」

「このくだらないゲームを決めた人よ」

「？ 何のゲーム？」

「さっき言ったでしょ？ 私は和人の盾で剣だって。それで最後に残った人がハッピーなエンディングが待っているって」

……聞いてないけど。

「……さっき今の状況を理解していないとしか言っただけだと思っただけ……。それ以前に俺の盾と剣になってどうするの？」

「あれ？ そうだったかな？ ごめん、ごめん。なら一度しか言わないからしつかり聞いてね。私と和人はパートナーで、旧暦で一月から十二月の名前がこの戦いの駒となるの。それで見事最後まで生き残った月とパートナーに凄く良いことが待っているの。ちなみに良いこと以降から抜け出して聞いていないから、どんな事が待っているのか私にはさっぱり」

先走ったって訳だな。そこが一番重要なのに、どうしてこの偽メイドさんは何も聞いていないのだろうか。全く困った人だ。

そんな事をサラサラと睦月は言うのだが、非常に信じられない。何の利益があって戦いをしなければならないのだろうか。それに戦いとなったらパートナーであり、主である俺にも被害が食うかもしれない。争い事は得意じゃないから、できるなら穏便に事を済ませたい。

「……百歩譲って今の話を信じよう。だけど、どうして俺がパートナーになったの？」

「この戦いを考えたロクデナシに聞いてちょうだい。ちなみに、ロクデナシが決めたパートナーは変更可能なのよ」

それがあるなら早く言ってくれよ。早く普通の日常に戻りたい。

まだ普通でない日常を味わってはいないけどね。

「けど、私達に決定権があって、主には決定権がないから和人には関係ないけどね。まあ、本当に私達がこの主を嫌だと思った時だけ他の人とパートナーを決める事ができるの。それ以外はいかなる理由でも交代はできない。私は和人の事は少し気に入ったから変更はしないよ。まっ、これも運命だと思って諦めてよ」

本当に俺には関係のない話だ。それならどっちが主で、どっちがそうでないのか区別がつかない。

睦月は嬉しそうに俺に視線を移す。

その時の笑顔が可愛くって少しだけドキリとした。

「……詳しい話はまた明日にして、今日はもう帰ったら？ 一応まだ最終のバスがきてないから、それに乗れば駅まで行けるはずだよ」  
「そうね、なら私は先に戻るとするかな」

睦月は体を起こして、ううっつと唸りながら両手を思いっきり上げて伸びをする。

少し日本語が変だが、今は取り敢えずスルーしておこう。

「んじゃ、お先に」

それだけを言い残して睦月は屋根から飛び降りる。ちなみに、飛び降りた位置はベランダ辺りだから心配はない。

どこに住んでいるのか分からないが、睦月の姿が見えなくなってから大きなため息をついた。

全く現状を理解していないが、何とかなるだろう。そんなポジティブ精神を全開に俺も立ち上がる。

「よっこらせつと」

と、ジジくさい事を呟きながら屋根から落ちないようにベランダに着地する。

部屋に通じる大きな窓をガラガラと音を立てながら部屋に入る。ちなみに、着地と同時に目にゴミが入ったため、目をこしこしと擦りながら部屋に入った。

俺の部屋は今日の昼に掃除をしたばかりだったから、床にゴミなどは落ちていない。だから何の障害もなく、前を見なくてもベッドに座ることができた。

それから数十秒後にようやく目のゴミが取れた。

「っ！？」

それと同時に声にならない叫びを上げ、そのままベッドの上を後退。それほど大きなベッドじゃないため、直ぐに壁にたどりつき。

ドン！

と、隣の部屋にまで聞こえるくらい後頭部と背中を強打する。

どうして俺がここまで身を犠牲に壁に激突したかと言えば、俺が

DMだからでは決してない。ただ、部屋の中央にあるコタツ机とペアの座布団に座りながら、メイド服を着込んだ人がお茶をすすっているからだ。

俺はヒリヒリする後頭部をさすりながら、今の状況を理解するため偽メイドを一瞥する。

「和人はどうしてそんなに不思議そうに私を見ているの？　もしかしたら私の顔に何か付いている？」

「ど、どうしてここに？　帰ったのじゃ……」

「？　どうして私がわざわざ変える必要があるのかな？　和人は私の主なら。その主がいる場所に私がいなくてどうするの？」

「……ここに居座る、と？」

「私はそのつもりよ。何か問題でもあるの？」  
問題だらけです。

この偽メイドは一体何を考えているのだろうか。一応俺だって健全な一男子高校生であり、ひよんな事から本能の赴くままに行動すると分らない男と一緒にの部屋に寝泊りするのは大いに問題だ。

「も、問題だら……」

以降の言葉はあいにく声に出す事はできなかった。

「一人でなに騒いでいるの！？　ちよつと静かに……おじやましました」

一応俺には双子の妹がいる。二卵性の双子で、俺の地味でごくごく普通の性格とは正反対の妹がドアを思いつきり開けて怒鳴るや否や、睦月の存在に気づいてそつとドアを閉める。

俺と妹の性格が正反対なのは隠しようのない事実だ。髪の色は校則違反と知りながら茶色だし、地味な顔の俺（誰かに俺イケメン？　そう聞けば高確率で普通と答えるほど）とは正反対で目はパツチリしているし、髪だって今時の髪型をしている。自分の妹をこう言うのは少々あれだが、可愛いほうの部類に入る。そして俺はダメな遺伝子だけを受け継ぎ、本当に兄妹なのかも疑われている。一種の都市伝説となりそうなほどだ。ああ、理不尽な世の中だ。ちなみに

妹の名前は佳苗で俺とは別の高校を行っている。

妹はかなり動揺しているのか、ドアを閉めた瞬間に「お母さん大変だよ！ 兄さんが変なプレイに目覚めてメイドさんと口では言えないあんなことやこんなことしているよ！！」そんな叫び声が聞こえてきた。いや、話を大げさにしないでくれ。頼むから。

睦月は最初だけキョトンとしていたが、直ぐに小さくクスクスと笑い始める。

「和人の妹さんは面白い子だね」

「……能天気だな」

「どうせ私の存在がばれるのは時間の問題だったでしょ？ それなら早めに話をしといた方が気楽でいいじゃない」

「そうだけど……母さんになって言ったらいい……」

訳のわからないゲームに強制的に参加させられて、今日からこの人と一緒に暮らします。そんな事は口が裂けても言えない。

一階の居間からは混乱した馬のような悲鳴のような声が聞こえるし、いったい俺は何をすればいいのか分からずに布団を頭からかぶって現実逃避を試みる。

「私と和人は付き合っていて、彼女の私の家が改築しているから少しの間だけ泊まるとか言えはいいのよ。和人は少し考えすぎ、ほら、そんなところで丸まってないで普通にしていればいいのよ」

ギシツと音を立ててベッドが少し傾く。きっと睦月が座ったのだろう。

案の定、睦月はそう言う布団から俺の顔が出るほど退ける。そして笑顔で優しいデコピンをしてきた。

「睦月はそれでいいの？」

顔だけちよつと出しながら聞く。

「私は別に構わないよ。和人が嫌なら話は別だけどね」

「……嫌なんかじゃない……よ」

そんな中、ドンドンと早歩きをしながら俺の部屋に近づいてくる足音が聞こえてきた。そしてノックもなしに部屋のドアがドンと今



にも壊れてしまいそうな音をたてて開かれる。あまり立て付けのいいドアじゃないから、そんなに乱暴に扱わないでほしい。

部屋の前にはいかにもおかんと言っているかのように、白いエプロンと鍋（明日の朝食の準備をいていたのか、ポテトサラダが鍋の中に入っている）を装備した母さんと妹。そしてなぜか俺の幼馴染である貴明の姿もある。明らかに貴明だけは場違いもはなはだしいうてか、今すぐ貴明だけ帰ってくれ。

母さんは今にも失神しそうなのか、少しふらりとふらつく。そして妹は私の言った事が正しかったでしょ？ とアピールしているのか腕を組んでコクコクと頷く。場違いの幼馴染は面白そうに俺と睦月を交互に見比べていた。

三者三面色々な表情をしているが、その中でも母さんにいたってはフラフラしながら座布団に腰を下ろす。それほど衝撃でもないだろ。一応俺だってもう高校生だから彼女の一人や二人連れてきても決して変ではない。

妹も幼馴染も母さんに続いて部屋に入って、適当に座った。

このタイミングであれだが、一応幼馴染の紹介でもしておこう。名前は村井貴明で、家はお隣さん（お隣さんなのに家三件分ぐらい離れている）で、保育園からずっと同じクラスだ。まあ、俗に言う腐れ縁というやつだね。そのため学校もいつも一緒に行っているし、お互い部活をしていないため大抵一緒にいるやつだ。いつもニコニコとしているが、これがまたいらぬ情報を集めるのが趣味で、弱みを握られた人は今までに数え切れないほどいる。

「……お母さんは今の状況があまり理解できないけど、それで今まさに何をしようとしているのかお母さんにも理解できるように説明してちょうだい。絶対に怒らないから素直に言ってごらん？」

コタツ机の上にドカンと白いエプロンとポテトサラダ付属の鍋を力強く置く。そのせいで鍋からポテトサラダが少しだけ飛び散る。せつかく掃除したのに台無しだ。

俺はベッドから体を起こし、睦月の隣に座る。

「えつと……この人は俺の彼女で睦月。別に普通に話をしていただ  
けで、変な事はしていないよ」

「和人の彼女の睦月といいます。これからよろしくお願いしますね」  
ニッコリと笑みを見せる偽メイド。

ばかりと口をだらしなく開けて信じられない物を見たかのような  
表情をする母さんと妹。そして興味深そうに俺と睦月を交互に見な  
がらポケットから出したメモ帳に何かを記入する幼馴染。俺の情報  
は別にいいから、今すぐそのメモ帳を破り捨ててやりたい。

「……そんなバレバレな嘘についてもお母さんの目は誤魔化せませ  
んよ！」

信じてくれなかった。

母さんは少しの間完全にフリーズしていたが、恥ずかしそうに咳  
をして我に戻る。このまま冷凍庫の奥に忘れられたミカンのように  
固まっていてくれれば助かったのだが……実に残念だ。

「そう言われても……」

「ならお母さんにも分かるような証拠を見せてみなさい！ 自分の  
息子だから言いたくはないけど、和人と睦月ちゃんが付き合ってい  
るのは信じられません！！ もう月とスッポンで、うちわとクーラ  
ーぐらい信じられませんか！！」

もう何がなんだか。月とスッポンは分かるけど、うちわとクーラ  
ーって……アナログとデジタルの差でも証明したいのだろうか？

それより実の母さんにここまでストレートに言われるとショックを  
通り越して、涙が込み上げてくる。

証拠といわれても、偽カップルの俺たちに証拠らしいものなんて  
ない。だって今日会ったばかりだし、カップル認定書とか書いた紙  
でいいなら何枚でも用意するけど、それ以外に今までに彼女ができ  
ていない俺には何をすればいいのか分からない。

俺は少し唸りながら、隣に座っている睦月を見た。睦月も何をす  
ればいいのか考えているのか、腕を組んで少し眉間にシワを寄せる。  
よくよく考えれば、偽カップルとはいえ、俺と睦月がお互い付き

合っていると言っているのだから母さんが信じようが信じまいが、別に証拠とか見せる必要がないと思う。まあきつと母さんは混乱してその事には全く気づいていないと思うけどね。

さて、どうしたらいいものと再び考える。ちなみに母さんは頑固者だから一度言った事は実行しなければ後々面倒になること間違えなしだ。主に食事に関して。

「やっぱり付き合っているならキスぐらいするのが普通だよな」  
困っている俺に助け舟……ではなく悪魔の囁きをニコニコ幼馴染が腕を組み、俺と目が合うと指を立ててパチツとウイングまでしてきた。この幼馴染は確実に楽しんでる。それよりありがた迷惑で仕方がない。いや、この幼馴染に気の利いたフォローを求めても何も出ないのは前々から知っているけど。

俺は睦月をチラリと盗み見ると、明らかに動揺しているのか顔を真っ赤にして俯いていた。当然と言えば当然か。

そんな睦月を見ていたら、俺も恥ずかしくなってきた。最初は始めてあった初日であり、よく睦月の事を知らないため現実味がなかったが、こんな睦月を見ていたらキスをしたところを想像してしまった。ちなみに現段階で俺のキスしていない暦は言うまでもなく歳の数だ。別に相手がいないからしない訳じゃないよ。俺は自分の唇を守りに守った結果としてこうなった訳だ。

見苦しい言い訳は太陽の彼方まで置いて、実際のところキスを誰かに見られながらするのは恥ずかしいし、ましてや実の母親と妹に見られたくはない。

「……」

母さんと妹は俺がキスをするものと完全に思い込んでいるのか俺と睦月を凝視している。さて、本当にどうしたらいいものだろうか。今日ばかりはニコニコ幼馴染の両足を縄で縛って近くの川にでも放り投げてやりたい。

「早くキスしなよ。ここまで大事にしといてまさか何もしないってオチはないよね？」

ニコニコと何を考えているのか分からない笑みを見せる幼馴染。  
いや、大事にしたのはお前だから。

俺はギョツと拳をつくる。そして睦月に体を向ける。

母さんたちは本当にキスをするとは思ってなかったのか、身を乗り出した。

「大丈夫。ギリギリで止めるから、安心して」

睦月の小さな肩をギョツと握り、耳元で小さく呟く。最初はビクツと体を震わせていたものの、頬を赤らめてコクリと頷きながら目を閉じた。とてもそられるこのシュチュエーションにドキツと俺の胸は高鳴った。もちろん付属品の外野はシュチュエーションどころか邪魔なのは言うまでもない。

寸前で止めていることを悟られないように俺は母さんたちに背を向ける。

俺は一度頷き、一段と手に力が入る。そして小さく整っている睦月の顔に近づける。

徐々に近づくにつれて俺のやわなハートが砕けてしまいそうなほど高鳴る。

息が本格的にかかるぐらいまで近づき、ちよつと近づけば触れてしまうほどだった。距離にして五センチぐらいだ。この距離だとキスをしたと言っても少々無理がある。だから俺の唇と睦月の柔らかそうな唇の間をずっと見ている。

「……」

限界まで近づき、そのまま数秒停止。これなら信じてくれると思いながら、素早く離れる。

ぷはあゝ。そこでようやく大きく息をはいた。だって緊張のあまりに呼吸をする行為が一時的に痴呆症のごとく忘れてしまったからね。

チラリと睦月を盗み見れば、顔を真っ赤にして俯いていた。

チラリと母さんを見れば、呆然と口を開いて今にも「今の幻覚！？」とか言いそうだった。

チラリと妹を見れば、先を越されたとか思っているのか齒を食いしばって握りこぶしを作って険しい顔をしている。

ギツッとニコニコ幼馴染を見れば、ポケットに何かをしまい俺にウィンク。

それぞれ独特な反応をしているが、そろそろ俺を解放してもいい頃合だと思う。特に母さんと妹と幼馴染が部屋から出ていつてくれる事を望んでいる。あつ、全員か。

「……せ、せせせ」

そんな中、突然母さんが「せ」を連呼。

「せ？ セバスチャン？」

あれ？ セバスチャンって何？ 取り敢えず「せ」のつくものを言ってみたけど、セバスチャンって何だっけ？ ……まあいいや。

「赤飯を持てーい！！」

母さんはそう言うと思いつき立ち上がる。そしてサラダポテト付属の鍋を手にとるとドアに向かって歩き出す。かなりの動揺しているようだ。

「何しているの、佳苗！？ あなたも手伝うのよ！」

「ちよつと待って！」

ドアに手をかけたところで、まだ本題を聞いていないことを思い出す。

「睦月を少しの間泊めてもいいの？」

「何を言っているの！ もう睦月ちゃんはお私たちの家族でファミリーよ。好きなだけここで暮らさない。ああ、前もって和人がこんな可愛い子を連れてくるなら化粧の一つでもしたのに……惜しいわ」

「父さんには聞かなくていいのか？」

「父さん？ 誰それ？ このお母さんがいって言っているから、別にいいのよ」

何気に酷い事を言い残して母さんと妹は部屋から出て行った。

「中々面白いものが見られたよ。ありがと、和人」

投げキッスをしてニコニコ幼馴染も部屋を後にする。

さっきまでは早く部屋から出て行つて欲しかったが、誰もいない部屋で二人きりにされると気まずくて仕方がなく思えた。もし未遂のキスが無かつたら話は別だけどね。

「……母さんや幼馴染が変な事を言つてごめん」

「私が言い出した事だから別にいいよ。それよりキスができなくて残念とか思つたでしょ？ このムツリ」

さっきまで頬を真っ赤にしていた睦月はどこにいったのか、今はさっきまでの睦月に戻っていた。これもキャラだったのだろうか？ 分からん。

「そんな事思つてないよ。それよりメイド服意外って持つてないの？ さすがにこのままじゃあれだろ？」

「ないわ。だつてロクデナシがこれなら間違い無いって言つたから、これ以外の服は全部捨てた」

「別に捨てる事はないだろ……」

「主に気に入られないと、どんな服を着ても意味が無いでしょ？ まあロクデナシの言つた事を信じた私がバカだったかな。これなら普通の服でくればよかった」

「……取り敢えず俺は廊下にいるから、そのタンスの服を適当にきてよ」

視線をタンスに移して俺は立ち上がる。

「別にここにいってもいいわよ」

「いやいや、さすがにそればかりは出来ないだろ。何度も言うが、仮にも俺は健全な一高校生であり、堂々と女性の着替えと居合わせるのはいかがと思う。」

「……少しは恥じらいという言葉を学びなさい」

「ちよつと着替えるから向こう見て。ほら早く。見たかつたら別に見てもいいからね。だけど見たらお仕置きだからねっ。……これでもいいの？」

「……たぶん全然違うと思う。と、取り敢えず俺は廊下にいるから、着替え終わつたら呼んでよ」

不満そうに睦月が唸っていたが、それはスルーしておこう。ほら、なんか答えたら答えたで面倒な事になりそうじゃない。

俺は一度廊下に出て、ドアによしかかって座り込む。そして大きなため息。

屋根の登ったときから色々とありすぎて今にも俺の頭はパンクしそうだった。白い湯気とか生ぬるいものじゃなく、戦隊物が登場する時にある無駄に手のかかった演出のように木っ端微塵に爆発しそうだ。

そんな事を考えていると、ガチャリと音をしたかと思えば背中にあったドアの感触が無くなり、よしかかっていた俺は重力に逆らえる事無く背中から床に倒れこむ。

「っー！」

声にならない叫びを上げ、倒れた衝撃から背中と後頭部に再び痛みが走る。軽く頭を擦りながら目を開ける。

仁王立ちをしている睦月の足の間に俺の頭はある訳で、最初に入ったのは白い太ももの奥にチラリと見える純白の生地。世間ではパンティーとかいうやつ。そして視線をずらせば大きな二つの山から少し見えるニヒルな笑顔の睦月。ああ、ナイスアングルだね。グッジョブ睦月。初めて君に感謝するよ。

「あら、見たいなら素直に言ってくればもっとサービスしたのに」  
「恥じらいと言う言葉が実に似合わない言葉である。女の子ならもつと恥じらってほしい。そうすれば可愛さがプラスアルファされて高感性が鰻登りなのに、実に残念だ。」

「ははは、これは事故で俺が望んだ事じゃないよ？」

もちろん内心では事故バンザイとか思っていたりする。

「あまり信じられないな。これを計算してドアによしかかっていたのよね？ なかなか策士なのね」

「……取り敢えず策士かどうかは置いて、どうしてワイシャツだけ着ている？」

一応俺だってズボンは数点所持しているのに、どうしてか睦月が

着ているのは学校のワイシャツ。しかも男物だから華奢な睦月の体には大きすぎるぐらいだ。そのため普通のワイシャツのはずなのにエロイ。……この服装はけしからんな。

「これの方が和人も喜ぶかと思って。気に食わないならこれも脱ごうか？」

そう言って睦月はワイシャツのボタンに手をかける。

豊かな胸のせいで胸囲がきついのか、一つボタンを外したところで少し胸が揺れる。くそっ、俺で遊んでいるな。

睦月が俺で遊んでいるのは確定だとしても、一度この状況を味わってしまったら中々違う行動を起こせないのが男の性だ。

できるなら今すぐにでも立ち上がるのに、中々行動を起こせないそんな時。

「彼女にワイシャツ一枚は少しマニアックじゃないかな？ けどさすが和人だね。僕も和人を見習わないとダメだね」

突然声がした。

別に顔を見なくても誰か分かる。

「貴明……頼むからこればかりは内密にしてくれれば助かる」

「心配しなくても僕はいつだって和人の見方だよ。けどね、一つだけ頼みがあるの。いいかな？ あっ、別に嫌だったら断ってもいいからね」

幼馴染の顔を見れば普通の人なら普段通りの笑顔なのに、付き合いの長い俺なら分かる。この笑みはよからぬ事を考えている笑みだ。さすが腹黒幼馴染だ。

2

日曜日の昼前。

俺はバイトをしていないため、学校のない休日は暇をもてあまし



ている。どうしてバイトをしないかといえば、理由は簡単だ。バイトを募集しているところが家の近くになく、バイトをしたところで家に帰る手段がないためだ。不便な土地だよ、本当に。

昨日のあの場面を見られるまでは先週同様に金持ちが暇をもてあます以上に暇なのだが、まさかの展開と不幸が重なり、どうしてか幼馴染と一緒に世間では少々メジャーな店の前で看板を見上げて立っている。ちなみに今俺たちがいる場所は地元じゃなく、四駅電車に乗り、さらにバスに揺られる事二十分の位置する街の中心だ。

「本当にここでいいのか？」

看板には見慣れない文字が書かれており、これから待ち受ける初体験の前に目頭を押さえる。

「ここであっているよ。和人だって本当はこういったお店に興味があるでしょ？」

「……」

人の趣味をとにかく言うのは野暮なのだが、付き合いが長い幼馴染が何を考えてここにたどり着いたのか検討がつかない。

俺は目頭から手を退けて再び看板に視線を送る。

ツンツンデレデレ。今日もご主人様をご奉仕、ご奉仕。

そんな看板が堂々と入り口の上にあった。俗に言うツンデレ喫茶というやつだ。

「どうしてメイド喫茶じゃなくて、ツンデレ喫茶？」

「ん？ やっぱり和人はメイドさんが萌なの？」

「……どうしてそうなる？」

「だって昨日彼女さんにメイド服を着せていたじゃない。僕は和人の趣味に対しては何も思わないよ。ただどね、彼女さんにメイドプレイを望んでいると嫌われちゃうと思うよ？ けど隠し通すより素直に彼女にメイド服を着させて和人が僕は好きだよ」

これって褒められているの？ 仮にそうだととしても……嬉しくねえ。

ニコニコ幼馴染に悪気がないのは分かる。だけど、このまま誤解

されっぱなしなのは少し不愉快だ。幼馴染は口が堅いが、いつ口を滑らせるか分かったものじゃない。きっと誤解をされたまま学校で噂されるのは近い未来かもしれない。

それはそうと、こんな街中でツンデレ喫茶の前で立っていると知り合いに見つかる危険がある。大体の相場が気にしていないと誰にも見つからないが、無駄に気にしている時に限って知人に目撃される事がある。

「こんなところで突っ立つても営業妨害にしかないから、入らさつさと入ろう」

それなら目撃される前に店に入り、何食わぬ顔で店から出るほうがよっぽど目撃される確立は減る。さすがにこのツンデレ喫茶の中に友達がいる訳がないからね。

「それもそうだね。あゝ、デレデレするのが楽しみだよ」

いや、デレデレうんぬんより俺としては今すぐにきた道を戻るほうが何十倍も楽しい。楽しくなくても、無理やり楽しくする自信がある。

「はい、注文したオムライス二つねっ」

さて場所はツンデレ喫茶の前から店内に移動し、中なら外より安全だと思っていたけど、まさかの知り合いばったり会ってしまった。しかも店員さんとして。

ツンデレ喫茶はツンツンデレデレしているだけで、内装としては他の喫茶店とさほど違いはなかった。それでも普通の喫茶店よりは少し華がある。テーブルの隣には観葉植物がずらりと並び、店員さんの表情としては少しきつめだが、着ている服はメイド服を少し改良されたデザインで中々良いものだった。

顔見知りの店員さんが現在無駄に高いオムライスを机の上にドカッと置いた。

釜谷美羽。同じ高校に通うクラスメイトで、ショートヘアで普段からツンツンさんだ。しかもデレデレは見たことのない正真正銘

のツンツン娘である。一応こういった類の店では高校生は働く事はできないのだが、このツンツン娘は大人っぽい顔つきをしている。それに化粧もしていることもあり、チラリと見た感じでは高校生には見えない顔つきをしている。

それはそうと、どうしたものか。客と店員さんなのだが、空気が重い。主に俺とツンツン娘の間だけだが。

ツンツン娘はオムライスの乗っていたお盆と一緒に持ってきたケチャップを徐に握り締めるようにぶっかける。オムライスが別の食べ物に見えてきた。

「さつさと食べて早く店から出てってよね！」

一応ツンデレ喫茶である以上ツンツンとデレデレがあるのだが、明らかにこれはツンツンで、しかもキャラとかじゃなく素だと思う。ツンツン娘はそれだけを言い残し、エプロンをひるがえして裏の方に戻っていった。

「……お前知っていただろ？」

「何のこと？ 僕はツンデレ喫茶がどんなところか知リたかったただだよ？ だけどこれは少しやり過ぎだね。予想外だよ」

幼馴染はとぼけるものの、きつとどこかで仕入れた噂を確かめるべくツンデレ喫茶に訪れたのだと思う。しかも俺という生贄を付属で。

俺はこのオムライスをどう攻略するか考えているが、幼馴染は普通にスプーンですくい一口ぱくりと食べる。たくましい幼馴染だ。

「オムライスよりケチャップの味の方が強いね」

普通にオムライスの感想を言っただけのけるのがたくましさ三割増だ。俺は食べている姿を見るだけでムネヤケした気分になってきた。

ムネヤケした気分なのだが、このまま一口も食べずに残すのは勿体ない。だから俺もケチャップをどかしにどかし、一口食べる。それでもケチャップが普通よりかかっている以上、オムライスを食べている気があまりしない。

「そうそう、一つ聞きたい事があるけどいいかな？」

「答えられる範囲なら」

「和人はツンデレの希少性についてどう思う?」

「……」

ツンデレ喫茶にきてその話は場違いとはあながち言えないのだが、それでもその質問に答える意味がどこにあるのか俺にはサッパリだ。「それは違うよ。だって人はメイドさんにご奉仕されたいと思うからメイド喫茶があるでしょ? ならどうしてツンデレ喫茶があると思う?」

人の心を読んだのか、ニコニコ幼馴染は言う。

「DMの人がツンツンされたいからじゃないのか?」

「そうかもね。だけど僕が思うに、普通に暮らしていく中でツンツンするのはマイナスなイメージしかないじゃない? 良くて毒舌、悪くて一緒にいたくない。そう思うでしょ? 普通の人ならそう思われたくないから見掛けは良い人で通しているの。だから普通を覆すツンツンして接してくれるツンデレ喫茶が人気になったのだと僕は思う。それでも一部の人の意見で、ほとんどの人はツンツンとデレデレのギャップが人気の秘訣なのだけだね」

「……で、何が言いたい?」

取り敢えず幼馴染が思っているツンデレ喫茶の人気は置いといて、そこからこの幼馴染は何を俺から聞きだそうとしているのか全く理解ができない。

「僕は純粹に無知な和人にツンデレの意見を聞きたい訳だよ」

「……俺は別にその人がツンデレでも毒舌でも、その人であるなら別に気にはしない」

「和人らしい答えだね。ちなみにその人って具体的に誰をさしているの?」

「別に特定の誰かって訳じゃない」

「なら釜谷さんや彼女さんもその中に含まれているの?」

「……そうなるな」

言い出したのは俺だが、一瞬彼女とは誰の事を言っているのか理

解できなかった。

「うんうん。やっぱり和人は和人だね。僕はこんな幼馴染がいて嬉しいよ」

「褒めているのか？」

「僕なりの愛情表現だよ。やっぱり和人はこつちの世界に欠かせない人材だってことだね」

「いやいや、どこの世界だよ。怪しい世界なら俺はお断りだ。それに幼馴染が絡んでいるのならなお更だ。」

ニコニコ幼馴染はテーブルの端に置かれているベルを鳴らす。

数十秒後にクラスメイトのツンツン娘がムスツとした顔でやってくる。ツンデレ喫茶である以上ツンツンするのは仕方が無いが、こ  
うもあからさまに嫌がられるのは悲しくなる。

幼馴染はツンツン娘に手招きし、耳元で何かを話し始める。それから直ぐにツンツン娘の顔が徐々に柔らかくなり、最終的には今まで見たこと無い笑顔になっている。いったいどんな手品をしていたのだろうか。全く想像がつかない。

「今日は私の奢りだから好きなだけここにいてね」

ツンからデレになった。

そしてそのまま嬉しそうに身をひるがえして裏に戻っていく。しかもスキップの付属で。今までにツンの方しか見た事がないから不気味だ。

「……何を言ったの？」

「ツンデレにおける一般人の思いを言ったただだよ。それにタダより高いものって無いから、結果として良かったじゃない」

勝手に話を終わらせないでほしい。けど無駄に高いオムライス（無駄に多いケチャップ付）が無料になったから別にいいか。

「……ちよつと聞いているの、和人？」

皿に盛ってあるオムライスも終盤に近づいた頃に、何を思ったのか幼馴染は本場のメイドとメイド喫茶のメイドについて熱く語り始

めた。しかも「メイドだけに冥土に送られるよ。ぷぷぷつ」とか絶望的な駄洒落の付属付だ。

俺は途中から睦月が家で変な事をしていないか気になり、幼馴染の話そっちのけで考えていたから、突然の声と身を乗り出して無駄に近い顔で少しビククリする。

それはそうと、先に食べ終えた幼馴染の皿にはケチャップが付いていない。どうやったらあの量のケチャップと一緒に食べられるのだろうか。

「ん？ ああ、聞いていたよ。それより俺のオムライスも食べてよ。正直に言えば、もう限界かも……」

ケチャップが、って意味で。

「もうしょうがないな」

そう言つて幼馴染は自分の皿とオムライスが盛つてある俺の皿を交換する。これでようやくケチャップ地獄から抜け出せる。

「あつ、そうそう。食べ終わったらどうする？ 和人はやっぱり彼女さんと一緒にいたいのかな？」

「いや、別に。貴明は他にどこかに行きたい場所とかあるのか？ せつかくここまで着たから付き合うよ？」

どうせ部屋で俺の帰りを待っているのは偽メイドだけだ。もちろん心配とかいう可愛らしい感情とかではなく、遊び相手程度にしか思っていないはずだけどね。

ニコニコ幼馴染は女の子仕様の感激ポーズ（上目使いで軽く見上げ、両手を胸の前で握り締める。ちなみにほんのり頬が赤かったら感激ポーズの完全型だ）をする。

「和人が彼女より僕を選んでくれて感激だよ。最近冷たかったけど、やっぱり最後は一番身近な僕を選んでくれるね。……あつ、そうかこれも一種のツンデレだね。無意識の中でツンデレをするなんて、さすが和人だよ！」

実に嬉しそうだ。

後半は果てしなく違ふと思うけど、この意味ありげな言葉はどう

かと思う。ほら、俺らって幼馴染を除けば男同士でしょ。どこまでお気楽な性格をしているのか図りきれない。

「そりゃどうも。それで、どこかに行きたいところとかあるのか？」  
「いっぱいあるよ！ けど和人に迷惑をかけられないから、一番行ってみたい執事喫茶にするよ」

「待て、ちよつと落ち着いて考えてみ」

俺は熱くなる目頭を押さえながら言う。

「俺たちは男で、どうしてわざわざ渋い小父さんにご奉仕される？」

「それは違うよ、和人。執事喫茶には渋い小父さんだけじゃなくて、若いお兄さんもいるよ」

「……いや、それはどうでもいい。俺が言いたいのは、どうして男の俺たちが執事喫茶に行く？ 明らかに場違いだろ？」

「それぐらい僕にも分かるよ。僕が求めているのはお客さんの意見で、渋い小父さんと若いお兄さんは二の次だよ」

「お客さんの意見を知ってどうするつもりだよ……」

もつため息しか出てこなかった。いや、ため息がでるだけマシなのかもしれない。

「和人は執事喫茶に行きたくないの？ 執事喫茶に？」

どうして二回言う。どこまで執事喫茶を強調して、どこまで行きたいのだろうか。うむ、幼馴染の考えている事は全く理解できない。「貴明には悪いけど、できるなら行きたくはないね」

「むう、和人がそう言うなら今日は我慢するよ。その代わり一つだけ手伝ってほしい事があるけどいいかな？」

「何を？」

「そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。そこまで変な頼みじゃないから安心して。ちなみに僕の部屋でするからね」

「部屋で？ いったい何をするつもりだ？」

ゲームか何かの類なのだろうか？ いや、趣味が情報流失の如くプライベートにずかずかと足を踏み入れる幼馴染だ。そんな生ぬるいものじゃないかもしれない。

ニコニコ幼馴染はウィンクしながら唇に人差し指を当てる。……あまり違和感がないのはどうしてだろうか？ この幼馴染が女顔だからか？

「内緒だよ。きてからのお楽しみ。そうときまれば、僕の部屋に行こう。ほらほら、早く！」

間食したオムライス（オムライスに反比例するケチャップの付属付）を俺の皿と重ねて椅子から立ち上がる。どうでもいいが、どうしてこういうも楽しそうなのだろうか。そのポジティブ神経を俺に少し分けてほしいぐらいだ。

俺は幼馴染の部屋で何が待ち受けているのか分からないため眉をしかめて立ち上がる。

俺たちがツンデレ喫茶から出るのが見ていたのか、クラスメイトの釜谷さんがイソイソとレジの方に駆け寄ってくる。もちろん今はデレデレの方だ。

「またいつでも来てね、森澤くん」

値段だけレジに打ち込んで、自分の財布からお金を出す。何か悪い気もするが、奢ってもらえるなら別にいいか。

普段はツンツン娘なのに今は極上の笑顔だ。しかも俺だけ名指しでいつでも来いとは……これを気に店の売り上げでも上げようと魂胆なのか。

「うん。アルバイト頑張ってね」

適当に返事をして手を振って店を後にした。何か普段がツンツンなだけデレデレしている釜谷さんに違和感がありまくりで、ちょっと見たくない姿だった。

「ツンデレ喫茶って少し変なところだな」

心の底から思った意見だった。最初のツンツンと正反対に最後は素晴らしくデレデレになっている。このギャップが変以外何というのだろうか。

店の外に出れば、眩しい日光が容赦なく降り注ぎ手で影を作る。地元に帰るべく俺たちは直ぐそこにあるバス停に向かって歩き出



す。

「今の限度が過ぎていたけど、普通ならもつとツンが入ったデレだから違和感がないの。釜谷さんはそうだったところはまだまだ修行不足だね」

厳しい意見だった。いや、こういった類での意見ではもしかしたら普通なのかもしれないけどね。

そんな話をしていると直ぐにバス停に着いた。バス停からツンデレ喫茶まで二十メートルぐらいしか離れていないから当然だけどね。バス停には駅行きのランプがピカピカと光っていた。地元は田舎だから当然こういった事はないのだが、都会のバス停は少々豪華使用になっていて、よく利用するバスにはランプがついていて、あとのぐらいい到着するのか分かるようになっていて。本当に科学の進歩は素晴らしいね。

幼馴染が突然スクール水着とビキニにおける相違点を話だし、当然俺は話しについていけないはずが無く、ただただ呆然と立ち尽くしていること五分。ようやく駅行きのバスがきた。そうそう。バス停には俺たち以外誰もいなかったからいいが、もし他の人がいたら他人の振りをしていただろう。

バスに二十分ほど揺られ、そこからローカル線の電車に乗る。ローカル線行きの電車はあまり行き来しないのだが、運良く直ぐに乗れることができた。

3

目的の駅で降り、そこから徒歩で家まで帰還。

やっこの思いで幼馴染の家まで帰ることができ、今は幼馴染の部屋でベッドの上に寝転がっている。ツンデレ喫茶から幼馴染の部屋までかかった時間は優に五十六分。あまり街には行くものじゃない

ね。

幼馴染の部屋は情報収入の趣味の他にもまだ趣味がある。部屋の至る所に置かれているフィギュアとアニメのDVD。メジャーなものもあればマイナーのものが名前順に綺麗に収納されている。俗に言うアニメオタクというやつだね。

至る所からフィギュアの視線を感じ、少々居づらい気もするが、どこでも行くと云ったのに断った事から帰る訳にもいかない。そのため多少居づらいからといって帰るのは悪い。

俺は大きなため息と一緒にベッドから見える天上を見る。そこには何かのアニメのポスターが張っており、セクシーポーズで俺を見下ろしている。ちなみにポスターの端に書かれている題名はセンスの力ケラもなかったりする。

そんな事を思っていると、ジュースの入ったコップを持って幼馴染が入ってくる。近くに置いてある小さい机にコップを置く。

「そのポスターって数量限定のレアモノだよ。二つ持っているから、和人がどうしても欲しいならあげるよ」

「……別にいらないけど、どうして二つも持っている？」

「えっ？ マニアとしては常識じゃないの？」

俺は何かのマニアになった覚えは無いから知りません。

幼馴染は首を傾げ、

「だって飾る用と保存用に二つ持つのが当たり前じゃない。できるならもう一つ自慢用にも欲しかったけど、当時の僕はまだ権力不足だったから二つが限界だったの」

「……そうか」

取り敢えず権力うんぬんは触れないほうが懸命だね。

俺は重い体を起こし、ベッドに座る。

「それで、俺は何をすればいい？」

「そうだったね。それじゃあ、和人はこれをお願いしてもいいかな？」

そう言っって幼馴染は尋常じゃない紙とファイルを机に置く。

紙にはクラスメイトの名前と顔写真。そして上半分に住所や電話番号などが書かれていて履歴書のようなだった。残りの下半分には噂話の真相と題され、その場の写真付で色々と箇条書きで書かれている。普段何をしているのかと思えば、こんな事をしていたとは……末恐ろしい幼馴染だ。

ファイルは二つあり、一つ目には「バージョン5」と素っ気なく書かれているのに対し、二つ目はアルバムだった。幼馴染のアルバム整理かと思い、何気なく開いてみると愕然とした。

アルバムの最初のページには見覚えのある写真があり、その写真の下には和人の誕生と書かれている。しかも律儀にコメントまでついている。いや、どうしてこの写真をこの幼馴染が持っている？

確かこれは我が家のアルバムにしか存在しないはずだ。

俺はパソコンに向かって何かを打ち込んでいる幼馴染を一睨みし、アルバムのページをめくる。やはり俺の成長の記録がそこに明細に書かれている。

「ぶっ！」

言葉を失いながらもページをめくり、最後のページに差し掛かったところで見覚えのある偽メイドと俺が偽キスをしている写真があった。今思えば昨日幼馴染を睨めば、何かをポケットに閉まっていた。まさか写真に撮られているとは思ってもみなかったから噴出す。しかもコメントには「僕の大切な和人にいらぬ害虫！これは早急に駆除するべし！」と赤字で書かれている。いや、俺は人の趣味にどうこう言うわけじゃないが、さすがにこれは不味いだろう。主に俺と幼馴染の関係について。

取り敢えず見なかった事にして、俺はそつと俺と睦月の偽キスシーンの写真を抜き取りポケットにしまふ。もちろんコメントはグシヤグシヤにしてダストボックスだ。

俺は山積みになっている個人情報を手際よくファイルにしまふものの、量が量のため、中々減る事は無かった。しかも仲の良い友達のものの中には数個あり、コッソリと何をやらかしたかと見れば、ほと

んどが顔に似合わずに色々とやらかしているらしい。その中で特に印象が深かったのはクラスメイトの進藤だった。進藤は学校のマドンナ的存在の西尾真琴のファンクラブに入っているらしく、会員ナンバーが一桁台の幹部らしい。しかも事もあるう事か、西尾さんを尾行しながら片手にカメラを持っている進藤の写真があった。こんな形で友達の進藤の哀れも無い姿を見るとは……心の底から残念で仕方が無い。

そんな感じでパツパと仕事を順調に済ませる。もちろん友達の欲望と犯罪染みた行動については今後も触れないでおこうと思っている。きつとこれも若さからの過ちというやつだ。

ようやく終盤に差し掛かったところで、一枚の写真とコメントだけがポツリと置かれていた。しかも写真は俺の顔の上に睦月が仁王立ちで立っているやつだ。しかも睦月はボタンに手をかけている姿で、その豊満な胸が今にも弾けだしそうだった。

俺は偽キスシーン同様にそれもポケットにしまう。それからコメントが書かれた紙を手に取り、一度読んでからダストボックス行きだ。だってコメントが「純粋な和人を染める輩をメイドだけに冥土に送るべし！」やはり駄洒落のセンスは絶望的だった。それよりメイドと冥土の所だけ絵の具なのか、真っ赤な文字から絵の具が垂れて恐さを表現していた。こんなところを凝らなくてもいいと思うけど。

それはそうと、黙々と作業をしていたら控えめにドアがゆっくりと開かれる。

ドアの向こうから現れたのは幼馴染の妹である美羽ちゃんだった。美羽ちゃんはまだ三歳で、ちょこちょこと俺の方に来たと思ったら嬉しそうにギョツと腕を抱きしめてくる。まだ子どもだけあり、美羽ちゃんの目はクリクリして頬っぺただって柔らかい。かなり可愛い子だ。

さてさて、そんな美羽ちゃんにキュンとしながら俺は頬っぺたを突つつく。美羽ちゃんは嬉しそうに笑みをこぼす。

「何しているの、和人お兄ちゃん？」

何度が突つついたり、突つつかれたりしていると、そんな事を言い出した。

「これは貴明お兄ちゃんのお手伝いだよ」

「お手伝い？ 美羽も一緒にお手伝いする！」

「本当に？ ならお願いしちゃうかな」

「うん！？」

美羽ちゃんを軽く抱き上げて俺の膝の上に座らせる。当然だが、三歳児がそう簡単にできる作業じゃないから、俺が教えながらゆっくりとするつもりだ。

「美羽ダメじゃないか！ 僕と和人は今大切な仕事だよ！？ 下で絵本でも読んでなさい！」

さてさて、三歳児は字が読めないぞ。……つと、そんな不適切な突っ込みはさておき、何と厳しいお兄ちゃんだ。もし美羽ちゃんが俺の妹なら快く一緒にいるのに……何なら我が家の妹と交換してほしいくらいだ。

美羽ちゃんは悲しそうな顔で俺を上目遣いで見てきた。やばっ、何この破壊力？

「少しぐらいいいじゃないか」

「和人は美羽に甘すぎ！ こんな事だと将来わがままな子に育っちゃうから、ダメなものはダメなの！」

いや、わがままは多分反抗期を境に大きく分かれるだろ。……確かそんな事をこの前に本で読んだ記憶があつたり、なかったり。

「……それなら俺は美羽ちゃんと一緒に絵本でも読もうかな」

「っ！ それはダメだよ！！」

「どうして？」

聞かなくても分かる。俺は美羽ちゃんに甘く、幼馴染は俺に甘いからだ。俺が「うん」と言えば幼馴染だって「うん」と言う。

幼馴染は苦い顔をするものの、直ぐに諦めたのかションボリとする。

「……分かったよ。好きにしてよ」

実に悲しそうな声だ。

俺は内心ニヤリとする。これは一種の復習だ。俺と睦月で遊んだ報いだ。けど、外見と同じでやる事も地味なのは取り敢えず触れないでほしい。だって空しいだけじゃない。

それはさておき、美羽ちゃんは嬉しそうに俺の膝の上でキャキャと喜ぶ。美羽ちゃんのこういった仕草を見ていたら、何となく保育士の道も悪くなく思えてくる。まあ現実には美羽ちゃんみたいな素直で良い子の方より、やんちゃな子の方が多いけどね。

美羽ちゃんを膝の上に乗せて一緒に残り少ない作業をこなしていく。まだ三歳児なので、やはり美羽ちゃんには難しい作業だったが、一緒にしているためゆっくりではあるが、それでも着々とノルマが減ってきている。

十分ぐらい経った頃によく全てのノルマが幕を閉じ、俺は座ったまま伸びをする。

「終わったぞ。これで俺はお役目ごめんだから、そろそろ帰るとするわ」

俺の膝に座っている美羽ちゃんをそっと抱き起こして隣に座らせる。美羽ちゃんはずったような顔で俺を見つめ、帰らないで目で訴えている。

「うん、分かったよ。手伝ってくれてありがとう」

幼馴染はキーボードを打つのを止め、回転する椅子で俺の方に向きながら言う。

取り敢えず昨日の出来事を他言無用にできたため、俺は嬉しさから頬が緩む。だってあんな写真が流通しただけでおぞましいからだ。俺は美羽ちゃんの頭を撫でてからドアを開ける。

「あら、もう帰っちゃうの？ 今日晩御飯でも食べていかない？ きつと美羽も喜ぶわよ」

玄関に向かっていると幼馴染のお母さんに呼び止められた。昔から家族ぐるみの付き合いだったけど、どこまで森澤家と村井家は才

ーブンな付き合いなのだろうか。

小母さんの手料理は母さんより上手だから少々そられる誘いのだけど、さすがにこれ以上睦月をほっとく訳にはいかない。もちろん何を仕出かすか分からないって意味で。

「いえ、今日は遠慮します。また今度ご馳走になりますね」  
軽く会釈をし、玄関を後にした。けど、内心では食べたくて仕方が無い。

外に出れば眩しい太陽が歓迎でもしているのか、さんさんと降りそいでいる。俺はその眩しすぎる太陽を手で隠しながら空を見上げる。

空はどこまでも広がっているのは当たり前だが、そんな当たり前な事を確かめるように数秒の間その場に立ち尽くしていた。

ふう、と大きなため息をつきながら三軒分離れた場所にある我が家に視線を送る。家を出た時と同様に、そこには古臭い家が建っている。まあ当たり前だけどね。

俺は重たい体にムチを入れながら、ゆっくりと我が家に向かって歩き出す。ちなみに重いのは体ではなく、俺の気持ちだ。ほら、家に帰っても安らぐ場所が俺にないじゃない。特に睦月と母さんと妹のやり取りについて。

どれだけゆっくりと歩いても、ただか三軒分ぐらいしか離れてはいないため二分程度が限界だった。詳しい時間は一分四十三秒。

俺は家のドアノブに手をかけたところで再び大きなため息をついた。この先には予期せぬ展開が俺を待ち受けていると心のどこかで悟ったからだ。

「ただいま」

ゆっくりとドアを開ける。

……。

……。

あれ？ 何も起きないよ？

何も無いのに超した事は無いのだが、確実といっていいほど睦月

と妹がタッグを組んで変な悪戯の一つでもしでかすのではないかと  
思っていた。

俺の予想とは裏腹に睦月と妹は思ったよりまともなものかもしれない。  
い。

数秒玄関で立っただけでも何も起こる気配が無い。

本当に何も無いのかもしれない。そう思いながら靴を脱いで階段  
を上る。

「っと、トイレに行つてこよう」

部屋のドアを少しだけ開けたところで、不意にトイレに行きたく  
なつてきた。

俺は呟くように言つて、ドアを閉めてからきた廊下を戻る。

階段を下り、トイレに入ろうとしたが、カギがかかって入れなかつた。  
先客が出てくるまでドアの前に立っているのも良かったのだが、今日のツンデレ喫茶で変な汗をかいたから、取り敢えず服を着替える事にする。

トイレから少し離れた場所に洗面所と風呂場。そして洗濯機もそこ  
にあるため脱衣所（でいいのかな？）に向かい入る。そこで服だけ  
を脱いで洗濯機の中にイン。

別にこの家に住んでいるのは赤の他人でもないため、上半身裸でも  
恥ずかしい事はない。……いや、一人だけ偽メイドがいるが、別  
に気にする要素はないだろう。

俺は当初の目的であるトイレのドアに再び挑む。今回は誰も入つ  
てなく、用を済ませてから部屋に戻る。

ガチャリ。

そんな音を立てながらドアを開ければ

「……」

俺を出迎えてくれたのは偽メイドではなく、エプロン姿の睦月だ  
った。しかもエプロン以外の衣服はどこかに忘れたのか装備してい  
ない。

睦月は何も発する事無く、呆然と俯いて立っていた。チラリと俺



を見るや否やため息をついて再び俯く。いったい何がここまで睦月を追い詰めたのだろうか。

俺は絶句する。

が、予期せぬ展開が待ち受けていると最初に悟っていたため思っている以上に衝撃的ではなかった。いや、睦月が落ち込んでいるのは予想外だったけど。

「……何かあったのか？ 俺でよかったら話ぐらい聞くよ？」

「タイミングが悪いのよ」

そして再び大きなため息。

「和人がトイレに行くって独り言いつていたから、トイレの前で待っていたらパパさんが出てきて、それに気づかないで『お帰りなさい、あなた。お風呂にしますか？ ご飯にしますか？ それともわたし？』とか言ってしまったじゃないの。これで落ち込まないのは相当なポジティブライフをおくっている和人ぐらいよ」

さり気なく皮肉と言う名のプレゼントをどうもありがとう。ちなみに俺はそこまでポジティブライフは送ってないぞ。

「……どうしてそんな事を？」

慰めようと思ったが、止めた。ほら、自業自得だからね。

「兄さんはこれで惚れ直すこと間違いないって佳苗ちゃんが言っていたから……」

予想通りだ。一つ違つとすれば、睦月と佳苗のタッグではなく、佳苗が睦月を利用したという点だけだ。それでも大きな差はない。

後で佳苗にきつく言っておくとして、今はこの状況を何とか打破しなければならぬ。このまま裸エプロンだと俺に影響を与えるのは時間の問題だ。特に下半身がつて意味で。

その前に気づいたのだが、今の状況は非常にマズイ。俺は上半身裸で、睦月は言うまでも無く裸エプロン。この状況を誰かに見られたら勘違いされても言い訳はできない。特に幼馴染に見られたら写真を撮られて、あのアルバムに飾られること間違いないだ。

俺はそうなる前に近くにあった羽織るタイプの服を手に取り、睦

月に着させるように近づく。

「ちよつと和人！ 僕の大切な写真持つて帰らないでよ！？ ……  
えっ？」

今の状況を説明しよう。

1、上半身の俺。

2、裸エプロンの睦月。

3、睦月の肩に触れる俺。

説明終了。この三つのシュチュエーションが重なった今、これを勘違いしない人はいない。

ドアノブをしっかりと握ったまま呆然と今の状況を理解しようとしている幼馴染は数秒だけフリーズしていたが、徐にポケットからデジタルカメラを取り出す。

カシャ。

カメラのシャッター音がしたかと思えば、幼馴染は身をひるがえして廊下を走り去っていく。しかも「うわーん！ 和人が！ 和人が僕知らない間に大人の階段を三段飛ばしで駆け上っているよ！ ！ こんな和人は見なくなかったよー！！」言っている事と、実行している事は全く矛盾しているが、プライバシー侵害という言葉を知らない幼馴染には仕方のない事だと諦める。

さて、そこまでは仕方ないアクシデントと受け容れよう。だが、ここからが問題だ。幼馴染の断末魔を聞いてこの部屋には家族がそろって集結する事間違いないだ。案の定階段を駆け上る音が聞こえてきたぐらいだし。

俺は盛大に落ち込みながらも、ドアを素早く閉めてカギをかける。  
「今すぐメイド服にでも着替えてくれると助かる」

「……嫌だ」

「いやって……」

「着てもいいけど、一つだけ条件がある。それを受け容れない限りあたしはこの格好で生活するからね」

何とわがままな娘だ。が、今はわがままうんぬんと言っている場

合じゃない。だってドアの向こうが何やら騒がしいからだ。最後の砦を破られ、この状況を家族に見られたら家族会議に有無を言う前に出席させられ、数秒でジ・エンドだ。

「……分かった。その条件とやらを受け容れるから、今すぐにメイド服に着替えてくれ。俺は急ぐから、話は後だ」

俺は睦月の肩に羽織らせようとした服を着て、ベランダに直行。そのままベランダの直ぐ近くにある木に飛び移って部屋から外に脱出する。

外に出た俺はさつさと玄関から家に入り、何事も無かったかのよう階段を上る。

「俺の部屋の前に集まって何している？」

あたかも今帰って来たかのように、怪訝にドアの前で相談をしている家族に言う。

当たり前だが、ドアの前では信じられないものを見たかのように目を見開いて家族の視線が俺に集中する。けどそこまで信じられないような顔をしなくてもいいと思う。まあ俺が家族から変な目で今までに見られていたのなら話は別だけどね。

「えっ？　だって貴明くん曰く和人が睦月ちゃんにケダモノの如く襲い掛かっているって……あれね？」

どこでそうなったか詳しく教えてくれ。それとも俺ってそんなに信用がないのか？

佳苗は混乱しているのか、腕を組んで考えている。

「？　何を言っているのか俺にはサッパリなのだが、もしかしてタダの聞き間違いとかじゃないのか？」

「けど、絶対に私は聞いたよ！」

「なら睦月に事の真実でも聞いてみれば俺の無実は確定だろ？」

睦月の条件とやらがあるため、きつと悪ふざけはしないと思いつながらドアをノックする。自分の部屋なのにノックをする光景ほど不釣合いはないだろう。

数秒してからカギが外れる音が廊下に響く。それと同時にゆっく

りとドアが開かれた。

ドアノブを握り締めた睦月はお決まりのメイド服を着用していた。分かっていたことだが、少し安堵する。

「ちよつと睦月に聞きたいのだが、さっき貴明がどうして叫んで出て行ったの？ 今しがた帰って来たばかりだから、今の状況が全く呑み込めなくて」

こっそりウィンクをしながら話しに合わせるようにアイコンタクトする。

睦月は俺のウィンク姿が変だったのか、一瞬噴出す。ちよつと侵害だとは思うが、男のウィンクほど似合わないものはないため、仕方が無いと見なかった事にした。

「ああ、あれですか。あれは貴明さんが私の着替え中に部屋に入ってきて、たまたまセクシーな下着をしていたので発狂したのだと思いますよ。ほら、よくある話です」

睦月は頬を少し赤らめ、嘘なのにあたかも本当にあったかのように恥ずかしそうにしている。中々の演技力だ。俺には到底真似できない。

よく話しに合わせてくれた。俺は嬉しいよ。

それよりよくある話って……そんなイベントが日常茶飯事にあるはずがない。食事中にテレビを見ていたらいやらしいシーンで気まずいお茶の間とはわけが違う。

母さんと父さんは無言のまま気まずそうに俺を見ないようにし、妹は自分に不利となったためか姿を暗ました。それについては別にいいけど、疑った事に対して謝罪の言葉を送るのが世間の常識じゃないのかな。まあ実際は嘘だから気にしないけどね。

「あまり睦月ちゃんに迷惑かけちゃダメよ？」

「げ、元気出せよ」

勝手に話をまとめて母さんと父さんは階段を下りていく。上手くまとめたつもりらしいが、幾分まとめ方が下手だ。

俺は何とか最悪の結果にならなかった事に安堵する。

「話を合わせてくれてありがとう」

俺は家族とは違う。ちゃんと睦月にお礼を言って部屋に再び入る。

「それで、条件ってなに？」

俺はベッドに座り、座布団でお茶をすすっている睦月に言う。ちなみに煎餅付属だ。どうでもいいが、ちよつと睦月が年寄りくさい。睦月は煎餅を一かじりし、今まで忘れていたのかハツとする。これなら聞かないほうが良かったと心の中で後悔する。昨日もそうだった、睦月は少々忘れやすいようだ。

「その前にツンデレ喫茶楽しかった？」

「ど、どうしてそれを？」

冷やりと嫌な汗が背中を伝う。

ツンデレ喫茶にいた時に、一度店全体を眺めたが睦月はツンデレ喫茶にはいなかった。それどころか客もあまり見かけないほどだ。

「昨日も言ったけど、和人は少し主としての自覚がないのよ。和人はいつ狙われるか分からないわ。だから私は和人に見つからないようにコッソリとね」

「……つけたって訳か」

何とも嫌らしい事をする娘だ。これだと幼馴染と何ら変わりはない。

「そんな恐い顔をしない。私は和人を心配しての行動よ。むしろ感謝してほしいくらいよ」

人のプライバシーに土足でドカドカと踏み入れて、感謝しろと？それは無理な相談だ。が、睦月が言った通り俺には主としての自覚はサラサラない。それもそうだ。昨日今日の出来事に自覚もクソもない。できるとするなら自覚するような出来事が起きた後だ。

「……今回は別に何も言わないけど、次からはそういった事は止めてくれよ」

「私だって人を勝手につけるような事はしたくは無いの。だから私の条件を言っね」

別に言わなくてもいい。ここまで条件が揃っていれば鈍い人でも気づく。

「お風呂とトイレ以外は私と常に行動を共にすること。いいわよね？」

「だろうな。」

ニコニコと俺の有無を言わせない笑顔をする睦月。

「いったい俺はどうしてこんな理不尽な展開に身を置いているのだろうか。普段なら漫画を読んだり、友達と遊んだり、まれに勉強をしたりと普通な生活を送っていた。それなのにこの偽メイドは俺の普通な生活にピリオドを打ってきた。そもそもこの偽メイドは本当に何者なのか。もしかしたらゲームとか実際はなく、最初から仕組まれているのかもしれない。初心に帰れば俺っていったい何？とかうつ病の人が言いそうな答えにたどり着く。いったい俺はどうしたいのだろうか。……分らない。」

そんな事をグルグルと頭の中で繰り返していると、何時の間にか睦月はムスツとする。そしてメイド服に手をかけると脱ぐ仕草をする。

「返事は？」

脅迫だった。

一人暮らしだったら知らない顔をするが、家族がいる実家で裸工プロンで生活をされた暁には確実に俺は肩身の狭い生活を送る事になる。

俺にできる行為は結局一つしかなかった。

「……分かった。もう好きにしてくれ」

「そうする。もしお風呂も一緒に良かったら言ってね。その時は喜んで一緒に入るから」

だれがこんな脅迫女と一緒に入るか。きっとまた訳の分からない脅迫をするに違いない。

俺はため息をついてベランダに出た。まだ星がでるには早すぎて太陽すらギリギリしている時間だが、屋根にでも行こうと思った。

やっぱり俺の逃げ場所は屋根しかないと思った。

ベランダの柵に足を掛けて屋根に上る。

俺は屋根の上に大の字に寝転がり、目を閉じる。

眩しかった。

目を閉じてても日光が俺に降り注いで、もっと居心地が悪く思えた。

「隣いいかな？」

突然睦月の声がした。

目を開ければ目の前に睦月の顔があった。逆光のせいで顔ははっきり見えないものの、睦月だと分かる。

足音も気配もなく、俺の目の前にいたのだが、俺は別にビックリはしなかった。ってか、この偽メイドの本当の正体はくノ一とかじゃないのか？

「別にいいよ。それで、どうかしたの？」

「和人の様子が変だったから」

そりゃあそうだよ。だれだって憂鬱になる時ぐらいあるさ。

「……きつと睦月の気のせいだよ」

その様子が睦月のせいだとしても、俺にはそんな中傷な言葉をかけるのは無理だ。

俺は誤魔化すように微笑む。この微笑みは作った笑みだから、きつと貴明には『なに無理しているの？』とか言われるに違いない。

「そう。私にはちよつと無理をしているように見えたよ」

「……他に大切な話があるだろ？」

「どうしてそう思うの？」

「理屈じゃなくって、ただそんな気がしたから」

「お見通しなのね」

お互い様だ。

「なら本題に入らせてもらうけど、まだ私と和人は契約を結んでいないの。だから私と契約を結んで」

結んでとは下から目線だ。昨日は主からパートナーの変更は認められないと言っていたのに。

「どうして？」

睦月は何がどうしてなのか分かっていないようで、怪訝そうな顔をする。まっ、それも当たり前か。主語やら代名詞やら詳しいのは分からんが、そういつたのが欠けているからだ。これで分かったらエスパーぐらいだな。

俺は右手で太陽を遮るように目の上に置く。

「どうして『結べ』と言わない？」

「あたしはロクデナシとは違うわ。私をパートナーにしたくなかったら私は諦めるつもりよ」

「……」

平穏な生活に戻る最後のチャンスが突然きた。

が、ここで本当に平穏な生活に戻ってもいいのだろうか。もしここで俺が断ったら睦月はどうなる？ パートナーが見つかるまで野宿って事になる。もし最悪なパートナーと契約を結んだら？

色々な事を考えてしまう。平穏な生活に戻るのは魅力のそその話だ。けど一人の女の子を路頭に迷わせてでも平穏な生活に戻りたくはない。

俺は優柔不断だ。今までは誰かが決めた事をしてきた。だから優柔不断でもさほど関係はないし、今のような状況にもあった事は無い。だからこそ俺はどういていいのか分からない。自分がどうしたいのか分からないのだ。

無言だけが辺りを支配した。

「……そう。ならもう何も言わなくていいよ」

その無言を破ったのは睦月だった。少し怒ったような声をしていたのだが、俺には悲しそうに聞こえた。

自分でも驚いた。

俺は立ち上がる睦月の腕を掴んでいたからだ。

どうして俺は腕を掴んだ？

最悪なパートナーと契約を結ばれるのが嫌だから？

女の子を路頭に迷わせたくないから？



睦月の悲しそうな声を聞いたから？

違う。

全然違う。

全部違う。

ほんぽんに俺は睦月とずっと一緒にいたい。そう思ったからだ。俺は別に睦月をどうこうしようとは思っていない。家族に睦月を見せ付けるためでもない。なんだかんだ言っても俺は睦月と会って少なからず楽しいと思えていた。

だから俺は睦月の手を掴んだのだ。これに対して悔いはない。だって自分が選んだ道だからだ。

「……もう少しこのゲームに付き合ってもいいと思っている」

睦月は意外そうな顔で俺を見つめたが、直ぐに笑みをこぼす。

「素直じゃないのね」

「男は照れ屋だからな」

「そう。なら和人の本音を聞かせてよ」

「いずれ、な」

「私は今聞きたいの」

真っ直ぐ俺の目を見据える。睦月の顔は真剣で、そんな睦月の目を見る事はできなかった。

俺は視線をずらし、

「まだ言えない。だけど必ず言うから、その時まで待つてよ」

「……そう。なら私からはもう聞かない。いつか和人の口から聞けるまで待つているわ。それじゃあ契約の儀式を始めるわよ」

言うや否や辺りが暗くなる。まだ昼間なのに、夜のようなだった。

それと同時に太陽は月のように黄色く染まる。まるで夜のようなだ。

俺は体を起こして睦月と向き直る。こうしなきゃいけないと思うたからだ。

「汝は我と共に戦うことを誓うか？」

「ああ、誓う」

何時の間にか俺たちの周りには漫画で見た魔法陣のようなものが

浮かび上がっている。そして俺の言葉と同時にパアツと輝きだす。

「今日この時をもって汝と我は主と僕。汝は我に忠誠を誓う」

言い終えると睦月は俺の手をとり、ひざまずく。そしてそっと手の甲にキスをした。

同時に世界が元通りに明るくなる。太陽も普通どおり眩しい。

「これで契約の儀式は終わり」

満足そうに睦月は笑った。

まだ手の甲には睦月の唇の感触が残り、手の甲をチラリと見ればそこには刺青のように模様が浮かび上がっていた。

「これは何？」

暗く何をモチーフにしたのか分からない模様を擦りながら俺は聞  
く。

「ああ、それは私の能力よ」

「能力？」

「そうよ。私は闇を操ることができるの。そうね、例えばこんな感  
じ」

睦月は俺の前に手を出す。そして手の上にどす黒いものが渦を巻  
き始めた。次の瞬間には睦月の手にはどす黒い刀が握られていた。  
その他にも俺の影を立たせ、真っ黒な俺が隣に立たせるなどもして  
くれた。

「ちよつと私の能力は特殊だね、こういったこともできるの。私が  
パートナーで和人は幸せ者よ」

「そうかい。なにはともあれ、これからよろしく」

俺は睦月に手を差し伸べる。

睦月はニツコリと微笑み、俺の手を握り返す。

「よろしく、主様」

これで本当に普通の生活には戻れないのかもしれない。それでも  
俺は別にいいか思っていたりする。この素敵な睦月の笑顔がまだ  
当分は見られそうだからだ。

睦月の髪は風になびき、そのサラサラとした髪が素敵なのだが、

このメイド服は近いうちに何とかしなければならなかった。

「いまさらだけど、後悔はないよね？」

「ああ、後悔だけなら睦月と出会った時だけだよ」

むしろ後悔など最初からないのかもしれない。もし後悔しているのなら睦月と共にいることを望まなかったかもしれないし、この契約もなかった。

もし後悔以外のものがあるとするならば、期待と不安ぐらいだ。

4

次の日の朝。

月曜日で夏休みやら冬休みなどの長い休みでもない今は普通に学校に登校をしなければならない。また一週間学校に行かなければならないと少し憂鬱になるが、それでも友達と喋り悪ふざけしている時間は楽しい。それ以外は……進学か就職の通過点とでも言うておこう。

それはそうと、俺が目覚めればベッドで寝ているはずの睦月の姿は無かった。ちなみに俺はベッドの隣に布団を敷いて寝ている。

おいおい、風呂とトイレ以外はずっと一緒じゃないのかよ。

俺は後頭部を軽く押さえながら壁にかけてある時計を見る。

時間は七時前。

学校の授業が始まるのは八時半からで、家から学校まで三十分ほどかかる。そのため学校に行くにはまだ早い時間だった。

俺はまだ開けきっていない目を軽く擦りながら居間に行く。

居間には家族が勢ぞろいだったが、その中に睦月の姿は無かった。そうなれば散歩にでも出かけているのだと思い、そこまで気に留める事は無かった。そうなれば無事に帰ってこられるか心配したが、それは直ぐになくなる。だって最初に会った時は屋根の上で、特殊

な能力の付属付だ。きつと尋常じゃない身体能力を秘めているに違いない。

「あら、睦月ちゃんはまだ起きてないの？」

俺に朝の挨拶をした後に、そう母さんが言う。

机の上には朝食が置かれているため、暗黙の了解で出来た自分の席に座る。

「学校に用事があるって早くに出てったよ」

適当な事を言いながら俺は箸を持って味噌汁をすする。うん、今日もいつもの味だ。

俺は結構母さんの作る味噌汁は好きだったりする。この濃すぎず薄すぎない絶妙な濃さは母さんの味だ。

さて、こんなB級フードナレータ染みたコメントはさて置き、学校に行くのにもじき幼馴染が来る頃だと時計を見ながら思う。まだ時間はたつぷりあるが、遅刻をするよりかは幾分まだ。

俺はさっさと朝ご飯を食べて制服に着替える。そして顔を洗って軽く寝癖のついた髪を直していると、チャイムが鳴った。きつと幼馴染だろう。

携帯で時間を確認しながら俺はバッグを持って玄関に行く。案の定そこにはニコニコ幼馴染が立っていた。

「あら、彼女さんは？」

母さんと一緒に事を言い出した。別にいいのだが、どうにもこの二日で睦月という存在が大きくなってきている。これって良い傾向だと受け止めていいよね？

「用事があるからもう行つたよ」

俺は靴を履きながら言う。

「和人って彼女さんに無関心だね。そうそう、彼女さんはどの高校に行っているの？ 僕たちと同じじゃないよね？」

聞かれたくない事をドンピシャで聞いてくるな。

「内緒」

それ以前に睦月の歳からして俺は知らない。知っているのは性別

で偽メイドだけって事だけだ。

俺たちが通っている三日月高校まではバスに乗って通っている。地元から一番近い高校を選んだため、この高校には地元民が終結している。それもそうだろう。他の高校となればバスから電車に乗り継がないといけない。最悪の場合電車でバスというオチも考えられなくはない。そんなメンドクサイ通学を三年も続けられるものなら俺はゴッドと崇拜しても構わないくらいだ。

バス停は俺たちの家から少し離れたところにある。毎日同じ時間のバスに乗っているため、今の時間だけを確認する。それでもバスは電車と違って確実にその時間にくるとは限らない。早い時もある。遅い時もある。便利な分そういったところが曖昧になってしまう。仕方が無いにしろ、これに乗れなかったら次のバスは何時間後かになってしまう。不便極まりない地元だ。

「そうそう、昨日聞こうと思っていたけど、いつから彼女さんと付き合っているの？一言ぐらい僕に言つてよ、水臭い」

「あゝ、半月ぐらい前からだったハズ」

「どうしてハズなの？あつ、もしかして忘れちゃったとか？そういうところはいっしょにしないとダメだよ？」

「そうだな。これからは気をつけるよ」

「けど和人に異性の人に興味ないとか思っていたけど、案外やる事はやっているね」

「俺だつて一応高校生だぞ？それぐらいするさ」

「その割には高嶺の花をもぎ取ったね。さすが和人だよ！」

「高嶺の花って……。まあ外見だけはそう思っても仕方ないか」

「って事は、性格はどん底って受け取ってもいいの？」

「いや、人に迷惑をかけないから性格が悪いって訳じゃなくって、時々俺をオモチャにして遊ぶから」

主にワイシャツ事件と裸エプロン事件だ。……まるでアダルト攻めだな。

そんな話をしているとバス停が見えてきた。

ブォーン。

バスの排気音がしたかと思えば、俺たちの隣をバスが通り過ぎる。これは非常にピンチだ。

「走るぞ！」

俺は言い終える前に駆け出していた。幼馴染も同じ事を考えていたのか既に走っている。さすが家族以外で一番時間を共にする仲だ。抜かりは無いな。

俺たちが乗っているバスの運転手は毎回同じということもあり、少しだけ待ってくれて何とか乗ることが出来た。俺は軽くバスの運転手にお礼を言う。

田舎だけありバスに乗っている人はあまりいない。しかも全員が三日月高校の学生服を着ている。どれだけこの若者は三日月高校を愛しているのだろうか。知らない誰かが見たら確実に乗るのをためらってしまうだろう。

「話を戻すけど、遊ぶって具体的にどういったこと？」

その話題はまだ続いていたのね。バスに乗れた嬉しさからすっかり頭から飛んでいた。

俺たちが座っているのは後ろの方にある二人よりの椅子だ。広い四人よりの椅子に座らないのは今に始まったことじゃない。

「秘密」

「どうしてさ？ 僕と和人の仲じゃないか」

「人疑義の悪いことを言うな。誰かに勘違いされたらどうする？」

「僕は構わないよ？」

「俺が構う」

「彼女が出来てから少しつれないぞ」

ツンと俺のデコを突つつく幼馴染。ゾクツと体中に鳥肌が立った。気持ち悪いから止めるよな」

「それはツンデレのツン？」

「ちがう本音だ！ ってかさ、さっきから何かと彼女がどうとか聞けど、いったい貴明は何を聞きだしたいわけ？」

俺の幼馴染だからって全てを話す義理はもちろんない。俺だって秘密にしたい事ぐらい人並みにある。

幼馴染は顎に人差し指を当てて考え始める。どうでもいいが、時々この幼馴染に嫌な疑惑を覚えて仕方が無い。もしその疑惑が確信に変わったら、きつと今より距離をとるに違いない。ほら、俺の貞操がかかっているからね。……自分でいって少し空しいな。

「強いて言うなら和人と彼女さんがどこまで進展しているのか知りたくってね。それによって僕が彼女さんに接する態度も変わるかな」

「それは良い意味か？ それとも悪い意味か？」

「和人が判断する事だから僕からは何も言えないかな。だから僕の態度に号ご期待だよ」

「そのアニメの最後に言うような台詞を生で始めて聞いたぞ……」

「奇遇だね。僕も初めて言った」

こんな他愛も無い話をしていると目的地である三日月高校前付近まできた。だから俺は止まるボタンを押す。

バスの中にいる人はほとんど三日月高校に通っている人で、俺たちを含めてこのバスの常連さんだ。俺はバスの運転手さんに定期券を見せてから下りる。

まだ授業開始には早い時間だが、結構の人が校門をくぐっていた。俺たちも校門をくぐり、玄関に向かって歩いている時。

「ちよつとお待ちなさい！」

どこかで声がした。一応俺の知っている声だが、ここで振り返れば俺の負けだ。

俺は聞かなかった事にしてスルー。

「待ちなさいと言っているでしょ！？」

聞こえない、聞こえない。

「ちよつと和人。早く反応しないとヒステリックになるよ」

コソコソと俺の耳元で幼馴染がチラリと後ろを見ながら言う。

「取り敢えず走るか？」

「……別にいいけど、そうしたら和人に被害が食うでしょ？」

「その時は貴明も道連れさ」

「あの人ちよつと苦手だから僕は嫌だよ」

珍しい。この幼馴染に苦手な人がいたとは初耳だ。

「キー！ 私を無視するとは見上げた根性ですわ！！」

ヒステリックになった。

このタイミングでこのヒステリック娘の紹介でもしようかな。名前は加名盛ユイ。どこか忘れたけど、会社の一人娘。俺が気に食わないのか、何かと突っかかり、さらには自分が学校一の美貌と断言して美化委員に入り、いつのまにか会長まで上り詰めた真正正銘のアホだ。喋らなかつたら今以上に人気になるのに勿体ない。以上紹介終了。ちなみに現段階で男子が最も憧れる人は西尾真琴。通称マドンナだ。その次がこのヒステリック娘。こんなヒステリック娘が二位とは世も末だな。

ヒステリック娘は俺たちの前に仁王立ちで立つ。ちなみにこのヒステリック娘には取り巻きがいる。何でもファンクラブ会員が一日交代で取り巻いているようだ。確かに同じ顔を連続であまり見ないな。

「森澤和人と村井貴明その場で止まりなさい！」

「僕の名前はアンジェリック・F・ジョナサンですよ？ 人違いだと思います。それでは急ぐので失礼」

そう言い残してヒステリック娘の隣を通り過ぎる。

「あつ、すいません。人違い……って、そんな筈があるか！！」

一瞬引つかかった。やっぱアホだ。

ヒステリック娘は叫びながら俺の腕を掴む。

「本当にお前はなに？ どうして毎日毎日俺に突っかかってくるのかな？」

こつも毎日同じ展開で登校するのはウンザリしてきた。少しぐらい俺の普通な生活に貢献して突っかかってくるのは止めてくれよ。

俺の腕を掴んで睨みつけるヒステリック娘。その隣では幼馴染がオロオロとしながらお化けの格好で体を震わせている。取り巻きも



予想外の事態に少し戸惑っている。

さて、ここまで大事にしたからにはヒステリック娘の謝罪に期待だ。まあ今までにも何度かこういった事はあったが、謝罪の言葉を聞いた事は一度も無いけどね。これだからお嬢さまというやつはプライドが高くて困る。

「わ、私は美化委員会長として！」

「で、なに？ シャツもズボンに入れている。髪も染めていないしピアスもしていない。タバコも吸わなければ酒も飲まない。それで美化委員？ はっ、その美化委員とやらは真面目な男に突っかかるのが仕事なのか？ 美化委員会長っていうのは相当暇なのだね」

ここはガツンと一度言っておく必要がある。そうじゃないと、このヒステリック娘は今以上に付け上がるに違いない。

「うあ、和人がまれに見るほどの強気……。加名盛さん、ここは素直に誤ったほうが良いと幼馴染の僕は思うよ？」

いつもニコニコしている幼馴染なのに、今は表情が少し固い。そこまで俺はイラツとはきてはいないのだが、この幼馴染がそう言うなら相当なものだろう。

「うるさい！ うるさい！ わ、私は謝りませんわ。今日は見逃してあげますから早く教室に行きなさい！！」

そう言っただけでヒステリック娘は俺の腕を離す。

俺が望んだ事なのだが、俺はここでヒステリック娘の言った通りに教室に戻るわけにはいかない。もしここで教室に戻ってしまったらいつもと何も変わらない。ここはもっと強気に出なければ明日も同じ展開になること間違いなしだ。少しぐらい俺の印象が下がろうが別に構わない。その印象を犠牲に安らぐ登校につなげられるなら安いものだ。

俺はヒステリック娘を見据える。

「そうじゃないだろ？ 俺はもうウンザリだって事ぐらい察すれよ。もう俺に突っかからないでくれ」

「っ！ 貴方は今何を言っているのか分かっているのですか！？」

私は貴方が女性との付き合いがないため直々に私が貴方に接しているのですよ!？」

「それなら俺に突っかかる理由はなくなるな」

「どういう意味ですか？」

「それについては僕から説明させてもらうよ。っと、その前にこれを見てよ？」

幼馴染は突然でしゃばってきた。まあ俺の口から偽りではあるが、彼女がいるとは言いたくはない。

ポケットから一つの写真を取り出し、幼馴染はヒステリック娘の前に差し出す。

「侵害ですが、この私より美しい女性は誰です？」

「和人の彼女だよ」

「貴方は私をからかっているのですか？ 失礼ですが、この男のそのような美しい彼女がいるはずがありません」

本当に失礼だな、おい。

「ならこれを見ても同じ事を言えるかな？」

さらにもう一枚ポケットから写真を取り出す。一枚目の写真はきつと見せても恥がないかもしれないが、その言葉から察するに二枚目は恥ずかしい写真に違いない。偽キスシーンか、睦月を見上げるシーンか、裸エプロンに迫っているように見えるシーン。百歩譲って偽キスシーンは許そう。が、それ以外は何が何でも他の人に見せる訳にはいかない。

俺は幼馴染の手にある写真を奪い取るために焦りながら手を伸ばす。が、時は既にどうしようもない。

ヒステリック娘は一瞬我が目を疑ったのか、何度も目をパチクリさせる。俺はそんな中、素早く幼馴染から写真を奪い取る。そしてその写真を見れば、偽キスシーンだった。見られた事に対しては良くは無いが、まだこの領域なら許せる範囲のためホッと安堵する。もし他の写真なら幼馴染との仲を決裂してもおかしくは無い。

「私の目が現役なら今の美しい女性とキスをしている写真ではない

のですか？」

「……」

ヒステリック娘は俺を一瞥しながら言うが、俺は何も言えなかった。

「何も言わないって事は真実なのですな。男女の付き合いの中ではこういった事もあるでしょう。ですが、私は一応美化委員会長として我が生徒が誤った道にそれないか見守る義務があります」

「何か？ 明日も今日同様に俺に突っかかるんでも？」

「突っかかるのではありません。私は貴方を誤った道にそれないか見守るのです」

「……勝手にしろ」

俺もこのヒステリック娘は苦手だ。何かしら理由をつけて俺に突っかけてくる。今回は幼馴染の失態でこうなったが、こうなるとは俺も予想をしていなかったから別に責めるつもりはない。それでも今後の課題としては幼馴染から写真を奪還することだ。

俺はそれだけを言い残して玄関に向かって再び歩き出した。後ろか「待つてよ」と幼馴染の声が聞こえるが、聞かなかった事にして止まらない。我ながら小さすぎる反抗だ。

教室に入ると、校門の騒ぎから俺たちを見るなりクラスメイトがコソコソ話を始めた。

俺の席は廊下側の壁の中央辺りにある。俺は気にする事も無く、自分の席にバックを置きながら座った。隣の席は腐れ縁の幼馴染で、俺同様にバックを机に置いて少し座った。一つ違うとするなら、この幼馴染は申し訳なさそうに俺をチラリと見ていることだけだ。

「気にするなよ。俺は貴明を責めるつもりは全然ないから」

本音はこんな姿の幼馴染を見るのは落ち着かないからだ。いつも通りニコニコしてくれないと調子がくるう。

「本当？」

悲しそうな目で見上げてくる。その顔は小動物のようだった。が、

こいつの場合は小動物でもバックに情報と言う名の大型の恐竜が控えているけどね。

「本当だよ」

「やっぱり和人は僕の見方だね！」

実に嬉しそうだが、そういったことは人前で言うのは止めてほしい。俺にも変な疑惑がつく可能性が無いとはいいきれないからね。

俺は大きなため息をついて机に突っ伏す。まだ一日が始まった序盤だが、この教室に至るまで嫌な事が多すぎる。特にヒステリック娘の存在が。

「あつ、そうそう。ちよつと小耳に挟んだけど、今日転校生がくるらしいよ。和人はどっちの性別だと思う？」

「さあね。俺には関係のない事だ」

「もう、少しぐらい話に乗ってくれてもいいじゃない。僕の予想はね、きつと男だよ。ほら、転校生が美人な女性って展開は漫画かアニメの世界だけじゃない？ だからむさ苦しい男が転校してくるに違いない」

俺はチラリと視線だけを幼馴染に向けると、楽しそうだった。きつと新しい情報が手に入るとか思っているに違いない。

「貴明のむさ苦しいって基準はどこからだ？」

「そうだね。漫画とアニメを愛さない人は全般にむさ苦しいと思うよ」

「……聞いた俺がバカだったよ」

「それは聞き捨てならないな」

「なら聞くが、仮に汗っかきでおデブちゃんが転校してきたとする。その転校生がもし漫画やらアニメが大好きだったら同じ台詞は言えるか？」

「もしそんな転校生なら僕は歓迎するよ」

こりゃあ思っていた以上に重症だ。どこまで漫画とアニメをこよなく愛しているのだろうか。それ以前にいつから幼馴染は漫画とアニメを愛するようになったのが気になる。

オタク魂を全開にしているのか、拳を作って明後日の方向を見ている。

「……そうかい。貴明がそれでいいなら俺は何も言わないよ」

「なんなら僕の言っている事に現実味が沸くような話をしようか？」

「別にいいよ。俺も漫画は好きだけど、そこまで熱中しようとは思ってはいいからな」

「それってやんわりと僕の話は聞けないってこと？」

おっと、この幼馴染に火をつけたら何をされるか分かったものじゃない。

幼馴染はギロリと俺を一睨みする。

「違う。楽しみは次まで待っていようと思っているだけだよ」

見苦しい言い訳しかできなかった。

「そうだよな。やっぱり和人はこつちの世界には欠かせない人材だから、コツコツと話す必要があるよね。ヤバイヤバイ、焦ったらダメだよな」

言い訳した本人が言うのもなんだが、「別にいいよ」うんぬんと「違う」うんぬんは全然かみ合っていないぞ。どっからそういった言葉が出てくる。まっ、いいか。これで俺の被害が未然に防げたのなら嬉しいものだ。

「みんな席につけよ」

そんな話を話していると、突然ドアが開かれて出席簿を肩たたき代わりにしながら担任の田中先生が入ってくる。

田中先生の性別は男。離婚数は二回。現在その記録を伸ばそうとしている。そんな先生だ。悪い先生じゃないのだけど、先生と見るにはちょっといかつい顔をしている。どちらかと言えばそっち系に見えなくは無い。

クラスメイトはこの先生に恐れているのか、シーンと教室中が静まり返る。

「欠席は……いないな。よし、良い話と悪い話。どっちから聞いたい？」

「……」

誰も発言しない。おい、田中先生の眉が痙攣しはじめたぞ。

「……悪いほうから聞きたいです」

誰も言わないから俺が言う破目になったじゃないか。

俺はため息をついて窓の外に視線を送る。別に話しに興味が無い訳じゃない。ただ、どうせまた変な展開になると感づいて現実逃避に浸っているだけだ。

「悪いほうだな。来週テストがあるから気を引き締めて勤勉に勤めるよ。それで、良いほうだが、森澤は何だと思う？」

「転校生でしょ？」

「どうしてその情報を知っている。……どうせまた村井が学校にハッキングでもして得た情報だろ？」

「確かに僕はハッキングでこの情報を知りました。ですが、転校生がくるだけで、それ以外はまだ何も知りませんよ」

なに白状している。ここは嘘でも白を切るに限るだろう。それよりどこからそんなスキルを得たのか俺は知りたいね。

田中先生は諦めたようにため息をつく。

「まあいい。それより転校生だ。あまりはしゃぐなよ。ほら、入っ  
てきなさい」

それと同時にガラリとドアが開く音がした。またもや同時に男子の喜びに帯びた歓声。

俺は視線を外から教卓に移す。

絶句だ。

ようやく今朝のような事が起きたのか理解できた。今朝睦月の姿が見えなかった理由。そして昨日どうしてあんな条件を出してきたのか全てが理解できた。

教卓の前にはニツコリと笑みを見せる睦月の姿。服は偽メイド服ではなく、学校の制服を着ている。今までに偽メイド服姿しか見たことがなかったから、この服はあまりにも自然だ。

隣の幼馴染を見れば驚きのあまりに放心状態だ。それもそうかも

しれない。偽りではあるが、俺の彼女と紹介したのが土曜日で、その次の月曜に転校してきた。これを驚かないで誰が驚くつてものだ。「琴田睦月です。これからよろしくお願いしますね」

偽名を使いやがったな。……いや、そうとも言い切れないかもしれない。俺は睦月の本名については何も知らない。あるのかも分らないし、もしかしたら無いのかもしれない。

睦月は黒板に名前を書くときニコリと誰にも負けないエンジェルスマイルをする。どうしてエンジェルスマイルなのかは、自分でも良く分からない。ただ、その笑顔が眩しかったからそう命名するのが妥当だと思ったからだ。それより気になるのが、名前の下に時期森澤睦月と書いてあるのが気になるところだ。

本性を知らない男子は片手を上げて雄叫びを上げる。一人は憂いに満ちているのか涙を目に溜めて、一人は睦月のエンジェルスマイルに心を奪われたのか胸を押さえではじめる。十人十色いろいろな反応をする中でもっとも凄かったのがクラス委員長だった。委員長はかけているメガネを高速で拭きすぎてヒビが入り、落ち込みながらも睦月を見つめていた。しかも両手を胸の前で握り、その姿は崇拜する人が目の前にいるかのようだった。どこまでテンションが上がるのか気になるところだ。

さて、ここにきて一つの問題に直面する。もしこの状況で睦月と俺が付き合っていると幼馴染が暴露したらどうなるかって事だ。良くて無視、悪くてリンチだ。俺の平穏な最後の砦をも崩壊さないでくれ、マジで。

「それじゃあ適当に質問する時間をやるから、司会は委員長だ。ぱっぱと始めてくれ」

委員長はメガネにヒビが入り落ち込んでいるかと思ったが、今までに見ないぐらいの笑顔で、嬉しそうに教卓までスキップする。その姿にクスリと睦月が笑えば、委員長は秘かにガッツポーズ。まさに計算したかのようだった。

「僕の名前は岡本健で、このクラスの委員長です。僕の事はダーリ

ンとも呼んでください。あつ、変な意味ではなく、僕は普段から皆にそう呼ばれて慕われています」

いつ誰がお前をそんな風に呼んだのか詳しく聞きたいね。

「ひっこめメガネ！」

「何ドサクサにまぎれて肩を抱こうとしている！！」

「後で体育館裏にこいや！！」

案の定野に解き放たれたケルベロスの如くクラスの男子は身を乗り出す。しかも筆箱やら靴までも飛ばす始末だ。なぜか全て委員長メガネにクリーンヒットする。そのコントロールを今度の球技大会でも見せ付けてほしいな。

委員長は割れたメガネなんて知らないといっているかのように、床に散乱したレンズを踏みつけて男子に睨みをかける。美しい人の前ぐらいはカッコイイところを見せないといけない精神が発揮したのだろう。中々のガッツを見せてくれてありがとう、委員長。

「君達は置かれている立場を忘れているようだね」

クイツとメガネを上げる仕草。メガネが無いのに。

「僕はクラス委員長で、この質問タイムを仕切っている身だよ？」

そんなにガンを飛ばすぐらいならウイंकでも飛ばしてはどうだい？ ええ！？」

「……」

男子は一斉に無言でウイंक。なんとこっけいな姿だよ、情けない。

「君達は本当にバカだな！ ウイंकを飛ばす事だけに全力を注いで誰も手を上げないとはね。はっ、これだから低俗は困る」

今は別にいいが、プルプルと震えて我慢をしている男子が放課後に何をしでかすが分かったものじゃない。そこまで考えていないとすると、この委員長も相当なおバカさんだ。

「それでは質問タイムに戻ります。はい、鈴木さん」

本名は鈴木円。性別は女性で、趣味と部活動はバトミントンのこと。



「どうして転校してきたのですか？」

取り敢えずメジャーな質問からきたな。

「家庭の事情で、急な転校が決まりました」

教室中から「へー」と声上がる。

そんなこんなで質問タイムは進み、そろそろ授業開始の時間になった。そのため委員長は「あと二人」と言い残す。ここまでは全員女子と、男子には目もくれない酷さだ。むろん俺は手を上げる事はない。それどころか目すらも合わそうともしない。

「武藤さんいつてみよう」

どこまでも男子を当てる気はないようだ。そろそろ男子の殺気に気づいて早退でもしたほうが懸命な判断ですよ、委員長。

「その時期森澤睦月って、どういう意味なの？」

「私の口からは言えません」

ポツと頬を赤く染める睦月。なんか卑猥だな、おい。

「それでは最後の質問となりました。ここは一つ転校生の琴田さんに当ててもらいましょう。指でもさす程度でいいのでよろしくお願いします」

委員長が言い終わると睦月は「んー」と考え始め、指をさす。その先には俺。ではなく、隣の幼馴染だった。

「村井くんにしましょう」

よからぬ気がする。さしずめ俺で遊ぼうと思っているに違いない。その証拠に睦月の口元が緩んでいる。

教室中ザワザワとざわめきあう。

俺と幼馴染は知り合いだから何も思わないが、他の皆はどうして転校してきたばかりの子が名前を言える。そう疑問に思っている。

クラス中が幼馴染に集中する。男子は嫉妬の視線で、女子は興味の視線だ。

「彼女さんは今後僕の敵となる人ですか？」

さらにざわめく教室。そりゃあ「彼女さん」とか言っているのだから、睦月に彼氏がいるのは明確だ。それだけならまだしも、幼馴染

染がその事を知っているとあれば、幼馴染の知り合いが睦月の彼氏だと勘のいい人は気づくはずだ。

「それなら宣戦布告として、その席を譲ってもらえますか？」

「それは無理な相談だよ。僕は和人を見守る義務があるからね」

「ではこれと交換といきませんか？」

なにやら二人だけの世界に入っている模様だ。この中央に俺がいるのは残念だけど。

睦月はポケットから一つの写真を取り出す。その写真は俺の知らない写真だった。それでも中央に映っているのは、紛れもない俺である。

「これを見てもそう言いますか？」

「そ、それは和人の寝顔じゃない！？ それだけならまだしも彼女さんの膝枕バージョン！ それは僕も入手していないレアな写真じゃないか！！」

俺の代わりに詳しい説明をどうもありがとう。

さて、詳しい説明は置いて、ここまで二人の話を聞いていれば誰だって俺と睦月が付き合っていると分かる。ここは今から早退して、込み上げる男子の怒りが収まるまで登校拒否になるのが吉だね。

「これだけで満足できないのなら、これも差し上げます」

「っ！ ぼ、僕が長年求めていた写真をどうして！！ それよりどうして僕が持っていない写真を彼女さんが二つも持っているのさ！？」

二枚目の写真は口にするのもためらう代物だ。あえて言うなら仮装パーティーでメイド服に仮装した。とでも言うっておこう。

俺の醜態を机から身を乗り出してまでも欲しいのか、幼馴染は。

「って、ちよつと待て！ いつの間にそんな写真を撮った！？」

睦月と幼馴染のやり取りを見ていたせいですっかり気に留めなかったが、俺はそんな写真を撮られた覚えは無い。

「もちろん和人が寝ている隙に、ね」

ウィンクで可愛さをアップするのはいいが、そのウィンクは小悪魔のウィンクと受け取っていいよね？

クラスの男子は睦月のウィンクが引き金となったのか、嫉妬のある視線から、殺意のある視線に変わりつつあった。このままだと視線で俺の精神はどうにかなりそうだった。

俺はこの事態をどう收拾するか考えるものの、これといって良い案もない。それなら俺から睦月の側にずっと居たほうがまだ安全といえるのかもしれない。睦月の側にいるとロクな事がないのだが、安全を捨ててまで得るものは何もない。それなら素直に安全な策に身を任せるに限る。

教室のあちこちから「同棲」という単語が出てきたが、ここで白を切ろうものなら後が恐いたため俺は何も言えなかった。

「それで、この写真と交換に和人の隣を明け渡してくれますよね？それとも写真を諦めますか？」

「……分かったよ。この席は今日から彼女さんが好きに使って」観念した幼馴染は机の中を集めて俺の後ろの席に置く。一応そこには先客がいるのだが、この幼馴染には関係が無いようだ。

「その席僕に譲ってくれてもいいよ、進藤くん？」

確か進藤は学校のマドンナをストーキングし、盗撮までした経緯があつたはずだ。ここで幼馴染の頼みを断るようなら、校庭の花壇に西尾真琴のファンに植えられること間違いなし。

「……」

進藤は無言のまま机の中身を整理し始めた。幼馴染に弱みを握られていることを既に知っているようだ。

机の中身を整理し終わった最後のつめに机と椅子を軽く払う。

幼馴染は悪い気持ちさがさらさら無いのか、ニコニコの笑顔で椅子に座って新しい席に満足しているようだ。しかも嬉しさのあまりか後ろから俺の背中を突っついてくるのをどうにかしてほしい。

「話がついたところで琴田は森澤のとなりに座ってくれ。そろそろ授業が始まるから、あまり騒いで先生を困らせるなよ」

さつきから教室の隅で椅子に座っていたから田中先生の存在をすっかり忘れていた。いかつい顔の割には俺と似ている部分があると実感した。影が薄いつて部分だ。

睦月は軽い返事をしながら手に持っているバッグを元幼馴染の机に置く。

「これからもよろしくね」

小悪魔の笑みを浮かべて控えめにお辞儀。

俺はこれから待ち受けられると思われる非日常に心を躍らせる事は無く、ただ今日をどう無事に乗り切りかだけを考えてた。

一時間目の授業が終わり、俺は睦月の手をとって素早く教室を後にする。

転校生がきた初日はクラス中の質問攻めになるのはどこ一緒で、それを阻止した俺に貧寒を買うのは致し方ないが、それ同様の疑問が俺にはある。

「どうやって転校していた？」

誰もいない事を確認しながら言う。

場所は特別教室が置かれている廊下。ここは授業で使う以外はあまり人が寄ってこない場所で、今の俺には都合のいい場所だ。

「ちよつとロクデナシの力を借りて、ね。迷惑だった？」

「当たり前だろ！俺の平穏な日常をどうしてくれる！？」

「そのぐらい私が彼女って事で我慢しなさい。ほら、美人の彼女がいて鼻が高いでしょ？」

「それとこれは関係ない！」

「さつきから叫ばないでよ。いったい和人はどうしたいわけ？」

「俺が望んだ日常は全て無くなったよ！睦月のおかげでね！！」

そうだ同じことを繰り返したかのような日常。暇な休日。どこにでもありふれている平穏な学校生活。その素晴らしい日常が今では遠い過去のように思える。今の日常といえば、男子から嫉妬の目で見られ、家族からも疑われる。これを普通の日常といえるほど、俺

は独特な日常を送ってきてはいない。そして今までの日常に戻るのか、それすらも分からない。

俺は言ってから後悔した。睦月の顔が徐々に歪んでいくのが分かったからだ。

昨日俺は睦月と契約して後悔がない。そう言った。それでも心のどこかで睦月と出会った事に後悔をしている自分がいるのかもしれない。それが怒りという形で睦月に当たり、その結果として睦月を悲しませるような事になった。

「……変な事を言つてごめん。ちよつと色々とありすぎて混乱しているのかもしれない……。本当にごめん……」

「いいの。私だって勝手な事をしたと思つていゝし、和人に迷惑だつて分かつていゝ。……だけど主様に迷惑かける駒つて邪魔だよな」

睦月は苦く笑いながら無理やり笑顔を作つた。その笑顔と言葉がどうしても俺には素直に受け止めることができない。人より少し違つたことができるだけなのに、自分の事を「駒」そう言つた。たつた少しだけ人より優れているだけ、なのに。それについて俺は氣になつた。

言いたい事をいい、睦月は俺に背を向けて歩き出した。振り返る瞬間に睦月が泣いていゝような氣がした。氣がしたただだから、もしかしたら氣のせいかもしれない。それでも俺の手は自然に動き、睦月の手を握つていた。

前回と今回、理由がどうであれ俺は睦月の手を握つたのには理由があつた。今回の理由は別に睦月が泣いていゝような氣がしたから手を握つたのではない。それだけの理由なら俺は何も言えないだろう。ただ俺には睦月に言いたい事があつた。

「睦月は駒じゃないし邪魔でもない！ 睦月は睦月で、駒なんて言ふな！！」

自分で言つておきながら謎めいていゝ。何が「睦月は睦月」だ。そんな事分かりきつていゝ。俺にもつとボキャブラリーがあればこんな事は言わなかつたのに。

「……和人。そう言ってくれたの、和人が始めて……」  
目に涙を溜めながら俺の胸にそつと顔を押し付ける。  
が、直ぐに胸のところに痛みが走る。

いったいどこの世界に抱き合っていたら胸に痛みが走るのかと思  
いながら俺は痛みを我慢しながら睦月を見れば、俺の胸を思いつき  
り噛んでいた。

「なんて言うと思ったの!? ちょっとラブコメ的な展開を期待す  
るのはいいけど、よくも私にイヤミを言ってくれたわね! ムカツ  
クからもう一回噛む!!」

「いつてー!! 噛むなよ!？」

噛む前に俺の熱い心の叫びを返せ。私利つきならなおよし。

俺はどこかホッとしたような気がした。こっちの睦月の方がどち  
らかといえば睦月らしいからだ。

「うるさい! 私をコケにした罰よ!!」

「いつ俺が睦月をコケにした!？」

「そんなの自分で考えなさい!!」

このご立腹のお嬢をどうにかなだめないことには、何日も胸に齒  
型が残るハメになる。それだけは断じて嫌だ。

「帰りにお菓子でも買ってやるから、噛むのを止める!」

「子ども扱いするな!」

悪化した。余計に胸に痛みが走るが、自分の言ったことからこの  
災いがうまれた。ここは俺が痛みを堪え、睦月のムカム力を見守る  
以外は何もないようだった。

睦月にこんな姿があるのだと思い、俺は少し鼻で笑いながら俺よ  
り一回り小さい睦月の頭に手を置く。

余談だが、言うまでも無く授業に遅れて先生に怒られた。女子か  
らは面白い展開に騒ぎ立て、男子からは……思い出したくも無い。  
できるなら記憶の底で永久に封印したいぐらいだ。

さらに余談だが、クラスメイトで友人の金田裕輔が「やっぱり森

澤くんと俺は切っても切れない縁があるらしい。えっ？ 何が良い事があったのかって？ やつと聞いてくれました！ 僕に嫁ができました！！ あっ、もちろん二次元でね。森澤くんには悪いけど、三次元の女性のどこがいいのか俺の教えてくれないかな？ …… ああ、やっぱりいい。聞いた俺がバカだったよ」とか何とか放課後に言ってきた。金田はイケメンなのに勿体ない。黙っていればそれなりに人気があっても不思議じゃない。……ほんと、どうでもいい余談だ。

## 二月 如月

0

パシーン！

俺の頬に痛みが走る。最悪の目覚めだった。

「やっとな貴女の主様が目覚めましたわね？」

睦月と契約を結んで何日かした時の事だった。

ようやく睦月との生活に慣れてきた時のこともあり、特に気に止めることも無く眠たい目を擦りながら声がした方をチラリと見る。

今日も特に普通の日と変わらない日だと思っていた。だけどいつもと違うのは俺の頬に痛みが走っている事と、そこにいる人だけだ。やたらと派手な服を身にまとい、その女性は俺を見下ろすように立っている。そのやたらと派手な服というのは偽メイドならぬ偽ナースでもなければ、偽チャイナだった。顔つきはどこからどう見ても日本人で、ギリギリ見えそうで見えないくらい絶妙のチャイナ服だった。健全な男子高校生の身として朝からこれほど刺激的なものを見れば、ベッドから出ようにも出られなくなってしまう。

睦月はニヤニヤと俺の反応を面白そうに見ていたが、キリツと偽チャイナ娘を睨む。

「どうしてここが分かったの、水無月？」

それよりどうして土足なのかツツコミをいれてほしい。おかげで床についた泥やら石が気になる。

ようやく俺は今起きている現状を把握した。この土足で偽チャイナ娘は睦月と同類の人なのだと。

ここで水無月について説明でもしよう。水無月とは六月の事だ。



これは中学時代に国語の時間に先生が余談で説明していたのを覚えている。それ以外は全く謎だ。主の姿がなく、契約しているのかも分からない。分かるとするなら下着の色がピンクということだけだ。ちなみにこれは窓が開いて、その深いチャイナ服を着ているから見えても不可抗力というものだ。実にラッキーである。

「それは極秘だから話せないかな」

「なら質問を変える。私達に何のよう？」

さつきから睦月がピリピリしている。この雰囲気だといつ偽チャイナ娘に跳びかかっても不思議じゃない。そうならば必然的に戦場は俺の部屋になるわけだが、それだけは勘弁してほしいな。もちろん外なら木をなぎ倒そうが関係ない。俺の目の届かないところなら暴れようが、何をしようが大いに結構だ。

チャイナ服のスカートをヒラヒラと風になびかせ、水無月は不適な笑みを見せる。

「私と手を組まない？」

「やっぱり水無月はバカね。仮に手を組んだとしても最終的に私達は敵になるのよ？」

ここが戦場になる確率が高くなるから、どういった形でも相手を挑発する発言は止めてほしい。欲をいうなら外で話してほしいところだ。

「そんな事は分かっているわ。けどね、もし私達が手を組めば最後まで生き残る確立が高くなるでしょ？ そうなれば私か睦月のどちらかが生き残る。確立なら二分の一なのよ。結構うまい話じゃない？」

「確立なら、ね。けど最終的に手を組むのに必要なのは信用と信頼よ。それについて私から水無月に抱く信用と信頼は、残念な事にゼロに等しいの。おわかり？ あなたは信頼できないって事なのよ」

「……そう。睦月が私をあまりよく思っていないのは分かりました。それでは睦月の主に問います」

「えっ？ 俺に？」

突然話をふられても寝起きのため頭が回らない。

「ええ。貴方は睦月と少しでも長く一緒にいたいのですか？ それとも近い間に永遠の別れに遭いたいですか？」

「一緒にいるのに越した事はないけど……」

「なら私と手を組めばそれが現実になるわ。一緒にこの戦いを乗り切らない？」

「そういわれても俺はこの戦いに何の興味も無ければ褒美とやらも関係ない。俺はもう少しだけ睦月と一緒にバカみたいな生活を楽しみたいだけだ。そんな訳で、後の話しは睦月に任せて俺は寝る。騒ぐなら外で騒いでくれよ。おやすみ」

俺は再び布団を頭からかぶって二度寝に走る。

薄れゆく意識の中「和人」と、嬉しそうな睦月の声が聞こえた。

1

朝の不可解な出来事が嘘のように、その後は何事も無く時間が過ぎていった。

今は昼休みで、俺は大抵一緒にいるメンバーの幼馴染、石井、金田が俺の机に集まって話している。話の内容としては「靴下とタイツの見た目の問題」について、だ。ちなみに俺は蚊帳の外だったりする。よくもこうも毎日謎めいた問題について熱く語れるものだ。俺には高等テクでついていけない。

睦月は隣の席で他の女子と話しているようだが、どこか上の空だった。今朝の事に何らか関係がありそうだ。あの後俺は寝たため、詳しい話は分からないため後で聞いておく必要があるそうだ。

「ちよつと、和人聞いている！？」

俺はどうにも話しについていけないため睦月を横目で盗み見ていると幼馴染の顔がドアップで現れる。

「ちけーよ！ あと耳元で大声出すな」

「和人が彼女さんばっかり見ているからだよ。どうせ僕達の話なんて聞いていなかったでしょ？」

ジト目で俺を一睨みし、流し目で睦月を見る。

「……聞いていたともさ」

「なら何の話をしていた？」

「靴下とタイツの見た目の問題について……だったような」

「その話は終わったもん！ 今は和人と彼女さんの夜の関係について話していたもん！」

そんな話を俺と睦月の側でしないでくれ、頼むから。

俺は大きなため息をついて、

「……それで、いったいどんな結論に出た？ ちなみに回答によっては貴明と縁を切らせてもらうから」

「何の冗談？ 僕と和人は切っても切れない仲じゃないか。それに僕にはしっかりと赤い糸が小指に見えるよ」

「つまりんジョークに付き合っているほど俺は暇じゃない。それで、結論は？」

「いつに無く本気だね。……け、結論につきましたはいずれまたの機会に」

焦っているのかどこか幼馴染はよそよそしかった。きっと俺が悪いほうの結論が出たに違いない。そうじゃなきゃ、この幼馴染がこんな態度をするはずがないからだ。

「……まあいいや。俺は購買に行ってくるから」

俺は椅子から立ち上がり、ズボンのポケットに財布が入っているのを確認する。

幼馴染に軽く手を上げながら教室を後にした。俺の態度がいつもと違うと悟った幼馴染は俺がドアに手をかけた時に「今日の和人少し変だね？ 彼女さんを意識していたから……これは調査が必要だね」とか聞こえてきた。

俺が教室を出て直ぐに睦月が俺の隣を通り過ぎたかと思えば、そ

のまま俺の手をとってズカズカと購買とは別の方に歩き出す。

「ちよつ、睦月どうした？」

俺の言葉を半ば聞いていないのか、睦月は無言のまま階段を上り、特別教室が並ぶ廊下まで俺を連れ出した。

最近この廊下にくる事が多くなっただけだと思いつつ俺は俯いている睦月の顔を覗きこむ。

「いったいどうした？」

「……和人が私に聞きたい事があるでしょ？」

睦月は廊下の壁によしかかりながらそう言う。

確かに俺は睦月に聞きたい事がある。それでもこうも突然ラチつてまで睦月は聞いてほしいのか？ それとも俺が聞きたいという素振りをしていたのか？ それについては定かではないにしろ、どんなかたちにせよ今朝の事を聞けるならどうでもいいというものだ。

「確かにあるけどさ……。それより今日の睦月ちよつと変じゃないか？」

「普段と一緒によ」

「……そうか。なら聞くが、俺が寝た後に何があった？ 結局あの水無月と手を組む事にしたのか？」

「それは分からない」

「分からないって……」

「一週間後にまた来るって。その時に答えを出すつもり」

フムフム。それでさっきの教室でも睦月が上の空だったわけだな。もし断れば争いは逃れないし、手を組んだとしてもいつかは戦う日がくる。それが早い遅いかの違いだ。

睦月がこんなに悩んでいるのは俺がいるためだと思う。もし睦月だけなら思う存分に戦うのだが、あいにく俺という足手まといがいる。俺と相手を同時に意識しなければならぬ。だからこそ睦月は悩んでいるのだろつ。

俺の予想がどこまであっているのかは分からないが、それでも少なからず俺の心配をしている事には間違いないと思う。あまり誰か

に心配をされた事がないため、そういった事が少し嬉しかった。

「睦月がしたいようにして、睦月の出した答えなら俺は絶対に反対はしない。俺の事は気にせず、睦月のしたいようにしろよ」

「和人……」

「あゝ、あと俺の部屋を戦場にするのだけは止めてくれよな」

「分かった。それだけは約束するよ。……あゝあ、和人に励まされるとは思わなかったよ。案外こういったのも悪くないね」

「ならこれから一人で何でも悩まないで、俺に相談でもしてくれ。解決ができるか保障はないけどな」

「そうね。無理難題な相談をして和人をいっぱい困らせちゃうから」「それは遠慮しとく」

何とか普段の睦月に戻りホッとした。こうじゃなきゃ、俺の調子がかかるう。

俺は最初の目的である購買に向かうために睦月に背を向けて歩き出す。

「パンかジュースでも奢ってやるよ」

「あら気前がいいじゃない。何か裏がありそうね？」

「……やっぱり奢ってやらん」

「うそうそ。ここはありがたく奢ってもらいます」

先に歩いている俺の肩に背後から思いっきりわしづかみにして軽く押してきた。バランスを少しは崩したものの、それほどの威力じゃなかったためこける事はなかった。

俺はそんな子ども染みた事をする睦月を鼻で笑いながら見る。睦月は無邪気そうな笑顔で俺の後を肩に手を置きながら歩いていた。もっともこういった睦月は珍しくはないため、俺はなされるままに歩いた。

今日もつつがなく学校生活が終わり、俺は荷物を確認してバックを担ぐ。

時間を見ればまだバスが来るまで時間はあるものの、時間通りに

バスが来るとは限らない。そのため早めに睦月と幼馴染と学校を出る。

幼馴染は睦月の存在をあまり好ましく思っていないのか、何かしら俺を間に挟んで抗争を繰り広げている。睦月も睦月で楽しそうに幼馴染と言い争いをして、俺の悩みの一つとなったのはつい最近の事だった。

「彼女さんは和人とどこまで関係を築いたのさ？」

そして今も俺を真ん中に両サイドで抗争が勃発しそうだった。言うまでもないが、この抗争を始めるのはいつも幼馴染である。

今まで何度かこの疑問で言い争いをしている。その都度睦月は真実そうな嘘について幼馴染の反応を楽しんでいる。

「ですから私と和人の仲は村井くんが一番知っているでしょ？」

そう言っただけ睦月はさり気なく俺の腕に絡んでくる。ちなみに今は玄関を出たところだから下校中の生徒から嫉妬の目で注目されている。

俺は大きなため息をついて睦月の手からどける。

睦月はつまらなそうに俺を一睨みするが、俺は知らない顔をしてそっぽを向く。

「和人に振られちゃったね。僕ならそんな事は絶対無いから僕の勝ちだよ」

そう言っただけ幼馴染は強引に俺の腕に絡んでくる。睦月ならまだしも男にそういった事をされるのは気持ち悪い。

俺は幼馴染の手をパシッと叩く。

「あら？ 完全に拒まれましたよ？ 私より酷いようですね」

「違うもん！ 和人の本音は腕を組みたいけど、面前の前だから照れているだけだもん！」

どこをどうしたらそうなる。俺は心の底から拒んだぞ。

俺は怪訝そうな顔で幼馴染を見る。

「なにさ？ 和人は幼馴染の僕より彼女さんの味方をするわけ？」

「いや、そういうつもりは……」

「私の味方をするのは当然じゃないですか？」

「どういう訳さ？」

俺の言葉は最初から聞かないようだ。

「自分で言うのは少々問題がありますが、私は女であり人並みよりモテます。ですが村井くんはどうですか？ 幼馴染というカテゴリーを抜かしたら何も残らないでしょ？ その証拠に私が和人にキスをして違和感がありませんが、村井さんがキスをすれば違和感しか残りません。そうでしょ？」

「……やってみないと分からない」

ううゝ、と唸りながら幼馴染は俺の頬に顔を近づける。

俺は焦りながら幼馴染の近づく顔を手で押さえる。言わなくても分かるでしょ？ 幼馴染だろうが性別は男で変わりはない。どういった形でも男にキスをされるのを拒まない男はいない。もしいるとするなら怪しい関係だ。

「ほらね。それに比べてあたしなら和人は拒まないわ」

そう言っただけで睦月は俺の頬にキスをする。

やられた。不意すぎて俺は避ける事ができなかった。それどころか頬に残る柔らかく温かい感触が残り、恥ずかしくもあり嬉しくもあり、色々なものが俺の中で悶々とうごめいた。

幼馴染はあからさまにガッカリしたようで、地面にひざをついて今にも泣きそうだった。

「これで私と和人の方が親密な関係だと分かりましたでしょ？ こういう事はあまり人前で言いたくはないのですが、首にあるキスマークは私のです」

ニッコリと幼馴染に追い討ちをかける。

幼馴染はポロリと一つの涙を流しながら校門の方に向かって走り出した。

「和人の変態でバカ！ どうせ夜も彼女さんとよろしくやっているでしょ！？ もう和人なんて知らないからね！！」

捨て台詞にそんな事を面前の前で叫ぶ。ああ、言い争いをするの

は一向に構わないが、誤解のうむような発言だけはしないでくれ。

俺は首にあると思われるキスマークを手で隠しながら睦月を睨む。

「俺が寝ている時は誤解をうむような事はするなと言わなかったか？」

「私は故意にしていないよ。きっと私が寝ぼけてキスしちゃったのよ。ほら、そんなに睨まないでよ。今のキスで全部チャラ。それでいいでしょ？」

「いい訳があるか！？ あとさり気なく腕を絡ませるな！」

「甲斐性がないとモテないぞ？」

「コラー！ 学校の敷地内での不純な行為は慎みなさい！！」

毎朝なにかと突っかかってくるヒステリック娘の声がした。

声がした方を見れば、ヒステリック娘は「誰よりも美しい美化委員会長」そんな腕章をして取り巻きと共に玄関から走ってきた。しかも顔を真っ赤にして今にも爆発しそうだった。

「逃げるぞ！？」

俺は言うよりも早く睦月の手を握って走り出す。もし捕まったら帰りのバスに間に合わない以前に、グチグチと説教をされるのが目に見えているからだ。

「観念して止まりなさい！ もし止まれば少しぐらいは罪を和らいであげますわ！！」

そんな保障はまるで無い。俺が止まろうが逃げようが、どうせ明日の朝に説教が待っているに違いない。

ヒステリック娘は以前紹介したように、どこかのお嬢さまだ。そのため体力は全く無く、それと一緒に足も早くは無い。そして取り巻きはヒステリック娘と共にいるのが仕事なのか俺を追おうとはしない。だから俺はヒステリック娘から逃げる事は難しいことではなかった。

「止まれと言っているでしょ！？ ハアハア、早く止まりなさい……森澤和人！！」

最後の力を振り絞って俺の名前を呼んだのは分かったが、俺は完



全に無視してそのまま走り去る。

運が良かったのか、俺がバス停についた途端にバスが来た。

先にバス停にいた幼馴染は俺と睦月が手を握っているのを目撃して悲しいのか、捨てられた犬のようにシヨンボリとしていた。そんな顔をされるとほっとけなくなるのが人の良心というものである。

「あゝ、睦月も貴明も同じぐらい大切だから、そんな顔で俺を見ないでくれ」

俺はバスに乗り込む寸前にバス停の前で落ち込んでいる幼馴染に言う。

幼馴染は一瞬花が咲いたように明るい笑顔を見せたが、ほんの一瞬だった。次の瞬間にはジト目で俺を見ながらバスに乗り込んできた。

「それって哀れな僕に情けをかけたつもり？」

昔はこれで何もかも上手くいったのに、何時の間にかこの方法が通用しなくなった。無駄なところを成長しやがって。

「そんなつもりはない。俺は事実を言ったただけだ」

さて、そろそろこの幼馴染の機嫌を直す最高の言葉を新しく考える必要があるな。

睦月がいない間までは二人用の椅子に座っていたが、睦月が増えた事により一番後ろにある五人用の椅子に座るようになった。もちろん俺が真ん中で、バスの中だろうが口論はひっきりなしにあったりする。

いつもの指定席に座り、未だにジト目で俺を見つめる幼馴染と、幼馴染を挑発しているかのように睦月が俺の肩に頭を預ける。もちろん俺は肩を上げてものの、何度しても肩に頭を預けるため諦めてなされるがまだ。

「やっぱり信用できない。和人と彼女さんは僕に対するあてつけのようには見えない」

「……」

俺はもう完全に諦め、無言のまま流れる景色に視線を移す。

バスに揺られて数分で辺りに木が増え始めた。それと一緒に俺のストレスも増え始める。

俺のストレス発散方法は夜に星空を見る以外は何も無い。そのため少しイライラし始め、ため息が普段の倍以上つく。

景色を眺めていると、一瞬だけ木の上に人影が見えたような気がした。本当に一瞬だったし、何より木の上に人が立っているはずがないため、気のせいと思いそれ以降は特に気に留めなかった。

バスに揺られること二十分ほどでようやく目的のバス停についた。俺は止まるボタンを押して三人でバスから降りる。その間ずっと睦月は俺の肩に頭を預け、その姿を悔しそうに幼馴染が見ているだけで、言葉を交わす事はなかった。

バス停から数分だけ歩いたところで俺の家と幼馴染の家が見えてきた。

幼馴染は家の前で、

「また明日ね」

素っ気なくそれだけを言って幼馴染と別れた。

幼馴染の家から俺の家までは三軒分離れているだけなので、俺も直ぐに家についた。その間は睦月と話す事無く無言で歩いていたため、睦月はつまらなそうな顔だった。

「ただいま」

家に誰かがいるのか分からないが、一応帰った挨拶として言う。

これは俺の数少ない習慣の一つだ。行く時は「行ってきます」帰った時は「ただいま」そう言うように心がけている。

俺は睦月と一緒に階段を上って自分の部屋に入る。

バックを適当に置いてベッドにダイブした。それと一緒に大きなため息。

ベッドに寝転んだ事により、疲れが薄れていく事を感じながら睦月に視線を移す。

「俺はお前に恥じらいという言葉を知ってもらいたいよ」

そう言うからにはそれなりの理由がある。

睦月は俺がいるにも係わらず、制服を脱ぎ始めている。思いつきり睦月の下着を目の前にしたため、俺の心臓はバクバクと鼓動を早めた。何度かこういった場面に立ち会ったが、これに慣れる事はない。健全な男子高校生の特権みたいなものだ。いやな特権だけどね。俺は直ぐに視線を睦月から壁に移した。

「私だって赤の他人の前だと着替ええないわよ。和人だから別に見られてもいいってこと」

「……」

「仮にも私達って恋人関係じゃない？ 今更恥らっても何も始まらないって」

「恋人関係はフリだろ？」

「つれないのね。最近和人って私に対して厳しくない？」

「……気のせいだ」

「私がおかしたら怒るのに？」

「怒ってない。注意しているだけ」

「……まあいいや。それより校門で追っかけた人と最近仲がいいのね。ちょっと妬けちゃうな」

「適当な事ばかり言いやがって。妬くどころか、俺をいじる理由が増えて喜んでいるだろ。今に始まった事じゃないから、まあいい。あれで仲がいいように見えるなら睦月にメガネがコンタクトをするのを勧める」

「それって遠まわしに私をバカにしているでしょ？」

「よく分かったな？ てつきり気づかないと思っていた」

「和人のくせに生意気……」

着替え終わったのかボスッとベッドに座り込む。

未だに壁の模様を見ているため睦月の表情は分からないが、声から相当ムカついているようだ。

「学校のお返しだ」

俺はボソリと呟いて目を閉じた。

\*

\*

貴明が学校から帰り、自分の部屋に入るや否やすぐさま部屋の力をかける。

もともと貴明の部屋には力ギはついてはいなかった。だが、趣味に情報収集があるため情報が他所に流失しないようにと思い力ギをつけたのだ。

貴明はすぐさまパソコンの電源を入れ、パソコンが立ち上がる間に制服を着替える。

着替え終わった後にキーボードでパスワードを入れる。これは力ギだけでは不安なため二十のロックだ。本当にパソコンについて詳しくない限りこのパスワードを破る事はできない。ちなみにパスワードは「KAZUTORABU」だ。どこまでも幼馴染の和人を崇拜して、愛しているのをパスワードに表したのだ。

パスワードを打ち込んでから数秒でパソコンが立ち上がり、それと一緒にアニメのキャラが待ち受けに現れる。

一瞬だけ貴明の口元は緩んだが、幼馴染である和人の彼女さん思い出して眉間にシワを寄せた。

「絶対に彼女さんの秘密を見つけ出してやる」

そう呟いて手馴れたようじキーボードを押す。

ネットの中で特定の人の秘密を見つけるのは至難の業である。多くのホームページでは偽名やイニシャルを使っている。そのためそれらしい情報を見つけても、それが彼女さんとの関係があるのか分からない。そもそも顔の知らない相手の情報を易々と信用ができるはずがない。そういった事は貴明が誰よりも知っている。

貴明はネットから彼女さんの情報を見つけ出すよりも最初に学校にハッキングして彼女さんの素性を知ることから始めた。

今まで彼女さんに対しジャラシーを覚えたのは隠しようのない事実だ。だが、さっき呟いたように「秘密を見つけ出す」そう思ったのは今日が初めてだった。その引き金になったのは校門の前で和

人に彼女さんがキスをした時だった。それがどうにも貴明は許せなかった。

今の時代は何でもコンピュータに記憶する時代だ。紙を使って保存するより、よっぽどエコで場所をとらないためだ。それと同時に学校に保存するより安全なためでもある。それでも必要最低限の個人情報履歴書という形で学校にも保存されているのが現時点の学校での現状だったりする。

貴明は生徒欄を観覧し、マウスでスクロールする。

学年とクラスから彼女さんを見つけるのは容易かった。が、彼女さんの名前と顔写真以外は「極秘」と書かれているだけで、詳しい事はまるで分からなかった。

貴明は怪訝そうに眉をしかめる。

「……どうして？ それにこのK・Kって誰だろう？」

ほとんどが「極秘」なのに対し、最後の方にだけイニシャルの頭文字が書かれていた。

こういった情報を漏らさないようにするには相当な権力者が、金にモノを言わせたかのどちらかだ。そのどちらかに彼女さんが関係している事で貴明の情報収集という趣味に火をつけた。簡単な秘密より、謎めいた秘密を暴いたほうが嬉しいに決まっているからだ。

「絶対に彼女さんの秘密を暴いてやる！」

貴明は握りこぶしを作って秘かに決意した。

2

水無月が土足で俺の部屋に不法侵入してから二日ほど経った。

一週間したらまた来ると言っていたのが本当らしく、この二日間は俺の部屋は安全地帯だった。それでも睦月は水無月を信用していないのか、部屋にいる時でも常に俺の側で誰かの気配を探っていた。

廊下で物音がすれば直ぐに視線をドアに向け、鳥が鳴けば睨む。この二日間の間休みなしですつと睦月はそんな感じで落ち着きがなかった。

それはさておき、学生の本業は勉強なため、今日も無駄に長い道のりの先にある三日月高校に向かって走るバスに揺られているわけなのだが、今日も無駄な抗争が俺を挟んで勃発している。言うまでも無いが、今回も幼馴染からの仕掛けだ。

「昨日考えたけど、本当に彼女さんが和人に相応しいのかテストをする必要がある」

また唐突に変なイベントを考えたものだ。

あきらかに裏があるだろ……。

「テストですか？ 私は別に構わないけど、村井くんが現実には背を向けないか不安だね」

バス内では俺が中央は当たり前として、俺の右隣に睦月、その反対である左隣に幼馴染となっている。

睦月はヒョイツと顔を出して二ヒルな笑みで幼馴染を見る。

幼馴染もそうだが、睦月も俺の何を知っている。外面的以外は無知だろ。

「その言葉そっくりそのまま言わせて貰うよ。当たり前だけど、僕の方が和人と過ごした時間は長いからね」

「その割には私の方が親密な関係を築いていますけどね」

「……男女の差からそれは埋めようの無い真実なのかもしれない。だけど和人の秘密……和人の事なら僕は何でも知っているよ！」

わざわざ言い換えるほど俺はやましい秘密はあるのか……。いや、自分自身だから言える。断じて俺にはやましい秘密は無い。きつと幼馴染は睦月をあおっているだけだ。

「あら、彼女の私に向かってどの口が言っているのです？ 私の方が和人の外面も内面も知っていますよ。ほら、私達って深夜を共にする仲ですから」

ニツコリと挑発。

言い方によっては間違いではない。だけど深夜を共にするって……。誰かに誤解されたらどう責任をとってもらおうか。まあそんな事を睦月に言っても『誤解が嫌なら真実にしてしまえばいいよね?』とか笑顔で言われそうだから口が裂けても言わないけどね。

「なら問題ね! 和人の数少ないホクロは体のどこにあるでしょう!?!」

待て、俺にホクロが少ないのは百歩譲っておいて置こう。が、その体のどこって幼馴染は俺の裸をじっくりと見たことがあるのかよ。幼馴染は「ジャジャン」とクイズ番組でよく聞く音と「チクチク」とシンキングタイムが減る効果音を言う。無駄なところはクイズ番組に忠実だな。

兎に角、だ。俺の見えないところで二人が争う分にはどうでもいい。好き勝手に話そうが、嘘を言ってもどうでもいい。だけど俺の目の前で言うのは正直勘弁してほしい。精神的にマイってしまうからね。それだけはこの二人に伝える義務が俺にある。

「もう止めるよな!?!」

だから言う。その義務とやらを成し遂げるために。

睦月と幼馴染はビックリした顔で俺を見る。

「……両腕に一つずつと、背中一つですね」

が、ビックリした顔だけで俺の話に耳を傾ける気はさらさらないようだ。

俺は無駄に大声を上げた恥ずかしさと悔しさから拳を握り締めて視線を床に移した。ここまで完全にスルーされると腹が立つにも立たない。

「せ、正解……」

正解のようだ。両腕にホクロがあるのは知っているが、背中に一つあるのは知らなかった。

「かなり簡単な問題でしたね? なら私からの問題です。いいですか?」

「僕は構わないよ。だって僕に答えられない問題はないからね」

「でしたら私と和人は一日何回キスをしているでしょう？」

「0回！」

即答だった。いや、それは事実だが、どうしてそれを即答できるかが謎だ。俺の部屋に隠しカメラか盗聴器でも仕込んであるのか？  
「どうしてそう思うのです？」

俺と同じ事を思っているのか、睦月は怪訝そうに幼馴染の顔を見ていた。

「僕がそうあって欲しいと願っているからさ。それで答えは？」

……確信とか無いのか、こいつには。それより問題の答えに自分の願いを言うのは広い世界とでこの幼馴染ぐらいだろう。

「……正解です」

「愛あれば盗撮盗聴は不要だよ。これ、僕のポリシー。次は僕からの問題ね。そうだね、なら和人が異性に求めるヘアースタイルの上位二つは？」

「……」

俺はもう断固としてツツコミを入れん。どうして俺の好きなヘアースタイルを知っているのかとか、どうして三つじゃなく二つなのかとかだ。全くもって今更なのだが、本当にこの幼馴染というやつは……。

「ストレートと……グルグルパーマ？」

「ブブー！ 答えはポニーテイルだけでした！！ ちなみに後頭部から肩甲骨辺りまで伸びているポニーテイルがストライクゾーンです！」

……答えとしては紛れも無く大当たりなのだが、どうしてか悲しくなってきた。俺がポニーテイルフェチと誰かに話した記憶が全くない。それなのにどうしてこの幼馴染が知っている。個人情報保護法とかいう制度は俺にだけ無効なのか？ それよりグルグルパーマって……。

「ひ、卑怯よ！」

「何が卑怯なのさ？ ポニーテイルも答えられなかったのに、よく



もそんな言葉が言えたものだね？」

睦月は親指を嚙んで苛立ちを表していた。

俺の問題に答えられなかったから苛立っているのではない。きつと幼馴染にだまされ、思い通りの筋書きにならなかったから苛立っているのだと思う。思ったより睦月は負けず嫌いなのだろう。

徐に睦月は髪をかきあげてポケットから出したゴムで結ぶ。それはまさにポニーテイルというやつだ。

「今のつてズルイよね、和人？」

「もちろんですとも！ 睦月をこれ以上いじめるなら貴明でも許さないからな！！」

上目遣いで俺を見上げ、さらには髪型がポニーテイルという事もあり、口が勝手に動く。俺にここまで言わすなんてなんという破壊力だ。恐ろしいぜ、ポニーテイル。

睦月は得意げな顔で幼馴染を鼻で笑う。

「彼女さんこそ卑怯だよ！ そこまでして和人を一人占めにしたいの！？」

「村井くんは少し勘違いをしています。一人占めにするのではなく、一人占めにできる権利が私にだけです。分かります？ 村井くんは幼馴染以上にはなれないのですよ？」

勝ち誇った顔で頷く睦月。

その睦月を悔しさ半分、悲しさ半分で睨みつける幼馴染。

本当に今更だが、睦月のせいで俺の人間関係が徐々に崩れていく。睦月という存在は悪魔か、それに似た類じゃないかと最近つくづく思う。

そんなこんなで言い争っていると目的のバス停に着いた。

バスの運転手に定期券を見せてからバスを降りる。バスから降りても俺の両サイドは険悪な雰囲気を出しているため、盛大なため息をつく。

盛大なため息をつきながら俺は校門の前で立ち止まる。どうせため息をつく理由がこの校門の先で待ち受けていると悟ったからだ。

「どうしたの、和人？」

怪訝そうな顔で睦月は俺の顔を覗きこむ。

「……ちよつと先に行ってくれ。直ぐに行くから」

俺は身をひるがえし、きた道を戻る。

「ちよつと和人！ どうし……」

「教室で待っているからね。ほら、彼女さん行くよ」

睦月の言葉を遮って幼馴染は睦月の腕を取って玄関に向かって歩き出す。

まだ状況は把握していないのか、後ろから「和人！」と声が聞こえてきた。まあ登校中に校門の前で立ち止まり、きた道を帰る学生は実にシニールだから仕方が無い。

何人かの生徒とすれ違いながら、校門の丁度裏側にある裏門が目的地だ。右腕にしてある腕時計で時間を確認したら授業開始まで全然時間があるから問題はない。それにヒステリック娘に捕まった方がよっぽど時間ロスだしな。

十分程度歩いたところでようやく目的地の裏門についた。

普段から裏門から校舎に入ろうとする生徒はいなく、今日もまた誰もいないものだと思っていたのだが、裏門によしかかってタバコをふかしている女性が一人いた。

俺の大好きなポニーテールにちよつとキツイアーモンド型の目。

その目がどこことなく人生が既に終わっているかのようで、寂しい目をしていた。それでも顔のパーツは整っている。ちなみに服装は少し男っぽいが、睦月とかに比べれば普通すぎるほど普通だ。

俺は係わっては面倒な事になると思い、無言でタバコをふかしている女性の横を通り過ぎる。

「ヘイヘイヘイ。ちよつと待てよ、森澤和人。美人が一人で立っているのに洒落たこと一つ言わないのは野暮じゃないのか？」

後ろから声が聞こえてきたかと思えば、首から重みがかかる。直ぐに隣を見ればそこにはさっきの女性が俺の肩に手を回して俺の隣に立っていた。

女性はニヒルな笑みを浮かべて口にタバコを銜えている。

「……」

俺は立ち止まることを知らない出来損ないのロボットのように無言のまま歩き続ける。

「……あたしと話したくないのなら別にいい」

彼女は俺の隣でポリポリと頭をかきながら続けて、

「森澤和人が話したいと頭を下げる環境を無理やり作るから」

ニツコリと微笑んだ後に、彼女は俺の服の袖を持って力任せに校舎の壁に押し付ける。

突然押し付けられたため、俺は少し咳き込むものの、彼女を睨みつける。彼女は悪気が全くないのか、意味深な笑顔で俺を見ていた。

「……何が望みだ？」

「人聞きの悪い事を言うなよ。あたしは純粹に話したかっただけさ」  
「その割には強引だな」

「あたしの話を聞こうとしないからさ。さて、ここで問題です。あたしは今から何をするでしょう？ 1、頭を潰す。2、心臓をもぎ取る。3、ひき肉にして鳥の餌にする。答えはどれだと思う？」

答えの最終地点が全て同じなのは理不尽すぎるだろう。ここはもとソフトな答えが一つぐらいあってもバチは当たらない。

「……1？」

どれも答えが同じだから別にシンキングタイムは不要だ。それでも理不尽な問題に数秒あきれた。

「残念。答えは4の普通にお話をする。でした」

「ベタな引っかけだな」

「なら問題どおりのシナリオを進めるか？」

「それは丁重にお断りします。それで、俺と何について話したい？」

「特にないな。あたしは森澤和人という個人に興味を持ってね」

「興味を持ったら無理やりにでも話すのか？」

「時と場合によってはね。それが今っただけ」

「……まあいいや。君の名前は？」

「あたしの名前は……内緒だ。少しぐらい秘密がある女の方がクールだろ？」

彼女はそう言って校舎の壁にタバコを擦り付けて火を消す。そのまま携帯灰皿に入れる事はせず、適当に放り投げた。マナーという言葉が実に似合わない光景だ。

俺は校舎の壁に残っている跡と、吸殻を交互に見る。

「別に名前を聞かなくても睦月や水無月と同じなのは分かる。それより学校の敷地内でタバコの吸殻を捨てるのは止めてくれないか？ 集会とかになったら面倒だから」

彼女は眉と肩をしかめ、面白くなさそうに俺を一瞥する。

「間抜けそうなツラの割には鋭いじゃねえか」

「余計なお世話だ。それで、俺たちに戦いを申し込みにきたのか？」  
「残念だけど、あたしにマスターはいない」

そう彼女は言うが、へらへらと小さく笑っている。残念というよりは、どことなく清々しいように見えなくてはなかった。

そんな姿を見ていると何か訳ありのように感じ、俺は目を細める。  
「理由が知りたいのか？ それは簡単な話だ。タダ単にあたしが気に入らなかつたから拒否しただけさ。だってあたしの顔を見るなり『君には萌という要素がまるで無い。出直すであります』とか言つたから、お礼に部屋中に飾ってあるフィギュアを手当たり次第ぶち壊してやったぜ。その時のあいつの顔ほど笑えるものはなかったな」

クツクツと笑いを堪える。

「鬼だな……」

俺にはそういった類はよく分からないが、自分の趣味の物を手当たり次第壊されれば悲しいに決まっている。それを手当たり次第とは鬼以外に何があるのだろうか。

「いたいけな少女にかける言葉を間違えた当然の報いさ」

「そのいたいけな少女がタバコを吸う姿はシニールだな」

「それは皮肉か？ ちなみに言っておくが、あたしはあたしを馬鹿

にする奴と皮肉だけは虫唾が走るほど嫌いだ」

俺の袖を掴んでいる彼女の手から力が伝わってくる。そして彼女は顔を近づけて、あと数センチでくっつきそうなところで睨みかけながら言う。

彼女の瞳はまさに狂犬そのものだ。光が宿っていないと言葉を使うのが一番手っ取り早い。どこまでも暗く、そして今にも吸い込まれそうな瞳だった。

「以後気をつけるよ」

ホールドアップをしながら言う。

彼女の手から力が抜け、そのまま俺の袖を離した。

彼女は身をひるがえしてポケットからタバコを出して口に銜えろとジッポで火をつける。

「まっ、話はそれだけだ。また近いうちに会うだろうが、それまで少しのお別れだ」

彼女が残したタバコの煙が風に吹かれて消えていく。

「一つだけ聞かせてくれ。君はこのゲームをどう思う？」

俺は去りゆく彼女の背中に問う。

「さーね、マスターのいないあたしには関係のない話さ。あと、あたしの名前を知りたがっていたな？ あたしの名前は皐月だ。中々クールでカッコイイだろ？ それじゃあな」

立ち止まる事無く、振り向く事無く、指にタバコを挟んだ手を軽く上げて皐月は俺の前から姿を消した。

全てが突然すぎて俺は流し目で裏門を見てから、ため息を一つして歩き出す。

教室に戻ればチャイムがなる数分前だった。

皐月と話す前まで結構時間があつたのに、思っていた以上に話しかんではいたようだ。

睦月は少し怪訝そうな顔で俺を見ていたが、何か言うわけでもなく自分の席に座っていた。幼馴染とはいえ、何時も通りニコニコ

と俺を見ていた。

最近では何も珍しい事でもない。むしろ普通の日常のように感じられる。これもまた睦月がもたらした日常といえる。

それはそうと、つつがなく授業が始まった。あまり勉強に熱心ではない俺は少しだけ真面目に授業を受けていたが、襲い掛かる睡魔という強敵に恐れをなして机に突っ伏す。これもまた日常だ。

睡魔と闘って見事に敗北を帰した俺を迎えたのは睦月だった。

「ちよつと私に付き合ってくれるかな？」

それだけを告げて俺の手を引く。

俺は寝起きという事もあり、なされるがまま連れて行かれる。連れてこられた場所は内緒話をするお決まりの場所だ。

特別教室が並ぶ廊下に背を預けて、睦月は俺の顔を真剣な顔で見る。

「今日の朝に何があったの？」

当然と言えば当然の質問だ。

仮にも俺は睦月の主であり、守られる立場だ。一緒に登校したのに、俺はチャイムギリギリで睦月は余裕をもって教室に入っている。しかも二日前に水無月の訪問ときている。これを怪しく思わない訳にはいかない。

「別に……普通に知り合いと話しこんでいただけだよ」

嘘ではない。知り合ったのが今日だって事だけだ。

睦月は俺を流し目で見てから視線を天井に移す。

「……そう。一応言っておくけど、私たちには同類が近くにいないのが不思議と分かるの。それでもそう言い切る？」

「ああ」

「和人は私をあまり信用していないのね」

「それは違うな。俺は本当に知り合いと話しこんでいただけだから」

「あゝ、分かった。分かったよ。私が悪かった」

突然だな、おい。

「……ほんとと言うとね、私が和人を信じていなかった。それが正解」  
「どうして信じていなかったわけ？」

別に怒っている訳じゃない。ただ睦月の本音が聞きたいだけだ。  
「強いて言うなら和人が優柔不断で八方美人だから、かな。良い言い方をすればお人よし、悪い言い方をすればバカだから」

「酷い言われようだな」

「だって本当のことだもん。それに和人って隠し事をしているように信用性に欠けるっていうか、本当に信用していいのか分からないっていうか……」

「それは睦月の気のせいだ。俺は隠し事をするほど独特な趣味やら隠すほどの経験なんて生憎持っていない。あるとするなら睦月の存在ぐらいだけだな」

「それって遠まわしに私が邪魔だっていいたいわけ？」

「俺は時々睦月の思考回路が疑問に思うよ」

「……」

「俺はただ、睦月の力とそれに係わっているゲームを隠す必要があるだけで、睦月が邪魔とは思った事はない」

「本当かな」

ジト目で睨まれた。

睦月は本当に俺の事を信用していないようだ。

俺は熱くなるこめかみを押さえながら、

「睦月が信じるか信じないかは俺がどうこうできる問題じゃない。」

「ただどな、俺は真実しか言っていない。それだけは本当だ」

「……そう」

「兎に角、そろそろ授業が始まるから教室に戻るぞ」

腕時計を見てみれば、チャイムが鳴る二分前だ。この特別教室から頑張って走りギリギリといったところか、ギリギリ間に合わないかの瀬戸際だ。あまり授業態度がよろしくないから、遅刻とか勿体ないことはできるだけ避けたい。

俺は睦月の手を取り、走り出す。

突然俺に手を握られて走り出されたため、睦月は一瞬だけバランスを崩す。それでも一瞬で、次には俺の隣で一緒に走っていた。この身体能力はさすがというべきか。

「一つだけ言っておくけど、私は和人の事は少しだけ信用しているから」

「少しだけ、か……」

「私が信用できるようにこれから私を崇拜するように心がけなさい」

走っているのに、ニコリと笑みを見せるほど余裕があるようだ。俺はもうクタクタで、ベンチがあるなら今にも座る勢いなのに……。

「ちなみに言っておくけど、俺が、じゃなくて睦月が、だろ？」

「和人が、だよ」

俺はその時、頭に皐月の最後の台詞がよぎった。「また近いうちに会う」そのままの意味なのだが、それに対して俺はどう受け止めるべきなのか複雑に思えた。今朝みたいな形で会うのか、それとも敵として会うのか、相手の事をよく知らないため俺の心は揺れている。それならこのまま会わない方が俺のためであり、睦月のためでもあり、そして皐月のためでもある。

それでも皐月の事は今のところは置いておくとして、最初に気にする必要があるのは水無月の事だ。たぶんだが、睦月の中での答えはもう出ているのかもしれない。それによって水無月と次会うときの状況が変わる。友好関係になるのか、それとも敵対関係になるのか。そのどちらかしかない。

言うまでもないが、俺としては無駄な争いは避けたいと思っている。だが、やはりここは水無月を以前から知っている睦月に一任したほうが懸命な判断なのかもしれない。さしずめ睦月は無駄な争いというものはなく、全てが必然の争いと思っているのだと思う。

俺は走りながらチラリと睦月の顔を覗きこむ。

睦月は以前のように迷いのある表情をしていなかった。それどころかニコニコと幼馴染と同じように笑みを見せていた。もう吹っ切



れたのだろう。

俺はそんな睦月を見て一度鼻で笑う。別に笑う要素があったわけではない、ただ笑顔の睦月の方が俺は好きだと思ったからだ。

「一つだけ聞くけど、睦月はこのゲームについてどう思う？」

教室までもう少しのところで皐月にした質問を睦月にも聞く。

「私も和人と同じ」

「へ？」

何が同じなのか意味が分からなかったから間抜けな声が自然に出る。それはそうと、俺の記憶にこの質問を誰かにされた記憶が無かった。

怪訝そうに睦月を見ると、睦月は呆れたようにため息をつく。

「水無月が来た時に、和人が言っていたじゃない？ 『俺はこの戦いに何の興味も無ければ褒美とやらも関係ない。俺はもう少しだけ睦月と一緒にバカみたいな生活を楽しみたいだけだ』 って、私も同じ気持ちだったことよ」

そういえばそんな事を言った記憶が薄っすらとある。それでもその直後に二度寝に走ったから記憶が曖昧だけだね。

ただ、睦月も皐月も、この「ゲーム」の褒美とやらにはあまり興味がないようだ。

睦月が今までどんな生活をしていたのかは想像もつかないが、それでも睦月がそう望むなら主として少しぐらい楽しい生活が送れるようにしなければならぬ。

「……そうだな。それなら俺はできるだけ睦月が楽しいと思えるようにしないと、な」

教室の前で睦月の手を放して立ち止まる。

睦月は突然放されたため、少しだけ距離が離れたところで立ち止まり、俺に振り返る。

「当たり前じゃない。私と和人はそういう関係だからね」

睦月はそれだけを言い残してさっさと一人で教室に入っていた。これを本当に「つれない」と言うのだろうか。

俺は漫画やドラマのような展開を期待していたわけじゃないけど、ここまでつれない睦月を見ていたら肩をしかめるしかなかった。BGMにチャイムの音を聞きながら俺はゆっくりと歩き出す。もつと気の利いた台詞やくさい台詞が言えるのなら今とは違った睦月と話しているのだろうか。そう当たり前の事を思いながら窓の外に視線を送る。

3

静寂と闇に包まれた廃墟。

そこにジッポの灯りがともされ、次には葉に火がともす。

タバコに火をつけたジッポはもう用がないのか、タバコと一緒に彼女のポケットにしまわれた。

口に銜えているタバコを軽く吸い、吐き出す。それが今の彼女の唯一の仕事のようだった。

キツイアーモンド型の目は見るという必然の事を拒んでいるかのよう閉ざされ、壁によしかかり耳だけを頼りに辺りを警戒している。

そう、普段の彼女 皐月は必要が無ければ無駄に動く事はなく、静寂と闇に支配された廃墟の片隅で生活を送っている。

皐月に必要なのは無になれほど静寂な場所と、雨水をしのげるだけで、それ以外は何も望まない。テレビもパソコンも机も冷蔵庫も、なにもかも望まない。ただ静寂さえあれば他には何もいらぬ。それが皐月の求める居場所というものなのだ。

今の皐月はゲームに参加する事と同類語である主でありパートナーがいぬ。

いや、いぬではない。

拒絶した。

そっちの方が正しい。

今でも当初の主を思い出すと虫唾が走る。

今朝久々に静寂包まれた廃墟から出て、以前からマークしていたゲームの参加者である森澤人とコンタクトをとったのだが、それがどうにも皐月の胸の中に混沌と渦巻くものができて頭から離れない。

最初に和人を見かけたのは当初の主の部屋をぶち壊した帰りの事だった。

ねぐらを探すため、普通の人では決してできない芸当、木の上から探していた時の事だった。

少し前まで一緒に邸にいて、少し前まで普通に話していた睦月の存在に気づき、道路を走るバスを見ればそこに睦月と、現段階で睦月の主である和人がいた。

皐月と睦月はそれほど仲がいいとは正直いい難い。それでも普通に話したり、一緒にご飯を食べたりと、他の人に比べれば睦月とは親しくしていた仲だった。

そんな睦月が本当に楽しく笑っている姿を見たのは初めてで、隣に座っている和人もまた楽しそうだった。それがどうしても皐月の頭から離れなかった。それはまるで、知らない人を見るかのようだった。

そんな時、和人が皐月を見た。

いや、はつきりと見たわけではない。姿を認知した程度だ。それでも異常な身体能力を秘めている皐月にはしっかりと和人の目を見据える事ができた。

少し頼りなくもあり、間抜けそうな顔でもあり、欲望という言葉が実に似合わない男がそこに座っていたのが皐月にはしっかりと分かった。が、それと同時に「私を何とかしてくれそう」や「私を受け入れてくれそう」そう感じた。

皐月がそう感じただけで、第一印象は最悪だ。それなのにそう感じるのにはそれなりの理由があるものだ。

例えば睦月が楽しそうに笑っている姿を見たから。

例えば昔の睦月と異なって見えたから。

例えば楽しそうな睦月を見ていたら羨ましく思えたから。

そう、全てが正解なのかもしれないし、これのどれか、だ。

第一印象は最悪にしろ、皐月は一度和人と会ってみたい。そう思った。

が、今日会って本当にあたしを楽しませてくれるのか、羨ましいと思った事が真実になるのか、疑問に思えて仕方がなかった。

突然現れて、突然話しかけられれば警戒するのも当然だと自分に思い込ませたのだが、それと一緒に自分でもはつきりしない何かが胸の中でうごめいていた。

皐月がそのうごめいている何かを悟るのはまだ時間がかかるとして、吸い始めた時よりはるかに短くなったタバコを床にねじるように消して弾くように捨てる。

睦月はため息をついてゆっくりと閉ざされた目を開ける。

身体能力が高かろうが、暗い中を暗視コープのように見る事はできない。そのため見えるのは暗い視界だけなのは言うまでもない。

目を閉じようが開けようが変わらない視界に皐月は嫌気や不安がさすことない。

それでも、この暗く、光の無い世界にしているとどうにも自分が嫌になる事がたまにあった。矛盾した思いが皐月の中にあり、それと一緒に昔の記憶を思い出す。

皐月はゆっくりと目を再び閉じて、ポケットに突っ込んだタバコとジッポをとる。探るようにタバコを一本取り、口に銜えてからジッポで火をつける。

体に煙が入っていくのを感じながらゆっくりと煙を吐き出す。

すさみもオシャレも全く不要な部屋。

何事にも無関心といっているかのような部屋にある物はパイプの

簡素な作りをしたベッドに、窓際に置かれた一つの木製の椅子。そして窓辺に置かれた灰皿だけだった。その他には机も無ければ、カーテンもない本当に何も無い部屋だった。

そんな今時の女性とかけ離れた部屋に居座っているのは言うまでも無い皐月である。下着のパンツにタンクトップだけを着込み、どこからどうみてもルーズな格好をしている。

皐月は窓際に置かれていた椅子に片足を乗せて座り、膝にアゴを乗せて椅子に座りながらタバコを吸っている。

一日のほとんどをこの部屋で過ごしている皐月がこの部屋で何をするのかと言えば、主にタバコを吸ったり、寝たり、窓の外を見るかの三通りしかない。この何も無い部屋なら仕方ない事なのだが、それに関して皐月は好きでこの生活を送っている。

コンコン。

ドアがノックされる音と共に、ゆっくりとドアが開かれる。

皐月はチラリとドアに視線を送った後に、短くなったタバコを灰皿で消す。が、灰皿には吸殻が山のように捨てられており、結局完全に消える事は無くほんのりと煙が上がる。それでも皐月にしては気にするという事に値しないのかほったらかしている。

吸殻でいっぱいになった灰皿を見ながら皐月はポリポリと頭をかきながら、この吸殻をどう処理するか考える。

部屋にゴミ箱がない以上、他のゴミ箱に捨てに行くしか方法は無いのだが、幾分面倒臭がり屋の皐月にはそういった当たり前の選択肢が出た途端却下した。

皐月は何の迷いも無く、煙が上がる灰皿を手にとると窓の外に出して、逆さにする。

重力に従う吸殻は全て下に落ちていく。もちろん火が消えきっていないタバコも含めて、だ。

灰皿を確認することも無く、直ぐに灰皿を元の窓辺に置く。

「何度も言うけど、窓の外に吸殻を捨てるのは止めてくれないかな？ 掃除するのって僕で、吸殻の後始末が大変なのよ」

何時の間にか皐月の部屋に入り、ドアの隣の壁によしかかる一人の男が言う。

目が開いているのか、それとも閉じているのか分からないぐらいの細い目。日光をまるで浴びたことのないような青白い肌。そしてほっそりとした体つき。ヘタレで優男の象徴というべき人がそこにいた。

このゲームを考えた人であり、今の皐月や睦月を養っている張本人である京道孝介がそこにいた。

ニコニコと笑みを振りまき、怒っている仕草はまるでないのだが、皐月には京道孝介が怒ろうが暴れようが気にするに値しない。むしろ皐月はこの優男が嫌いであまりない。そのため皐月は視線を窓の外に固定する。もし顔を見てしまったら有無を言わずに灰皿が宙を舞う事になるからだ。

「……タバコに火をつけるまでが我慢の限界だ。それ以降もこの部屋に居続けるような容赦はしない。さっさと部屋から出る」

こういった優男にはこのぐらい冷たくあしらう必要があると皐月は知っている。だが、京道孝介はタフにタフを重ねたタフであり、皐月がどう言おうが表情を変える様子はない。

「今日こそはガツンと言う必要があつてね。皐月の了解を聞くまではこの部屋からでるつもりは無いよ」

「……」

いかに皐月を養っている京道孝介であろうと、その本人に何を言われようが日常を変えるつもりはまるで皐月にはない。それどころか悪化させてやろうか思っていたりもする。

「最初に皐月は知らないかもしれないけど、窓の下に何があると思う？」

「さーね。あたしには関係のない事だ」

「そうだろうね。ちなみに言っておくけど、窓の下には僕が丹精を込めて植えた花があったりするのよ。それで、その大切な花に吸殻という必要も無い肥料を勝手に与えられると困った事になる」

「ハッ、あたしからの優しさを快く受け取ればいいだけだろ？　きつと花だつて嬉しいに決まっているさ。あたしが保障する」

皐月はポケットに入っているタバコとジッポを取り出し、タバコを一本口に銜えると火をつける。

「それと次にたつた今皐月が吸い始めたタバコに関しても苦情が来ているよ。両隣の卯月と水無月からタバコの臭いがくさいから止めるとのことだつて」

ちなみに、部屋割りは一月から一二月まで順に決まっている。

「あいつらがタバコの臭いに慣れればいいだけの話だろ？」

「そうは言つてもね、共同生活の場として他の子を気にかけるのは当たり前だよ？」

「ならあたしからも苦情だ。両隣のお二人さんがうるさい。もっと静かにしとけと言つておいてくれ」

「……その他にも睦月以外から苦情があるから、紙にまとめておいたから目を通しておいてよ」

「そんな物は焼却炉に入れば可決するだろ？」

「あのね、皐月にはマナーという言葉を知らないのかい？」

「それなら聞くが、乙女の部屋に無断で入るのはマナー違反じゃないのか？」

「僕はちゃんとノックをしたよ？」

「あたしが返事をしてようやくそのノックは活かされるとあたしは思うが、それについてどう思う？」

「……確かにその通りだね。それに関しては僕が悪かったよ」

「ならさつさと部屋から出てつてくれ。タバコが不味くなる」

「タバコの味は変わらないと僕は思うよ？」

「気持ちの問題だ」

「そうだね、なら僕は今から皐月が捨てた吸殻を掃除しに行くよ。

兎に角、この苦情が書かれた紙は一度目を通しておくように」

京道孝介はそれだけを言い残してさつさと部屋から出て行く。

ずつと窓の外に視線を固定していた皐月は部屋に誰もいない事を

確認してから立ち上がり、ドアの前に置かれている紙を手取る。  
その紙を持ったまま再び椅子に腰を下ろした。

確かにその紙には京道孝介が言った通り睦月以外の名前と、苦情の内容がきめ細かに書かれていた。

苦情の中には風呂掃除をサボるなやら、下着姿でうろつくなやら、部屋をもっと可愛らしくしろ、などの苦情の部類に入らない事まで書かれていた。この部屋を訪れるのは睦月か京道孝介のどちらかだ。そのため、皐月にはその部屋うんぬんの苦情はさしずめ京道孝介が勝手に付け加えたのだと直ぐに分かった。

皐月はジッポでその紙に火をつけると窓の外に捨てる。

「こらー！ 窓の外に火のついた紙だけは捨てるなー！！」

と、直後に京道孝介の怒鳴り声が聞こえたのだが、皐月はまるで聞いていない。それどころか、返事の代わりに中指を立てて窓の外に出した。

一見理不尽極まりない行為なのだが、皐月に限ってはこれが日常のようなものだ。どうやって嫌いな京道孝介を困らすか、それだけが皐月の楽しみだったりする。

それから何日かした時のこと。

再び皐月の部屋に訪問者が現れる。今回もまた京道孝介なのだと皐月は思っていたのだが、ノックと一緒に部屋に入ってきたのは睦月だった。

さしずめ誰かの差し金だろうと皐月は最初思っていた。が、少し話をすれば苦情といった類では無かった。それどころか京道孝介や他の人のグチを言う始末だった。もちろんそこまで仲がいいとはいい難い人からグチを聞かされ、最初は戸惑ったもののそれに関しては時間が解決してくれた。

「それでね、ロクデナシが私に何て言ったと思う？」

睦月はパイプの簡素なベッドに腰を下ろしながら言う。

ロクデナシとは京道孝介の事であり、そう呼ぶのは睦月だけだ。



もちろん皐月は京道孝介が嫌いである以上、文句も言わなければ庇う必要もない。

「さー、あたしには想像もつかない」

「女の子なのだから部屋をもっと綺麗にするとか、女の子らしい仕草の一つでもしたらどうだい？　とか言うのよ！　信じられる！？」

睦月は京道孝介の真似をしながら言い、言い終えた時にはバタバタと足をバタつかせる。

「それならそのロクデナシに仕返してもすればいい。丁度花壇の手入れをしている途中だ。さて、丁度あたしの手には火のついたタバコがある」

ニイッと不適な笑みを浮かべて皐月は睦月を手招きする。

皐月と睦月は窓の外に顔を出して、現在進行形で麦わら帽子を被りながら花壇の整理をしている京道孝介に狙いを定めながらタバコを落とす。さらには付属に灰皿に溜まっている吸殻のおまけつきだ。火のついたタバコは麦わら帽子のツバに乗るという神業的な結果になり、それから直ぐに吸殻が麦わら帽子の上をバウンドする。

「こらー！　吸殻は捨てるなって言っただろー！？」

と、慌てる様子もなく京道孝介は叫ぶものの、未だに麦わら帽子のツバに乗っている火のついたタバコの存在に気づいていない。それどころか、モクモクと麦わら帽子から煙が上がり始めた。

皐月は笑いを堪えながら自分の頭をトントンと叩く。睦月にいたっては限界がきたのか、ベッドの上で笑いながら転がりまわっている。

京道孝介は怪訝そうな顔で自分の頭に手を伸ばしながら上を見る。

「ん？　煙？　……煙！？　ってか、アツツ！　僕の大切な麦わら帽子が燃えている！！」

さっきまでの平然な様子とは正反対に、今はパニックに陥って煙が上がる麦わら帽子を取りながら花壇で消火活動にいそんでいる。仕返しと言う名の悪戯が終わった頃には、当初の綺麗な花壇がどこにいったのか、植えられていた花が踏み潰され荒れる一方だった。

もうそこには以前の綺麗な花壇は存在していない。あるのは見事に足跡のついた花と、そこら中に散らばる花びらだけだった。

全てが終わった後に、京道孝介はガツクリとその場に崩れ落ちる。

「僕の大切な妻わら帽子が……。僕の大切な花壇が……」

と、今にも消えそうな声だけが辺りに響く。

皐月は全く罪悪感を抱く事はなく、ただガツカリと崩れ落ちている京道孝介を見て小さく笑っている。

他の窓からも京道孝介の叫び声から何事かと思い、顔を出している子の姿はあった。皐月同様に笑いを堪えている子もいれば、哀れみの視線を送っている子のどちらかしかいなかった。それでもほとんどが笑いを堪えている子で、哀れみの視線を送っている子は一人二人しか見受けられない。

皐月は椅子に座りなおし、タバコを吸いなおすべく口に銜える。

その時だった。

バン！

と、盛大な音を立てて突然ドアが開かれる。

突然の出来事に皐月は口に銜えていたタバコが床に落ちる。

ドアの前に仁王立ちで立っているのは師走だった。

師走は皆の姉的な存在で、それと同時にこの皐月が京道孝介の次に嫌いな自分物でもあった。それにはそれ相当の理由がある。

「皐月さん！？ 貴女がタバコを吸うことは今まで目をつぶっていましたが、それだけでは飽き足らず、小火騒動にまで発展した以上もう限界です！ 私は貴女に女性のなんたるかを一から教える必要があるようですね？ もちろん睦月さんも同罪ですよ？」

皐月が最も嫌いとするもの、それは自分を馬鹿にする人と皮肉を言う人。その次に自分の性格と私生活に文句を言う人、自分の世界にズカズカと土足で入り込む人。皐月にとってその四つはどうしても許せない。それ以外なら何を言われてもいいのか？ そう聞かれようが皐月は問答無用で拒むだろう。結局のところ、自分に絡んでくる人が嫌いなのだ。

睦月は徐に嫌そうな顔で師走を見る。さっきまでのテンションが空の彼方に消えうせたかのように、未だに花壇で崩れ落ちている京道孝介と同様に睦月も肩を落とす一歩手前だった。

視線を師走から床に転がっているタバコに移し、皐月はヒョイツとタバコを拾うと口に銜える。窓辺に置いてあるジッポで火をつけ、肺に溜まった煙を吐き出すと師走を睨みつける。

人を殺めたような目で睨まれた師走は一瞬だけ身を引くものの、ここで引けば今後も皐月が調子に乗る一方だと悟り、生唾を飲んだ後にゆっくりと皐月に近寄る。

「で、ですからタバコは止めるように言っただでしょう!？」

師走は皐月が口に銜えているタバコを取ると、すぐさま灰皿で消す。

「へイ、師走の姐さん。あんたはあたしの堪忍袋が鶏の脳みそより小さいのが知らないはずがないだろ？　今すぐ自分の足で歩いて部屋から出ると、歩けない足であたしに廊下に放り出されると、どちらがお望みで？」

今まで座っていた椅子から立ち上がり、口元は笑っているのに目は笑うどころか、睨みをつけながら皐月はグツと師走の胸倉を掴むと顔がくっつくギリギリまで近づける。

師走の目の前に皐月の暗く、人を殺める事の悪気を知らない瞳を直視できず、無理やり視線を足元に移していた。

まるで蚊帳の外である睦月も今の状況は非常に危ういものだど悟り、緊迫した空気が部屋に漂う。仮に今の皐月が蛇なら師走は蛙のようなものだ。それを示すのは師走が部屋を後にする以外の選択肢はないということなのだ。もし師走がこの部屋の残留を望むなら、皐月は自分の拳で師走の鼻を折ることも、灰皿で師走の頭を割ることも、壁とキスさせることも、全てたやすく、そして罪悪感に浸る事無くやってのける。それほど皐月という存在は悪に染まっている。師走は皐月の手を払いのけ、

「こ、今回は目をつぶります。ですが、次は無いと思いなさい!」

捨て台詞にそういい残して、師走は逃げるように部屋を後にした。睦月はホッと安堵するものの、未だに暗く危うい目でドアを見つめている皐月に少し体を震わせる。ただ、師走には悪いがさっきの相手が私じゃなくて良かった。そう思えて仕方がなかった。

タバコが当初より幾分短くなり、そろそろ限界というところで皐月は床にタバコをねじって適当に放り投げる。

ゆつくりと閉じた目を開け、さほど楽しいとは思えない思い出から現実は無理やり引き戻した。もちろん皐月にとって楽しいと思える思い出はない。あるのは腹が立つ思い出と、この世で一番嫌いな京道孝介に悪戯をした思い出ぐらいしかない。

皐月は徐にゆつくりと立ち上がり、伸びをする。

「そろそろ時間だな」

そう呟く。それでも皐月は腕時計をしていなければ、携帯電話も持っていない。仮に持っていたとしても、この暗闇では確認をする手段がまるで無い。皐月にとって時間というものは自分の都合のいい時の事を指し、それ以外は決して受け付けない。

ズボンのポケットにタバコとジップが入っている事だけを確認し、皐月はゆつくりと歩き出す。言うまでも無いが、光の届いていない闇の中ではどこに歩こうが関係がない。そのため手で探りながら歩いている。

\*

\*

ようやく学校から帰り、一息つく間も無く俺は米研ぎという仕事を押し付けられた。そのため今は制服のまま台所に立っているわけだ。

以前にテレビで現代の若者は米研ぎの仕方を知らない。そんな感じの番組をやっていた。それを何気なく見ていたら米を洗剤で洗っ

ていた。もちろん俺は無理やり家事を押し付けられること数年。残念な事に米を洗剤で洗うという発想は全くもってない。

何度か米を研いだところで水を入れて炊飯器に釜を入れる。炊飯ボタンを押してようやく仕事が終わった喜びに浸りながら部屋に戻るべく階段を上る。

部屋のドアを開けて、そのままベッドにダイブする。

睦月は既に着替え終え、お決まりのメイド服を着込んでいた。何度と思うが、このごくごく平凡で普通の部屋にメイド服はシニール以外に何も無い。

「どうして睦月はメイド服以外の服を着ようとしない？」

一応この部屋には睦月のメイド服以外にも妹の佳苗から借りた服が数点置いてある。それでも睦月は佳苗の服は全く手をつける様子が無く、今も部屋の片隅に薄っすらとほこりが被った状態でたたんで置いてある。唯一の救いが、ほこりと言う名で辺境した服が妹の目に入っていないということだ。

睦月は湯飲みに煎餅という老人スタイルを維持しながら流し目で服を見る。

湯飲みを飲み干し、机の上に置きながら、

「そうね、強いて言うならメイド服に愛着がわきつつある、と言ったところかな」

以前までメイド服はあまり好ましく思っていなかったのに、それについては時間が解決したようだ。最初は嫌と言っていても、長い間それを維持しながら着込めば着々と自分の中で別にこの服でもいい。そう思えてくるようになってくる。ほったらかした傷口が体を蝕むのと似たようなものなのだろう。

俺は妙に納得しながら、この部屋にはシニールすぎるメイド服にあまり違和感がなくなりつつある自分を受け入れたくない衝動に駆られる。別にメイド服を見て呼吸が荒くなったり、ムラムラとした気持ち芽生えたりする訳では決して無い。ただ、以前まであったメイド服の価値観が俺も睦月同様に変わりつつあった。

実のところ、睦月と同じ部屋で生活をするようになって幾日が過ぎた。その間にとりわけ事件といえるような事態は無いにしろ、それが意味するのは俺と睦月は同棲をしているだけ。その現実しかない。

俺が睦月以外のゲームの参加者と会ったのは二人。そのうち一人は手を組む誘い、もう一人は話をしたただけではあるが、それでも他の主でありマスターである俺にコンタクトしたところを見ると、そろそろゲームが本格的に始まりつつある。

俺は睦月とバカな生活だけ送ればいい。そうは言ったものの、褒美について興味が無いのかと言えば嘘になる。その褒美が果たして何なのか、それが気になって仕方が無い。

「睦月は今の生活が楽しいか？」

時々だが、不安になる。今の生活に慣れたて楽しくなればなるほど、別れの辛さが自分に跳ね返ってくるからだ。

「毎日が楽しいよ」

お茶も煎餅も食べた睦月がベッドの上にダイブしてくる。

俺は軽やかに横にローリングして接触を回避する。

「俺が主で良かったと思う？」

顔が無駄に近かった。

一応俺たちが寝転がっているベッドはシングルであり、二人が寝られるほど大きくは無い。

俺は睦月の目を見据えながら言う。

「そう思わなかったらこの部屋にいないよ。それにしても今日は良く質問をするのね。どういった心境なの、それは？」

「……悪い。別に答えたくなかったら答えなくてもいいから」

「私は和人を責めている訳でも、質問に辛い訳でもないの。質問がしたいならすればいいじゃない。ただ、私は今日に限ってどうしてかなって思っ」

「……結局のところは睦月と同じだ」

「？」

俺の答えの意図が掴めず、怪訝そうな顔をする。

「睦月はメイド服に愛着がわいた。そう言っただろ？俺も睦月の事をもう少し知ろうと思ってるね」

「その割には私からの質問はあまり答えてくれないのね？」

「少しぐらい秘密があったほうがクールだろ？」

「以前に同じことを言われた気がするよ」

それは皐月の事だと直ぐに分かった。

何となくだが、皐月にそういった第一印象を覚えたからだ。

「……そうか」

「ねえ、和人？」

「ん？」

「キス、しようか？」

「……突然だな」

「つまらない冗談よ」

クスリと睦月は笑う。

「だろうな……」

俺もクスリと笑った。

向かい合う俺と睦月はお互いの唇を重ねる事は無く、ただ見つめあっただけだった。

俺はそんな何時もと違った時間でも悪くないように思えた。それによって睦月が何を思ってる、どう俺を見ているのか少しだけ分かったような気がしたからだ。

流れるような日常が過ぎ、ようやくと言っべきか、それとも残念と言っべきか、水無月が再びこの部屋を訪れる前日となった。俺としては明らかに後者で、睦月にすれば前者なのだろう。最近の睦月

を見れば、もう以前のような迷いはないし、なにより瞳の奥に潜む何かを隠しきれていない。

時間は深夜0時にさしかかろうとしていた。

普段ならそろそろ電気を消してベッドに入るのに、今日に限ってはお互いベッドに入ってはいない。それどころか、お茶まで用意している始末だ。

俺は眠い目を擦りながらお茶をすすっている睦月を見つめる。

睦月は明日の朝が待ち遠しいのか、今にも笑い出しそうな表情をしていた。いったいどこに楽しい要素があるのだろうか。

「もう返事は決まっているよな？」

一週間前に土足で部屋に入ってこられ、その最悪な目覚めを再び繰り広げないため、窓の前に敷いた新聞紙を見ながら言う。

「ええ、当然よ。それより眠いのなら先に寝てもいいのよ？」

願ってもいないお言葉だ。

「……睦月はどうするつもりだ？」

「何が？」

「このまま寝ずに待つのか、それとも一緒に寝るのかってこと」

「私は起きている」

「どうして？」

「寝てしまったら今の気持ちで薄れそうだからよ」

さしずめ今の睦月はアドレナリンが異常に分泌しているのだろう。

睦月は待ちきれないのか、口元が緩む。

「……睦月は水無月と戦うつもりなのか？」

「必要であれば私はそのつもりよ。そうなれば必然的に和人も参加しなきゃいけないけど、それについての反論は聞かないわ」

「別に俺が側にいなくても結果は変わらないだろ？」

それどころか足手まといにしかならないと思うのは俺の気のせいだろうか。

睦月が異常なほど身体能力が高いのは以前に聞いた。それでも俺はどうだろう。普通の人間となんら変わらない。それならまだしも、



並以下の運動神経しか持ち合わせていない。それを意味するのは足手まとい以外に答えがない。

怪訝な顔をする俺とは裏腹に睦月はニヒルな笑みで答えてくれた。「私達は契約する事によって能力を得ると同時に、契約者が側にいなければ能力を発動する事ができないのよ。和人には悪いけど、素直に私の側で見学でもしてちょうだい」

「……俺に拒否権は？」

「無いわね」

「ですよ……」

ガツクリと俺は肩を落とした。

戦場がどこであれ、その結末を側で見なければいけない。そうなれば俺にも被害が少なからずあるということだ。

俺は遠い目をしながら戦場に繰り出されないことを少なからず望む。が、それと同時に睦月という存在がいることで自分の思い通りにならない事は良く知っている。そのため望みは徐々に薄れていった。

「今更だけど、勝負の勝敗ってどう決まるわけ？」

「簡単よ。相手の主を亡き者にするか、相手を完膚なきまで叩きのめすかのどちらか」

残酷な結末しか残らないってわけだ。

睦月は簡単にいうけど、俺の生命がかかっているのに気づいているのだろうか？ それとも必ず勝つという勝算でもあるのだろうか？ 真相は睦月に聞かないと分からない。それでも俺にとっても相手にとってもいい結果にはならないのは確実のようだ。

取り敢えず、今の俺に出来ることといえば無傷で生還できるように祈るぐらいだ。

そもそも明日は平日であり、明日の授業に間に合うのか不安になってきた。今のところ皆勤賞だから出来ればそれを維持したいところだ。……自分の命より授業をとってしまった自分が情けないけど、「心配しなくても大丈夫よ。私に全て任せれば何もかも上手いく

のよ」

それが心配だから悩んでいるとは言えるはずもなく、

「……それもそうだな」

と、言うしかなかった。

俺は眠気を覚ますために淹れたコーヒーをすすりながら煎餅を食べる。が、コーヒーと煎餅は実にミスマッチで、正直に言えばあまり美味しくない。

そもそもいったいどうして俺は起きているのかも不思議になってきた。

別に睦月は寝たければ寝ればいい、そう言った。それならお言葉に甘えて寝てもいいのだが、どうして俺はコーヒーをすすっているのだろうか。

うむ。考えれば考えるほど謎めいてきた。ここは素直に寝るべきなのだろうか。はたまた、謎を追求するために起きているべきなのか。

「難しそうな顔をしているけど、どうかした？」

考えていると、怪訝そうな顔をしながら睦月が話しかけてきた。

「……いや、ちょっと初心に帰ってみただけ」

「そう、初心に帰るのは別にいいけど、寝られる時に寝ときなさい。それとも私の事を気遣って起きていたの？ 私は好きで起きているから心配しなくてもいいよ？」

ここまで言われたら素直に寝るべきなのだろうと思い、俺はベッドに横になる。

先ほどからずっと重たかったまぶたを閉じる。

BGMとして睦月がお茶をすすする音が聞こえたが、別に耳障りではないため、まぶたを閉じて数分後には夢の中に迷い込んだ。

\*

\*

森澤和人の部屋から約六百メートル離れた位置。

見晴らしの良い屋根の上に皐月は座っていた。

皐月が座っている位置から和人の部屋は見え、読唇術は心得ていないにしろ、和人と睦月が話し込んでいるのが分かった。

二人の様子を監視するという形なのだが、それについて皐月は何も感じていない。

どのぐらいの間二人を監視していたのかは、屋根に置かれているタバコの吸殻が物語っている。二本や三本といった生ぬるい数ではない。優に十本以上の吸殻が屋根の一角に置かれていた。

ポケットからタバコを取り出しジッポで火をつける。何度も繰り返した行為により、タバコが最後の一本になった。そのためケースを握りつぶして適当に放り投げる。それでも未開封のタバコがあるため、別に気にする事もなく体に煙を取り入れる。

「覗きはお世辞でも良い趣味とは言えませんよ？」

足音一つせずに声をかけられたのだが、皐月は驚く様子は全くなかった。足音はしなかったものの、その前から気配だけは感じ取れていたからだ。

皐月はタバコを吸うという行為を変えるつもりは全くなく、チラリと誰かだけを確認すると再び吸い始める。

「久しぶりだな、水無月。お前の方こそ覗きにきた口じゃないのか？」

「人疑義の悪いことを言わないでくださいな。私は睦月とその主の様子を見にただけですよ？」

「はっ、やる事は一緒じゃねえか。それで、どうせお前は睦月に手を組もうとかぬかしたわけか？」

水無月はいつもそうだ。別に仲が良いとか関係無しに、一緒に手を組んで結局最後は裏切るような奴だった。

皐月は屋根から立ち上がり、お尻を何度か払った後に水無月を睨みつける。

「睦月とその主に少しでも手を出してみろ？ あたしは容赦なくお前をつぶす」

「あら、主がないのによく言えたものね？」

水無月は恐がる事はなく、平然と皐月の目を見据えながら言う。  
以前の水無月には到底できなかったのだが、主がいる今となっては  
恐いものが何もないのだろう。

「それは睦月たちに手を出すと解釈してもいいのか？」

が、その水無月の気持ちは仕方が無い。

「そうね。睦月の答え次第ではそう解釈してもいいわ」

それでも時と場合によっては高飛車な発言は全て無になる。

「な、る、ほど。なるほど、それは実に残念だ」

良い例がまさに今である。

「どういう……」

その後の水無月の言葉は無かった。

理由は簡単だ。皐月が水無月の顔を握り締めているからだ。

「近くに主がいなければ契約していようが関係ない。今のお前の立  
場は分かっているのか？ 目を潰そうが、鼻を折ろうが、無理やり  
屋根とキスさせる事だってあたしにはたやすくできる。さて、何を  
お望みで？」

「にや、にやるいにようだんはにやめて」

一瞬で水無月の表情は曇る。

「何て言っているのかあたしには分からないな。それなら取り敢え  
ず屋根とキスでもしとくか？」

理不尽すぎる皐月の答えに水無月の目には涙が溜まる。

ニッコリと皐月は微笑みかけ、そのまま力いっぱい屋根に水無月  
の顔を振りかざす。さらには足まで払いのけ、確実な手段までとつ  
た。

ガシャン。

瓦が割れる音が辺りに響く。

尋常ではない身体能力を秘めている皐月にとっては瓦が割れよう  
が別に驚くほどの事ではない。むしろ割れることを前提に理不尽す  
ぎる行為をしたほどだ。

「さて、屋根とキスをした感想は？」

割れた瓦に顔を埋め、ピクリともしない水無月の頭を持ち上げながら皐月は問う。

「……」

何も返事がないため皐月は水無月の顔を覗きこむ。

水無月の頬には小さく割れた瓦の破片が突き刺さり、さらには鼻血、口元からも少し血が流れていた。そして目は閉ざされており、そこから失神したのだと直ぐに皐月は悟る。

当初の美しい顔は皐月のせいで見る影もなくしたのに対して何の悪気もないかのように小さく鼻で笑う。

「……さて、こいつを土産に睦月のところに行くべきか、それともこのまま適当に捨てるか。悩みどころだな」

慈悲の心が少しでもあるのなら、そこは迷う事無く土産として睦月のところに持つていくのが当たり前だろう。だが、あいにく皐月には慈悲の心は持ち合わせていない。

頭を何度かかきながら数秒だけ悩む。

「まっ、土産として持つていっても迷惑になるだけだな」

結論が出たところで皐月は水無月の頭から手を退ける。重力に正直な水無月の顔は再び割れた瓦の中に戻る。

「よっこらせつと」

ジジくさい掛け声を上げ、皐月は水無月を持ち上げる。

何度か辺りを見渡してから家が無い方向を見つけると、そのまま野球ボールを投げるかのように水無月を投げ飛ばす。

数十メートル弧を描くように宙を舞った水無月の体はそのまま森の中に落ちる。

木の枝が折れる音が聞こえ、そこから生命の危機が非常に危うく感じられたが、それについて気にすることも無く手を払っただけだった。

何時の間にか小さくなったタバコを吐いてから靴で踏む。そのまま無造作に置かれた吸殻を適当に蹴り飛ばした。

騒がしい外を怪しんだ家の住人が外に出てきたのだが、構う事無く皐月はその場を後にした。

皐月が帰る場所、そこは今のところ一つしかない。

静寂と闇に支配された廃墟。

その住処に向かった。

「退屈な夜だ」

皐月にとって珍しい一言を言い残して。

\* \*

水無月との約束の朝、俺は頬を張り手で起こされることも、耳元で叫び声を上げられることも、ましてや無理やり布団を剥がされた訳でもない。普通に目覚ましで起き、普通に自分の足でベッドから出た。

睦月は徹夜をしたのか、ほんのりと目の下にクマがあり何杯目か分からないお茶を飲んでいる。

「……結局こなかった。ようだな……」

昨夜のようにアドレナリンの異常分泌が嘘のように、ブルーな気持ちをあからさまにだしていた。

「……」

返事の変わりに頷いて答えてくれた。

睦月には悪いが、内心では良かったと思っている。争いが生むものは非情な気持ちと後に残った残酷な結末しか生まれない。もちろんそれは良心というものが少しでもあれば、の話なのだが。

俺はブルーの睦月をどうするか、というより、このまま何事も無く平穏な生活に戻るか、の方が気になる。

水無月は睦月だけでなく、俺にも組もうと言った。それは少なからず組めるものなら組みたい。そう思っているのだろう。だが、今朝は現れない。もしかしたら来られない事情ができたのかもしれない。それについては追求しようにも追求する相手がいないため、ど

うする事もできない。それでも、だ。このまま水無月が来ないのに越した事はないし、そう考えるのが一番ピンとくる。

「……取り敢えず、だ。俺は学校に行くけど、睦月はどうする？」

俺は制服に着替えながら言う。

「……私も行く……」

テンションどん底なのにも係わらず、律儀に学校に行く必要もないのに睦月はメイド服に手をかける。

廊下にでも出ていたほうが良いのかと思い、まだ着替えの途中にも係わらず、俺は無言で部屋を後にした。

「今日も朝から発情したけど失敗したかな、兄さん？」

「……佳苗」

久しぶりに妹を見たような気がする。

「俺はお前に睦月同様に恥じらいという言葉を知ってほしいよ」

それだけを言い残してさっさと階段に向かって歩き出す。

「ちよつと、それってどういう意味？」

振り返ってチラリと妹の顔を見れば、実に興味津々のご様子だった。

俺は大きなため息をついて、

「……あのな、お前は仮にも女の子だ。それなのに発情とか言うな」

「それを言ったら兄さんだって仮にも男の子だから、もっと女性に優しくする気持ちでも育てれば？」

「それについては育てたくてもこれ以上は育ちません」

「ナルシスト……」

「声が小さすぎて聞こえません。あゝ、聞こえません」

「子どもか！？……まあいいや。それで、スッキリしたの？」

「何が？」

「仮にも私たちって双子で、産まれた時からずっと一緒だよ？ それぐらい分かるよ」

ふふゝん、と鼻を鳴らしながら自慢げに言う。

「スッキリしたかどうかはまだ分からない。それでも肩の荷が多少

減ったような気がするよ」

水無月が来ないのは不思議だけど、それでも俺の周りで争いごとが一つ減った事実は変わらない。そう言った面では肩の荷がおりたのかもしれない。

「そう。それなら良かったじゃない。まっ、スッキリしたお祝いとして何か奢ってくれてもいいよ?」

「奢れ、じゃなくて奢ってくれもいいか。一応俺の意見も尊重しろな。けど、俺は何も奢らん」

「可愛い妹にカツコイお兄さんを見せてくれてもいいじゃない」

「……しょうがない。それならトマトを存分に奢ってあげよう」

ちなみに妹はトマトがゴキブリ以上に嫌いらしい。ゴキブリ以上って……この前見かけた時、大泣きしていたくせに。しかもこともあるつか、一緒に寝るとか何とか……この記憶は封印でもしようか。妹はトマトという単語が出た途端に険しい顔をする。

「この悪魔!」

後ろから聞こえたが、知らん顔で洗面所に入る。風呂場からシャワーの音が聞こえる。誰かが入っているようだ。きつと父さんだろう。

「この鬼!」

真後ろから何かが聞こえるが、取り敢えず顔を洗う。あゝ、何も聞こえない、聞こえない。

「この変質者!」

歯ブラシを手に取り歯を磨く。今日もいい天気だな。あつ、別に裸で外を徘徊しようとは断固として思っていないから。

「この痴漢野郎!」

今日のバスには良い娘が　　っておい!　一応言っておくが、俺は痴漢とかも断固としてしないからな。

「この変態野郎!」

全てをまとめてきたな、おい。

「あゝ、分かった。分かったからもう変態扱いするな」



「つてことは？」

「何でも奢つてやる……」

元から薄い俺の財布が見るも無残な薄さになる未来を想像しながらため息をついた。

「それでこそ自慢の兄さんだよ」

「そりやどうも。嬉しすぎて泣きたくなってきた」

「泣きたかったら私の大きな胸で泣いてもいいよ？ ほれほれ」

グイグイと胸を強調するかのように俺に胸を向ける。

妹の小悪魔の笑みが実に腹ただしい。

「俺にその自称大きい胸は俺には少し荷が重過ぎるよ」

「それって嫌味？」

「違う。真実だ」

「ふんだ。せっかくその自称大きな胸の一つでも触らせてあげようかと思っただけ、絶対に触らせてあげないから」

プイッとそっぽを向いて、妹はズカズカと洗面所を後にした。

俺は濡れている顔をタオルで拭き、制服に着替えるべく部屋に向かって歩き出した。

それより実の妹の胸を喜んで触る兄……それこそ変態野郎だな。

睦月は既に着替え終わっており、鞆の中を整理していた。俺もいつまでも中途半端の格好のままにいる訳にもいかなかったため、直ぐさま制服に着替える。

「なあ、睦月は誰かと戦いたいとか思っているのか？」

昨夜の睦月を見ていたらそう質問する以外になかった。あの睦月は戦いに飢えていた。そう感じ取れるほどだった。そのため今までの睦月と昨夜の睦月、どちらが本当の睦月の顔なのか不思議でたまらない。

「どうして？」

「いや……何となく、かな」

「そうね。出来るなら誰とも戦いたくはないのが本音ね。けど必ず誰かと戦わなければいけない時がくる。その相手が強敵なら誰とも

戦っていない私は確実に負けるでしょうね。だから強敵じゃない相手と手合わせがしたかった。それもまた本音ね」

「なるほど」

それなら昨夜の睦月はいつもの睦月の線上なのだと納得がいった。それでも、それでもできるなら昨夜の睦月はあまり見たくはない。笑顔が似合い、いつも楽しそうな睦月の方が俺は断然に好きだ。できるならいつまでも今のままの睦月を見ていたい。

「それにしてもいったいどうしたのかな？」

制服に着替え終わったところで、俺は問う。別に真実が知りたい訳でもなければ、答えを求めている訳でもない。ただ、話しの流れとして聞いておく必要があった。

「さあね、大方期限の一週間の間に他の誰かにやられて戦線離脱したのがオチでしょう？」

「そんなものなのかね？」

「それ以外に考えられないよ。兎に角、もう水無月の事は忘れるに越した事はないわ」

残念そうに皐月はため息をついた。

「そうだな。水無月の事は忘れて今の問題を解決しよう」

「ん？ 何か問題でもあるの？」

「そろそろ幼馴染がくる頃だけど、まだ朝ご飯も食べていなければ、学校の準備もしていない。さて、どうしたものかね」

「簡単よ。どちらかを諦めればいいだけじゃない」

「……簡単だな」

「ええ、簡単よ。それで、和人はどっちを選ぶのかな？ 今から朝ご飯を食べに行くか、私が朝ご飯を食べている間に学校の準備をするのか。まっ、私は事前にしてあるから問題はないけどね」

「……そうだな」

睦月が着替えていたからできなかった。とは言えない。仮に言ったところで「私の事は気にせずによければいいじゃない」と不思議そうな顔をするのが目に見えているからだ。

俺は今日の授業の教科書が一つも入っていない鞆を手に取り、教科書をありったけ出してからドアの方に向かう。こんなに軽い鞆を持つのは実に久しぶりだ。

「あら、学生の本業より空腹を満たすのが先決なのね」

「教科書なんぞ睦月に見せてもらえば何とでもなるからな。けど空腹だけは食べない事にはどうにも、な」

「そう。だけど私が見せるとは限らないよ？」

「その時はその時で考えるよ」

軽く肩をすくめて俺は朝ご飯を食べに廊下を歩いた。

5

水無月に体裁と言う名の理不尽をしてから数日したある日。

太陽は既に昇っているだが、静寂と闇が支配している廃墟に太陽が昇ろうが沈もうがまるで関係がない廃墟に皐月は横たわっていた。

「……………ん……………」

目を擦りながら皐月は目を覚ます。が、廃墟は常に静寂と闇が支配しているため、目を覚ましても夜なのか朝なのか区別がつかない。目覚めのいっぶくをするため、傍らに置かれたタバコを手探りで探すと、口に銜えてジッポで火をつける。

まだボンヤリする頭の状態でタバコを吸うのは実に不健康なのだが、このゲームに無理やり参加させられ、常に死と隣り合わせの皐月には不健康だろうが健康だろうか関係は無い。自分のしたいようにし、したくなければしない。そんな生活を送っている。

そんな時、グウーと皐月のお腹が食べ物求めている音が鳴る。

皐月の性格と正反対に、その音は実に可愛いものだっただ。

そういえば昨日の昼から何も食べていない。そんな事を思いながら皐月はお腹を擦る。そんな事をしても空腹が紛れる事も、膨れる

はずもない。ただの気休めだ。

かといって、今の皐月はお金も食料も無い。

「どうしたもんかね」

考えたところで何もいい案が浮かびそうになく、無駄に時間を浪費するのと一緒に余計に空腹になるだけだった。

「……あたしの頼れそうな人は…… 睦月に森澤和人、後は京道孝介ぐらいか。京道孝介は嫌いだから排除するとして、残った睦月ペアは……」

悪くない案が浮かぶ。

睦月と和人は全く知らないのだが、一応二人は皐月にカリがある。皐月はニヒルな笑みを浮かべると口に銜えたタバコを消す。

「よしっ、飯でも食いにいきますか」

皐月が向かった先。

まだ朝が早く、そのため玄関のドアはカギで閉ざされている森澤家の屋根。そこに皐月は立っていた。

皐月は二階にある窓を一通り調べ、廊下にある窓が開いているのを確認してから靴を脱ぎだす。脱いだ靴をどうするか考えた末、森澤和人の部屋に通じるベランダに置いた。

廊下の窓から難なく森澤家に不法侵入し、何食わぬ顔で居間に向かう。

いつもなら場所をわきまえずにタバコを吸っている皐月なのだが、そんな姿を家族の誰かに見られたら警戒される恐れがあるため、吸いたい衝動を抑える。

階段を下りたところで森澤和人の母とばったり遭遇する。が、取り乱す事は全くなかった。むしろ好都合だと口元が緩む。

「あっ、おはようございます」

「おはよう。佳苗のお友達？」

「申し送れました。私は和人くんとお付き合いしている皐月といいます。今後ともよろしく願いしますね」

皐月はニツコリと微笑み、森澤和人の母は同様に隠し切れていないのか、数歩後退し、信じられないものを見るかのように皐月を凝視する。

睦月同様に偽りの彼女を演じ、このまま家に居座るのが皐月の目的だった。もちろんこの場に森澤和人が居合わせていれば追い出されていただろう。だが、この場に森澤和人も睦月もいない。これほどのタイミングは早々ないため、皐月の口元は余計に緩む。

グウ。

と、その時。皐月のお腹から可愛らしい音になる。

「す、すいません。実は家庭の事情で昨日のお昼から何も食べて……いえ、今の話は忘れてください」

「……と、取り敢えず。もう少し朝ご飯ができるから、それまでシヤワーでも浴びておいで。洗面所とお風呂は一緒だから、誰かに見られないように気をつけてね。詳しい話は朝ご飯を食べながら聞かせてちょうだい」

それが合図かのように、森澤和人の母は混乱する頭を制しているかのようにこめかみを押さえて居間のドアを開けて入っていく。

「はあーい」

皐月はウキウキする気持ちを抑えながら言われた通り洗面所に向かう。予想外の展開とはいえ、それでも汗を流したい気持ちが皐月にあった。

洗面所に入ったところで皐月はすぐさま服を脱いで何も入っていないカゴに放り込む。

銭湯や温泉のような公共の施設ではないため、タオルで前を隠すなどはしなく、性格とはまるで正反対の柔肌をさらけ出し、シャワーを頭から浴びる。

言うまでも無いが、皐月が今まで生活を送っていた廃墟でシャワーが浴びられるはずがなく、サッパリと気持ち良さそうに笑みがこぼれる。さらには気分が乗ってきたのか、鼻歌まで歌いだすしまつだ。もちろん人前では鼻歌どころか歌すらうたわない。それほど皐

月の気分は最高潮だった。

いつもポニーテイルで縛っている長い髪をシャンプーで洗っていると、

「近くに誰かがいる気配がするから、気をつけて和人」

そんな睦月の声がドア越しに聞こえてくる。

「残念。ドア越し、が正解かな」

ボソリと呟き、鼻で笑う。

皐月は楽しんでた。このまま何事も無く朝食を食べているところに睦月と森澤和人が現れるのもよし。睦月と森澤和人が朝食を食べているところに現れるのもまたよし。どう転んでも二人が驚くのは確実なのだ。その驚きと慌てる表情を想像するだけで笑いが込み上げてくる。

「まっ、別に気をつけるほどでもないだろ」

森澤和人は実に興味が無いように言う。

仮にも今はゲームの最中であり、寝ていようがお風呂に入っているのが襲われる心配がある。それなのに森澤和人はまるで自分に関係の無いように「気をつけるほどでもない」と言っただけだ。どうしてそう言えるのか皐月は気になって仕方が無かった。

「どうしてよ？」

「そつだな。強いて言うなら悪い奴じゃないと思うからかな」

怪訝そうな睦月の声が聞こえてきた途端に意味深な事を森澤和人は言う。

「？ まあいいや。もし向こうが襲ってくるなら私も遠慮はしない」

睦月が言い終えた直ぐに廊下を歩いていく足音が聞こえてきた。それでも森澤和人、または睦月がドア越しにいるのは変わりない。そのため皐月は注意を払いながらシャンプーを洗い流す。

「さ、で、と。俺と睦月に何のようだ、皐月？」

スモークガラスの向こうに森澤和人の声と背中シルエットが濃く浮かぶ。

\*

\*

俺はドアによしかかりながらチラリと隣に置かれているカゴに視線を送る。

カゴの中には可愛らしい下着と、一度見たことのある服が置かれている。その前に睦月は気づいていないが、ベランダに靴が置かれていた。それだけでも怪しいというのに、妙にそわそわした母さん。俺はカゴに入っている服を見た途端に全ての元凶は皐月だと察したのだ。

皐月とこうして話すのは二度目になる。一度目は数日前に学校で少し話し、二度目は今この時だ。どうも皐月は気の向くままに行動しているようだ。

「……睦月はあたしの存在に気づいているのか？」

「さっきの睦月とのやり取り通りだよ。意外と睦月は鈍いから気づくまで時間がかかるだろうな」

「そうか。ならどうしてあたしに気づいた？」

「いつも見慣れない物が至る所にあるからかな」

「なるほど、な。やっぱり顔に似合わず鋭いな」

「そりやどうも。話を戻すけど、俺たちに何のようだ？ 俺としては良い話意外は聞きたくはない。それを踏まえて教えてくれ」

「腹が減ったからだ」

我が家をファミレスと勘違いでもしているのだろうか。それとも空腹を満たすのを建前に何か仕出かすのだろうか。

付き合いがまるでない分、何を考えての行動か全く分からなかった。

「……」

「警戒するのは仕方がない。けどな、仮にもあたしにカリがある。そのカリを今返してもらおうかと思って」

「カリ？ 何のことだ？」

俺の記憶が正しければ、皐月が介入した事件は無い。もし介入し

ていたとするならば、俺の知らないところで、俺の目の届かないところでしたのかもしれない。

「どうして水無月が現れなかったのか分かるか？」

「……もしかして……」

水無月。以前俺と睦月の前に突然現れ、手を組もうと言ってきた敵だ。その水無月が約束の朝に現れなく、それを俺たちは来られない訳ができたと解釈していた。その裏に皐月の存在があったとは今の一度も考えもしなかった。

「良くて当分はゲームに参加できない。悪くてゲームをおりたつてところだな。まっ、あたしに逆らった当然の報いさ」

仮にも水無月は契約していて、仮にも皐月は契約していないはず。そんな皐月が契約している水無月に理論上は勝てるはずもない。それなのにどうして皐月が勝ったのか。それがどうにも気になるころだ。

「……それは皐月が水無月を倒したつて事だよな？」

言葉に出して聞いても信じられない。まっ、それもそうか。それで信じられたら逆に変だ。

「そうだ。あたしが水無月を倒して、睦月を戦場に向かわせなかった。森澤和人にとつても睦月にとつてもいい結果が残っただろ？」

「俺の事は和人でいい」

「和人は睦月と水無月が戦っている様を見たかったか？」

「いや、できるなら見たくはないな。まっ、睦月は戦いを望んでいただけだな」

「意外だな。睦月は他の奴らと比べたら戦いに向いていないような気がするのに」

「それは俺も同じ意見だ。けど睦月はどうにも弱い相手と手合わせをしたいようだ」

「なるほど、睦月は弱い相手から徐々に潰すタイプか……思ったよりグロイな」

「グロイかどうかは置いといて、どうやって俺の母さんを手玉にと



った？ 了解もなしに風呂に入るほど常識が無いわけじゃないだろう？」

皐月と会うのは二度目で、以前の皐月は……あれ？ 常識らしいところを見てないな？ ……いや、一回が常識外れなだけで、実際は常識があるに違いない。そう思っておこう。

「どう手玉にとったのか言ってもいいが、それによって和人は傷つくかもしれないぞ？」

やっぱり常識外れだ。

何も実の母親に息子の傷つくような事を言う人がどこにいるというのか……。もしいるなら教えてくれ、同士として歓迎するよ。

それは兎も角だ。皐月が母さんに何を言ったのか聞き出す必要がある。少なからず今なら何とか誤解という形で母さんと和解できそうだしな。けどもし仮に和解できなかったらどうなる？ 今も肩身の狭い生活を送っているというのに、これ以上肩身が狭くなれば発狂するに違いない。

「……傷つく覚悟で教えてくれ……」

「そう言うなら覚悟して聞いてくれよ」

「ああ……」

「和人の母さんにはあたしと付き合っていると伝えた。いや、こんなに美人な彼女がいて嬉しいだろ？」

……デジャブだ。

睦月がこの家に居座った理由とまるで一緒だ。

いったい俺が皐月に何をした？

俺の平穏な生活をこれ以上壊さないでくれよ、マジで。

きっと母さんは俺が何食わぬ顔で二股をしていると勘違いしている。それだけならまだしも、睦月がいるのにも係わらず、皐月という新キャラが登場し、さらには泊まったのだと勘違いしているだろう。

非常に不味い。学校行きのバスが無期限の運休になったぐらいに不味い。

一見してみれば、二人の美女を両手にウハウハしているかのよう  
に思われる分にはまだいいが、実際は全く良くないけど……。それ  
でも部屋に二人の美女と俺、この組み合わせはどう考えてもよから  
ぬ方向に解釈しても仕方ない。それが母さんならなお更だ。

このまま俺と睦月、そして新キャラの皐月が同時に母さんの前に  
現れれば、きつと母さんの標的は俺にくるだろう。言葉の攻めに追  
いやられ、その結果として精神と物理的に俺のガラスのハートは無  
残にも粉々になること間違いないし。

こうなれば先手を打って先に母さんに皐月が冗談を言ったのだと  
誤解を解く以外に方法はない。

「かぁーずうーとぉー!？」

睦月の叫び声が居間から聞こえてきた。

はい、俺の計画失敗。それにしても間が悪いな。こうなると睦月  
と皐月が打ち合わせしていたみたいだ。

ドカドカと睦月の足音が聞こえてくる。しかも早歩きで。

「和人の死に場所はここらしいな。葬式にはしっかり出席するから  
安心しな」

俺が死ぬこと前提かよ！

この無茶な計画を企てた責任を取れよ！

一番の被害者なのに、この流れだと完全に俺に非がある前提に話  
が進められる。それだけはごめんだ。かといって真実を言ったとこ  
ろで軽やかにスルーされるのは経験上間違いない。そのせいでもあ  
り、これから待ち受ける緊急事態を想像すると嫌な汗で背中がびし  
よびしよだ。

それはさておき、だ。ドア越しで皐月を睨みつけている間に睦月  
が険しい顔で登場した。

「正直に事の真相を言いなさい」

声のポリウムは小さいにしろ、何との言えない迫力が表情以外  
にあった。そう、例えるなら一般民（武器は木の枝）に襲い掛かる  
寸前のツキノワグマといったところだろうか。

「いや……あの……」

迫力負けした俺は、無駄に近い睦月の顔から視線を逸らす。

睦月は俺の胸倉を掴み、あいた片方の手で俺の両頬を掴むと強引に自分の方に向けさせる。あっ、やべ、この迫力にちびりそう。

涙目の俺に睦月は容赦なく睨みつける。それほど睦月は怒っているようだ。

俺が二股だろうが、他の誰かとラブラブしようが睦月は怒るところか笑うだろう。だが、相手が悪かった。

このゲームの参加者であり、元同じ邸で生活を送っていた皐月となれば話は別だ。きっと睦月は知らない間に他の参加者と面識があり、それを言わなかった事に腹を立てているのだろう。さらには影で何度も会っていたのだと睦月は勘違いをしているに違いない。本当は今日で二度目なのに。

俺は両手を上げ、無実を形から表す。

「と、取り敢えず落ち着いてくれ。あと俺の頬を掴むのは止めてくれ。話にくい」

「これを落ち着いていられるならよっぽどのバカか、和人を信じきっているかのどちらかよ。あと、その提案は却下」

睦月が俺を信じていないのは以前に聞いた。それでも二度言われると流石にシヨックだな。

俺が窮地に追い込まれていると知っているはずなのに、ドアの向こうから皐月の笑い声が聞こえてきた。どうにも俺の身近な知り合いは俺をオモチャか何かと勘違いしているようだ。

どうしたものかと思いつながら、弁解を言わなければ何も始まらない。

俺は後ろから聞こえる笑い声にイラツとしながらも睦月の恐ろしい顔を見据える。

「最初に言うが、俺は無実だ。皐月と話すのも今日で二度目だし、睦月が思っているほどの仲じゃないって」

「へー、ならどうしてこの場に皐月がいる事を黙っていたのかな？

さらに言えば、最初会った事を隠していたのかな？」

「そ、それは……」

言葉につまる。

睦月の言葉は隠しようのない事実であり、何を言ったとしても言い訳程度にしか聞こえないだろう。

まさに万事休す。

「和人は純粹に睦月を心配させたくなかったただだろ。そんなに和人を責めるなよ」

そんな時、後ろからドアの開かれる音と共に皐月が俺の横をすり抜ける。

睦月同様に羞恥心とやらがまるで無いのか、それとも俺を異性と思っていないのか、顔色一つ変えずに裸で出てきた。そのためモロに皐月の裸を見てしまった。いや、これはあくまで反射的に見てしまった訳で、決して狙って見た訳じゃない。おい、そんな目で俺を睨むなよ、睦月。

皐月はタオルが山積みになっているカゴから一つヒョイツと手に取ると、実に面倒くさそうに体を拭く。もちろんそんな光景を目の前で繰り広げられれば、男の象徴が反応するのは当たり前であり、居所が悪く思えてしょうがない。

頭の中で悶々と繰り広げられているピンク色のモヤと格闘していると、何時の間にか皐月は服を着ていた。

「前回も今回もあたしの独断だ。だから和人を責めないでくれ」

皐月は俺の胸倉を掴んでいる睦月の手を握って制す。

中々いいところがあると感心する。まあ全ての元凶は皐月だが、この際目をつぶろう。一応命の恩人だしね。

「まっ、けど和人に乙女の柔肌を見られたのは隠しようのない事実だけだな。あの全身を嘗め回すような視線はどうかと思うぞ？」

前言撤回。皐月は悪魔だ。

皐月が睦月の手から退けると同時に、睦月は開いた手で拳を作ると上げる。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ 確かに俺は皐月の裸を見たかもしれないけど、チラツとしか見てないから！」

「そう、それだけ？」

「それだけって！？ 皐月の言葉に惑わされちゃダメだ！ ここは言葉のキャッチボールがまるで出来ていない！？ それに気づいてくれー！」

「他に何か言いたい事は？」

「で、できれば殴らないでくれ！？」

俺がここまで焦る理由は一つしかない。睦月が人並み以上の身体能力で俺を殴れば、それは車が俺に突っ込むのと同じで、俺の生命がこの場で途絶えるのもまた同じだ。

睦月はニツコリと微笑む。

ようやく俺の説得に応じてくれたのかと思ったが、拳を解いたただけで手を下げる様子は無かった。一応グーからパーにランクダウンしただけで、何の解決にもなっていない。

「無理だよ」

睦月は上げていた手のひらを俺に振りかざす。

パシーン！

一瞬過ぎて気がつけば俺の頬に激痛が走る。

「異常なまでの腰のフリと手のスナップだな。まっ、全力の半分以下だったのが救いだっただな」

詳しい説明をする皐月を涙目で睨む。

皐月は知らん顔でそっぽを向き、関係ないと言っているかのような悪気の無い顔をする。それどころか楽しそうに口元が緩んでいる。尋常じゃない頬の痛みを手で擦りながら、睦月が全力でビンタをした時の想像をする。……やめた、バッドエンドしか思いつかなかった。

「今日から皐月ちゃんも家に泊まっていきなさい」

朝ご飯が並べられている机の椅子に座るや否や、母さんが呟くよ

うに言う。

いや、待て。そうなった経緯とやらを聞きたいものだ。理由によつては平穏な生活を守るために断固として講義も許されるだろう。

睦月は突然の出来事に呆然と母さんを見て、その後に俺を睨む。俺を睨むのは場違いじゃないのか？ 皐月は皐月で、笑みをかみ締めている。

「……なぜそうなる？」

「彼氏なら皐月ちゃんの家庭の事情ぐらい知っているでしょ！？」  
しらねえよ！

つてか、彼氏ですらねえよ！

それ以前に二股について少しは触れるよ！

そろそろ今時のくれる子どもになってもいいよね？ 許されるよね？

皐月をチラリと見れば、分かりづらいジェスチャーをしている。

あいにく俺にはそのジェスチャーがタコの口から出る墨を両手で包む漁師にしか見えん。ここは見なかった事にして、この嘘ばかりの話に真実を告げたいのはやまやまだが、後から何をされるか分かったものじゃない。俺の体を大事にするなら話を合わせる方法しかない。

「……そうだったな。その事をすっかり忘れていたよ」

「私は反対だからね！」

観念してこの場を譲ろうとしたが、睦月はこの展開に不満らしい。外見では驚いたように見せかけ、内心では睦月を応援する俺に対し、皐月は意味深な笑みを浮かべるや否や、ポロリと一つの涙を流す。

「ひ、酷いわ。私が睦月さんに何をしたの？ 確かに私は睦月さんと和人くんが付き合っていると知りながら和人くんに告白をしました。ですが、私と和人くんが付き合ったのを知りながら睦月さんは私にも和人くんにも何も言わなかったじゃない。それなのにどうして今更……どうして……」

言葉を失うとはまさにこの事だろう。

以前の皐月はボーイッシュで言葉の一つひとつにトゲがあった。それなのに今はどうだろう？ このけな気な口調は。この演技力は実にけしからん。いや、恐ろしいとしか言えない。

「そんな嘘ばかり並べないでよ！ 和人も一言皐月に言っただけだよ！？」

そこで話を振られても困る。

確かに睦月の言っている事は真実だ。

だが、真実がどうあれ、ポニーテイルの子を易々見逃すのも気が引ける。

俺は考える。

仮に俺が睦月の味方をするでしょう。そうならば皐月が適当な事を言っただけに悪人になる。

仮に俺が皐月の味方をするでしょう。そうならば睦月からの仕返しで適当な事を人前で暴露される恐れがある。

両方からの視線が痛かった。睦月は目を見開いて顎で言えといっているし、皐月はポニーテイルをなびかせて俺を拝むように見つめてくる。

どっちに転んでも俺には安らぎとは反対の言葉しか思い浮かばず、どうしたものかと悩む。

「あれれ？ これって修羅場？ 修羅場だね？」

ややっこしい奴が一人増えた。

声と口調からして言った本人を見るまでもない。幼馴染以外に考えられない。

幼馴染は空いている椅子に座る。

「和人の大好きなポニーテイルの子は新顔だね？」

「この子は皐月ちゃん、和人の彼女よ」

母さんはため息をつきながら言う。

幼馴染は「彼女」と言う言葉に反応し、さっきまでのニコニコした表情から一変し皐月を軽く睨みつける。

「今回のお題はなに？」

「皐月ちゃんを家に泊めるか、泊めないかについての話し合いよ」  
またいらぬ事を言う母さん。

「それで、今はどっちに有利なの？」

「私的に皐月ちゃんが半歩リードってところかしら。やっぱりこの話の決定権は全て和人だし、大好きなポニーテイルの子が相手もあるから睦月ちゃんが何を言っても心は皐月ちゃん優先だしね」

いらぬ事を言うせいで、睦月からのやつ当たりが全部俺に回ってくるのをそろそろ察してほしいな、マジで。言うまでもないが、幼馴染をどうにかしろ、的な行為が実際に机の下で行われている。

「なら僕は彼女さんの味方をさせてもらうよ。やっぱりこれ以上和人の彼女が増えるのは僕にとっても彼女さんにとってもよくないからね」

やはり二股には触れないのね……。

こんな事を自分の口から言うのはいささか虚しいが、彼女いない暦は歳の数だし、誰かに告白さえもされた記憶もまた無い。それなのに誰もが振り向きそうな美人を両手に抱えるのは疑問に思うだろう。まあそう思わないのならそれもまた嬉しいのだけだね。

「……そろそろ真面目に時間がヤバイから、学校から帰ってきてから話の続きをしてもらってもいいか？」

授業開始までまだ時間は十分にあるが、それでもバスの都合上そろそろ行かないと間に合わない。実際今も走って間に合うか間に合わないかの瀬戸際だ。

睦月たちは俺を睨みつける。

空気を読めていないのは俺が一番知っている。が、それよりも学校の方が俺にとっては大切だ。行けるときに行かないと、後々何かあって出席数の問題で留年なんてオチはご免だ。

無言のまま居間は静まり返り、居心地が悪くなる。

「……分かった。ならこうしよう。少しの間だけ一緒に生活をして、それまでに何か問題があったら睦月の好きにすればいいし、もし何



もなかったら皐月の好きにする。これなら問題はないだろ？」

「お母さんは和人がそう決めたのなら何も言わないわ。それでも睦月ちゃんか皐月ちゃんどっちかにだけに優しくするのだけはなしよ？」 睦月ちゃんも皐月ちゃんもそれでいいわよね？」

安心してくれ母さん。もしどっちかだけに優しくしていたらボコボコにされるから。あくまで俺は中立の立場で見守るよ。

「……お母様がそう言うなら……」

と、苦虫を嚙んでしまったような睦月。

「これからよろしくお願いします」

と、笑みを浮かべる皐月。

幼馴染は実につまらなそうにしているし、我が家で存在が最も薄くて発言権がまるでない父さんに限っては気づかない間に椅子に座って朝食を食べている始末だ。さらには妹も父さん同様に気づかない間にソファに座りながら不適な笑みを浮かべている。

## 三月 弥生

0

西尾真琴は完全無欠のスペシャルレディーだった。

だった、そういうからには何かボロを見せたのかと思われる。いや、見せてはいない。他の誰か、には。

俺は知っている西尾の正体を。違うな。知っているのではない、知ってしまった、の方がしつくりくる。

西尾は誰からも愛される存在だ。

容姿は異性どころか同姓にも認められ、性格も誰にもでも気が利くし優しい、勉強も常に学年で一位をキープするほどだ。さらにはスポーツやら音楽やら、上げるものが多すぎて省略したいほどだ。

そんなスペシャルレディーの唯一の欠点。それは何て言えばいいのか……易しい言い方をすれば人より少しエッチ。きつく言えば変態だ。

もちろんだが人前でそんな姿を見せるはずはない。だが、俺はその現場を目撃してしまったのだ。思い出せば今でも俺の健全な下半身は反応をしてしまう。うむ、恐ろしい。いやはや、実に恐ろしい。兎にも角にも俺はそれ以降というもの岡部とは係わりたくなくても強制的に係わる事を余儀なくされた。

それでも悪いようにはされていない。

だが、西尾の秘密を誰かに喋らないように見張られているだけだ。さらには学校では俺と岡部が付き合っているように勘違いされ、クラスを含む全校生徒から敵対関係中だ。中立になる兆しは言うまでもないが、まるで無い。あるとするならば、西尾の秘密が全校生徒に知られる以外にない。

それでも学校に西尾の秘密が知られる予定は無い。

どうしてそこまで断言できるのか。それについては仮にそんな話が学校の噂で流れたとしよう。が、その噂は一部の生徒にもみ消されるだろう。

その生徒を発見。

見た目は普通の生徒なのだが、腕に腕章をしている。その腕章には「真琴様親衛隊」と書かれている。どうでもいいが、文字が素晴らしい綺麗に縫われているのは業者さんに頼んだからなのだが、その業者さんがどういった思いで文字を縫ったのか知りたい。さぞ驚いたに違いないな。

そんなこんな事を考えていると噂の変態……。スペシャルレディーこと西尾真琴が自動販売機通称自販機の前で腕時計を見ながら辺りをキョロキョロしていた。

以前の俺なら「可愛いぜ、こんちくしょう！」とか言いながら親指で鼻を一瞬だけ持ち上げる江戸っ子のような反応をするのだが、西尾の秘密を知った今となってはそんな気は感じられない。それどころか他人のフリをしてこの場から去りたい。

どうして俺がここまで拒絶するのは簡単な話だ。別に変態だからとかいう理由じゃない。そう、精神的にも肉体的にも親衛隊からのイジメが激しいからだ。それでも頑張って登校している俺に褒美でもあげたいぐらいだ。

次イジメに合ったときにする命乞いのセリフでも考えようとしていると、西尾が俺の存在に気づいた。

犬のようにチヨコチヨコと俺の方に駆け寄り、俺の隣に立つ。仕草が甘えた犬のようにしか見えない。いや、兎か？ まっ、どっちでもいいか。俺には関係ない。

「おはよう、和くん」

そうそう。偽彼女の西尾からは和くと慕われ、西尾以外には害虫と罵られている。多分だが、いまや俺の存在は西尾以上かもしれない。悪い意味だけど、ね。ちなみにルックスは中の上（西尾曰く

果てしなく上の下に近い」らしい。さらにちなみに西尾は神の領域（全校生徒曰く）との事だ。それについては俺も激しく同意する。容姿だけなら神がかりだ。

「おはよう、西尾」

外見はニッコリと微笑んでいるのだが、内心では「今すぐ離れてくれ！できれば別れてくれ！」とか思っていたりする。だって四方八方からくる憎しみのこもった視線が浴びられるからね。俺って本当に人気者だな。この人気を誰かに分けてあげたいぐらいだよ。何はともあれ、何時の間にか西尾が腕を絡ませてくる。

俺はギョツと西尾を見るものの、西尾は気にするに値しないのか笑みをすれ違う生徒に向けている。ああ、憎しみから殺意の視線に変わっちゃったよ。本当にどうしたらいいものかね。

「ねえ、どうして私の事を名前で呼んでくれないの？」

何度が聞かれた質問だった。

俺はその都度曖昧に答えるか、受け流すかのどちらかだ。どうしてなのかはもし西尾の事を名前で呼んでしまえば彼女と認める以外にない。そう俺の中で思っているからだ。そのため偽りだが彼女の西尾を苗字で呼んでいるようにしている。それが俺なりのセーブの仕方というものだ。

もちろんそんな事を知るはずも無い西尾は不思議でたまらないよっただけ。

「ハハハ」

今日もまた苦笑いで受け流す。

そして今日もまた西尾は頭の中で繰り広げられるピンク色の妄想を内緒にしながら、偽カップルの称号を担いでいる俺の非日常的なお話。

「ウーッス！ 森澤！！」

誰だか知らない生徒からが俺の背中に張り手のプレゼントと共に俺の隣を通り過ぎる。

「おはようございます、森澤先輩！」

キャピキャピとした声を上げながらすれ違いざまに腕をつねる知らない後輩。

「やあ、今日も元気そうで何よりだよ、森澤くん」

ハハハと高笑いを上げながら後頭部をド突く知らない学級委員らしい人。

「森澤さんの顔を見られて今日も幸せですわ」

どこかのお嬢さまらしい人が「あら、手が滑ってしまったわ」と言いながらわざとらしく鞆の角を脳天にぶち込む。

「おうおうおう！ いい女を連れてご機嫌じゃねえか、森澤よお！！」

香水の代わりに制服にタバコの臭いを振りまくヤンキーが脇腹にパンチのプレゼントを一つ。

「和人大丈夫？ やっぱり明日からは一緒に行こうよ。私和人の事心配だよ……」

睦月が本当に心配そうに俺の隣に歩き、反対側の西尾を睨みつける。

さてさて、睦月以外の皆は俺に敵対しているのは分かっているが、流石にここまで敵対されていればへこむ以外に何も無い。

それより、だ。先ほどから地味に肉体的に痛めつける生徒は、言うまでもない親衛隊の皆さんなのだが、キャラが統一していないのはさすが西尾の人望というべきか。

西尾とは別のクラスなため見かける事はほとんどないが、西尾は言うまでも無いほどの人気者だ。が、睦月も負けてはいない。俺の知らないところでは西尾には遠く及ばないものの、それでも隠れフ

アンが存在する。付き合いが長い分だけ睦月に対して麻痺しているが、それでも睦月は美しい顔つきをしている。

唯一俺の事を心配してくれる睦月の手を引いて今すぐ遊びに行きたい衝動を押さえる。

「それはダメですよ！ 和くんは私と一緒に学校に行きたいに決まっています！！ ね、和くん？」

それは無い。断固として無い。

だがそんな事を言ってしまうえば、親衛隊に何をされるか分かったものじゃない。これ以上俺の体に負担がかかれば、今日は保健室登校になってしまうだろう。

それでも仮にここで「そうだよ」とか言ってしまうえば睦月が悲しい顔をする。それもまた見たくはない。うむ、これは非常にピンチだ。

「私は和人の事を信じているから」

「っ」

俺は危うく自分の身を守る事に気をとられ「西尾と一緒に学校に行く」と口走りそうだったが、何とか踏みとどまる。

睦月は切なそうな顔で俺を見つめ、その表情から自分の名前を呼んでくれると信じているのだがそれでも確信はない。そんな意図が掴めた。

もちろん俺にとってどちらかを庇えば何かしら代償がくる。それが肉体的にくるものか精神的にくるものかの違いで、結局のところ俺はいい結果がない。

さて、困った。

俺としては睦月の方が大切だ。それでも西尾を泣かすような事があれば何をされるか。

どちらをとるか悩みどころだった。

「……」

中々口を開こうとしない俺に痺れをきらしたのか、二人は一步前に出て顔を近づけてくる。

しょうがないと思いながら俺は睦月を見つめる。

「和くん……」

悲しそうな声をあげてシヨンボリとする西尾。

西尾を見つめる。

「和人……」

今にも泣きそうな声の睦月。

そんな時、「オッス！ もーりーさーわー！！」無駄に元気な声が背後から聞こえた。振り返ろうとしたが、その直後に背中に痛みと衝撃が走る。

突然の出来事から俺はそのまま前に吹っ飛ぶ。さらには額を地面に強打する。

薄れゆく意識の中、「真琴様親衛隊長」の腕章がチラリと見えたのと同時に、意識が太陽の彼方まで吹っ飛ぶ。

\*

\*

黒く荒んだ空を見上げながら俺は地面に倒れこんでいた。

アスファルトの上だというのに腰に痛みは感じられない。その代わりに腹部にだけ痛みがあった。いや、痛みのような生易しいものじゃない。激痛がそこにあった。

どうして？

知らない。

痛みを訴えているのが俺なのにも係わらず、俺は痛みから体を動かせずに、ただただその場で倒れこむしかなかった。

出来ることなら今すぐアスファルトではなく、ベッドで寝転びたい。そう思えるが、動けないのなら仕方が無い。

むしろどうしてこうなったのか知りたいぐらいだ。

が、俺は何も知らない。

知っているのは空が黒く荒んでいる事と腹部に痛みがある。それぐらいだ。それ以外は何も知らない。

どうして俺がここで寝転がっているのかも、  
どうして腹部に痛みが走っているのかも、  
どうして徐々に意識が遠のいていくのかも、  
どうして眠くなってきたのかも、  
どうして喋れないのかも、  
どうして痛みが和らいできたのかも、  
どうして俺は俺なのかも、  
どうして分からない。  
どうして自分自身の事も分からない。  
どうして今置かれている状況が分からない。  
どうして全てが分からない。  
どうして、どうして……

「……和人」

そんな中、聞きなれた声が聞こえた。ような、気がした。それでも幻聴なのか、それとも本当に誰か俺に語りかけているのか確認を取る手段が俺にはない。もし仮にその手段があるとするならば、俺の目の前に顔を見せてくれる以外にどうしようもない。

「……」

俺は声を出したくても出せなかった。

許されるなら体を起こし、自分の目で誰なのかを確かめたい。だけど許されない。全てにおいて許されない自分。実に惨めで、実にこっけいな姿だろう。こんな姿を誰かに見せるぐらいなら、俺はいっそう誰にも遭う事無くこの場で朽ち果てたい。

「どうして和人がこんな事に……」

誰かも分からない彼女の声は悲しさのあまりに震えていた。

「……」

俺は何も言えず、目の前に広がる黒く荒んだ空しか見る以外になかった。

そんな時だった。

頬に人の温もりが伝わる。



そう、誰なのか分からない人の手が俺の頬に置いたのだ。

「……………」

俺は何も言えず、そっと目を閉じた。もうこれ以上目の前に広がる黒く荒んだ空を見ないように。ではなく、眠くなつたからだ。

ゆっくりと閉ざす目にぼやけながらも、誰かの顔が目の前にあった。

次には俺の頬に一粒の滴が落ちる。

その滴は俺のものではない。

誰だから分からない人の涙、だ。

ただ、最後に俺のために泣いてくれている人が誰なのか、それだけを知りたかったが、そう思った次には眠りについてしまった。

夢の中で俺はアスファルトの上に寝転がっていたのと同様に、体が動かなかつた。だけど腹部の痛みは無い。その代わり、何も無い空間に俺は浮かんでいた。それが夢だと分かったのは直ぐだった。

不思議だ。

夢だと分かると何でもできそうな気がする。

それでも、だ。俺はいつたい何ができるのか？

俺のために泣いてくれる顔も分からない君に、いつたい何ができるのだろうか？

……………分かつている。物理的な事は俺には何もできない。それでも俺のために泣いてくれた君の事は覚えていられる。

「……………そうだろ、睦月？」

そう思った時の事だった。自然に睦月の名前を出していた。さっきまで何も話せなかつたのに、今はハッキリと言える事ができた。

「……………」

もう一度声を出そうかと思ったが、次は何も喋られなかった。

俺は諦めたように目を閉じる。

\*

\*

……。

……ん。

……あ、あん。

声が聞こえたのと同時に、どこか体が重く感じられた。

俺はゆっくりと目を開ければ、そこには男子高校生が夢見る桃源郷が広がっていた。

いや、待て。ここで一つ悲鳴を上げるのは容易い。が、そうなれば誰かが駆け寄ってくる恐れがある。ここは取り敢えず今の状況を整理しよう。

どうして体が重く感じられたのか、それについては西尾が俺の上に乗っているからだ。

どうして声が聞こえたのか、知らん！　　ってか、今の俺の立場って非常に不味い。

俺が寝ているのは保健室のベッド。

そして俺の上に乗っている西尾の制服は肌蹴て、普段では見えなところがちラリと見えている。その白くスベスベの肌が時折俺の肌と擦りあう。さらには胸に柔らかな感触が……。やばい、鼻血が出そうだ。

「……取り敢えず落ち着いて俺の上からどいてくれないか？」

「ダメだよ」

ニツコリと断られる。

「あのさ、ここは学校でそういった事は良くないと思うよ。それに好きでもない相手が始めてなのはどうかと……」

ちなみに言うが、西尾はこういった行為は経験してないらしい。さらにちなみにだが、俺も同じだ。

俺はドキマギしながら西尾から視線をそらす。もしこれ以上西尾を見ていたら、俺の精神崩壊と共に野獣の如く襲い掛かる恐れがある。

「和くんは私じゃ不満？」

不満か不満じゃないのかと聞かれれば、即答で不満ではないと答

える。

どういう訳か、西尾の中では口では言えないあんな事やこんな事をしたようだ。まあ変態の西尾なら考えられない事でもないけど。それでも俺は学校でこういった事をするのは大問題だと考えている。一部の生徒は見つかるか見つからないかの瀬戸際で、破廉恥な事をするのがドキドキでたまらない。そう言っている人もいるのだが、俺としては静かなところでしたいと考えている。

「それは……」

「ならいいじゃない」

「よくない！」

俺は即答で答える。

不満か不満じゃないのかは何も言えなかったが、善し悪しの区別は別物だ。俺の性格が問われるからな。

「どうしてよくないの？」

「さっき言った通りだよ。学校では良くない」

「なら学校じゃなかったらいいの？」

「そうだよ」

「どうして学校はダメで学校以外はいいの？ 私には違いが全く分からないよ」

確かに学校はダメで学校以外はいいというのはおかしい話だ。公共の場でも他の誰かに迷惑をかけなければ小さいことなら誰もが目をつぶるだろう。

なら別にいいのかもしれない。

学校中の窓を叩き割ったり、廊下をバイクで暴走したり、授業中に奇声を発して飛び出したり、他の誰かに迷惑をかける行為こそが大問題で、如何わしい行為は何も誰かに迷惑をかけるわけじゃない。むしろ自己責任で済む問題だ。

なら別にいいのかも。

そうだ。学校の日常生活に少し路線がずれた行為だと皆も認知するだろう。

別にいい。

俺はきつと如何わしい行為に対し、自分が気づかない心の奥で緊張のあまり「ダメなこと」として全否定していたのかもしれない。むしろこの好機を逃せばこういったイベントを次体験するのは相当後だ。

なら今しかない。

これを機に今後の生活がぐるりと変わるような事が起きても、だ。今さえ良ければどうでもいい。

けど睦月はどうなる？

別に睦月と付き合っているわけでもない。そう、強いて言うならただのパートナーだ。それを除けば親しい間柄。なら別に睦月を気にする事はまるでない。そう、睦月は全く関係ない。今の状況に睦月こそ無関係だ。

ばれたらどうなる？

もし仮に睦月にこの話が伝わったとしよう。睦月は悲しむ？ 笑う？ それとも何事も無かったかのように俺と接する？ 分からない。睦月との付き合いは短いが、それでも共にした時間は長い。そう、一種の家族のように。

「俺は……」

一度は流れに身を任せようとも思ったが、睦月の事を考えたらその思いは揺れた。

睦月の悲しむ顔が頭の隅をよぎったからだ。

実際は悲しまないのかもしれない。

それでも、だ。

仮に、

睦月が、

悲しむ顔をすれば、

俺も悲しい。

揺れる。揺れ動く。

揺れた後は早かった。さっきまでの思いは完全に空の彼方に飛ん

でいき、その代わりに切なさで自己嫌悪が舞い降りる。

俺はゆっくりと体を起こし、制服が肌蹴っている西尾の体に俺の制服を羽織らせる。

無駄に顔が近いが、今はそれほど緊張することも無ければ視線を合わせられないことも無かった。

「自分の体をもう少し大事にしろよ」

俺はそう静かに言う。

突然俺がそんな事を言ったものだから西尾は驚いたように俺を見た。が、直ぐに俺の言ったことの意味を理解し、伏せ目で頷くと俺の上から退く。

こつもすんなりと退くとは思っていなかったものの、それでも退いてくれた事により俺の体は自由になる。

ベッドの恥で俺の制服をギョツと握りしめる西尾。

そんな姿の西尾を横目でチラリと盗み見てから俺はベッドから立ち上がる。

肌蹴で胸元があらわになっているワイシャツのボタンを閉め、乱れた制服を正す。その間もコッソリと俺は呆然と座っている西尾を盗み見ていた。別に制服の隙間から覗く肌を見ているのではない。強いて言うなら西尾の表情を見ていた。いや、けどチラリズムこそ地球が生んだ奇跡だね。マジで。

何はともあれ、だ。一時の流れとはいえ、不健全的な行為に走ろうとした俺と西尾はお互い口を閉じて時間だけがむなしく進む。

静寂がこの場に降臨してから数分経った時だった。

お互い気まずく向かい合っている時、突然ドアが開かれる。

ドアから顔だけをヒョッコリと出している睦月がそこにいた。時間を見れば既に授業は始まっているのだが、どうして？ という思いよりも、よくきてくれた。そう思う気持の方が強かったため睦月が保健室に入ってきてても何も言わなかった。

睦月は俺を心配そうに見て、

「大丈夫？」

と、俺の体を流す程度に見てから言っ。

「大丈夫だよ」

と、俺は答える。

「打ち所が悪かったらどうしようかと思っただけ、平気そうで良かったよ。それはそうと、どうして西尾さんがベッドの上で和人の制服を握り締めているわけ？」

睦月はニツコリと微笑むや否やすぐさま触れてはいけない禁断の話題に話を持ちかける。もちろん顔は笑っていない。例えるなら般若の顔で俺を睨みつけていた。

どうしたものかと思うものの、それらしい言い訳が全く思い浮かばない。

仮にここで事の発端を一から話したとしよう。……止めた。ゾツとする。

「に、西尾が風邪を引いているからだよ」

強引な言い訳で対応しました。これ以外は何も思いつかなかった。「ふーん、そう。なら一つだけ聞くけど、どうして西尾さんの至るところが肌蹴ているのかな？ 私には破廉恥な事をしていたようにしか思えないけど、それって私だけなのかな？」

おしい。破廉恥の末遂が答えだね。

まっ、何はともあれ俺にとっても西尾にとっても、悪い結果にしかないのは確かだ。

「授業より隣に座っている琴田の横顔を見ていた方が楽しいのは分かるが、少しぐらいはノートにメモ取った方がいいと思うぞ？」

丸めた教科書で頭を叩かれて、俺はハツとする。気がつけば先生の呆れた表情が目に入り、隣に座っている睦月が「もう」と言いた

そくに呆れた表情をしていた。漫画などでよくある展開だが、ほほを赤らめて俯くといったような事にならなかったのは少し残念だが、そんな事を睦月に期待しても手遅れなので諦めるとしよう。

俺はすぐに先生に謝り、閉ざされたままのノートにペンを走らす。黒板に書かれている事をノートに写しながら、今までの妄想について少し考えていた。

ここ最近こういった妄想をする時間が多いような気がした。ふと気がつけば妄想に浸り、記憶があいまいなまま学校生活を一日過ごす事もある。今だってそうだった。いつから妄想の世界に浸っていたのか全く記憶にない。それどころか現実と妄想の区別がつかない事もしばしばあった。

俺はコツンと頭を軽く叩き、授業に集中しようと試みる。そうでもないという妄想の世界に引き込まれるか分かったものじゃないからだ。

ノートにペンを走らせている途中に無残にもチャイムが鳴り響く。やってしまったと思いつつ、後で睦月にノートを写させてもらうことにして休み時間に入った。

「はあ……」

大きなため息をつき、ボーッと黒板の上にある時計の長針を眺める。

「ねえ、西尾さんと今朝本当に何もなかったの？」

いつの間にか目の前に心配そうな表情をする睦月の顔が目に入っ

た。

「西尾さん？ いったい何の話だ？」

「何の話って……。ほら、保健室の話だよ」

「……」

全く話が見えなかった。さっきまでの出来事は俺の妄想だよな？ いや、仮に妄想だとして、どうして俺の妄想の話を睦月が知っている。そうなれば妄想ではなく、現実の話になってしまう。

「あつ、あーあれね。本当に何も無いって」

少し頭が混乱しているが、ここは上手く話を合わせる事にした。  
取り乱して格好悪いところを見せるわけにもいかないからな。

俺はその場から逃げるように「ちよっとトイレ」と言って教室から出た。一人になって考える時間が必要だからだ。主に俺と西尾の関係について。

今までの出来事をまとめると、俺と西尾は付き合っている事になっているようだが、いつから付き合い始めているのかは分からない。付き合うきっかけは西尾が変態で、その現場を目撃した事により、口封じのために側にいるらしい。らしいというのは、俺がその現場を見た覚えがなく、見てしまったという情報だけが脳裏にあるからだ。俺の記憶が正しければ、睦月と付き合っている設定だったはずだ。だが、睦月からそういった態度があまり見られず、それこそが妄想だったかのように思えてくる。

窓の外を眺めながら考えにふけていると、「私は誰でしょう？」という可愛らしい声に加えて視野が真っ暗になる。俗にいう目隠しをされている。「正解したら熱いチューのプレゼントつきだよ」とうれしいサプライズイベント付きだ。

「西尾さんだね？」

まあ現状はどうあれ、そういった嬉しいイベントは大歓迎なので、普通に答える。いや、だって可愛らしい子からのキスって嬉しいから。

「はい、大正解です！ だけど名前で呼んでくれなかったから大正解から正解にランクダウンです。それでも正解は正解なので、ご褒美の大人なキスをしちやいます！ ディープなチューと普通のチューどっちがいいですか？」

後ろから抱きつかれているような形から耳元で喋られているため、少しむず痒かった。そんな事よりも今は問題のキスだ。ディープって事は言うまでもなく唇と唇でのキスだ。俺の記憶上誰かとキスをした覚えがないわけで、ファーストキスがディープなのは少しハードルが高いような気がする。それどころか、ファーストキスが学校



の廊下で公然の目の前なのも少しどうかと思う。

さて、どうしたものかと悩んでいると、おもむろに頬を両手で挟まれて綺麗に90度曲げられた。急に首を曲げられたものだから、かなりの負担が首にかかって痛かった。

が、そんなさやかな痛みของプレゼントより祝福のプレゼントが待ち受けていた。

ゆっくりと整った西尾の顔が近付き、そのまま唇が重なる。何が起こっているのか理解が追い付かず、俺はただ呆然となされるがまだ。

次の瞬間、さらに衝撃が走った。口の中に舌が入ってきた。

たっぷり二十秒ほどの出来事だった。

西尾は「キヤー」と黄色い歓声を上げて走り去り、俺は呆然とその場に立ち尽くした。その場で立ち尽くしてから更に二十秒ほど経ってようやく頭が整理された。それと同時に体の底から羞恥心がかけ走る。

こんな形でファーストキスが奪われるとは思ひもなかったが、相手が相手だけにラッキーだったような気がする。人よりちよつと変態さんなのは傷だが、今は目をつむることにしよう。だって、今はそれどころじゃないから。

「森澤くん気分いいみたいだね？ 僕たちの気分は最悪だから憂さ晴らしに一緒に遊んでくれないかな？」

それどころじゃない現況に話しかけられた。

あれだけ堂々とキスをすれば親衛隊が近くにいてもおかしくはなく、いつの間にか俺を中心に囲まれている。

殺気立った親衛隊のプレッシャーから脂汗がにじむ。

「あ、遊びたいけど今からトイレに行くから今度にしてもらってもいいかな？」

「それは奇遇ですね。僕たちも今からトイレに行こうと思っていたところだ。一緒に行かないか？ おっと、その前に一つ君に頼みごとをしてもいいかな？」

「頼みごと？」

「僕とキスしてくれ」

「は？」

「いやいやいや、目の前にいる親衛隊は何を言っている。男と男でキス？　ちよつと流石にそれは請け負えない。想像するだけで鳥肌ものだ。」

「君はさつき真琴様とキスをしたのなら、今キスをすれば間接的に真琴様とキスした事になる。これほどのチャンスはない。だから今すぐキスをしよう」

そして迫る男の顔。

ちよつと待て！　これは冗談で済まされるレベルをはるかに超えている。だから俺はありつた力の力で名も知らない彼の顔を押える。「親衛隊長の俺を差し置いて平の君が何をやっている！　俺が先に決まっているだろ！」

「親衛隊長だからつていい気になるなよ！　俺が先だ！！」

「ふざけるな！　僕こそが相応しい！」

俺の唇で争いが勃発した。

至るところから暴言と暴行が行われた。きつと最後に立っていた人が俺の唇を奪うチケットが進呈されるのだろつ。俺の意思は全く無視らしい。

このチャンスを逃すと、きつと思ひ出したくもない心の傷ができるだろつ。だからこの機会を逃すわけにはいかない。

「ふざけるな。俺が真琴様の唇を奪う」

棒読みで近くの人に言いながら、コソコソとその場から離れようと試みる。が、もう大乱闘になっているため、ゴチャゴチャしすぎて思いのほか前に進めない。横から殴りかかってくる人がいたり、殴られて倒れこんできた人がいたり、障害は多かった。

思いのほか時間がかかったが、何とか脱出に成功する。最後に調子をのつて「親衛隊のバーカ！」と、ささやかな復讐をしたのが運のつき。一斉にギロリと睨まれてしまった。俺のバカ。

「おい、獲物が逃げたぞ」

「真琴様とキスをするのは俺だ。お前らはそこで指を銜えて見ていろ」

「ハンティングの時間だ」

さっきまでの内戦から一致団結。

ワサワサと手を動かして、ジリジリと距離を縮めてくる。それに合わせて俺もジリジリと後退する。どちらかが何かしらの行動を起こせば、状況の変化は見えているが、お互いジリジリと歩くだけできつかけをうかがっている。

親衛隊の前進。俺の後退。何度か繰り広げ、このままではらちがあかないため、俺は勇気を振り絞って走り出した。目的もなく、ひたすら走る。もちろん後ろかは「待たんかい！」と、罵倒のおまけつきだ。

振り返りたいけど振り返れない恐怖に怯えながらも、俺は懸命に走った。体力と運動神経は人並より少し劣っているが、ここで捕まってしまうば最悪の結末が待っているため、無我夢中で走る。そのおかげかいつも以上の力が発揮されている。本来ならもう捕まっているに違いない。

もうそろそろ体力の限界に近付き、いつでも倒れる準備はできている時、廊下の先に追われる元凶の人物を発見。俺の状況とは正反對に、友だちと楽しそうにキャッキャツと話し込んでいる。

仮にここで西尾に助けてもらおうとしよう。親衛隊の前で何をされるか分かったものじゃない。それこそ火に油を注ぐようなものだ。

この提案は却下。

「あつ、和くーん!!」

提案は却下されないようでした。

西尾はキャッキャツと手を振って「こっちこっち」と嬉しそうにしゃいでいる。本当に止めてくれ。

俺は観念して西尾のそばで立ち止まる。立ち止まると疲れがどつときた。肩で息を整えながら西尾の後ろに隠れる。格好が悪いのは

知っている。だが、こうしないと親衛隊にいつ肩を掴まれるか分からない。背に腹は代えられない。

「皆で鬼ごっこしていたの？」

「……」

俺は首を左右に振る。喋ろうと思っても息が整わず、喋るに喋れない。

「ん、なら何だろう？」

「たぶんだけど追いかけていると思うよ」

西尾と先ほどまで喋っていた友だちAが呆れたように言う。友だちAはどうして追いかけられているのか理由も分かっているのだろう。

「えっ、そうなの和くん？」

「……」

コクコクと言葉の代わりに首を縦に振って答える。

「何か悪いことでもしたの？」

お前のせいだよ！ とは言えず、首を左右に振る。

俺が西尾を盾にした事により、これ以上手を出せないと親衛隊たちは苦い表情をする。一部ではコソコソと相談している姿を見るが、西尾に嫌われてでも得るものはないと行動に出せないようだった。

取り敢えず、窮地は脱した事にホッと安堵する。それより問題はこれからだ。何も起こらなければそれまでだが、何かが起これば新しい問題が起こってしまう。

「和くんに何か用ですか？」

いつもポワポワしている西尾が珍しくきつめの口調で言い放つ。

「えっ、いや……」

「用がないなら和くんを追いかけないで下さい！ 迷惑ですよ！」

「ですが森澤は真琴様に無理やりキスをしたという情報が……」

「それは違いますよ」

「え？」

「だって私から和くんにキスをしましたので。こんな感じに」

西尾は俺の方に振り向き、またしても頬を両手で押えて半ば強引に唇を重ね合わせてきた。もちろん突然の出来事に先ほどと同様になされるがまだ。

「ね。私からキスしたでしょ？ ちなみに舌も入っていますよ」  
ニッコリと親衛隊に笑顔のプレゼント。

その姿を目の前に親衛隊は様々な反応をしていた。一人はその場に崩れ落ち、一人は号泣し、一人は幻覚と現実逃避し、一人は怒りに我を忘れて暴走し、一人は見えていなかったと口笛を吹きながら外を見ているし、一人はブツブツと森澤の唇を奪えば間接キスになると言っている。上げればきりが無いほど、様々な反応があった。

さて、こうなってしまった以上俺は西尾のそばから離れるわけにはいかない。仮に一人になればいつ背後から襲われるか分かったものじゃない。

「真奈美ちゃんこの人達どうしよう？」

西尾の友だちAの名前は真奈美ちゃんらしい。

真奈美ちゃんは「どうしようって……。全部真琴のせいじゃない。自分で何とかしなさい」とやれやれといった感じに呆れた。

「ん、私も知らない。和くん、真奈美ちゃん行こう」

元凶の西尾は人ごとのように俺と真奈美ちゃんの手を引いて歩きます。少しぐらゐは混乱を鎮める努力をしようよ！

「あつ、そうそう。和くんって今日の放課後は暇かな？」

「残念だけど暇じゃない」

特に親衛隊から逃げるために。これは命にかかわる大問題だから仕方ない。いやー、残念だ。本当に残念だ。

「もしかして琴田さんと関係ある？」

琴田？ 琴田って誰だっけ？ ……あー、睦月のことね。そういえば学校では琴田で通っている事すっかり忘れていた。

「いや、別に関係ないけど何で？」

「それならいいの。今のこと忘れて」

「？ まあ睦月とは一緒に帰る事になるけど」

「どうして？」

「いや、だって睦月とは一緒に暮らしているし」

「同棲！？ 和くんと琴田さんって同棲しているの！？」

「あれ？ 知らなかった？」

「そんな話聞いてないよ！ どうして黙っていたの！？」

「いや、だって聞かれなかったし……」

「現代っ子みたいなさ言わないでよ！！ 同棲しているなんて誰も想像しないよ！！」

かなり動揺しているようで、オロオロとしている。その姿は見ていて可愛らしかった。

「あつ、もしかして親戚とか？」

残念不正解。首を左右に振る。

「血のつながらない兄妹？」

残念不正解。首を左右に振る。

「なら腹違いの兄妹？」

残念不正解。首を左右に振る。

「だったら……、家庭の用事？」

あながち間違いではないな。家庭の用事なら何にでも通用しそうだけど、そこは気にしないでおう。

それに本当の事を言うわけにもいかないし。

「そんな感じ」

「ふーん。なら琴田さんとは何もないって事でいいのかな？」

「……何もない。と思う」

「はつきりしないなー！」

睦月とは実際には付き合っていないが、付き合っている設定にはなっているのだが、本当の事を言えば何かされそうで怖い。

なるようになるか、そう思いながら「ハハハ」と笑ってごまかす。

「ねえ！ 和くん聞いている！？」

俺はハツとする。

確かさっきまで学校の廊下にいたような気がしたりしなかったり。いや、どことなく気のせいに思えてきた。きつと妄想に違いない。だって俺が西尾にキスされるはずがない。

西尾は不満そうに俺を睨みつける。

ちなみに今は下校中のようだ。いつ授業が終わって、いつ学校を出たのかは覚えていないが、さほど重要のように感じられないので深く考えるのは止めよう。

「あー、ごめん。それで何だっけ？」

さっきまでの記憶がないので素直に謝る。それにしても彼女のような人の話を聞かないとは実にけしからん。全くもってけしからん。「もー！ ……学校の廊下で暇じゃないって言ったのに、どうして突然一緒に帰ろうって言ったのになって」

なるほど、俺はまっすぐ睦月と家に帰るつもりだったが、何を思ったのか西尾を誘ったと。だとすると、西尾とのキスは妄想ではない事になる。今更だが、得した気分になった。

知らん！

知るはずがない！

「い、いやー……西尾と一緒に帰りたくなったから？」

「どうして疑問形なの？」

「どうしてだろう？」

「もー！ 今日の和くん変！ 何かあったの？」

「いや、変なのは今の状況だと思うぞ」

あえて気にしないようにしていたが、さすがに気になる。

だって俺と西尾の周りには親衛隊が囲んでいるから。

もしかして廊下の続きだろうか。それとも「いつ森澤がオオカミになって真琴様を襲うか分からないから見張っている」とかそんな

理由だろうか。

理由はどうあれ、とても気になる。もうすぐ気になる。気になるのは俺だけではないようで、帰り道が同じ生徒や会社帰りのサラリーマンが、不思議な光景だと興味津々の眼差しでチラチラと見ている。俺だって同じ現場に立ち会ったら同じ反応をする。

「だよな……。私と和くんの大切な時間を邪魔しないでよ！」

西尾のちよつとした反抗。

「いえ、私たちの事はお気になさらず」

「気になるから言っているの！」

「ですが真琴様の事が心配なので……。特に隣の野獣について！」

「私の隣に野獣はいませんよーだ！」

「人間の皮を被ったオオカミがおります。私には分かります」

「んもー！ いいもん。和くん腕組もうよ」

俺の返事を待たず、勝手に腕を組んできた。おい、公衆の面前で何をする。

親衛隊は面白くないと「ムカムカ」「イライラ」と、あちこちから聞こえてくる。

「なに？」

キツと親衛隊を睨みつける西尾。

「いえ、私たちは心境を擬音語で表しただけです。お気になさらず」  
そんな感じで下校は続いた。

帰りの途中で雑貨屋に入って「これ可愛いねー」と見たり、レンタルビデオ屋でも「これ私のオススメ！」と嬉しそうに映画を進めたり、ドーナツ屋で「これも美味しい。はい、あーん」と嬉しいイベントがありながら寄り道をして帰った。言うまでもないが、どこに行くにしても親衛隊はついてきた。「他のお客さんに迷惑だよ！」と西尾の注意を気にすることなく、俺たちを監視してきた。

西尾は親衛隊の存在に諦めたようで、ドーナツ屋を出た後はお菓子のおまけとも思っているのか、完全に気にしないようになっていた。もちろん俺は親衛隊の殺気に怯えていた。



当たり前だが、下校だけあってゴールは必ずある。ゴールは西尾の家で、今は西尾と向かい合って立っている。後ろには親衛隊のおまけつき。第三者からはいつたいたいどう思われているのやら。

「今日は楽しかったね。和くん」

嬉しそうな西尾とは正反対に、俺の心は沈んでいた。決して西尾と別れるのが辛いわけではない。西尾と別れた後の事を考えて沈んだのだった。

西尾は突然何を思ったのか、指をもじもじさせる。どこか頬も赤みがかかっていた。

「さようならのチュー」

ボソツと西尾はとんでもない発言をする。

「いやいやいや、ちよつと待て！」

後ろの親衛隊から殺気を浴びる。たぶんだが、「さようならのチュー」を試みる。明日の朝日は拝めないと思え」そんな類の事を思っているに違いない。

「チュー」

ボソツと呟いて催促する西尾。

背後からの殺気。

そして数分後の未来を想像して怯える俺。

「和くんはチュー嫌い？」

しょんぼりする西尾。

背後から西尾の寂しそうな表情に心を痛めたのか、一人から「早くチューしろ」と聞こえる。

一応親衛隊からの許しは出たが、勇気がなくて一步を踏み出せない俺。

「……もういい」

かなり悲しそうに呟き、俺に背を向ける西尾。

俺の背中を押す親衛隊。

ようやく一步を踏み出せた俺。

俺はそのまま西尾を後ろから抱き締める。

そして、肩を抱いて俺に振り向かせる。そのまま俺は西尾の唇を奪った。キヤー！ 恥ずかしい！

西尾から唇を離すと、「やっぱり和くん大好き」嬉しそうに頬を緩めていた。そういつた事を言ってくれる異性は今までにいなかったため、胸が熱くなるのを感じた。きつと顔も真っ赤になっているに違いない。

あれ？ 俺たちって偽りのカップルだったような……。いや、偽りのカップルなら「さようならのチュー」なんてしないか。それ以前に俺と西尾の会おうきつかけって何だっけ？ ……忘れた。まっ、いつか。俺と睦月の関係は？ ……忘れた。まっ、いつか。

いろいろな思いが頭をよぎるが、はつきりと分らないため「まっ、いつか」で解決した。

「さてと、和くんとさようならのチューもできたし、また明日だね。バイバイ和くん」

円満の笑顔で手を振る西尾に、「また明日ね」と俺も手を振り返す。

そういえば、さっきまで西尾と離れるのを嫌がったけど、どうしてだったかな？ ……まっ、いつか。

「さて、森澤くん。今から私たちとデートでもしようか。もちろん嫌とは言わないよね？」

よくない！

すっかりと親衛隊の存在を忘れていた。

西尾とのキスで俺の思考回路は麻痺していたに違いない。こんな生命にかかわる重要な事を忘れるなんて、そうしか考えられない。

玄関のドアを開ける西尾。

俺の肩に手をまわす親衛隊。

西尾に手を伸ばす俺。

「ちよつと待ってくれ！」

命の危機を悟った俺は、無意識にそう叫んでいた。それは西尾に對するものか、親衛隊に對するものなのか、自分でもよく分からない

いが叫んでいた。

西尾は不思議そうな表情で俺に振りかえる。

「今日西尾の家に泊まってもいいかな？」

俺の口はとんでもない事を口走っていた。

決してふしだらな事を考えているわけではない。これは明日に生命をつなぐ大切な意味がある。ここで断れたら三割増で酷いことをされるに違いない。

『な、なんだと！？』

綺麗にはもる親衛隊の皆さん。自分で言っておきながら、俺も同じくらい驚いている。

「和くん本気？」

西尾の頬を赤く染まり、拳動不審にあたりを見始めた。かなり動揺しているようだ。まあ、誰だって異性の相手に「今日泊めてくれ」と言われたら動揺するか。

「あつ、いや、何ていうか……。ごめんやっぱり今のこと忘れて！ハ、ハハハ」

「そ、そうだよね！ ハハハ」

「ハハハ」

「ハハハ」

お互い発言で相当動揺し、笑って誤魔化そうと無意味に笑い続ける。

そんな時、ズボンから聞きなれたメロディーが聞こえてくる。俺の好きな映画の主題歌だった。ちなみに俺は顔に似合わず、ベタベタな恋愛映画をこよなく愛している。

普段なら決してなる事はない携帯電話のディスプレイを見る。そこには「家」の文字と、電話のマークが映っていた。

西尾に「ちよつとごめん」とだけ伝え、気持ち程度その場から離れて電話に出る。もし相手が幼馴染や学校の友だちなら、通話終了のボタンを押して後でかけなおすところだ。家庭の用事とかもあるし、極力家族からの電話は出るようにしている。

「はい、もしもし。……あつ、睦月？ どうした？ ……うんうん、あー、大丈夫。今から帰るから。……うん、うん。分かった。えっ？今日は睦月がご飯作るのか。頼むから普通のご飯を作ってくれよ。……あー、いや、なんでもない。本当に頼みます！ そ、それだけは勘弁してくれ！ あー、けどバス」

あつたかな？ と言おうとしたが、直前で俺の携帯電話が奪われた。

誰に？

西尾に。

「和くん今日は私の家に泊まるからご飯いらないって」

言いたい事だけを言って、素早く通話終了のボタンを西尾は押す。そして携帯電話を胸に抱き、俺の表情をうかがってきた。

西尾は何を思っているのか俺には全く分からないが、その表情からは焦りが感じられた。

俺も西尾も一言も喋らず、車のエンジン音だけが辺りに響く。

「……ハ、ハハハ。なら今日は泊まっていこうかな」

先に折れたのは俺だった。

西尾に氣遣って極力明るく言う。

背後にいる親衛隊の皆さんは、今の状況でふざけた事が言えないと察しているのか、傍観者となつて事を見守っていた。たぶんだが、思い思い言いたい事があるだろう。それでも下手な事は言えるはずもなく、つまらないと眉間にしわを寄せるだけだった。

「お、お父さんとお母さんに何て挨拶したらいいのかな？」

「……今日はいないの」

「えっ？」

俺の聴覚が現役なら「今日はいない」と確かにそう言った。それは西尾の両親が不在という事で、果てしなく親衛隊に誤解を生みそ

うだ。

「今ね、二人で旅行に行っていないの。お兄ちゃんも今日は帰ってこないと思うの」

「えっ？ ……ええー!!」

本日何度目かの驚き。

「……いや、かな？」

「俺は嫌じゃないけど……。西尾はそれでいいのか？」

むしろ両親に変な誤解をされないという点では嬉しい。ただ西尾についてだ。

仮にも俺は男であり、口では言えないあんな事やこんな事に敏感な年頃だ。親衛隊の言った才オカミも否定できない。手を出さないと心がけていても、俺の心を揺さぶるきっかけがあれば心境の変化は容易い。それに誰もいない密室で二人という状況も不味い。才オカミになる確率が三割増しだ。

言葉の代わりに頷いて答えてくれた。

西尾は頷いて恥ずかしいのか、それとも別の理由からなのか、俯いて表情は見られなかった。その姿がどうしても俺を不安にさせる。誰に言われるまでもなく、俺と西尾が不釣り合いなのは知っている。俺はいけるメンズとはお世辞にも言えない。西尾は言うまでもなく整った美しい顔をしている。

だからこそ俺は不安になる。

どうして俺なのか？

俺以外にも相手はいただろうに。

何か裏があるのか？

そんな素振りはない。

そもそも西尾とはいつ出会った？

分からない。

いつ付き合った？

知らない。

睦月は？

忘れた。

俺は何をしている？

西尾の家に入ろうとしている。

俺の事を大好きと言ってくれた。

それだけだと本音が嘘か冗談か分からない。

俺は西尾の事が好き？

……。

いろいろな思いが頭をよぎる。考えれば考えるほど、思えば思うほど、その全てがどうでもよく思えてきた。この問題はあくまで俺と西尾の問題で、睦月にしても、背後にいる親衛隊にしても、俺たち二人以外には関係のない問題だ。

だから俺は身を全て西尾にゆだねる事にする。

俺は少し気持ちが安らいだような気がした。その安らぎは言い訳のような感じがする事は、自分が一番よく分かっている。

「……和くん行こう」

西尾は俺の手を引いて玄関に向かって歩き出す。

「ちよつと待って下さい！」

「流石に二人きりは危険です！」

「も、もう一度よく考えて下さいよ！」

「私も一緒に泊まってもいいですか!？」

このままでは崇拜する西尾の危機と親衛隊が動く。最後の言葉はきつと願望だろう。

それにしても、仮にも同じ学校に通っている生徒の前で、両親がいない状態のお泊り。明日学校で噂になっても文句は言えそうになり。平凡な日常とは完全に取り戻せそうにない話である。

西尾は親衛隊の話に耳を傾けるつもりはないようで、特に何も言わずに俺の手を引く。ただ、ほんの少しだけ俺の手を握る手に力が入ったのが分かった。何かを決心した現れだろうか。それとも恥じらいからの行為なのだろうか。理由はどうあれ、西尾の中で思いが固まったのは伝わってきた。

もう西尾の家にお邪魔するのは決定なので、取り敢えず親衛隊に最高の笑みを見せておいた。俺を肉体的に攻撃しようとするから、それに対する精神的な仕返しだ。案の定ものすごくショックを受け

ていた。

「お邪魔しまーす」

と、お決まり文句を一言いって玄関で靴を脱ぐ。

当たり前なのだが、西尾の家は外見も含めて実に普通だった。玄関には履かれていない靴が並び、傘立てには数本の傘が並び、どこからどう見ても普通の家だった。俺の中ではもっとお嬢様のような生活をしているのだと思っていたので、少し残念なような安堵したような気持だった。

一応礼儀として靴を綺麗に並べ、廊下を少し歩く。すぐにドアがあり、居間に入る。

やはり居間も実に普通だった。いや、当たり前か。

未だに何も喋らない西尾に少し気まずさを感じ、適当に靴を置く。西尾も近くの椅子に靴を置き、電気をつけてから冷蔵庫を開ける。冷蔵庫から冷えたお茶を出して、二つのコップに注いだ。

俺はそんな西尾の後姿を見つめていた。

「はい、和くん。ほら、立っていないで座ろうよ」

そう言っただけ俺にお茶の入ったコップを手渡してくれた。

二人で近くの椅子に座る。食事の時にでも使っているのだろう。

「あのね、ちょっと恥ずかしいけど、私ご飯とか普段作らないの。

あのね、けど今日は頑張っただけと思うの……。だから、あのね

」

「楽しみにしているよ」

俺は西尾の言葉を途中で遮り、そう言った。

西尾は嬉しそうに「うん！頑張るね！」とやる気が出てきたようだった。

帰る途中に寄り道したため、ちょうどご飯時だった。それでも今から作るとなれば時間がかかる。さて、俺はどうしたらいいのだろうか。せっかくやる気が出ている西尾の邪魔をするわけにもいかないし、勝手に何かしているわけにもいかない。ここは素直に西尾の

後姿を堪能する以外に方法はなさそうだった。

「私が頑張って作っている間に、お風呂でも入って待っていてね」  
西尾の後姿と作っている姿は堪能出来そうになかった。そして「あつ、着替えはお兄ちゃんのもいいかな？ ちよつと持つてくるから待っていてね」そう言っただけで居間を後にした。きつと今頃お兄ちゃんもやらの部屋に不法侵入して、服を物色しているに違いない。ほどなくして動きやすそうな半ズボンのジャージと、シンプルなＴシャツを持ってきた。俺に渡すと、すぐにお風呂にお湯でも溜めに行く。忙しそう走り回る西尾が可愛らしかった。

お湯が溜まるまで不慣れそうに包丁や、鍋を使っている西尾の後姿を頼が緩みながら見ていた。途中で「もー！ 恥ずかしいから見ないでよー！」と怒られたりもした。初めて料理をする娘を見る父親のような気分だった。むしろ新婚さん？ いや、想像だけど。

「和くんお風呂もう大丈夫だよ。ゆつくり入ってきてね。廊下に出て、階段の前にあるドアが脱衣所だからね」

と、料理の合間を見てお湯加減を見てきてくれた。

俺はお兄ちゃんとやらの着替えを持って脱衣所に向かう。もう少し西尾の姿を見ていたかったが、怒られるから我慢しよう。

脱衣所にはバスタオルが用意されていた。うむ、なぜか緊張してきた。

素早く制服を脱ぎ、カゴの中に置いておく。西尾から受け取った服も同じように放置。

「……うっ」

一歩お風呂場に足を踏み込むと自然に声が漏れた。何か不思議な物があったからではないし、浴槽も含めて一般的だと思う。ただ、裸という事もあり、少しふしだらな事を考えてしまったのだ。いや、だってほら、やっぱり想像しちゃうじゃない。

俺は想像している事を忘れようと、冷たい水をシャワーで頭からかぶる。

「冷たい」



当たり前である。

すぐにお湯を付け足し、冷えた体を温める。それでも効果はあったようで、少し頭がすっきりとしたような気がした。

俺は髪の毛、体、顔と、それぞれいつも以上に綺麗に洗う。最後に湯船につかった。

大きな深呼吸をして、どこか新婚生活を思わせる今の状況から妄想が膨らんだ。

お風呂に入り、手作りの晩御飯を食べて、その後は……。やめた。妄想するだけで頭から湯気が出そうな気がしたから。それに妄想通りの展開にならない事は俺が一番よく知っている。妄想と現実はいくら違うのだ。

こうやってゆっくりと色々な事を考える時間があると、何か大切な事を忘れていている気がしてくる。それでも何を忘れて、何が違うのか俺には全く分からない。西尾の事だったりもするし、睦月の事だったりもするし、俺自身の事だったりもする。

「和くんご飯できたよー」

兎に角、俺が思いにふけていると、嬉しそうな声が聞こえてきた。「はい」と返事をし、湯船から出る。やっぱり気のせいかな。と無理やり結論を出す。

テキパキと体をバスタオルで拭く。西尾が用意してくれた服を着て、制服を持って居間に戻った。

居間に戻ると西尾は既に椅子に座って準備万端のようだった。

制服を鞆の近くに置き、俺も椅子に座った。

「お風呂ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして。さっそく食べよ」

「うん。いただきます」

食卓にはスパゲッティ、サラダ、そしてまさかのお味噌汁。洋食と和食の共演がここにあった。きつとスープを作ったのだから、作り方を知らなかったに違いない。

俺は最初にスパゲッティに手を伸ばす。フォークで程よくクル

クル巻いて口に入れる。

茹でる時間が短かったのか、少し硬いけど美味しい。

その後も俺は二口、三口と食べていると視線に気づく。

ふと視線を上げれば、西尾が何も言わずに俺の表情をうかがっていた。あー、そういう事か。

「とつても美味しいよ」

その返事が正解だったようで、西尾の表情がほころぶ。その笑顔を見て俺もつられて頬が緩む。

俺の返事が聞けて西尾もフォークを手にする。一口食べると少し表情が曇る。想像していた味と少し違っていたのだろうか。今にも「失敗しちゃった」とか言いそうだ。

「また今度西尾の手料理が食べたいな」

と、フォークを入れておく。西尾は元気に「うん！」と言う。俺としてはその笑顔が見られるだけで満足なのは言うまでもない。これだけでお腹はいっぱいだ。

普段料理を作らないのは本当のようで、サラダにしても味噌汁にしても、何かがずれていた。西尾も分かっているようで、一口食べるごとに表情を曇らせていた。それでも料理のセンスはあると思う。俺だったら普段作らない状態で包丁を持てば、何をしでかさ分かったものじゃない。それこそベタな話だけど、塩と砂糖を間違えるようなサプライズイベントがありそうだ。

兎に角、西尾の手料理を堪能し、食べ終わったら次は西尾がお風呂に入る番だった。

俺は西尾に連れられて部屋に案内される。

第一印象はとも女の子らしい部屋だった。それでも見てわかるような部屋ではなく、さりげなく所々に飾ってあった。「絶対に部屋あさらないでよ！」と何度も釘を刺され、西尾は駆け足で部屋を出て行った。大丈夫。俺はどこかの勇者のように、タンスを勝手に開ける趣味は持っていないから。そんなに心配なら居間で待つように言えばいいのに。

特に何もする事がないため、ボーっとしていると外で話し声が聞こえる。

俺はこっそりとカーテンを隙間から外を見る。

「隊長どうしましょう？」

「うむ……。ここは見守るしかない。きっと真琴様も私たちの思いに気づいてくれるはずだ」

「了解しました！」

「では食料の調達に行きましょうか。今日は寝られない夜になりそうだからな」

「了解しました！」

外では親衛隊長とその部下が話し込んでいた。今の時間ならまだ何とかなるが、真夜中も立ったまま見張っていたら不審者と間違われるだろう。そうなたら警察沙汰になり、俺と西尾も事情を聞かれそうだな。それは嫌だな！。

俺は大きなため息をする。

「おい、早く帰った方がいいと思うぞー」

窓を開けて、どこかに歩きだしそうな親衛隊に向けて言う。

親衛隊は何事かと声のする方、俺を見る。その表情は驚きというより、怒っているようだった。

「き、貴様！ 貴様がいるのはもしかして！？」

「お前たちが想像している通りの場所だ。ベッドフカフカで気持ちいいぞー」

ちなみに今俺がいる場所はベッドの上。ベッドに上らないと窓の外が見られないから。

隊長らしき人はその場に倒れこむ。すぐに部下のような人が「た、隊長！」「お気を確かに！」と言っている。

「あつ、そう言えば今西尾ってお風呂に入っているけど、暇だしどうしようかなー」

ムクツと体を起こす。復活した。

「貴様！ それをやってみろ！ 心に消えない傷を植え付けた後、

学校の花壇に埋めてやる！ 栽培してやる！」

「ならさつさと帰れ。そうすれば俺は何もしない」

「信用できるはずがないだろ！？」

「あー、暇だなー」

「ふざけるな！」

「いや、俺はいつでも真面目だよ。早く帰った方がいいと思うぞー」

「ふざけるなと言っていい！」

「やれやれ、少し汗かいたな。では俺はちよつと下に行くわ」

ちなみに言うが、俺は全く西尾の入浴を覗こうとは思っていない。ちよつと強引な取引をしている最中だ。

フリでその場を後にしようとする。と、その直後に「ま、待ってくれ！」と外から声が聞こえる。うん。そう言ってくれなかったらどうしようかと思つたよ。いや、マジで。

「……分かつた。今日は身を引くとする。だ、だから約束は守れよ！」

「了解しました」

そして親衛隊の人達はその場を後にする。俺は大きくため息をついて窓を閉めた。

俺が乗つた事によつてシートに出来たシワを払い、ベッドに背を預けて座つた。

「やれやれ、これで不審者騒動はなさそうだな」

と、一安心したのはつかの間、「ねえ？」と声をかけられる。

俺は背中冷や汗をかいた。今日何度も聞いた声がドアの方から聞こえるからだ。しかも少しご機嫌斜めのようだ。

「大声で変な事言い争わないでよ！ 近所に変な誤解されたらどうするの！？」

はい、叱られました。

「あれ？ いつからそこに？」

「あんなに大きな声だしていたら聞こえるよ！」

「あー、なるほど」

道理で服が少し乱れ、髪の毛もボサボサなわけである。相当急いであがったに違いない。

理由はどうあっても俺が全面的に悪い。言い訳もしようとは思わなかった。俺は十分ほど正座で怒られ、俺が反省したと分かってくれたのか「……もう。本当に和くんは」と最後には呆れながらも笑ってくれた。

西尾の「少しお話ししよう」その一言で、俺と西尾はベッドの背を預けて座っている。説教の前は少し明るかったものの、今はすっかり太陽が沈み辺りは暗かった。それでもどういった理由か、電気はつけていない。

「和くんは……、和くんは私のどこが好き？」

何の前触れもなく西尾はそう言う。

部屋が暗く、西尾の表情は見えないものの、その声色からは特別な何かを感じた。興味といった類ではなく、強いて言うならば、どこか安心を感じさせていた。

西尾の好きなところ。

まだまだ西尾との付き合いは短い。それ以前に出会いすらもろくに覚えていないため、短いかどうかも分からない。

「いつも楽しそうな笑顔をしているところ、俺にドキドキをくれるところ、少し強引だけど優しいところ、苦手な料理を頑張って作ってくれるところ、そして可愛いところ……。かな」

それでも俺ははつきりと答える事が出来た。少しキザだったが、別に気にはしない。それが本音だから。

部屋が暗いせいなのか、相手の表情をみえない不安と安心感、もしかしたら矛盾する二つの思いのせいなのだろうか、少しシリアスな気持ちになる。

「ふふっ、ありがとう」

「西尾は？」

「和くんはとっても優しい。私が変な事をしてても嫌な顔一つしない……。今だって強引に泊まるような事になったけど、最後は笑って

くれた。けどね、少しだけ不安になるの……」

「不安？」

「和くんが無理をしていないかって……」

「……」

「知っている？ 付き合っているカップルのどっちかが、無理をしていると長続きしないって……。私はこんな性格だし、和くんに呆れられてないかって……」

西尾の声は少し震えていた。

不安なんは俺だけではなく、西尾だって同じだった。やはり何事も話し合う事が大切なのだと、当たり前のことを思った。分からないければ話し合えばいい。不安になれば話し合えばいい。真実を知る怖さから逃げなくてはならない。

俺は西尾の本音を聞いて少し西尾が愛おしく思えた。

「それに私って嫉妬深いよね」

バツが悪そうに、西尾は苦笑う。

「和くんが琴田さんと電話している時に、本当に一緒に住んでいるって実感がわいて、楽しそうに話す和くんを見ていたら嫌になって……。あの時の私どうかしていたよ。ごめんね。本当にごめんなさい」

「俺の方こそごめん」

「どうして和くんが謝るの？ 悪いのは私で、和くんは何も悪くないよ」

「いや、西尾の前でするような話じゃなかったから……。それに俺は無理していないから。無理なんて一つもしていないからな。それに、学校でのキスや今日の下校にした寄り道や、今だって西尾と一緒にいられて嬉しいし」

本来の俺だったら恥ずかしくて悶えているにちがいない。だけど今のシリアスな気持ちからは不思議とためらう事なく本音が言えた。「……あー、やっぱり私は和くんの事が好きだわ。……ねえ、一つ私の我が儘を聞いてもらってもいい？ 和くんから私にキスして

ほしいな。駄目かな？」

俺は言葉の代わりに右手で西尾の頬を触り、少しずつ顔を近づける。それと同時に右手を頬から後頭部に手を移動させる。

そして唇を重ねる。

右手をどうしようかと思い、背中に手を回そうと伸ばす。

「んっ……」

西尾から色っぽい声が漏れる。

俺は背中に手を回そうとしたが、暗闇から禁断の場所を触ったようだ。とてもやわらかくて、控えめでいて、それでも主張する胸に俺は触れていた。

ゆっくりと唇を離す。それでも右手はそのまま。

「……いいよ。和くん、いいよ。私初めてだから優しくエスコートしてね」

「西尾……」

赤く染まる頬にもう一度触れる。

とても大切な物を扱うように、優しく、それでいて雑に、俺は触れた。

4

「和くん。朝だよ」

耳元で囁くような声で俺は目を覚ました。いつの間にか眠っていたようだ。

声のする方、真横を見る。俺は絶句した。

うつ伏せで横になっている西尾の顔がすぐに目に入ったからだ。顔の下、胸辺りまで布団がかぶさっているが、そっと覗く肩は何かを着ている様子はない。そう、まるで裸のようだった。そういえば俺も下の方が涼しげで、なおかつ服を着ている違和感が全くない。

とても解放感に満ちている。

俺は恐る恐る布団を軽く持ち上げる。

はい、俺も裸でした。

全く記憶にないが、俺は取り返しのつかない事をしてしまったようだ。言わなくても分かるよね？

「もう、恥ずかしいから私の裸見ないでよ」

怒っているのではなく、照れくさそうに言った。西尾が「もう」と言った時、大抵が照れている時だと気づく。

「えっ？ あっ、ごめん」

「もう……。朝ごはんどうしよう？」

「と、いいますと？」

「時間は大丈夫だけど、あまり美味しい物を作れそうになくて……」

「あー、西尾が嫌じゃなかったら作ってほしいな」

「うん！」

嬉しそうに返事をし、もそもそと西尾は動いた。あー、そうか。ベッドから出たいけど、服を着ていないから出られないって事が。それに俺が床側って事もあるため、下着も服もとれないと。

事の真相を知った事によって、俺は少し西尾を苛めなくなった。

「どうした？ ほら、作りに行かないのか？」

「和くん顔がにやけているよ？ ……あっ、私を見て楽しんでいるでしょ？」

「そんな事ないって」

「……もう。チューしてあげるから目を閉じて」

「了解しました」

直後に体に重みがかかる。ただ、体の至るところがやわらかくてぬくもりを感じる。それが俺の想像を引きたてた。肌の感覚から察するに、俺の上に西尾が乗っかっている状態だ。しかも胸辺りには比喩物にならないやわらかい物が二つ。これは完ぺきに重なり合っている。

チュッ。



西尾の言った通り、とても控えめなキスをされた。

体から重みがすぐに消える。隣で布が擦れ合う音がリアルで、さらに想像を引きたった。

「和くんも制服着たら居間に来てね」

ほどなくして西尾の声に続き、ドアの閉まる音がした。

もう少し堪能したかったという感想は置いて、俺も辺りに散乱した服を手に取り着ていく。最後にお兄ちゃんとやらから借りた服を綺麗にたたみ、鞆を持って居間に行く。その前にチラッと外に目にした。親衛隊の姿はなかった。

居間に戻ると朝食が出来ていた。

机にはご飯に昨日のお味噌汁、黄身がつぶれた目玉焼き、タコさんウィンナーにしようとして失敗したのか、形が特殊なウィンナー。見た感じ「朝ごはんだ！」と言いたくなるようなチョイスだった。

俺は鞆を床に置いてから椅子に座った。

「いったきまーす。それで、このウィンナーはなに？」

「……タコさんウィンナーのお刺身」

うん。やっぱりそうだったか。何となく薄々そう感じていた。

俺は恥ずかしそうに言う西尾の顔で軽く吹き出してしまった。

「もう！」

「だって面白くて。それに……んっ、とっても美味しい」

「ウィンナーは焼くだけだもん。美味しいに決まっているよ」

「あつ、それもそうか」

そして無駄話をしながら朝食を食べる。最後に「ん、美味しかった。ごちそうさま」と言うと、嬉しそうな表情をしていた。

朝食を食べた後は二人並んで食器を洗い、顔を洗っている間に登校する時間がやってきた。やはり二人並んで玄関で靴をはく。

先に西尾が出て、俺もその後に続く。てっきり外で親衛隊の人達が待っていると思ったが、さすがにそこまではいかないようだった。外は登園する小学生で賑やかだった。西尾と話しながら一緒に歩いていると、同じ制服を着た生徒を数人見かけた。それでも俺たち

に興味を示さなかった。親衛隊が異常なだけで、この反応が普通のだろう。

「あつ、そうそう昨日の事は誰にも言ったらダメだからね」

それは約束しよう。昨日の出来事が親衛隊の耳に伝わったら……。想像するのをやめよう。本当に花壇に埋められてしまいそうだ。

いや、ちよつと待てよ。俺が西尾の家に泊まったのは隠しようのない真実であり、その事を親衛隊が知っている。そうなれば学校中の噂になってもいたしかたない。その事を西尾は気づいているのだろうか？ 仮に気づいていなくても、遠かれ早かれ学校に着いたら嫌でも気づかされるだろう。

少し思いにふけたが、なるようになるか、そう結論を出した。

学校に近付くにつれて徐々に登校する生徒の数が増えてきた。それに加えて周りの目も気になってくる。俺たちを見つけると何かコソコソと話している生徒もいる。主にそれは親衛隊だったので、親衛隊の中で連絡網があるのだろうか。プライバシーという物が役にたっていない瞬間でもあった。

西尾も周りの異変に気づいているようで、かなり困った表情をしていた。

「あ、あのね、和くんの一つ謝らないといけない事があるの」

「ん？」

「あのね、怒らない？」

「たぶん怒らないと思う。まあ、大抵の事は笑って終わらせるから、怒らないよ」

「実はね、今朝ちよつと調子にのっちゃって、和くんの首にキスマークつけちゃったの」

なるほど、これはもう大々的に公表しているようなものだ。

「どっちの首に？」

「えつとね、右の首に2つと、左に一つ」

「さ、左右！？ ……今日は首を手で隠して授業でも受けるか。まっ、気にするなっ」

マフラーでもあればよかったな。季節からすると、かなり場違いになるけど。

俺は開いている手で首を隠そうとしたが、やめた。もう今更だし、何より余計に怪しまれそうだから。

気にするなどは言ったものの、西尾は相当気にしているようで、ちらりと横顔を盗み見ると落ち込んでいるようだった。

取り敢えず俺は西尾の頬つぺたを突つついてみた。この行動に意味は全くない。

思いのほか頬つぺたは柔らかく、癖になりそうだった。

「な、何するの!？」

「いや、何となく」

そして俺は西尾の頭に手を置き、雑に頭を撫でる。いや、撫でるといふよりかは、せっかくセツトしたであろう髪をグシャグシャにただけだ。

西尾は「わー」とグシャグシャになった髪を整い始める。そんな西尾を置いて、俺は「ははっ」と軽く笑って先に歩きだす。

「もう……。和くんのバカ」

駆け足で俺の隣に並ぶと、照れたような嬉しそうな声で呟いた。その呟きはとても小さかったが、俺は聞き逃さなかった。きっと一種の優しさと受け取ってくれたのだろう。とてもぶっきらぼうな優しさなのだけれども。

次に西尾の横顔を盗み見た時は、さっきまでの落ち込んでいる表情は見えなかった。いつもの笑顔がそこにあった。

俺は鼻で笑い、前を向いて歩く。

「ん? どうしたの?」

「いや、昨日の事を少し思い出しただけ」

西尾の耳元で囁く。

「も、もう!」

耳まで真っ赤にして、明らかに動揺している。

「うそうそ、やっぱり西尾は笑顔が似合うなって思っただけ。これ

本当」

「からかわないでよ」

そんな風に話していると、所々から「バカップル」という単語が聞こえてきた。流石に白昼堂々と髪の毛をグシャグシャにしたり、頬つぺたをツンツンしたりしているとそう思われても仕方がないか。

二十分ほど歩いてようやく目的地の学校に到着した。道行く生徒から「バカップル」という単語を浴びせられ、心身共に疲れた。

学校の敷地内に入るや否や、西尾は思い出したように「あつ、先生に提出しないといけないプリントあった！」そう言って駆け出して行った。そして今はその後姿を見つめている。さて、今からどうしたものか。取り敢えず走ってみよう。

「どこに行くのかな？」

肩を掴まれて妨害されました。まあ、分かりきった結果だけど。取り敢えずホールドアップ。両手を上げて敵意が無い事を証明する。

「教室に行きたいけど、駄目ですかね？」

「私たちに付き合っただければ、教室に行ってもいいですよ」

「それって今じゃないと駄目ですかね？」

「残念ですが、今じゃないと駄目ですね」

「そうです…… かつ！」

親衛隊の腕を振り払い俺は走る。目的もなく走る。後ろからの足音にも負けずに走る。

玄関で今までに見ない速さで靴を変え、走り続ける。かなり恥ずかしいが、また西尾を頼ろうと試みる事にする。西尾は先生に用事があると言った。だから俺は懸命に職員室に向かって走る。

走っている途中で何度も誰かとぶつかりそうになる。それでも今は謝っている暇さえない。

あと少し。あと少しで目的地の職員室につきそうところで、俺は曲がり角で誰かとぶつかる。お互い盛大に後ろに尻もちをついて

しまった。元からヘトヘトの俺である。もう立ちあがれそうになかった。

「い、痛い」

「ごめん！ 大丈夫か！？」

よく見たら相手は幼馴染の貴明だった。とても久しぶりに会うような感じだ。気のせいかな？

「なんだ、貴明か。なら別にいいか」

「か、かずとあー。やっと会えたよー」

そう言いながら震える声で俺の方に近付いてくる貴明。体調がよくないのか、かなりフラフラで歩いてくる。それとも俺がぶつかったせいなのだろうか。たぶん後者だと思う。

幼馴染は俺の側になると、力尽きたように倒れこむ。どこか頬が赤く、息が荒かった。おでこに手をのせると熱かった。前者のようだった。

「僕が風邪で休んでいる間に好き勝手にやっているようだね。全部彼女さんから聞いたよ。携帯に電話しても出ないし、メールも返事返してくれないし……。体にムチをいれて学校まで来ちゃったよ！」

あつ、そう言えば俺の携帯電話は未だに西尾に拉致されたままだった。それよりも酷い話ではあるが、今の今まで幼馴染の事はすっかり忘れていた。顔を見るまで存在自体すっかりだ。

幼馴染の声は今にも消えそうで、辛いのがすごく伝わってくる。

それよりも「彼女さん」とは誰を指しているのだろうか。西尾の事だろうか。それ以外に俺は誰かと付き合っていないと思う。いや、俺が誰かと付き合えるほど手回しがよくない。うむ。本当に誰の事だろうか？

先ほどまで俺は追われる身であり、ここで悠長に話し込んでいる暇は全くない。案の定追い付かれてしまった。かといって病人を放置して逃げるのもまた酷い話である。やれやれと思い、俺は逃げるのを諦めた。

数十秒としない間に俺はすっかり囲まれてしまった。

「さあ、観念しろ！」

「私たちから逃げられませんか！」

「覚悟は出来ているか？」

嫌な笑みを浮かべてギリギリと近付いてくる親衛隊。

「あー、また今度でもいいか？ 風邪引いている幼馴染を家まで送ろうと思っているのだが……」

「あいにく俺たちは病人相手でも容赦はしないと考えている」

「……」

これこそ酷い話である。親衛隊には良心というものが存在しないようだった。

「おい、こいつらの弱み何かないのか？」

「んー、えっとねー。この手帳に全部書いてあるよ」

病人が幼馴染と知った途端、親衛隊の表情が青くなる。しかも「村井が休んでいるから大丈夫だと思ったのに！」と聞こえた。なるほど、幼馴染は何日か休んでいたようだ。そしてその幼馴染に何か弱みでも握られているようだ。

俺は幼馴染から受け取った手帳を見る。ふむ、なるほど、名前が分からないから見てもさっぱりである。

手帳を閉じて、次に顔を上げた時には親衛隊の姿はなかった。逃げてしまったようだ。俺は安堵し、手帳を幼馴染のポケットにしまふ。

「さっ、一緒に帰るか」

俺は幼馴染を落とさないように背中におんぶする。

「今日の和人優しいね。惚れ直しちゃったよ」

「気持ち悪い事を言うな。そういう事は俺じゃなくて、異性の相手にでも言ってやれ」

「ははっ、僕は和人しか見てないから」

「……」

やれやれ、幼馴染もここまで来ると重症だ。たぶん熱で頭がいかに  
れているに違いない。

取り敢えず勝手に帰ると後が面倒なので、いったん職員室に行く。担任の厳つい田中先生に「今日休んでいいですか？」と言ったところ、問答無用で殴られそうになった。学校まできて「休んでもいいですか？」って流石に教師をバカにしているように思えて頭にきたのだろう。だけど背中におぶっている幼馴染を見ると、申し訳ないような表情になり「森澤……。お前って良い奴だな。いきなり手を出そうとしてすまなかった。村井を家まで送ってやってくれ」と、了解してくれた。一瞬ヒヤツとしたのは俺だけではないようで、職員室にいた他の教師もヒヤツとしていた。今のご時世教師が手を出す、いろいろと問題があるから。時代は変わったのだよ、時代は。幼馴染の事を考えると、今すぐに帰るのが一番なのだが、その前に俺は西尾に会って携帯電話を返してもらわなければならない。あれがないと何かと不便だし。俺も現代っ子というわけである。

誰かをおんぶしながら廊下を歩いていると、ものすごく注目を浴びた。

「あー、貴明？ 西尾のクラスってどこだ？」

「四組」

「了解」

ちなみに俺たちは五組である。今まで知らなかったが、お隣さんのようだ。

取り敢えず教室の前にまでやってきた。幼馴染を教室の前に少し放置し、他のクラスに突入する。

目的の西尾は外に視線を送り、何か考えにふけているようだった。その姿もまた絵になるな。

俺の存在に気がついたクラスの人達は、表情を曇らせる。きっと何か言いたい事でもあるのだろう。想像だが、俺たちの安らかな一時を邪魔しないでくれ。そんなような事だろう。

「あー、西尾？ 今大丈夫か？」

「ん？ あれ和くん！ どうしたの？ それよりも和くんが私たちのクラスにきたのって初めてだね！」

先ほどの考えにふけている表情はどこかに行ったようで、嬉しそうに笑顔になる西尾。どこかで舌打ちが聞こえたような気がする。

「そう言えばそうだな。それで俺の携帯持っていないか？」

ついさっき初めて西尾のクラスを知ったとは、口が裂けても言えるはずがなく、誤魔化そうように笑って本題に入る。

西尾は「あっ」と思いだしたようで、制服のポケットから俺の携帯電話を取り出す。すっかり忘れていたようだ。

「ごめんね」

と、申し訳なさそうに謝ってくる。

「いや、気にするなっ」

取り敢えず西尾の頭を少し雑に撫でる。そのせいで髪をクシャクシャになる。登校中もそうだが、西尾のフワフワした髪をクシャクシャにするのは少し面白い。西尾の反応も含めて癖になりそうだ。

西尾は「わーわー」と少し取り乱していた。

「もー！ 和くんの何するのっ!？」

「いや、何となく」

「何となくで、髪の毛グシャグシャにしないでよ……。あつ、今日も一緒に帰ろう」

「あー、それはちよつと無理だ」

俺が西尾の誘いを断った事で、一瞬教室中がざわつく。クラス中の人達は俺たちの会話に興味津々のようだ。所々で「断ったぞ」と聞こえてきた。

「えー、どうして？ どうして？」

「ちよつと幼馴染が風邪で倒れて、今から家に送りにね」

「そうなの……。ならさようならのチューしてあげる」

「遠慮させていただきます」

そしてより一層教室中がざわつく。「また断ったぞ。勿体ない。むしろム力つくな」と聞こえてきた。それ以前に、人前でするような事では決してない。それに突っ込もうよ。



今更だが、西尾には変なところで恥じらいがないようだった。

「照れなくてもいいのに。いいもん。勝手にしちゃうから」

「ちよつと待つてくれないかな。僕の目が黒いうちは和人にふしだらな事はさせないよ。和人にふしだらな事をする時は僕に了解を得てくれないかな？」

西尾の言葉を遮り、床を張って幼馴染が登場した。その姿はさながら映画のワンシーンのようだった。もちろんホラーだが。

「和くんだれ？」

「さっき話した幼馴染」

「なるほど。……幼馴染さん。和くんによさうならのチューをしてもいいですか？」

「いいよ」

いいのかよ！？ 俺は心の中で突っ込みをいれる。

幼馴染は「あれ？ カメラどこ？ カメラどこ？」と、激写するためにカメラを探しているようだったが、見つからないみたいだった。探しても見つからないようで、心のカメラで激写するか俺たちを凝視している。

「幼馴染さんがいいよって言うてくれたから、さっそくさようならのチューをしよう」

「いや、あのね。人前だと流石に抵抗が……」

「人前じゃなかったらいいの？」

「もちろん」

「そっか。和くんがそう言うなら我慢するね」

「かずとおー。さようならのチューはまだー？」

今までの話を聞いていなかったのか、早くしてくれないかな？  
みたいな事を幼馴染は言う。

「……」

俺は大きなため息をつき、怪訝そうに見つめる幼馴染に近寄る。

「ほら、バカな事言つてないで、さっさと帰るぞ」

幼馴染をおんぶするため近くに腰を下ろすと、ナメクジのように

背中に上ってきた。それがとても気持ち悪く、背中に嫌な汗をかいた。

落とさないように軽く持ち直す。

「では帰ります。また明日」

こういった時、なんて言えばいいのか分からなかったため、少し他人行儀になってしまった。

「また明日ね。授業中いっぱい和くんにもメールするね!」

「ちゃんと授業受けてください!」

「えー、私がいないと寂しいでしょ?」

「心配しなくても和人には僕がいるから大丈夫だよ。和人は僕が側にいると、いつもニコニコしているからね」

「それはお前の妄想だ」

突然変な事を言う幼馴染をこの場に放置して、一人で帰ろうと一瞬本気で思った。

「では本当に帰ります。また明日」

「また明日ね。授業中にいっぱい和くんにもメールするね!」

二回目のやり取り。なんか無限ループしそうだった。

「……楽しみにしているよ」

「やったー!」

俺は諦めた。西尾は嬉しそうに頬が緩みきっている。こんな幼い表情をしている西尾を見ると、本当に何でもこなすスペシャルレディーなのかと信じられなくなってきた。

完全に身を俺に預けている幼馴染を持ち直し、俺は廊下に向かって歩き出す。

廊下に出てもう一度西尾を見ると、笑顔で手を振っていた。それに答えるかのように俺も笑顔を見せる。

「彼女さんに帰る事言わなくてもいいの?」

廊下を歩き、玄関で靴を変え、バス停に向かっていている時に突然そんな事を言ってきた。

さっきもそうだが、幼馴染は「彼女さん」という。一体誰の事を

指しているのか俺にはさっぱり分からなかった。

「それにしても次は三日月高校のマドンナか……。敵はどんな巨大になっていくね。それよりも三股は少しやりすぎじゃないかな？」

「ん？ お前は誰かと勘違いしてないか？」

「してないよ。和人の事だよ」

「俺が三股できるほどモテモテになった覚えはないぞ？　ちなみに残りの二人は誰だ？」

「うわー。それはちよつと酷いよ。睦月ちゃんとポニーテイルの皐月ちゃんの事だよ。忘れちゃったの？」

「……」

俺は何も答える事ができなかった。

幼馴染に言われ、ここ最近少しずつ何か大切な事を忘れかけているように感じる。西尾との出会いもそうだ。以前は西尾との出会いを覚えていたような気がする。だが今は完全に記憶にない。睦月と皐月だってそうだ。幼馴染の口から「睦月ちゃんとポニーテイルの皐月ちゃん」と出なければ睦月と皐月の存在をすっかり忘れていた。考えれば考えるほど、俺の頭は混乱する。

何かとても大切な事を忘れているような気がしてならなかった。

けど何が大切で、何が大切じゃないのか分からない。それが無性に腹が立ち、無性にイライラする。

「ちなみにお前はいつから学校を休んでいる？」

「酷いなー。昨日だよ。ほら、昨日メールしたよね」

「なるほど。ちなみに俺はいつから西尾と付き合っているか知っているか？」

「知らないよ。どうして僕に教えてくれなかったの？」

「……俺は本当に睦月と付き合っていたのか？」

「そうだよ。家族の前で付き合っているって言っていたじゃない。本当にどうしたの？　僕が休む前は彼女さんとラブラブだったじゃない。何度も僕の軟なハートを粉々にしちゃってさ。それに西尾さんと仲が良かったなんて知らなかったよ。いつの間に付き合うよう

な事になったの？ あつ、もしかして彼女さんとグルになって僕のことをからかっているの？ そうでしょ？」

「……いや、そんなつもりはない」

何かがおかしい。

昨日は西尾の家に泊まった。それは確かだ。口で言えないような事もしてしまった。それも真実だ。西尾の口からはつきりと聞いていないが、昨日今日の付き合いではないような感じがする。幼馴染が言ったように昨日初めて出会ったのだろうか？ いや、違う。記憶にはないが、もっと前から会っていたような気がする。それでもどうしてだろうか。昨日以前の記憶が全くない。もしかしたら昨日がファーストコンタクトだったのかもしれない。だって西尾との出会いが全く覚えていないから。俺の中の西尾は昨日からの西尾で、それ以前の西尾は知らない。

分らない。何が分らないのかも分らない。

そもそも、だ。幼馴染が言ったように、どうして俺は睦月と付き合っているのに、西尾に手を出したのだろうか。

知らない。

そしてどうして俺は睦月と一緒に住んでいるのだろうか。

俺が聞きたい。

どうして俺は皐月と一緒に住んでいるのだろうか。

そうしたいから？

違う。何か理由がある。だけどその理由が分らない。

とても大切な何かを俺は忘れている。幼馴染も知らない大切な何かを俺は忘れているような気がする。

謎が謎を呼び、俺の頭では処理しきれなくなった。

ただ一つ、何かがおかしい。それだけは理解できた。

バス停で無言のまま立っていると、ほどなくしてバスがやってきた。俺は幼馴染をおんぶしたままバスに乗り込み、近くのシートに座らせる。俺もその隣に座った。幼馴染の息は少し荒く、顔も赤い。その姿を見ているだけで辛くなってきた。

「ねえ、和人。一言いつてもいいかな？」

他に乗り込む客がないように、俺たちがシートに座ると発射のブザーと共にドアが閉まる。

「ん？」

ゆつくりと発進するバス。

「彼女さん泣いていたよ」

バスに揺られながら動揺する俺。心が大きく揺れた。

「和人がいなくて、彼女さん泣いていたよ」

俺のポケットから切ない音楽が流れる。誰かからの着信が着たようだった。その音楽が切なくて、俺の心を締め付ける。

「せつかく作ったご飯を食べてくれないって……。彼女さん泣いていたよ」

幼馴染の言葉が俺の心を何度も締め付ける。一言いうたびに、俺は胸が苦しくなった。今にも泣きだしてしまいたい気分にもなる。

「……」

俺は何も言えなかった。手で顔を覆う以外しか知らないかのように。俺はその場で何もできなかった。

\*

\*

三日月高校では一時間目のチャイムと同時に、授業が始まった。

西尾真琴は退屈な授業を受けながらも、昨日の出来事を考えていた。その事を考えると頬が熱くなり、今にも「キヤー」と言いたそうにしていた。

昨日の出来事。彼氏の森澤和人と関係をもった出来事である。一時の出来心とはいえ、後悔はしていない。それどころか好きな相手と、そういった事が出来た事に喜びさえ感じていた。

西尾真琴はおもむろに携帯電話を取り出し、黒板でチョークを走

らせながら、教科書を通りに進めるあまり面白みのない先生に見つからないようにメールを打つ。相手は言うまでもなく森澤和人だった。

メールの内容としては「和くんはもう家についた？ 授業は暇だよー。私も一緒に帰ればよかったかもー」と、心境を知らせる内容だった。絵文字や顔文字を一切使わない、今時の女子高生には少し花のないメールでもあった。西尾真琴はあまりメールをしない人なので、そういった事は不慣れだった。

森澤和人にメールを送っても、中々返事が返ってこない事に少し寂しさや不安を感じていた。

何度もメールの確認をしても、誰からのメールも来ない。何度も何度もチェックしている間に授業終了のチャイムが響く。結局その授業は全く聞いていなかった。ノートも書いていない。普段の西尾真琴を知る人からすれば、とても珍しい光景のように思えただろう。授業が終わると、駆け足で隣のクラスに顔を出す。

森澤和人の教室。

もしかしたら戻ってきたかもしれない。そう思ったのだった。だけど現実には裏切られる事となる。近くの生徒に聞いても「いや、今日はきてないよ」そう返事が返ってくるだけだった。

西尾真琴は森澤和人に電話をしようと何度も携帯電話を開く。ほんの一時程度だが森澤和人に会えない。連絡が取れない。たったそれだけなのに胸が苦しかった。

「真琴どうしたの？」

同じクラスの友だち、黒崎真奈美に心配そうに話しかけられても、西尾真琴はため息をするだけだった。話し声が聞こえないわけではない。聞こえているのだが、頭に入らないのだ。

「また彼氏の事？ 何だっけ？ 森澤くん？」

森澤和人の名前が出た事で、西尾真琴の集中が黒崎真奈美に移る。「真琴さ、いつから森澤くんと付き合っているわけ？ 私に一言ぐらい言っただけだったな。つれないなー」

「いつからって……」

西尾真琴もまた気づいた。森澤和人と同様の事に。  
いつから付き合っているの？

忘れた。

出会いは？

忘れた。

森澤和人は優しく、少し意地悪な所があるけど一緒にいると嬉しい。私に笑顔をくれる。そして少し会わないだけで私の胸を締め付ける。私の中で一番大きな存在。

西尾真琴は過去の事を忘れてしまった。それでも森澤和人がどういった人なのかは分かっている。それだけで満足のはずなのに、それ以上の何かを求めようとしていた。忘れてしまった過去を。取り戻そうとしていた。

「ちよつと和くんの家に行ってくる！」

そう思ったら西尾真琴はすぐに行動した。机の隣にかけてある鞆を手に取り、黒崎真奈美の「ちよつと！ 授業はどうするの！？」という言葉に耳を傾ける事無く、西尾真琴は走り出した。もう西尾真琴には森澤和人の事しか考えられなかったのだ。

西尾真琴が教室を出た後、黒崎真奈美は「全く……。学校より、友人より、彼氏が一番ですか」そう呆れるように呟いた。ただ、黒崎真奈美の表情は呆れるというより、少し嬉しそうだった。西尾真琴にも春がきた事に。

担任に一言もいわずに学校を抜け出したのは言うまでもなく初めてで、ワクワクしながら西尾真琴は走った。だが、一つ重要な事を忘れている。それは森澤和人の家がどこにあるのか、最も大切な事を西尾真琴は知らなかった。

携帯電話で時間を確認すると、もうそろそろ二時間目の授業が始まりそうだった。

西尾真琴は急いで黒崎真奈美に電話をする。

「もしもし！ 真奈美ちゃんにお願いがあるの！」

「取り敢えず落ち着いて、それでお願いって？」

「あのね、和くんの家どこにあるか聞いてほしいの！」

「あんたって人は……。ちょっと待って」

そして少しの沈黙。

今の西尾真琴には一分一秒も待てない状態だった。たった三十秒ほどの時間も長く感じられるほどだった。

「えっとね、学校の側にあるバス停に乗って、八つ先のバス停だつて。あつ、真琴の家と反対の方向に八つ先ね。家はちょっと説明しにくいから、バス停を降りたらその先を一分ほど歩いた先にあるつて。その辺りはあまり家がないから、すぐに分かるみたいだよ」

「ありがとう真奈美ちゃん！」

「どういたしまして、今度何か奢ってよね？」

「うん！」

西尾真琴は携帯電話を鞆にしまい、バスの時刻表を見る。時間を確認すると後五分ほどでバスが到着するようだった。さほど時間が経たないうちに、学校からチャイムが聞こえる。そこでようやくサボったのだと実感が湧いた。

今の西尾真琴にとって五分という時間はとても長いような気がした。道の先からバスが早くこないかと、ひたすら見つめる。何度も腕時計を見る。だけど時間は進まない。それを何度も繰り返し返していた。

ほどなくして待ちに待っていたバスがやってくる。西尾真琴は急いでバスに乗り込み、近くのシートに座りこんだ。

\*

\*

俺は幼馴染を家まで送り、ベッドに寝かした。幼馴染の家には誰もいなく、少し不安だったが「僕の事はいいいから、彼女さんの所に



行つてあげなよ。彼女さん和人の家にいるはずだよ」その言葉を聞き、俺は家に入るのをためらっている。後から聞いた話だが、睦月は今日学校を休んだようだ。理由は定かではないが、病気のような類ではないらしい。

何分ぐらい家の前で立っているのだろうか、中々決意が決まらず、ドアの取っ手に手を伸ばすものの、ドアを開ける事はなかった。

頭の中では何度も幼馴染の言葉が流れている。「彼女さん泣いていたよ。和人がいないって、なっていたよ。せつかく作ったご飯を食べてくれないって……。彼女さん泣いていたよ」その言葉が繰り返し俺の頭に響き渡る。

今ここで睦月に会って何を言えいいのだろうか、それが俺の思ひだった。それが家に入れない理由だった。

俺の決意が固まらず、玄関の前で立っていると、突然ドアが開かれる。その先にいたのは、双子の妹の佳苗だった。

「さつさと入れば、兄さん。いつまでも玄関の前で立っていたら不審者みたいだよ」

「佳苗……。学校は？」

「休んだ。お母さんが睦月ちゃんの事が心配だからって……。それで私も学校を休んで一緒にいるわけ」

「悪いな」

「どうして兄さんが謝るわけ？」

「いや、だって……」

俺は佳苗の顔を見る事が出来なかった。

「あつ、もしかして睦月さんが泣いた事知っているの？」

「……」

「そっか、そっか。兄さんも女泣かせの一面があつて私は嬉しいよ。これ私が最初に思った事。今の兄さんは格好悪い。いつまでもウジウジして、睦月さんに会えない兄さんは格好悪い」

「……」

「ほら、早く睦月さんに謝つてきな。その後に昨日何があったのか、

洗いざらい話してもらってから覚悟しとくように！」

そして佳苗は俺の背中を押す。その後押して俺は家の中に入る事ができた。

一歩一歩ゆっくりと歩き、俺は自分の部屋に向かった。そこに睦月がいるから。睦月が待っているから。

部屋の前で俺は立ち止まり、大きく深呼吸をしてノックをする。

「あー、睦月？ 入るぞ」

心臓の行動が早くなったのが分かった。

睦月は俺のベッドで横になり、小さな寝息を立てていた。まだ何を言えばいいのか分からなかったから、その姿に安堵する。

ベッドの側で腰を下ろし、睦月の頬を軽く撫でる。

「ごめんな。ごめんな。俺……、睦月の事、忘れちゃった」

睦月は喋ってくれない。

「睦月との事全部、全部忘れちゃった。……ごめんな」

そつと、優しく睦月の頬を撫でる。その頬に一粒の滴が流れる。

俺は最後に一言「ごめんな」と言い、その場を後にする。部屋を出る際に「私も和人の事忘れちゃった。ごめんね」その睦月の声が俺に届く事はなかった。

部屋の前には佳苗が立っていた。佳奈は無言で歩き、俺もその後を追う。

佳奈と外まできた。玄関の前に座り、俺もその隣に腰を下ろす。

「それで、昨日は何があったの？ 睦月さんが兄さんに電話をした後に、大泣きして大変だったよ」

「……昨日さ、女の家泊まった」

「はっ！ 信じられない！ ……まあ、いいや。それで？」

「俺も最初は帰るつもりだった。だけど電話中に相手に携帯をとられて、睦月に今日は帰らないからって言った」

「……なるほど、それで帰るに帰れないと。ばっかじゃないの！

兄さん大馬鹿野郎だよ！ 最低野郎だよ！」

「……」

答えられない。佳苗の言つとおりだから。

「それで、もちろん泊まった女の人とは何もなかったよね？」

「……」

俺の視線は泳ぎ、明らかに動揺しているかのように体を一瞬震わす。

「信じられない！……寝てないって言いなさいよ！何もなかったっていいなさいよ！」

佳苗は俺の胸倉をつかみ、無理やり俺の目を見据える。

俺はその視線から逃げるように目をそらした。だって「寝ていない。何もなかった」とは到底いえないからである。

「っ！」

佳苗は俺の頬をピンタで叩く。力いっぱい叩いた。

口の中で鉄分の味がする。

「……俺さ、睦月の事何も覚えてない。睦月の事全部忘れてしまった」

「そんな冗談いわないでよ！」

「冗談じゃない。本当だ。いつ睦月と出会って、いつから睦月と一緒に暮らしているのか、俺と睦月の関係。その全部覚えてない」

「ふざけないで！」

佳苗は手を振り上げる。俺は横目で、また叩かれるのか。そう思った。

「和くんを叩かないで！」

今から振り下ろそうとする佳苗の手が止まる。

昨日から何度も聞いた声、西尾の声が辺りを響く。横目で道路の方を見れば、そこには息を切らした西尾の姿があった。

西尾は懸命に俺のところまで走る。

「もしかしてあの可愛い子が？」

「……ああ、そうだ」

「っ！」

次はグーで殴られた。

俺はその場に叩きつけられる。

佳苗は何も言わず、俺の胸倉から手を離して家の中に入っていく。  
「和くん大丈夫！？　ちよっと待ってね」

西尾はすぐ近くにある水道でハンカチを濡らし、俺の頬に当ててくれた。熱を帯びた頬が冷たくて、気持ちよかった。

「さっきの子は？」

「双子の妹の佳苗だ」

「妹さんすごく怒っていたけど、それにしても殴るなんて酷いね。大丈夫？」

「なんとか」

「いったいどうしたの？　妹さん怒らせるような事したの？」

「……ちよっと色々あって」

「そうなの……」

そして言葉が途切れた。

俺は何かをするわけもなく座り、西尾は俺の目の前に座って頬にハンカチを当ててくれている。

「……あのね、私謝らないといけない事があるの」

沈黙を遮ったのは西尾だった。

「あのね、和くんとの思い出なにも覚えていないの。忘れちゃったの」

俺は目を見開いて西尾を見つめた。俺と同じだった。

「和くんといっつ出会ったのか、和くんといっつ付き合ったのか……。昨日の夜より先の事が全然思い出せないの」

耳元で「ごめんね」と言い、俺に抱きつく。非力ながらも力いっぱい俺を抱きしめた。

俺は見開いている目を閉じ、西尾の背中に手を回す。俺も西尾の思いに答えるかのように、力いっぱい抱きしめる。もう少し力を強めれば折れてしまいそうな、華奢な体を抱きしめる。

「俺も西尾と同じ。西尾の事忘れちゃった。……ごめんな」  
「いいの。お相子だね」

へへツと笑い、西尾は少しだけ体を離す。

目の前には西尾の整った顔があり、手はまだ後ろに回されている。抱き合いながら見つめあっている状態だ。

そして西尾は突然顔を近づけてくる。何度目かのキスをされた。

一瞬驚いたが、次には俺も目を閉じる。

「かぁー！ 真っ昼間からアツアツだな！ ついに睦月が嫌になったのか？」

俺と西尾はビクツと体を震わす。

声ができる方を見ると、そこにはポニーテイルで目付きの悪い女性が煙草を吸いながら俺たちを楽しそうに眺めていた。

俺はこの女性をどこかで見た事のあるような気がする。名前は覚えていない。

「えつと……。どちら様でしたっけ？」

「それは冗談のつもりか？ 全く笑えない冗談だな」

俺の言葉に腹を立てたのか、俺と西尾を引き離すと片手で俺を持ち上げる。

西尾はポニーテイルの女性の乱暴な態度にビクリして放心状態だった。

「なあ、和人？ あたしはそういった類の冗談は嫌いだ。お前も知っているだろ？」

「知るかつ！ い、息が！ 頼むから下ろしてくれ！！」

「それならいたいいけなあたしを弄んでごめんなさいと謝れ」

「ふざけるな！」

「……もう飽きた。和人も頑固者だな」

そう言ってポニーテイルの女性は俺を下ろす。そして何を思ったのか、女性は俺の口にさっきまで吸っていた煙草を押しこむ。

「まあ、一服つけて落ち着け」

俺は今までに煙草を吸った事がなく、肺は予想外の物を取り込んだと押し返し、そのせいで俺は涙目になってむせる。

「お、俺は煙草なんて吸わない！」

「そうだったか？　けどお前の部屋って煙草臭いぞ？」

「皐月のせいだ！」

俺は自然とポニーテイルの彼女の名前を叫んでいた。

「ほら、あたしの事知っている。二日家から離れて寂しかったか？　それに何だ、その類っぺた。さては睦月に叩かれたな」

ぺしぺしと叩いてくる。痛いからやめろよ。

「……俺と皐月の関係って何だ？」

「はっ？　何を今更言い出すと思えば、そんなくだらない事を聞くわけか。そうだな……。あたしは和人を利用して、和人もあたしを利用してゐるって感じかな。設定上では彼女がどうのこうのって話だ。まあ、実際にはあたしと和人は付き合ってもいないし、キスだってしていない関係ってところだな。ところでどうしてそんな事をあたしに聞いた？　何か訳ありか？」

「そうか……。訳ありと言えば訳ありだ。ちよつと最近記憶がおかしくて……。睦月の事も、皐月の事も、今までの事全部忘れてしまった……」

「なるほど。そりゃー、話は簡単だ」

皐月は大きく息を吸い込み、

「てめえーの仕業なのは分かっている！！　さっさと出てこい

！！　霜月！！」

誰かに言うわけでもなく、そう大声で叫んだ。

俺と西尾は何を言っているのだろと顔を見合わせ、皐月はキョロキョロと辺りを見渡している。

数秒の沈黙のあと、

「いい夢は見られましたか？　私からのささやかなプレゼントです」  
どこからともなく声が聞こえた。あたりを見渡しても俺と西尾、そして皐月の三人しかいない。皐月は顎で向こうを見ると合図を送る。

合図の先、さっきまでは誰もいなかった道路に知らない女性が立っていた。

お金持ちのパーティーに着て行きそうなドレスを身にまとった女性がそこに立っていた。

シンプルそうな作りのドレスのように見えるが、それでも卓越したセンスに洗練された色づかい。とてもではないがド田舎には不釣り合いな格好だが、その姿はとても幻想的で、美しかった。

「つまんねー夢からさっさと解放してやれ」

「あら？ 森澤和人様は私からのプレゼントはお気に召しませんでしたか？ それは残念です。ではお望み通り記憶を戻してあげましょう」

そう言っただレスの女性 霜月は指を鳴らす。

瞬間だった。

俺の頭には色々な情報が流れる。それは忘れていた記憶であり、大切な記憶だった。睦月との出会い、睦月との関係、皐月との出会い、皐月との関係、そして忘れていた西尾との出会い。全てが思い出される。

一瞬で頭に色々な情報が流れ、俺の頭は悲鳴を上げる。

俺はその場に膝をついて霜月を睨みつける。

「混乱しているようですね。では私から説明でもさせていただきます。昨日の早朝に私は森澤和人様、西尾真琴様、そして睦月さんの三人の記憶を操作させていただきました。時々ですが、一瞬間が飛んだような感じがあったと思います。それも私の仕業です。少しずつ古い記憶を消させていただきました。西尾真琴様と睦月さんの事を忘れてしまったでしょ？ そうそう、西尾真琴様との出会い設定は私が勝手に操作させていただきました。少し刺激的で、楽しかったでしょう？」

俺だけの情報が流れた西尾は平気そうな表情をしていたが、事の真相を知ってワナワナと震える。

「ちよつと！ 私そんなにふしだらな女の子じゃありませんよ！  
和くんに変な誤解されたらどうするの！！」

西尾は女の子だった。普通なら情報操作について突っ込みをいれ

るところだろう。だが、西尾はそれどころではなく、自分の設定に不満を持ち、文句を言っている。

皐月もそんな西尾を見て「こりゃ、大物だ」と、こっそりと笑っている。

「あ、あの西尾？」

「どうしたの？」

「えっと……。何ていうのかな。別に付き合っている訳じゃないのに、あんな事やこんな事をして、ごめんな」

思い出したように西尾の頬は真っ赤になる。今にも湯気が出てきそうほだった。

「そ、それなら責任をとってください！ 和くんは私のファーストキスと初体験を奪いました！ だから責任とってください！」

「いや、でも……。西尾は別に俺の事好きでもなんでもないだろ？」

「……和くんの優しさはいっぱい知っています。私じゃ駄目ですか？ やっぱり琴田さんの方が和くんは好き？」

西尾の今にも泣き出しそうな瞳、今にも泣き出しそうな声。生涯最大の衝撃を受けた。もしこれが物理的な攻撃なら即死レベルだった。

皐月は我慢できず、その場で大笑いしている。笑いすぎて涙を流しながら、「和人よかったじゃないか。あたしも睦月も別にお前と付き合っている訳じゃない。その可愛い彼女の気持ちに答えてやれ」と言っている。

「お、俺でよかったら……」

「うん！ これからもよろしくねっ！」

とても嬉しそうに頬が緩む西尾。敵の霜月を無視して、ここに本物のカップルが誕生した瞬間であった。

「森澤和人様、西尾真琴様よかったですね。恋のキューピット役になれて私は幸せです」

「うん！ ありがとうございます！ 綺麗なお姉さん！」

「いえいえ、どういたしまして」



敵となれあう西尾。まあ西尾にとっては、敵味方なんてどうでもいい事か。

それよりも騒がしい人が一人増えそうだ。さっきから家の中からドンドンと足音を鳴らして、近付いてくる人がいる。顔を見るまでもない。睦月だ。

力いっぱいドアを開け、ズカズカと睦月が登場した。

「遅いご登場ですね。睦月さん」

「かあーずうーとおー！ どういう訳か説明しなさい！」

「あら、私の事は無視するのですか？ 寂しいですね」

「あんたは少し黙って！ 何があつたのか全て私に説明しなさい！」

「取り敢えず落ち着け。そうだな」

「私のおかげで、そこにいる西尾真琴様と晴れてカップルになったのですよね」

俺の言葉を遮って霜月が結論を言う。西尾も「キャッ」と恥ずかしそうに顔を手で覆い隠す。

睦月はその回答が気に食わなかったのか、皐月と同じように俺の胸倉をつかんで持ち上げる。

「私が悩んでいる時に和人は彼女とよろしくやっていた訳ね」

「そうですよ。だってファーストキスと初体験を奪っちゃったみたいですから」

と、霜月。その言葉で今以上に胸倉に力が入る。

「睦月、お、落ち着いてくれ」

俺はギブギブと睦月の手を叩く。

「私が大泣きしている間に彼女とイチヤイチャしていた訳ね」

あつ、もう無理。そろそろ限界。

今にも気絶しそうな時に皐月の助け船がやってきた。

「そろそろ離してやれよ。今回の事は睦月にも少なからず責任があるだろ？」

「どうして私が！？」

「霜月の存在に気がつかなかったのは誰だ？ 一緒になって霜月の

思い通りになつていたのは誰だ？ お前だろ。そうしたら和人はどうなる？ お前の八つ当たりを受けている和人はどうだ。あたしは和人に同情するね」

「もう！」

睦月は俺を乱暴に下ろし、霜月を睨みつける。ものすごく機嫌が悪くうだつた。

「えっと、誰だっけ？ その可愛い子」

「私ですか？ 私は西尾真琴ですよ」

「そう、西尾さん。和人の事は忘れてさっさと家に帰りなさい」

「それは無理です」

「どうして？」

「だって今日は和くんと一緒にいるって決めましたから」

「……話にならないわ。和人、あなたからも彼女に言ってやりなさい」

そして再び胸倉を掴まされた。もう勘弁して下さい。

「何を！」

「私が言つた事を復唱しなさい。俺はもう君とは付き合えない。別れましょう。ほら、とっても簡単でしょう？」

「ふ、ふざけるな！」

「私は真面目よ。ほら、気絶する前に言いなさい」

「さ、皐月！ 助けてくれ！」

やれやれと言いながら、実に気だるそうに俺たちに近付く。

「いい加減にやめておけ。いったい睦月は何がしたい。あたしには我が儘な子どものように見える」

「だ、だって！ 和人は私を裏切つた！ だから私は――」

「いつ和人が睦月を裏切つた？ 可愛い彼女と関係をもつた事か？ それは違つたろ。和人は自分の意思で彼女と関係をもつて、自分の意思で付き合つた。睦月、お前はどうか。和人にキスの一つでもしてやつたか？ 和人と体の関係をもつたか？ 和人とお前は別に付き合っている訳じゃない。それ以前に和人はお前の主で、お前は

和人の物だ。それを忘れるな」

「もう、和人なんて知らない！ 和人も皐月もバカ！！」

そう言って睦月は家の中に走り去って行った。

残された俺たちは呆然と睦月の後姿を見つめる。

「まっ、窒息死しなくてよかったな」

皐月はそう言って俺の肩をたたく。

俺はまた一つ大きな問題ができた、大きなため息をつき立ちあがる。

さて、その大きな問題の前に解決しなければいけない問題が目の間にある。俺はニコニコしている霜月の顔を見つめる。

「もうお話は終わりましたか？」

「おかげ様でね」

「それはなによりです」

「それで、君は一体何をしにきたのかな？ まあ、想像はつくけど」

「ご想像の通り、森澤和人様と睦月さんをやつつけにきました。皐月さんはどうします？」

「あたしは別にいいや。見学させてもらっよ」

まるで興味がないかのように手を振ってその場に座る。

西尾は何が始まるのかワクワクした感じに俺たちを交互に見ていた。まるでヒーローショーが始まる寸前の子どものような感じだった。

明らかに俺と霜月には戦力の差がありすぎる。現段階では睦月が助けてくれそうにないし、皐月も見学すると言っている。これは非常に由々しき事態である。

「では私からも一つプレゼントがあります。楽しんでいただけると幸いです」

霜月が一礼し、指をパチンと鳴らす。

刹那。

俺の視野には黒く荒んだ空が広がった。

## 四月 卯月

0

黒く荒んだ空を見上げながら俺は地面に倒れこんでいた。

アスファルトの上だというのに腰に痛みは感じられない。その代わりに腹部にだけ痛みがあった。いや、痛みのような生易しいものじゃない。激痛がそこにあった。

どうして？

知らない。

痛みを訴えているのが俺なのにも係わらず、俺は痛みから体を動かせずに、ただただその場で倒れこむしかなかった。

出来ることなら今すぐアスファルトではなく、ベッドで寝転びたい。そう思えるが、動けないのなら仕方が無い。

むしろどうしてこうなったのか知りたいぐらいだ。

が、俺は何も知らない。

知っているのは空が黒く荒んでいる事と腹部に痛みがある。それぐらいだ。それ以外は何も知らない。

どうして俺がここで寝転がっているのかも、

どうして腹部に痛みが走っているのかも、

どうして徐々に意識が遠のいていくのかも、

どうして眠くなってきたのかも、

どうして喋れないのかも、

どうして痛みが和らいできたのかも、

どうして俺は俺なのかも、

どうして分からない。

どうして自分自身の事も分からない。

どうして今置かれている状況が分からない。

どうして全てが分からない。

どうして、どうして……。

「……和人」

そんな中、聞きなれた声が聞こえた。ような、気がした。それでも幻聴なのか、それとも本当に誰か俺に語りかけているのか確認を取る手段が俺にはない。もし仮にその手段があるとすれば、俺の目の前に顔を見せてくれる以外にどうしようもない。

「……」

俺は声を出したくても出せなかった。

許されるなら体を起こし、自分の目で誰なのかを確かめたい。

だけど許されない。全てにおいて許されない自分。実に惨めで、実にこっけいな姿だろう。こんな姿を誰かに見せるぐらいなら、俺はいっそう誰にも遭う事無くこの場で朽ち果てたい。

「どうして和人がこんな事に」

その後の言葉はなかった。

どうして？

喋っていた人 睦月の顔だけが目の前にあったから。

本来なら一瞬の出来事なのかもしれないが、睦月の首が重力にあらがえずに落ちる光景はスローモーションだった。

その直後、腹部に重みがかかる。

どういった訳なのかそこで体が自由に動いた。

俺の腹部には睦月の胴体。

俺の隣には目を見開いた睦月の首。

「あつ…… ああああああああああああああああああああ  
ああああ！！」

＊

＊



きた岩に潰されたり、あるいは感電死したり、あるいは苦しそうに悶えて窒息死したり、あるいは首の骨を折られたり、あるいは体中に鉄が突き刺さっていたり、あるいは首を絞められたり、あるいは突然言葉を発しなくなったり、あるいは血を吐きだして倒れたり、あるいは切られた腹部から内臓が出てきたり、あるいは空から降って潰れたり、あるいは餓死したり、あるいは自分の手に持っている刀に倒れこんできたり、あるいは皐月が笑いながら睦月の頭を握りつぶしたり、あるいは自ら自害したり……。

歪んでいた。

睦月が色々な死に方をする度に声を出していたが、最後の方は声も枯れて出なくなった。おう吐しそうにもなった。

それでもできずただただ目の前で睦月の死ぬ姿を見ているだけだった。

あまりにも残酷な出来事を見ているだけだった……。

次にまばたきをして最初に目に入った光景、それは先ほどと同じ黒く荒んだ空　ではなく悪夢を見る前の光景だった。

少し離れた場所に霜月、向かって右側では西尾と皐月が並んで座っていた。

あまり時間が経っていないのか西尾は興味津々の様子で俺と霜月を交互に見て、皐月はポケットから煙草を取り出そうとしていた。そこでようやく脳が回転し始める。

俺は叫びたい衝動を抑えて家の中に向かって走った。

叫びたい衝動は抑えられても感情までは抑える事はできず、俺は嗚咽を漏らしながら涙を流していた。早く睦月の姿を見たい。早く睦月の声を聞きたい。そう思って靴を脱がずに部屋に向かって走る。「むっ……き？」

ドアを乱暴に開けて目に入った光景、見慣れた服を着た女性の体がベッドに横たわっていた。

ただ何かが違った。

何が？

首より上が存在していなかった。

手を伸ばして睦月に近寄ろうと一歩足を踏み出そうとしたら足に何かが当たった。

視線をベッドから床に移すと、

「むつき？ むつ」

そこには目を見開いた睦月の首が転がっていた。

「あつ……あああああああああああああああああああああああああ！！」

俺の叫び声が家中に響き渡った。

1

まばたきをすると同じ光景を何度も何度も見続け、今がどつちの世界なのか区別がつかなくなり、やはり何度目か分からない光景が目の前に広がっていた。

少し離れた場所に霜月、向かって右側では西尾と皐月が並んで座り、あまり時間が経っていないのか西尾は興味津々の様子で俺と霜月を交互に見て、皐月はポケットから煙草を取り出そうとする。

俺の頬には大粒の涙がこぼれる。枯れるほど泣いたと思ってても自然と出続ける。

胸は針が刺さったかのように痛み、呼吸も荒くなる。

それでも睦月のところに走った。悪い夢が覚めてほしいと願い、もしかしたら次は生きているかもしれないと儚い夢を抱いて走った。土足で家の中に入り、段差に躓きながらも自分の部屋に向かって走る。



乱暴に部屋のドアを開けて中を見渡す。

初めてだった。

部屋を見渡しても血痕がついていない。睦月の首も落ちていない。部屋が燃えていない。内臓が散乱していない。刃物が落ちていない。綺麗な部屋がそこにあった。

止まらない涙を服の袖でぬぐって一歩ずつゆっくりと膨らんでいくベッドに歩み寄る。

布団に手をかけて崩れ落ちるかのようにその場に膝をついて「…

睦月？」声を震わせながらそつと問いかける。

「うつさい。どっか行けバカ和人」

髪の毛が見えてきたところで初めての言葉を聞いた。

「睦月？」

その言葉が真実なのか確かめるように何度も睦月の名前を呼びながら震える手で布団をどかす。

布団をどかすとそこには猫のように丸まり、壁の方を見て寝転がっているため表情までは見えないが睦月の姿があった。

止まる事をしない涙と鼻水を服の袖で拭いてから、震える手で肩を掴むと肩で払われる。

「触らないで！」

何度か同じ事を繰り返したところで睦月が折れた。声を荒げながら険しい表情で体を起こす。

不意だったのだろう。

グシャグシャの顔を見て険しい表情もどこかに行き、今は目を見開いていた。

睦月の声が聞こえ、睦月の表情が変わり、睦月が動いている。

全てが今まで通り当たり前の事なのだが俺は嬉しかった。

何度も何度も見た悪夢からようやく解放された喜び、幾度となく見た睦月の死にかたに心が壊れかけた悲しさ、何より睦月が生きている真実。

色々な思いが胸の中にあり、その思いが涙となって流れる。先ほ

どまでとは比べ物にならないほどの涙が頬を伝った。

視界は涙でぼやけるものの、睦月の頬に手を伸ばして触れる。

「……む」

「む？」

「むじゅぎがいぎでだあー」

そして俺は声を出して泣きながらも睦月の温もりを感じるために抱きつく。

俺に何があつたのか知らない睦月は戸惑うものの、それでも未だに怒りは忘れていないのか苛立つたように声を上げて引き離そうとする。それを俺は必死に抱きつくのだった。

\*

\*

場所は離れて玄関先。

三人の女性がそこにいた。

皐月は煙草をふかし、その隣にいる西尾真琴は森澤和人に何があつたのか困惑し、霜月はうつすらと笑みを浮かべていた。

実に面倒くさそうに皐月は立ちあがり軽くズボンを払う。

「西尾だつたつけ？ お前は帰れ」

「和くん泣いていましたよね？ 何があつたのか分かりませんが、私が介抱してあげないと！」

「介抱でも何でもやりたかつたらすればいい。もし和人と長く付き合いたいなら今すぐ帰れ。お前にとつても和人にとつてもそれが一番だ」

「……」

西尾真琴は何も言えなかった。恋人である森澤和人に何があつたのか知りたいと思う反面、皐月の言葉もまた聞き流す事はできなかった。

皐月は煙草を吐き出しやれやれといった感じに霜月を見る。

「お前も酷な事をするなよ」

「どうしてです？ 私達は敵同士ですよ？」

「和人の心を壊すつもりだっただろ？」

「質問を質問で返すのはあまり美しくありませんよ。ですがそうですね。あまり血を流すような戦いは美しくないのです、見かたによっては一番良心的な方法だと思いますよ」

「確かにそうだな。かなり臭いが、和人には未来がある。それを壊す権利はお前にはない」

「命を落とすより悪い選択肢があるのですか？」

「そうじゃない。そういった事は和人じゃなく睦月にしろと言っている」

「検討してみますわ」

「……それは置いておくとして、お前の主はどこにいる？」

常人よりスペックが格段に上の皐月にしてみれば、近場で身を潜めたところで無関係である。それでも皐月が分からないとすれば非常に遠い場所にいる事になり、それだと契約違反 主と一定距離いなければ能力が発動できない。

霜月は少し考えてからうつすらと笑みを見せる。

「内緒です。別に教えてもいいのですが、それだと面白みに欠けるでしょう？ では私からも一つ質問してもいいでしょうか？」

「どうぞ」

「どうして主でもない森澤和人様の味方をしているのですか？ 別に利益があるわけではないのでしょうか？」

「損得は関係ない。家に泊めてもらっている恩と睦月が友達だからだ。それとは別に私は和人に期待している。和人と一緒にいて睦月が変われたように、私も和人の側にいれば変わるかもしれないと期待している」

「中々興味深いですね。それよりも一番興味深いのは皐月さんが友達と言える存在がいる事ですけれどね。もう一押しすれば簡単に勝負は決まりますが、森澤和人様にお詫びという形で今回は引き上げた

いと思います。それではごきげんよう。またお会いしましょう」  
綺麗に45度の礼をし、霜月は突然姿を消した。それも一種の幻想のようだった。

残された皐月は肩をすくめ煙草を投げ捨て、西尾真琴は心ここに  
あらずといった感じに森澤和人がいる家を見つめていた。

\*

\*

「あーもう！ 苦しいから離れてよ！」

睦月が声を荒げて鬱陶しそうに言うには理由がある。

今の状況 ベッドによしかかり俺が睦月を後ろから抱きしめ続  
けているからだ。

もし手を離せばまた悪夢が繰り返りそうで怖かった。そう思うと  
より一層手に力が入り、目元も熱くなってくる。

後ろから抱き締めているため自然と睦月の髪からシャンプーの良  
い匂いが鼻孔をくすぐる。

「皐月も笑ってないでどうかしなさいよ！ それよりどうしてこ  
うなった訳！？」

「怖い夢でも見たって事しか知らないな。まっ、それより望んだ結  
果になって良かったじゃないか」

「誰が！！」

「和人を可愛らしい彼女に取られてご立腹の睦月が」

「誰がこんな奴に！ 学校とかご飯とかどうする訳！？」

「全部一緒にすればいいだろ？」

「……それにトイレとかお風呂の事もあるし」

珍しくもごもごと呟くように睦月は言う。

「それも一緒にすればいい。設定では和人と睦月が付き合っている  
事になっているよな？ それなら一緒に風呂に入ろうが問題はない

と私は思っね」

それは違うと俺は思う。親公認のカップルだろうが、親がいる家で堂々と一緒にお風呂に入るほど乱れたカップルはいないだろう。……いや、もしかしたら広い世界にはいるかもしれないけど、あいにくド田舎の庶民にはあり得ない。

そうは思っても俺は口に出す事はなかった。あの出来事があった後、気持ちの問題なのか誰かと口を聞きたいと全く思わなくなった。できれば顔も見られたくない。自分で言うのもあれだが、今は情緒不安定で突然泣き出す事もあるだろう。そんな姿を誰かに見られたくはない。

「あり得ない！……だって恥ずかしいじゃない。そ、そう言う臆月が一緒に入ってあげればいいじゃない！？」

「和人が私でいいって言うなら構わないけどな」

「恥ずかしくないの！？」

「別に恥ずかしくはないね。それに一度和人に裸を見られたし、今更ってところかな」

「っー！」

今まですっかり忘れていが臆月の居候が決まった日にすっかりと見てしまった。

睦月は声にならない叫び声を上げ、突然俺の頭に肘で攻撃してきた。

「ちよつとトイレに行ってくる！」

常人より何もかも格段にスペックが高い睦月にとって俺の手をほどくのは簡単な事だった。そのまま乱暴にドアを開けて部屋から出て行く。

抱きついていていた事により安心していただけだが、睦月から離れた事によって不安がよぎる。

もう睦月が帰ってこないかもしれない。

頭の中に先ほどまでの悪夢がよぎると不安が不安を呼び、早く安心が欲しくて見てなくなつた睦月を追おうと立ちあがる。

「そう慌てるなって。睦月はすぐに帰ってくるから、それまで私が代役になるう。ほら、早く来い」

そうは言うものの睦月の事が気になって仕方なかった。

ドアと皐月を交互に見ている間に痺れを切らした皐月が俺の手を引き、予想以上に力いっぱい引かれたため飛びこむように皐月の胸に引き込まれた。

温もりがそこにあつた。

落ち着く……ああ、そうか。

別に睦月じゃなくてもいいのか。

そこに温もりさえあれば現実と悪夢の違いが分かる。

皐月の腰に手を回し、温もりを確かめるようにギュッと抱きしめる。

少し乱暴な行動や言葉がある皐月だが、時に優しくその温もりは睦月とは違った心地がそこにあつた。

一粒の涙が頬を伝った。

失恋した時に心の傷を癒すほど優しくすれば落ちる。そんな意見もあるが、何となくだがその意見が分かるような気がした。

「……これもこれで悪くないな」

今にも消えて無くなりそうなほど小さな声で皐月が呟くと、そつと優しく俺の頭を撫でる。

少しの間なされるがまま続いたのだが、突然その手が止まる。

直後に部屋のドアが乱暴に開かれた。

誰が入ってきたのか見なくても分かる。

「ほら、早くこっちに来なさいよ！」

さっきと同じ場所に腰を下ろした睦月は急かすように床をバンバンと叩く。

「皐月は優しいから好き。睦月はすぐに怒るから嫌」

「なっ！」

「振られたな。私の方が母性本能あるようだし、このまま和人は私が面倒みるとしよう」

「もう怒らないからこっちにおいで」

「……」

「和人の大好きなお菓子あるよ？　一緒に食べよ？」

「……」

「皐月は煙草臭いからこっちにおいで」

「……」

「いっぱいギューってしてあげるよ？」

「そろそろ睦月のところに戻ったらどうだ？　もし睦月が意地悪するようならまた私のところにくればいい。それだと駄目か？」

皐月がそう言うなら、と小さく頷いてモソモソと睦月に移動する。よっぽど嬉しかったのか「よしよし」と声を弾ませながら、某アニマル好きの老人を思わせるほど俺の頭を撫でまわす。

撫でてもらうのは嬉しいのだが、力いっぱい撫でまわすため頭がグワングワンと激しく揺れる。最初はよかったが、時間が経つにつれて乗り物酔いにあつたような気持ち悪さがこみ上げてくる。許されるなら嘔吐も選択肢の一つに数えてもいい。

やばい本気で吐きそう……。

これ以上は限界と睦月から離れて再び皐月のところに戻る。

「また睦月に苛められたな。ほら、今日から優しいお姉さんが面倒みてやるからな。怖いお姉さんには近付いちゃダメだぞ？」

「どうしてよ！？　優しくしたじゃない！！」

「どこが……。睦月は何も分かつちやいない。力いっぱい撫でまわすから和人氣持ち悪そうじゃないか。もつと優しく撫でてやれよ」  
小さな子どもをあやすように背中をトントンとリズムカルに叩いたり、ゆっくりとさすってくれたりしてくれている間に気持ち悪さも治まってきた。

「次は優しくするからこっちにおいで」

「睦月嫌い」

「嫌から嫌いに昇格おめでとう。ツンデレもいいが、こういった場合はツンで接しても駄目だぞ。最初からデレでいかないと」

「誰がツンデレよ!？」

「和人を可愛らしい彼女と私に取られてご立腹の睦月が」

「っー!」

「それに比べて和人は優しい私が好きだよなー?」

「好きー。煙草の臭いしなかったら大好きー」

「もう! 皐月も何まんざらじゃない顔で煙草捨てようとしているの!？」 それ以前に和人と皐月のキャラ変わりすぎだし!」

「いや、ほらな。誰かに好きとか大好きとか言われるのが初めてで嬉しいし……。これもこれで悪くないって言うか。べったり甘えてくる和人も悪くないって言うか……。それより今日はいっぱい泣いたから一緒に風呂に入ろうな」

半ば強引に俺の手を引いて部屋から出る。

後ろでは苛立った睦月が枕を手にして叩いているのかポフポフと聞こえてきた。

\*

\*

森澤和人と皐月が部屋から出て行った後、睦月はイライラが抑えきれなくなり一人で家を出て裏山にきていた。

林道は何とかあるものの地元の子ども達は裏山で遊ぶ習慣がないため、その役割はあまりなく林道と言うよりかは獣道と化していた。そうとは知らずに裏山にきた睦月も今となつては後悔でしかない。

「和人のバーカ。皐月のバーカ。西尾真琴のバーカ」

途中で拾った木の枝をガキ大将のように振りまわしながら小言を呟いていた。

昨日から立て続けに起きたイベントを思い出すと手に力が入り、手元からボキッと鈍い音がする。どちらかといえば太い木の枝なのだが、それを折るぐらい睦月にとっては簡単な事だった。



立て続けに起きたイベント。

まず初めに森澤和人が西尾真琴の家に泊まった事。その次は森澤和人と西尾真琴が付き合い始めた事。最後に森澤和人が契約者の睦月より関係ない皇月を選んだ事。

確かにイライラから出すぎた行動があつたと睦月は自負していた。それでも森澤和人は何があつても自分の味方をしてくれると人知れず睦月は思っていた。ところが結果は裏切られる事になる。

「面白くない！」

手にしていた木の枝を力任せに投げる。

それぐらいでストレスが解消されるなら何も裏山にも来ず、「面白くない！」を連呼して近くの木を何度も殴り始めた。

一発が重く異常なほど木が揺れる。しまいには木が耐えられなく鈍い音と共にゆっくりと倒れる。

倒れた衝撃で舞った草を頭に乘せて睦月は息を荒げた。

「ム力つくー！」

拳にはうつすらと血がにじんでいたが、今の睦月にとってはどうでもいい事だった。

二本目の木に八つ当たりしようとした時、

「睦月！」

少し離れた場所に大粒の涙を流した森澤和人の姿があつた。その後ろでは皇月が腕を組んで立っている。

生い茂る草木をかき分けながら森澤和人は睦月の側まで駆け寄り、そのまま抱きつく。

「どこにも行かないでよ」

「だって私の事は嫌いでしょ？」

「嫌いつて言ったのは嘘。本当は大好き」

「皇月と西尾さんより好き？」

「……好き」

「そこは即答しなさいよ！……まあいいわ。和人は私がいないと駄目みたいだし、それで許してあげる。私も少し大人気なかつたし」

「これに懲りたら和人に優しくするんだな」

少し離れた場所でニヤニヤとしながら皐月が煙草を吸おうとするが、先ほどの森澤和人の言葉を思い出して銜えた煙草をしまう。もしかしたら再び森澤和人が歩み寄ってくる事もあるだろう。その時に「煙草臭い」とか言われたくない女心の結果だった。

「どうせ私は乱暴者ですよ」

いじけたように口を尖らせながらも睦月の目元は和らいでいた。

先ほどまでのストレスはどこかに行ってしまったようで、よしよしと次は優しく睦月は森澤和人の頭を撫でるのだった。それでも心のモヤモヤは完全に消えてはいなかった。まだ西尾真琴と霜月の問題が残っている。

まずは霜月の問題を解決してから西尾真琴の問題に取りかかろうと、森澤和人の背中に腕を回しながら睦月は思っていた。

「さて、和人早く家に帰って一緒に風呂に入ろう」

そうだった。霜月や西尾真琴より先に今の問題を解決しよう。と森澤和人の手を引いて皐月に近寄る睦月だった。

2

### 三日月高校。

森澤和人や睦月、学校のアイドル的存在の西森真琴が通う高校。

その二年五組の教室では現代国語の授業が行われていた。

グラウンド面の窓際後ろから二番目に位置する席に西尾真琴が座っていた。

カラッと晴れた青空の下でサッカーをする男子生徒を眺めつつ先ほど 森澤和人が涙を流した時の事を考えていた。

皐月に帰るように言われた後、どうして泣いていたのか気になる思いを押し殺して帰宅を余儀なくされた。かといって家に帰ったと

ところで暇を持て余すと、学校に戻ったのだった。

もちろん担任からの呼び出しに説教が待っていたのは言うまでもないのだが、普段から優等生で今回のように不良行為に走った経歴がなく、あまり説教らしい説教はされずに一言注意されただけだった。

西尾真琴の友人である黒崎真奈美は何か言いたそうな表情をするものの、心ここにあらずの友人にとにかく言うような性格はしていない。そのため学校に戻ってきてから数えきれないほどため息をつく西尾真琴に何があったのか、友人を含めてクラス中の生徒が気になっていた。

当の本人はそうとは知らず、もしかしたら森澤和人からメールか電話があるかもしれない。と期待を胸に秘めて数秒ごとに携帯電話を机の下で開くのだが、そう上手くいかないのが現実である。その都度ため息をつくばかりだった。

ここまでモヤモヤするなら皐月の言った事を気にせず、家に突入するべきだったと人知れず西尾真琴は思っていた。

そして大きなため息を一つ。

そうこうしている間に授業終了のチャイムが鳴り響く。

午前中の授業は終了し、今から昼休みとなる。

授業が終わった事とも知らず、今なお先生から隠れて携帯電話をいじっている友人を遠くから見詰めて黒崎真奈美は肩をすくめる。

それからしばらくして西尾真琴の携帯電話が震える。

「わわわっ！」

嬉しそうに声を上げてメールの確認をするが、受信したメールは黒崎真奈美の物で、それが分かった途端にため息に変わる。

メールの内容を見ずに待ち受け画面に移した。

「ちよっと！ちゃんとメール見ようよ！？」

突然声をかけられてビクツと西尾真琴は肩を震わす。

「真奈美ちゃん……。いたんだ」

実に興味なさそうに携帯電話に視線を戻す。

「それって酷くない？　せっかくご飯のお誘いにきたのにさ」

「ん？　もう昼休みか……。私ちよつと食欲ないから今日はいいや」

「何があつたか知らないけど、美味しい物食べて元気だそぉー！」

「……」

「どうしたどうした？　今日はノリ悪いねー」

「……ねえ真奈美ちゃん？　返事返ってこないのに、いつぱいメールとか電話しちゃうとウザいかな？　面倒くさい女って思われるかな？」

「森澤くんがそう言ったの？」

「和くんはそんな事言わないよ！」

「メール送ったけど返事こないの？」

「そうじゃないけど……。もしね、もし真奈美ちゃんに大好きな人がいたとするよ。その人が泣いていたら真奈美ちゃんだったどうする？」

「そりゃ慰めるよ」

「もし慰めたいけど、理由があつてそれが無理だったら？」

「んー、そんな状況になった事無いから分からないけど、私は諦めが悪い人だから相手が嫌つて言つても意地になつてでも側にいるかな」

「先に慰めている人がいるとしたら？」

「関係ないよ。だって大好きな人なんでしょ？　それなら遠慮する事ないって」

「でも！　でもね」

「あのね、私は森澤くんの事はよく知らないけど、最近付き合い始めたんでしょ？　それならまだ真琴の事が一番好きだと思つよ？

好きな人が側にいてくれた方が森澤くんだって嬉しいって」

「べ、別に和くんの話じゃないし！　飯の話だもん！」

「はいはい、そうですかー」

「もー！　信じてないなー！　それに『まだ』真琴の事が一番好きってどういう意味よ！　和くんは浮気しないもん！」

「どうだろうね。男は浮気する生き物って言うじゃない？ 近すぎるのも問題だけど、離れすぎるのも問題じゃない？ ほったらかしにしていたら違う女にホイホイついていくかもよー」

「ちよっと和くんの家に行ってくる！」

鞆を手にして今にも立ちあがりそうな友人の肩を黒崎真奈美は掴む。

「やめときなさい。さすがに一日二度も無断早退はやばいって」

「だって和くんが！」

「そんなに心配なら電話でもしてみたら？ あつ、電話に出ないんだっけ？」

「んーんー。ちよっと電話してみるね！」

手に持っていた携帯電話を素早く操作して通話開始のボタンを押すと耳に当てる。

何度かプルプル と呼び出し音になり、そろそろ切れそうな時に電話が繋がった。

「和くん！ 浮気は駄目だよー！」

電話をする中でお決まりのやり取りである「もしもし？」と言った言葉を聞く前に西尾真琴は叫んでいた。

昼休みに入ったばかりで教室にはチラホラと生徒が残っており、元から注目されているのだがさらにその視線を集めていた。友人が相当焦っている後姿を見て黒崎真奈美は「失敗したかなー」と呟くのだった。

『その声は西尾か？』

「あれ、皐月さん？ 和くんはどうしたんですか？」

『和人なら睦月と寝ている』

皐月の言っている意味が最初は分からなかったが、数秒後にはその意味を理解する。

「うわーん！ 和くんが浮気したー！！」

彼氏の浮気を知って大粒の涙を流す西尾真琴。

突然涙を流して驚きの発言にギョツとするクラスの生徒一同。

『す、すまん！　ちよつと言葉が足りなかった。和人と睦月は別々の部屋で昼寝の最中だ。うん、きつと！』

電話越しに聞こえる泣き声にビックリした皐月はとっさに嘘を言う。本当のところ今現在二人は同じ部屋、同じベッドで昼寝中だった。

時として嘘は人を救う。

皐月は自分のせいで二人が破局するのは嫌だし、何より泣いた相手をするのを得意としていなかった。これは嘘でもそう言わざるを得ない状況である。

「本当ですか？　……グスン」

『本当だって！　何なら和人起こして確かめるか？』

「お昼寝の邪魔をしちゃ悪いので大丈夫です。……一つお伺いしますが、どうして皐月さんは和くんの携帯を持っているのですか？」

『そりゃー和人の部屋にいるからだ』

「どうして和くんの部屋にいるのですか？」

『だってこの部屋以外は居場所ないし』

「って事はいつも和くんの部屋にいるんですか！？」

『そうなるな。……ハッ！　いや本当はいつも睦月の部屋にいる！　今日はたまたまだ！』

「本当ですかー？」

『本当だって！　和人の寝顔なんていつ見ても面白みにかけるし！』

「いつもですか？」

『そう！　いつもだ！』

「いつもって事は寝る時は和くんの部屋なんですね！　うわーん！　和くんに裏切られたよー！」

『だー！　墓穴掘ったー！！　……これ以上は何も言うなよ！　誘導尋問しようとしても無駄だからなー！！』

その時だった。皐月の後ろで『皐月うるさい！　和人起きるじゃない！』『てめー！　喋るな！　面倒くさい事になったらどうする！？』睦月と皐月のやり取りを西尾真琴は聞き逃さなかった。むし

る大声でやり取りしているのを聞き逃す方がおかしい。

「今の琴田さんの声ですよ！ さっきは別々の部屋でお昼寝って言ったじゃないですか！？ どういう事が詳しく教えてください！」

「さー、何の事だか私にはさっぱり」

「誤魔化さないで下さい！ 本当は一緒に寝ているんですね！」

「それはないから安心しろ！」

「ならどうして琴田さんが和くんの部屋にいるんですか？」

勝手に人の携帯電話を使っている皐月に対して疑問を持ったのか  
「誰と電話しているの？ ……もしかして西尾真琴ね！ さっき和人に睦月一番好きだよって言われたわよ！ 彼女の役割果たしてないようね！」  
「いい加減にしろ！ 誤解で二人が破局したらどう責任とるつもりだ！」  
「うるさいな！ 私には本当の事しか言っていないし！」  
皐月の切なる思い 破局は何とか阻止という思いが着々と崩れ落ちそうとしていた。主に睦月の発言によってだが。

「皐月さん！ 説明して下さい！」

「誤解だって！ 取り敢えず落ち着こうじゃないか。睦月の言っている事は九割がた嘘だから気にするなよ、な？」

「本当ですかー？」

「それにサツキ和人に西尾の好きな所をエイエンと一時間ほど聞かされたからナ！」

「声が少し裏返っていますよ？」

「気のせいだ！ よーし、ちよつと和人に変わるから少し待て！」

それから数秒だけ無言が続く。いや、本当は電話越しから睦月の声が聞こえるのだが、皐月の妨害によって電話越しだと何を言っているのか分からないのであった。

間もなくして実に眠そうな声で『もしもしー』と森澤和人が電話に出る。それと同時にドキッと西尾真琴の胸は高鳴った。

『西尾は世界で一番好きだよ。超ラブー』

今にも再び眠ってしまいそうな声だったが、恋する乙女には美化して聞こえたようだった。

壊れてしまいそうなほど心臓の鼓動は早くなり、胸のモヤモヤはその一言で遠いどこかに飛んで行ったような気がしていた。浮気疑惑をした自分が恥とさえ西尾真琴は思っていた。

さて、事の真相はというと、皐月が森澤和人の耳元でそう言うように頼みこんだ。もちろん森澤和人は「どうして？」と疑問はあったが、寝起きの頭では深く考えても仕方がないと思って言われた通りに言っただった。

『ほらなー。和人は誰よりも西尾の事が好きだと！ いやー良かったよかった！』

「和くんは放課後家に行くね！ って、伝えてもらってもいいですかー？」

テンションと機嫌が格段に上がり、今にも鼻歌を歌いたい気持ちを抑えて弾んだ声で伝言を皐月に頼む。

『分かった。んじゃ、また後で！』

それだけを告げると皐月は焦るように電話を切った。

「真奈美ちゃん！ 和くんは浮気してないよ！」

「そう、良かったじゃない」

「今日は和くんのお泊りしよかなー」

「はあ！？ 風の噂で聞いたけど、昨日は森澤くんが真琴の家に泊まったらいいじゃない？ 二日続けて同じ屋根の下で寝泊まりはやりすぎじゃない？」

「だって放課後に和くんのお泊りしたら帰りのバスないもん」

「……確信犯ね？」

「どうだろうね？」

「まあいいわ。満足するまでお泊りでも何でもしなさい」

「そうするー。さっ、お腹すいたからご飯にしよう！」

「現金な奴」

「あつ！」

椅子から立ち上がり携帯電話を大事そうに上着のポケットにしまった西尾真琴は、頭の中で森澤和人の言葉 『西尾は世界で一番



好きだよ。超ラブー』を何度目かの自動再生中に気がついて声を上げた。ちなみに恋する乙女の脳内ではイケメンボイスに美化されている。

「次はなに？」

「恥ずかしくって和くんの顔見られないかも……。真奈美ちゃんどうしょー!？」

「別れちゃえば？」

ここまでバカツプルぶりを発揮する友人を近くで見ていると、恋人がいない黒崎真奈美にとっては、見せつけられているように思えて仕方がなかった。そして今の発言は冗談二割本音八割と、ほぼ本音だった。

そうとは知らずに意地悪されたと思った西尾真琴は頬を膨らませた。すかさず黒崎真奈美は膨らんだ頬を潰しにかかり、結果として「ぶう」と気の抜ける音が口から漏れた。

「怒って頬つぺたを膨らませる人って現実にいたんだ。それにしても真琴って前よりも表情豊かになったよねー。やっぱり恋は人を変えてるってやつ？」

「そうかな？ けどそうであってほしいかも。だって和くんが超ラブって事だもん！」

「……今なら森澤くんがメールとか電話をあまり出ない理由が、少し分かったような気がする」

「!？ どうしてどうして!？」

「岡田くんちよつといい？」

岡田くんとは、西尾真琴の前が席の選ばれし生徒である。容姿性格学力と実に平凡なクラスメイトで、その平凡ゆえに影が薄い。平凡からかけ離れた生活を送る森澤和人にとって羨ましい存在なのだが、現段階では二人の接点は皆無である。ちなみに最近の岡田くんの悩みとして、授業中に憧れの的にお腹が鳴った音を聞かれないか心配している。少し乙女が入っている岡田くんだった。

聞き耳を立てていた岡田くんは心底ビックリしたが、ここで頼れ

る存在とアピールすべく「なにかな？」と齒を輝かせて振り向く。

そんな岡田くんを知ってか知らず、西尾真琴は頭の中に永久保存した森澤和人のイケメンボイスを自動再生していた。

さすが平凡キング岡田くんである。多少のアピールでは染みついた平凡ライフに変化がみられない。ビバ！ 平凡ライフ！

「もし真琴と恋人関係になったと」

「私は和くん一筋です！ 岡田くん？ とは恋人関係になりません！」

初めて喋った憧れの的と記念すべき日なのだが、それと同時に完全な拒絶を聞いた日でもあった。仮にこれが漫画の世界なら今頃岡田くんは血を吐いて崩れ落ちているだろう。もしかしたら平凡の神様が、脱平凡を企む岡田くんに対しての仕打ちなのかもしれない。

ちなみにどうして岡田くん？ と疑問形なのかと言うと、西尾真琴にとつて森澤和人の存在が大きすぎて他の男性は眼中にない。それと一緒に名前もうつすらとしか覚えていないのである。いや、忘れかけているが正解。

「仮定の話だつて！」

「それでも嫌だもん！」

哀れな岡田くんである。いったい彼が何をしたというのだろう。

今にもその場に崩れ落ちそうな思いを必死にこらえるものの、岡田くんの頬には一粒の涙が流れる。あれ？ どうして僕は泣いているの？ 切なる思いが胸をよぎる。ああ、そっか。何もしていないのに振られたからだ……。家に帰ったら子どもビールを飲みながら枕をびしょ濡れにしてやろう。そう密かに誓う岡田くんだった。

クラス中の男子が岡田くんに心の中で敬礼をする。

「あー、もう！ これだと話にならないわっ！ って、岡田くんはどうして泣いている訳！？」

「……ちよつと目にゴミが入っただけです」

「岡田くん？ 大丈夫？」

失恋のショックで泣いているとは知らない西尾真琴は優しさ言葉

をかける。だが今の岡田くんにとっては追いうちでしかなかった。  
「そう、ならもし真琴にそっくりのひとと恋人関係になったとしまし  
よう」

「私にそっくりなら岡田くんとは恋人関係にならないよ？」

「話が進まないじゃない！ 森澤くんが好きなのはよく分かった。  
分かったから少し黙って！ 続きを言わせてよ！」

「仮定の話でも和くん以外と恋人関係は嫌だもん……」

「もう別れなさい」

先ほどは二割の冗談と八割の本音だったが、今回は十割本音だった。それと同時に森澤和人に少し同情する黒崎真奈美であった。

「いーやー！」

「……ならこうしましょう。岡田くんが憧れの的を何とか口説き落として、二人は恋人関係になったとしましょう。岡田くんはその人が好きで、彼女も岡田くんの事が大好き。彼女から一日に何度もメールや電話がきたらどう？」

「もちろん嬉しいですよ」

「うん、だよ。だけどメールがきている事を知らず、携帯をほったらかしにしていたとする。それでも彼女はメールを必要以上に送り続ける。しまいには連絡が取れないからって家に押しかけてきた。岡田くんはどう思う？」

「最高です！ それで好きな人が家にくるなら携帯その場で壊します！」

岡田くんの脳内では自分の部屋で西尾真琴と、楽しい談話をしながらお茶を飲んでいる光景が広がっていた。

「普通怖いでしょ！？ 付き合っていたとしても数時間連絡が取れないだけで、家に押しかけられたら怖くない！？」

「それは愛情が足りない人の考えです。一般人には理解できないですよですね」

「真奈美ちゃんは変な人なの？」

「違うから！」

さて、ここまでイライラしながら声を荒げている黒崎真奈美だが、実際のところは森澤和人達が本当の恋人関係になったのは数時間前の事である。メールのやり取りをするようになったも二日前ぐらいで、黒崎真奈美はそうとは知らずに「今なら森澤くんがメールとか電話をあまり出ない理由が、少し分かったような気がする」と言う。黒崎真奈美の中ではすでに月単位で連絡のやり取りをしているものだと思い、さらには連絡が返ってこない事を想定で話を進めているところはどうだろう。実際は西尾真琴の行き過ぎた行動　今朝学校であつた無断早退はあつたものの、それには理由があつたし森澤和人もメールの返信は人より遅いが、それでもマメに返事をおくっている。

要するに、裏方の理由を知らない黒崎真奈美の独り相撲となっている訳である。

「それで真奈美ちゃんは何が言いたかつたの？」

「……もう忘れて」

「変なの。時間勿体ないしご飯にしよう！」

クラスで聞き耳を立てていた生徒がモヤモヤする中、西尾真琴は嬉しそうに頂垂れている友人の手を引いて教室を後にするのだった。その後で一部の生徒の間で「森澤和人の浮気説」「森澤人とマドンナの破局説」で盛り上がったのはまた別の話である。

\*

\*

時は過ぎて放課後。

本日二度目になる森澤和人宅がある最寄りのバス停に向かつて、ウキウキと心を躍らせながら西尾真琴はバスに揺られていた。

昼休みに電話をしてから現在に至るまで、西尾真琴は浮かれていた。いや、浮かれすぎていた。授業中も彼氏と何をするのか妄想で

シミュレートするほどだった。

ド田舎行きのバスには乗客が数えるほどしかいなく、どれも三月高校の学生服を着こんでいる。一同に「どうして西尾真琴が？」と思っているが、それを口にする人は一人もいなかった。そして森澤和人と共に小中学校で青春を送った友達でもあった。

まだかなー？　そう思いながら外の景色を西尾真琴は楽しむ事数十分。

ようやく目的のバス停に着き、運賃を入れて外に出ると伸びをする。

走り出したい衝動を抑えて、心を落ち着かせながら森澤和人の家に向かった。

歩く事数分で目的の家に到着する。

深呼吸をしてからインターホンを震える指で西尾真琴は押した。

ピンポン。

家の中からは騒がしい物音が聞こえるものの、いくら待っても玄関ドアが開かれる事はなかった。

それには理由があった。主に睦月のダダが原因である。

昼に西尾真琴と電話を終えた皐月は大きなため息をつき、暴れる睦月をなだめていた。そのせいもあり、西尾真琴が訪問する事を今のいまですっかり忘れていたのである。インターホンの音で思い出したように睦月に伝えたのだが、あまり西尾真琴に良いように思っていない睦月は「追い返して！」と暴れ出したのだった。そして中心人物の森澤和人は二度目の昼寝の真っ最中で、今は蚊帳の外である。

もう一度インターホンに指を伸ばそうとした時、ゆっくりとドアが開かれる。

玄関に立っていた人物を見て森澤佳苗は「げっ」と声を漏らした。森澤佳苗の立場は睦月を支援する形となっている。そのため西尾真琴の事はあまり好きにはなれず、嫌そうな表情を隠そうとはしなかった。

「……えつと、兄さんに用ですよ？」

「もしかして佳苗ちゃん怒っている？」

「どうしてですか？ 私が怒る理由はありませんよ？」

「だって顔怖いし……」

イラッ！

誰のせいだよ！ とは言えずに森澤佳苗は口元をひきつらせる。

「も、元からこんな顔なの」

「せつかくの可愛い顔が台無しですよ！ もっと笑顔ですよ笑顔！」

イラッ！ イラッ！！

これ以上相手をしていると手を出しかねないと思った森澤佳苗は、大きなため息をついて道を譲る。

「……どうぞ。兄さんは階段を上がった目の前にある部屋にいます」

「はい。お邪魔します」

軽く舌打ちと共に「本当にお邪魔」と呟く森澤佳苗の声は耳には入らず、綺麗に靴を並べてからスキップをするように階段を上がる。部屋の前で手鏡を取り出してから顔のチェックをし、大きく深呼吸をしてから最高の笑顔で部屋のドアをノックする。

コンコン。

直後に「入ってくれ」という皐月の声を聞き、西尾真琴はゆつくりとドアを開けたのだった。

そして目の前に広がる光景にパチクリとする。

布団に丸まってミノムシと化しながら眠っている森澤和人。そのミノムシを後ろから抱きしめながら西尾真琴を睨むメイド姿の睦月。もう半ばやけになってお茶をすすっている皐月。

不思議な光景がそこに広がっていた。

「和人が早く帰れ！ そう言っていたわよ」

「……和くんから離れてよ！」

飛びこむように二人の間に西尾真琴が割って入り、そのせいで寝息を立てている森澤和人は顔から床に転げ落ちる。

少し鈍い音がしてからゆっくりと森澤和人が目覚めました。

「……痛い」

ミノムシ状態で顔だけを横にして呟くように言う。

「和くん大丈夫!？」

優しく抱き起こして赤くなった森澤和人の鼻を優しくさする。

「……西尾? どうして家に?」

「遊びにきちゃった。迷惑かな?」

「すっごい迷惑!」

誰よりも早く睦月が言い放つ。

「琴田さんには聞いていませーん!」

「私は和人の気持ちを声にしただよ。そうよね和人?」

「勝手な事を言わないで下さい! 私と和くんは恋人関係ですよ。」

「だって私は和くんの世界で一番好きな超ラブーの彼女ですもん」

「あまり調子乗らないでよね! そもそも遊びにきたとか言っただけど、本当は何をしにきたのよ!？」

「和くんの世界で一番好きな超ラブーな彼女なので、泣いていた和くんを慰めにきました。彼女の鏡でしょ?」

「残念だけどその役は私なのよね。ほら、さつさと和人を渡しなさい」

「嫌です」

ギュツと離さないように森澤和人を抱きしめる。

今の森澤和人は温もりから現実と悪夢の区別をつけている。壊れかけた心は人の温もりを求め、今は西尾真琴の温もりを肌で感じていた。

別に温もりさえあれば誰でもいいと言う訳ではないのだが、好きな相手から抱きしめられれば、子どものコアラのように抱きしめるのが今の森澤和人だった。

布団から両腕だけを出し、温もりを求めてギュツと抱きしめ返す。

「やっぱり和くんは私の事が大好きみたいですな」

ふふーんと鼻を鳴らし、胸に顔を埋めている森澤和人の頭を優しく撫でる。

「皐月！ あの頭悪そうな女をどうにかしなさい！」

「私はもう知らない。さっさと和人をとり返さないと西尾にずっと抱きつく事になるぞ」

「皐月のせいでこの女が家にきたじゃない！ なら責任とりなさいよ！」

「あいな、私は和人が自分で選んだ事を尊重しようと思っている。和人が西尾を選んだから、私は陰ながら応援しようと思っている。和人を取られたくないと思っているのは睦月だけだ。私には関係ないから自分で何とかしろ」

「裏切り者！」

「それ以前に和くと琴田さんはどういった関係ですか？ 和くんの事が好きで邪魔するんですか？」

「くっ……。べ、別に好きじゃないけど……」

「私は和くんの事は大好きですよ。好きじゃないなら邪魔しないで下さい」

「皐月！」

西尾真琴に上手い事あしらわれ、怒りの矛先を皐月に転換する睦月であった。

「西尾の言っている事は間違っちゃない。まずは自分に素直になることだな」

「私はいつだって素直よ！」

「なら問題ないじゃないか。好きじゃないなら、和人と西尾が人前でイチャイチャしても気にならないだろ？」

「私は和人の事を思っ言っているの！ 和人も迷惑だっ言っ言っいたもん！」

「嘘はよくないぞ？ 勝手に和人の思いを捏造するな」

「皐月は和人が取られてもいいの！？」

「だから私は西尾の味方だっ言っただろ？」

「なら私の味方になりなさいよ！」

「睦月が自分の気持ちに正直になったら考えてもいい」



「どうして私が素直じゃないって断言できる訳!？」

「見ていたら睦月が和人をどう思っているのかよく分かる。そろそろツンからデレに変わってもいいと思うぞ? 何なら睦月の心境を私が口に出そうか?」

「……やってみなさいよ」

「和人超好き好き! 西尾真琴なんか見ないで私を見てよ。彼女にやった事全部私にもしてよ! お風呂だって一緒に入って上げるし、チューだってする。その先も何だってしてあげる。だから早く私のところにきてよ、和人」

睦月の声真似をしながら皐月は言う。

さて、突然そんな事を言われた睦月はといえば、大きな口をあけて呆然としていた。皐月の口調にもそうだが、何よりあり得ない事を言っていると思ったからだ。

呆然としている睦月だが、皐月の言っている事はあながち間違っではない。本人が気づいていないだけで、少し大げさなだけで本音は似たようなものだった。

もちろんそれを認めない睦月はワナワナと体を震わせ、今にも皐月に飛びかかりそうだった。睨みつける瞳も力が入る。

「あり得ないから!」

ドン! と机を叩く。

「やっぱりそうでしたか。私もそうだと思っていましたよ」

睦月の叫びは西尾真琴には届かず、やはりかとウンウンと頷いている。

「誰が和人なんて! 甲斐性はないし、優しさだってない……。好きになる要素があるはずがないわ!」

「そうか。……なら今後、何があっても和人と西尾の邪魔をするな。和人は西尾が好きだから付き合った。それを邪魔する権利は睦月がないだろ? 和人だってそうだ。誰にでも良い顔をしていたら、いつかは西尾が愛想をつくすかもしれないぞ? 今は西尾だけを見ていればそれでいい」

「どうして皐月にそんな事を言われなきゃいけないのよ!？」

「ならどうして睦月は和人にこだわる？」

「どうしてって……。私と和人はパートナーなのよ!」

「それだけだろ？ 和人の恋愛を邪魔する必要がどこにある？ 敵対する奴が現れたら和人と一緒にパートナーらしく戦えばいい。それ以外は何かする必要があるのか？」

「あ、あるもん!」

「ほう、なら言ってみろ」

「一緒にいた方が連携とかとれるもん!」

「戦うのが睦月で、それを見守る和人に連携が必要なのか？」

「ないよりかはあった方が絶対にいいもん!」

「そうだな。もしかしたらそうかもしれないな。それでも恋愛とは何も関係ない。あつ、そうそう。さっきの続きがあるけど聞くか？」

「……」

「あー、和人。どうして私だけを見てくれないの？ 確かに西尾真琴は可愛くて素直な子。だけどそんな突然現れた女より、どうして一番近くににいる私を見てくれないの？ ちょっと不器用だけど、それでも和人を好きな気持ちは西尾真琴に負けない! ……違うか？」

「……」

睦月は何も言えなかった。

少しの間沈黙が続き、次に声を出したのは睦月だった。

「……分かったわ」

誰に言う訳でもなくボソリと呟く。

「和人を取られるのは面白くない! 和人と西尾真琴が一緒にいるとムカつく! イライラする! 私から和人を取らないで! 和人とずっと一緒に居たのは私で貴女じゃなくて私! 今すぐ返してよ!」

その叫びが聞けた皐月は満足し、うつすらと笑みをこぼしていた。西尾真琴は恋のライバルを睨みつけ、森澤和人を離さないと力いっぱい抱きとめる。

そして叫んだ睦月は心のモヤモヤと苛立つ理由が何からくるのか理解し、それが恋からくるものだと言って内心驚き、それと同時にホッとした。生身の人間のようにでそうでない自分が、人間のように恋ができるのだと。

「嫌です。私も和くんと琴田さんが一緒にいると腹が立ちます。だから嫌です」

「確かに今は和人の気持ち貴女に寄っているのは認めるわ。認めたくないけど認める。だけど私は和人と一緒に生活をしているのよ？ 残念だけど時間の問題かもしれないわね」

「そんなの嫌……絶対に嫌！ イヤイヤイヤイヤ！！」

「現実を受け止めなさい。一緒に暮らしている私と、学校でしか会わない恋人。さて、どちらの方が有利なのかしらね？」

「それでも嫌だもん……。ガズくんを取られたくないもん！ うわーん！」

お菓子を買ってもらえなかった子どものように、両足をバタつかせて西尾真琴はダダをこねて泣き始める。

この勝負もらった！ と言わんばかりに睦月は薄らと笑う。

「全く見苦しいわね。淑女なら現実を受け入れなさい」

「わ、私の……グスン。お腹にはガズくんの赤ちゃんがいるもん！」

「何ともベタな事を言うのね？ 寝言は寝てから言いなさい。それに『ガズ』じゃなくて『かず』よ？」

「だってゴムつけなかったもん！ もしかしたら赤ちゃんできたかもしれないもん！」

「はっ！？ 何ふざけた事言っているのよ！」

「あっ、お腹少しはっているかも……」

「それはただの食べすぎよ！」

「……ファーストキスと初体験の相手は忘れられないって言うもん。だから私の勝ちで和くんは私のです！」

「なにが『だから』よ！ 全く意味が分からないわね。確かにそれは貴女の勝ちよ。だけどファーストベッド、ファースト抱きつき、

ファースト同姓、ファースト親公認、ファースト頼つぺたキス、ファースト登校&下校、それから……と、取り敢えず私の方がいっぱい初めてあるようね！」

何でも「ファースト」をつけているが、一般的にはそれ 誰にでもできるような事は「初めて」とは言わないだろう。少々無理がある。唯一理解されそうなのは初めて同姓した相手ぐらいだろうか。森澤和人の両親がいるので、同姓と言うのも少し違うような気がするが。

「量は勝つても質はだいぶ負けていますけどね！」

「ならセカンドを奪っちゃえば私の圧勝ね？ 貴女が帰ったら全部奪っちゃいましょ。あー楽しみだなー」

「っー！ い、イヤイヤイヤ！ ゼーったいにイヤ！！」

「あのね、私は貴女の事が嫌いだから言っている訳じゃないの。だーいつ嫌いだから言っているのよ？ 私の気持ちも分かっただろうかい」

「和くんを琴田さんに取られるぐらいなら」

「 包丁で刺すつもり？ 貴女の愛情は相当歪んでいるようね」

「うわーん！ 琴田さんが苛めるー。和くん助けてー」

さて、今のいままで全く会話に参加していなかった森澤和人はといえ、ほぼ寝ていると言ってもよかった。会話の九割は頭に入っていない。

「西尾を苛める睦月は嫌い」

助けを求める恋人の役に立とうとはするのだが睡魔には勝てず、睦月の気持ちを知ってか知らずか、今の睦月にとって一番のダメージを負わす言葉を口にする。

さすがの睦月も想いを寄せている相手に「嫌い」と言われれば怯まないはずがない。

うつ、とうめき声を上げて奥歯を噛みしめる。それでもやらないと胸を締め付ける痛みに負けてしまいそうだったからだ。

助けてくれたお礼なのだろうか、西尾真琴は「ラブ」を連呼して

睦月に見せつけるかのように濃厚なキスをする。

一瞬だけ睦月の瞳に二人が唇を重ねる姿が映る。見たくない！  
そう思つて目を閉じるが、まぶたの裏には二人のキスシーンが焼きついていた。先ほどの言葉は本音じゃないと言ひ聞かせて何とかなつたが、キスをする現場を見るとなるばそうはいかない。より強く胸を締め付けられ、睦月の瞳からは今にも涙がこぼれ落ちそうだった。

その姿を西尾真琴は見逃さなかった。

「今日はずっとチューしようね。だって琴田さんとは違って私達は恋人ですもん。他人の琴田さんと違ってチューぐらい普通にできる仲だもんね」

ふふふ、と笑みを浮かべる。

「琴田さんとは違って私達は恋人関係ですもんね」

強調するかのように二度言い、こことぞばかりに畳み掛けるつもりだろう。

「それに比べて琴田さんは可愛そう。だって好きな人にキスもできないし、好きな相手には彼女がいるのよ。私だったら悲しくて悲しくて泣いちゃうかも。まっ、琴田さんとは違って私には大好きな和くんが側にいてくれるから関係ないか。それに知っていましたか？ 和くんって結構激しいのよ。あっ、他人の琴田さんは知らないか。ごめんなさーい」

「うっ……ふえ……ふえーん」

胸の痛みと西尾真琴の発言に耐えきれなくなった睦月は声を出して泣き始めた。

その事に一番ビックリしたのは皐月だった。睦月と過ごした時間は断トツで皐月が長く、そのため初めて見る睦月の涙に目を見開いた。

邸に居た頃に睦月は悪戯程度の意地悪などをされ、その姿を皐月は何度か見てきた。怒ったとしても決して泣く事は決してなかった。一度理由を聞いてみたところ、だって泣いたら負けたって気がして

悔しいから。そう睦月が言ったのを皐月は覚えていた。それなのに今は泣いている。

そうとは知らず、西尾真琴は涙を流す睦月を見て心の中ではガツツポーズをする。

勝った！ と。

恋は時に非情を言うが、まさにそれだった。普段なら泣いている人をあざ笑うような西尾真琴ではない。知人なら理由を聞いて何か行動を起こし、知らない人だと一瞬はためらうが声をかける。世話好きと言えはそうなり、お節介と言えはそうなる。

それでも罪悪感が全くないのではない。理由はどうあっても自分のせいで睦月が泣いたのには変わりない。チクリと痛む胸を我慢し、ここは鬼になるのよ！ そう西尾真琴は自分自身に言い聞かせる。

「あ、貴女が……帰っても、グスン。……かじゅとには、手をだしやない。……だから私の前で意地悪言わないで、イチャイチャしないでよ……ズズッ」

涙を流し、鼻水をたらしながら睦月は懸命にそう言う。その姿はさながら幼稚園児のようだった。

「ん、私も少し言いました。……ならこうしようよ。私は琴田さんに意地悪言わないし、琴田さんの前ではイチャイチャもしない。その代わり、私と和くんが一緒に居る時は邪魔をするのはダメで、琴田さんと和くんが一緒に居ても私がきたらすぐにゆずってね。もし和くんが琴田さんと一緒に言えば私は諦める。どう？」

それこそ彼女の権利をフルに活用できる場面だが、変な所で優しさを発揮する西尾真琴だった。

「……うん」

「皐月さん。和くと琴田さんが私の居ないからって、変な事をしないかちゃんと見張って下さいね！」

「睦月と西尾がそれでいいなら分かった。睦月が和人を色仕掛けでどうこうするのを止めればいい訳だな？」

「お願いします」

「りょーかい。……そろそろ帰らないとバスなくなるぞ？」

「今日はこのまま泊まっていこうかなー」

「和人の親に何て説明するつもりだ？」

「もちろん恋人って説明します！ お父さんとお母さんにちゃんと挨拶できるか少し不安だけど、しっかり者の彼女って所を見せないと！ ふんふん！」

鼻息を荒くして西尾真琴は拳を握る。

「それは止めとけ」

「どうしてです？」

「和人から聞いたか知らないが、私と睦月は赤の他人なのにこの家で暮らしている。理由は取ってつけたにすぎないからどうでもいい。一応ここの家族には私と睦月が、和人の恋人関係って設定で住まわせてもらっている。本人と親公認の二股も正直やバイのに、これ以上増えたらどうなる？ いい加減和人の両親も疑問に思うだろう？」

「でもでも、それだと私はどうなるの？」

「さー、適当に睦月の友達やらクラスの勉強会とか言っておけ。つい口が滑って彼女とか言ってみろ？ 和人を骨の髄まで睦月にメロメロにしてやる」

「りよ、了解しました。ところでどうして皐月さんじゃなくて、琴田さんなんですか？」

「和人は私の好みと違うからな」

「なるほど……この家の敵は琴田さんだけって事ね」

「さて、話も終わったところで和人を叩き起こしてくれるか？ 流石にご飯一人前追加を親に言うのは和人の仕事だからな」

「すやすやと気持ちよさそうに西尾真琴の腕の中で眠っている和人は無理やり起こされ、ボーっとする頭のまま言われるがまま仕事から帰ってきたばかりの母親に「母さん、ご飯一人分追加ねー」と言うのだった。」

「ちなみに食卓は非常に緊迫した状態だった。森澤和人は西尾真琴にベッタリだし、睦月はイライラしっぱなしだし、森澤佳苗は敵と

認識した西尾真琴を嫁いじめする姑のように接し、さらには森澤佳苗の一言「お母さん明日は赤飯ね。……だつて兄さんは西尾さんとやっちゃったらしいから」爆弾を投下した。もう食卓は大混乱だった。両親にどういう事かと森澤和人と西尾真琴は問い詰められ、恋人関係と白状したところ「今の恋愛は乱れているわ!」と、母親がギャーギャー言うのだった。

3

森澤家から少し離れた場所。詳しくは森澤和人の部屋から約六百メートル離れた位置。

見晴らしがよくてその位置からだに森澤和人の部屋が実に見える。以前皐月と水無月が静かな戦いをした家の屋根でもある。

そこに霜月が立っていた。

普通の人には部屋の電気がついていっているほどにしか見えなだろう。だが普通の人とは格段にスペックの高い霜月にとって部屋の様子をみるのは容易い。

今はこういった形で見張っているが、普段からこういったストーリーのような行動を取っている訳ではない。いつもは京道孝介の財布から出ているお金でホテル住まいをしているのだ。

現在の主と契約を結んだ時に一緒に暮らそうと言ったのだが、その主は実家に住んでいるため無理と言った。それでも食い下からず説得を試みたが、席はこの間埋まってしまったと意味ありげな事を言つて耳を貸さず今に至る。

それから少しした頃に森澤和人と睦月の存在を知った。

第三者から全てを見ていた霜月は皐月と水無月の事も知っている。

「……楽しそうにしていますわね」  
ボソリと呟いた。



その視線の先には森澤和人を奪い合い、西尾真琴と睦月が言い争いをしていた。徐々にそれがエスカレートしていく。しまいには森澤佳苗が迷惑だから静かにしろと乱暴に部屋の中に乱入。

ピクリと霜月の眉が動いた。表情の微々たる変化が語るものは果たして何に対してなのだろうか。森澤佳苗の乱入でこの後の展開が気になるのだろうか。もしくは楽しそうに繰り広げている光景を羨ましく思ったのだろうか。はたまた気まぐれか。それとも　もっと深い理由がそこにあるのだろうか。その答えを知っているのは霜月だけだった。

「そろそろ勝負を決めて終わらせたいものね。主のためにも、私のためにも……」

そう言い終えた時、ゆつくりと皐月の顔が外　霜月に移る。結構な距離があるのだが、二人とも人外である。

視線がぶつかる。

皐月は特に驚いた様子はなく、今にも人を殺めそうな目つきで睨みをかける。その視線には平穏な生活を邪魔するなら容赦はしない。そう視線で訴えていた。

そこで腰が引ける霜月ではなかった。優雅に手を振って余裕を見せる。

「皐月さん。貴女の歪んだ表情はどうなのかしら？　泣き叫ぶ声はさぞかし美しいでしょうね。想像するだけで興奮してきましたわ」  
うつとりと頬を染めて手を当てる。

普段は何事も丁寧に対応する霜月だが、素顔は最も歪んだ性格をしていた。皐月に「あまり血を流すような戦いは美しくない」そう言ったが、心の底では好きで好きでたまらなかった。好きな相手を得意の幻想で散々泣け叫ぶ姿を見てから殺める。それから抱擁するなり、接吻するなり、好きな事をする。彼女の愛情表現は歪んで病的だった。

「ああ、主様。睦月さんと皐月さんを倒した暁には、ご褒美として私の愛情を受け取って下さい。森澤和人様の表情もゾクゾクしま

したが、やはり主様ですよ。……だめですね。楽しみすぎてゾクゾクしてきました」

笑みを浮かべて口元を歪め、霜月は自分自身を抱きしめるように肩を抱く。

早く、早く、早く、早く。一分一秒でも早く想像した光景を繰り広げたい。

「……ふふふふ。そうでした、そうでしたわ。私は我慢のできない子ども。楽しみを我慢する必要はありませんでしたね」

より力を入れて自分自身を抱きしめ、爪が肩に突き刺さる。

「オードブルは睦月さんと皐月さん。メインディッシュは森和和人様と西尾真琴様。デザートに主様……。ふふ、ふふふふ」

不敵な笑みを浮かべ、自分自身を抱きしめた状態のままゆっくりと体を傾ける。

人間離れた身体能力を持っていたとしても重力に逆らう事はできない。

そのまま屋根から落ちていく。

擦り傷一つ付ける事無くゆっくりと森澤家に向かうのだった。

\*

\*

### 森澤和人の部屋。

現在そこは総勢五人と、人口密度が非常に高かった。騒いでいる三人。森澤和人と皐月を除く三人は大暴れだった。

西尾真琴と睦月は森澤和人をめぐって言い争っている。森澤佳苗はうるさいと苦情を言いにくたのだが、今では睦月を援護する形で西尾真琴を追い出そうと口論を繰り広げている。

屋根の上から姿を消した霜月が徐々に森澤家に向かっていている気配を察し、言い争いを一瞥してから嘆息し皐月はおもむろに立ちあが

る。

「ちょっと風呂に入ってくるわ」

ドアノブに手をかけたところで「皐月」と、冷静な声で睦月に呼ばれて振り向く。

「私が最初にお風呂に入る。この子のこと頼むわね」

「……気づいていたのか？」

「当たり前でしょ？ それに和人をこんなにしてくれた張本人にお礼を言いたい。今回は私に譲ってくれない？」

「まっ、せいぜい頑張ってくれ。子守をしながら祈っているよ」

「そうしてちょうだい。さっ、私はちよつとお風呂に入ってくるけど、私の居ない間に和人に手を出したらだめよ？ 西尾真琴」

「どうしようかな！。だって約束だと琴田さんの前では、意地悪とイチャイチャをしない約束でしょ？ それなら琴田さんが居ない間は私が好きにできるって事じゃない。ふふふ、和くん今からラブラブしようね！」

「……佳苗ちゃん？ 西尾真琴の魔の手から和人を守ってね」

「了解しました！」

「ん。お願いね」

いつの間にか定位置の場所に座っている皐月の代わりに、睦月は部屋から出る。

部屋から出たところでドアに背を預けて深呼吸をする。部屋の中では森澤佳苗と西尾真琴の醜い言い争いが再び始まっていた。「西尾さん知っている？ 兄さんって実は年上好きなよ？ 貴女はお姉さんって言うには少し無理があるよね。子どもっぽい性格とか」「う、うるさいです！ それでも和くんは私を選んでくれましたよ。その情報自体が間違っていると私は思いますよ」などと、森澤佳苗の嘘話に耳を傾けながら睦月はクスリと笑う。

いつまでも今の楽しい時間が続けばいい。だから負けるわけにはいかない。そう自分に言い聞かせる。

パチン。

「よし！」

両手で頬を叩き、掛け声を出して気合を入れてから外に向かって歩き出すのだった。

季節は夏に向かっており、外に出た睦月の頬を生温かい風が撫でる。

田舎だけあり日が沈むと辺りは暗く、光と言えば家から漏れる蛍光灯と月光だけだった。そのため百メートル先もろくに見えない状況である。そして車一台は当然と言った感じに走っておらず、家から漏れる話声以外は静寂に包まれていた。

睦月は目を閉じて集中し、霜月の気配を探す。

「ふふふ、私ならここにいますよ」

ヒールを鳴らせながら、楽しそうに笑う霜月の声が聞こえてくる。  
「そう」

特に驚く事もなく瞳を閉じたまま返事を返す。

それから数秒後には暗闇でも視認できるほどの距離まで歩み寄り、一定の距離を置いて立ち止まる。

「睦月さん？ どうして目をつむっているのですか？」

「こうでもないとお得意の幻想を見せるでしょ？ 確かに貴女の幻想は怖いけど、確か相手の目を見つめないと発動できなかったわよね？」

「お見通しですか。ですが目をつむったまま私を倒せるのですか？」

残念そうに言うものの、それは声だけだった。表情はその逆で、興奮から頬が赤く染まり今にも笑いだしそうに口元を歪めている。

「むしろ貴女こそよく夜にきたわね。そっちの方が驚きよ」

そう、睦月の能力といえば「闇」である。太陽が沈み辺りが暗くなつたまさに今、完全なるホームの場となる。

「私は我慢ができない子どもなので、朝まで待ちきれませんの」

「それは知らなかった」

「それはそうと、森澤和人様を一人にしてよろしかったのですか？」

「和人なら皐月が面倒見ているから問題ない」

「あら？ では私の腕の中にいる殿方は森澤和人様ではないと？」

「私の目を開けさせる作戦にしては考えが子どもっぽいわね」

「森澤和人様？ 睦月さんが私の言っている事を信じてくれませんか。いったいどうすればいいのか教えて下さらない？」

「 睦月。俺はここにいるよ」

先ほどまで部屋に居たはずの森澤和人の声を睦月が聞き間違えるはずがなかった。

驚きを隠せずそつと目を開ければ、そこには確かに森澤和人と後ろから抱きつくように首に両腕を回す霜月の姿がある。

「ほら居たでしょ？ 睦月さんも知っての通り、私は幻想と幻視を見せられても幻聴を聞かせる事はできません。睦月さんは幻想と幻視を受けないために目を閉じていた。なのにここに森澤和人様がいる。どうしてでしょうね？」

霜月が言っている事は本当の事だった。

仮にこれが霜月の描いた幻想の中なら話は別だが、その対策を睦月はした。それなのに森澤和人がいるという事は簡単な話だ。森澤和人が自分の意思でそこにいるから、だからである。

「か、和人！？ 霜月から離れて早くこっちに来なさい！」

「そう言っていますよけど、森澤和人様どうなされます？」

「あー、俺はこのままここにいる」

「睦月さんったら主様に見離されちゃいましたね、可愛そうに。西尾真琴様にも取られて、私にも取られちゃって、もう睦月さんがそこにいる意味がなくなりましたね。悲劇のヒロインになった気分はどうですか？」

実に楽しそうな表情でペロリと赤い舌で森澤和人の頬を霜月が舐める。

「冗談なら後からいくらでも聞いてあげるから、早く家の中に入っていないさいよ！」

「そう言えば睦月は俺の事を好きって言ってくれたよね？ その返

事を言わなくっちゃいけないよな」

ゆつくりと森澤和人は歩き出す。抱きついていていた霜月は「あんつ」と残念そうに声を上げ、首から手を解放する。

「後でいいから早く家の中に！」

「そうはいかない。だってこの機会を逃したら言えるかどうか分からないからな。……俺は睦月の事は好きじゃない」

「えっ？」

「好きじゃないだと伝わらなかったか？ 俺は睦月の事は嫌いだ」  
「……」

睦月の頭の中は真っ白になった。森澤和人を想う気持ちに気がついたのが先ほど、そして一日もしない間に「嫌い」の一言。

もう睦月は奥で笑いかみ殺している霜月の事がどうでもよくなつた。いや、「どうでもいい」のではなく、霜月の存在より森澤和人の一言が勝って霜月の存在が薄くなつた。それほど大きな一言だった。

どうして？ 睦月は「嫌い」の意味を探したが、それらしい節がありすぎて答えが見つからない。

「あー、ごめん。ちよつと嘘ついた」

嘘？ 「嫌い」と言った事？ それとも他の何か？ 睦月の頭の中は答えの出ない疑問で埋め尽くされていた。唯一答えが出ているのは、自分の顔に森澤和人が徐々に近づいている事だけだった。

「嫌いつて言ったのが嘘。本当は大っ嫌い」

耳元で囁いてから睦月から離れ、ニコツと微笑む。

「……大っ嫌い？ 和人が私の事を嫌い？」

「そつ、俺は睦月の事が嫌い。理解できたか？」

笑みを浮かべて何度も「嫌い」と言い放つ森澤和人に対して、何か言い返そうかと睦月は考えるのだが、頭に何度も流れる「嫌い」の単語と直接心臓を握られているかのような痛みに頭が働かなかつた。森澤和人の言った事をオウム返しのように呟くのが精一杯だった。

ポケットに手をつ突っ込んで、睦月から少し離れた場所で笑みを絶やさずクルクルとその場で嬉しそうに回転する。

「どうして俺が睦月の事が嫌いか知っている？ 知らないよね。だから答えを教えてあげるね。答えは三つ、睦月が暴力を振るう所、睦月が我が儘な所……。まあ、この二つはどうでもいいや。俺はね、西尾の事が好きで好きでたまらない訳。それなのに睦月は邪魔をする。睦月じゃなくて西尾と一緒に居たいのに、睦月はそれを邪魔する。どうして？」

「……」

「黙っていたら分からないよ？」

「……」

「まあいいや。答えなんか聞かなくても想像できるし」

笑いながら再び睦月に近寄り、そつと顎を持ち上げる。

「キスしてあげようか？」

「イヤ！」

いつの間にか頬には涙が流れ、唇を噛みしめ、目をギュッと閉じて、ゆっくりと近づく森澤和人の頬めがけて手を振る。

が、それは空をきった。

先ほどまで睦月の正面にいた森澤和人が、いつの間にか背後から手をまわして寄りかかるように睦月を抱きしめていた。

「どうして嫌がるの？ 睦月が望むならその先の事をしてもいい。それを睦月は望んでいただろ？」

「望んでない！」

腕を後ろに振るが、森澤和人は難なくよけて再び正面から睦月の顎を持ち上げる。

「望んでいる。だって言っていたじゃない」

「言っていない！」

「……そう。なら最初で最後のお願いごとを聞いてくれないかな？」

「イヤ！ あっち行って！」

睦月はもう目を開けていられなかった。

突き飛ばそうとする両手はやはりそれも空をきり、いつの間にか背後に森澤和人は立っていた。

「俺はね、これから西尾と二人で居たい。そうすると睦月は邪魔だよな。だからさ、自分の喉を切ってくれない？　それが俺の最初で最後のお願ひ」

「イヤイヤー!!」

「どうして？　臯月も言ったように睦月は俺の物だろ？」

「違う!!」

「違うないさ。俺の事が大好きな睦月は言う事を聞いてくれるよな？　俺は睦月の事は大嫌いだけど」

ははははは、と声を上げて笑いながら睦月から離れて行く。

「うつ、うつ……うつ」

睦月はもう我慢しきれず、その場に崩れ落ちて泣き始める。好きな相手に散々邪魔もの扱いされ、それには飽き足らず終いには「喉を切れ」と言われた。これ以上何かを言われるなら、いつその事言われた通りにした方が楽になれるかと睦月は思った。

「ははははは、どうして泣いてんの？　ウザいから泣くの止めるよ。つてか早くどこかに行けよ。さつさと目の前から消えてくれ」

「わ、私の……知っている和人はっ……うつ、そんな事、言わない」

「へー、まだ会ってそんなに経っていないのに俺の事を語る訳？」

「言わないっ!!」

「そうだな。西尾には絶対に言わないかもしれないな。だけど睦月は太っ嫌いだから言っちゃうのかも」

「違う!!」

「……もう何でもいいや。俺にどういった幻想を抱いているのか知らないけど、これが俺だから。だからさ、もう終わりにしよう。いい加減に飽きてきたし」

森和人は走り出し、泣き崩れている睦月を押し倒す。「うつ」とその衝撃に声が漏れる。そのままマウントポジションを取ると、いつの間にか手にしていた鋏を喉仏につきたてる。



ゆつくりと両手を高らかに上げると、勢いよく振りかざす。  
「イヤっ！」

声を上げる睦月の声は森澤和人に届く事はなく

\*

\*

睦月が部屋から出て行った直後。

落ち着きを取り戻しつつある森澤和人の脳裏に不安の文字がよぎる。その文字が意味するのは果たして何なのかは分からなかったが、思い当たる節はあった。

「和人。お前が行ったところで足手まといにしかない」

立ち上がろうとする森澤和人を皐月は言葉で制す。

「だけど睦月が心配」

「大丈夫だ。あいつだって霜月の対処法ぐらい知っているはずだし、私はお前達のお守を頼まれた身だ。それなのに和人が行ってしまうと私は睦月に叱られなきゃならない。分かるな？」

「それなら皐月が見てきて」

「はっ？ どうして私が？」

「嫌なら俺が行く」

「おーけい。分かった私が行く。けどな、大丈夫そうだと判断したらすぐに帰ってくるからな？」

「それでいい」

「全く人使いが荒いったらないな」

実に面倒くさそうに立ち上がって皐月は部屋から出て行く。

欠伸を噛みしめながら軋む階段を下り、頭をかきながら玄関のドアを開ける。そこには霜月と向かい合いながら呆然と突っ立っている睦月の姿があった。

そう、睦月は既に霜月が描く幻想の世界に迷い込んでいたの

だった。

睦月は外に出て目を閉じるが、その時には既に幻想の中だった。もつと言え、睦月が外に出た瞬間から幻想の中に入る手はずは整っていた。何も不思議な事はない。睦月からは何も見えなくても、霜月が睦月の瞳を捉えた時点で条件は満たしている。

「全く世話が焼ける」

幻想の世界に一度入れば確かに厄介なのだが、それでも対処法がない訳ではない。その一つとして外部からの衝撃で引きずり下ろす方法があった。実にシンプルな方法である。

あくまで睦月が見ているのは幻想に過ぎない。現実にはあるはずのない事を霜月のシナリオ通りに脳内で思い描き、そのシナリオが終われば幻想も終わる。そのため現在の睦月の脳は霜月の配下にあると言っても過言ではない。その集中を一時的にでも途切れさせれば幻想は終わる。

このままほつといても睦月は現実に戻ってくるだろう。だがその後が怖いのだ。

誰にでも心の弱みはあり、そこを非常に霜月は嫌らしくつくってくる。何を見たのかは霜月と幻想を見た本人じゃないと分からないが、大抵はその幻想で心が折れて戦意喪失する。その独占場が霜月の狙いだった。

「さつさと目を覚ませ！」

突っ立っている睦月に近寄り、力いっぱいのゲンコツをお見舞いする。

「ぎゃ！」

小さく悲鳴を上げて睦月はその場に崩れ落ちる。

ものの数秒後には地面に座り込んだ状態で、目を覆い大声を出して泣き始めた。

「かじゅとイヤイヤ！ もうイヤイヤイヤ！」

首を左右に振って子どものように泣き散らす睦月にため息をついて皐月は見降ろし、腕を掴んで強引に立たせる。

「落ちつけ」

皐月の声は睦月に届く事がなく、ひたすら「イヤ！」を連呼していた。

「いい加減に目を覚ませ！」

開いた左手で頬を思いつき叩く。

突然の痛み到我に帰った睦月は呆然と皐月を見る。それから辺りを見渡しても森澤和人の姿がない事に気がつく。

少し先に立っている霜月は口元を緩ませ、泣き叫ぶ睦月を興奮した様子で見学していた。

「ふふふ、大好きな森澤和人様に拒絶された幻想の世界はどうでしたか？ 楽しかったでしょう？」

「そう言う事だ。お前は霜月にしてやられた。今までののは夢で、人は家の中に居る」

「……かーじゅーとおー！」

全てを悟った睦月は泣きながら家の中に走り去っていく。  
残された皐月は呆気にとられて睦月の背中を見つめる。

「……さてと、睦月は戦線離脱だ。これからは私が相手をするが、それについては文句ないよな？」

「ええ、構いませんよ」

その方が霜月にとっても嬉しかった。睦月の泣き叫ぶ表情も良かったが、皐月の表情の方が霜月にとって興味深く、興奮をそそるものだった。

「言っておくが、私にはお得意の幻想とやらは効かない」

「どうしてです？」

「誰かが目の前で死のうが、誰かに『嫌い』やら言われて動揺する人に見えるか？」

「確かにそれはあり得なさそうですね」

「それに夢だろうが現実だろうが、お前は殴り飛ばせば答えは出るだろう？」

言っが早し、皐月は駆け出していた。

未だに棒立ちの霜月の頬にめがけて拳を振りかざす。が、突然霜月の姿が壊れかけのテレビのようにブレたと思ったら一瞬のうちに消え去る。

殴る相手を失った拳は空をきる。

「……中々面白い事してくれるじゃないか」

鼻で笑い辺りを見渡すと、そこには十人ほどの霜月が口元を緩ませ立っていた。

能力の一つである幻視だ。幻想とは違い、現実世界で実際に居ない物を魅せる事ができる。あくまで魅せているだけで、それに害自体は全くない。

「私がどこにいるか分かりますか？」

コツコツとヒールを鳴らせながら十人ほどの霜月が歩み寄る。

「これは参った。さて、本物はどれだ？」

適当に近付いた霜月に手を伸ばそうとして、

「なんてな。答えは簡単だ」

その更に奥にいる霜月の首を右手で掴み持ち上げる。

霜月の喉が詰まる音と、首の骨が悲鳴を上げる音が同時に響く。

「どうして分かったって？ お前は幻聴を聞かせる事ができない。だからヒールを鳴らしている奴が本体だ。スマートだろ？」

残りの力を振り絞って霜月は拳を振り下ろす。

その拳を避けも、受け止めもしなかった皐月の頬を当たる。

「やっぱりお前と睦月は弱い。弱すぎる。睦月は置いておくとして、お前が今まで生き残っていた事が不思議だ。そう思わないか？」

よりいっそ皐月は右手に力を込める。

脳に酸素が行きとどかず、今にも霜月は白目を向いて気を失いそうだった。

「お前には和人と睦月の礼がある。だからお礼に本当の悪夢とやらを教えてやる」

そのままの状態で地面に押し倒す。

衝撃で霜月の肺から空気が漏れるが、そんな事に構っている皐月

ではない。

大の字に倒れる霜月の腹部に座り、霜月の右手には左手を、霜月の左手には足を、そして霜月の瞳には右手を置く。拘束状態だった。「どうして目と腕と足と肺が二つあるか知っているか？ 一つなくなっても生きられるためだ。ならどうして指は全部で二十本なのかは……それは知らない。拷問用なのか、それとも創造者の気まぐれか。……さて、霜月は何本まで耐えきれるか見ものだな」

右手から手を離し、変わりに親指を握り締める。そのままゆっくりと日常では曲がるはずの無い方向に傾ける。

「おね……がい。やめて……」

ピタツと止め、

「お前は和人と睦月がイヤと言っても止めなかったよな？ 慈悲はかけなかったよな？ そんな虫のいい話は世の中にはない。残念だけれど我慢してくれ」

思いつき曲げる。

骨が折れる音が辺りに響き、それと一緒に霜月の絶叫も響き渡った。

「あああああああああああああつあああ！！」

「さて、次は二本目だ。どの指がいいか決めさせてやる」

「いやああああああー！！」

「……私はお前と違って慈悲深い女だ。本当なら全ての指をへし折り、右目をえぐり、左手をもぎ取り、右足をもぎ取りたいところだが、とつても慈悲深い私は親指だけで勘弁してやる。その代わり、お前の主が誰なのか言え。その後は契約を切って京道のクソ野郎の所に戻る。その二つを守ると約束するなら勘弁してやる。どうする？ もし痛みに快感を覚えているなら止めないが」

「痛いのはイヤ！！ 何でも言う！ 何でも言うから痛いのは止めて！！」

「お前の主は誰だ？」

「森澤佳苗様！ 和人様の妹よ！」

「ほーう。なるほど、それで能力が使えた訳だな。ところで佳苗は私と睦月の存在　お前と同じ人種だと知っているのか？」

「知らない！　後で驚く顔を見たかったから言わなかった！」

「それはよかった。お礼にもう一本いくか？」

「いやあああああつああ！」

「冗談だ。最後に契約を切って全ては終わる。ほら、さつさとしろ」  
契約を結ぶのも切るのも実に簡単な作業だった。

霜月は契約した手順と同じ事を繰り返し、最後に一言「契約を破棄します」唇を噛みしめながら呟く。それでももう森澤佳苗と霜月との契約は無くなった事になる。

「これでお前はゲームからリタイアとなった。最後に佳苗に挨拶でもしていくか？　それとも何も言わずに邸に戻るか？」

拘束を解くと、霜月は折られた指を庇って何も言わずに走り去って行く。

あつという間の戦いだった。以前に引き続いて今回も睦月の出番はなく、丸腰の皐月が一人で解決するのだった。

残された皐月はポケットから煙草を取り出すと口に銜えて火をつける。

「……仕事の後の一服は格別だな」

誰かに言う訳でもなく呟くのだった。

#### 霜月との戦闘から翌日。

悪夢を見た森澤和人と睦月は学校にも行かず部屋に引きこもり、現在二人して赤ちゃん返りの真っ最中だった。

お互いで甘え合い、見ているだけでお腹いっぱいといった状況である。

ちなみに西尾真琴は一人で学校の授業を受けている。当初は「二人が一緒だと不安だからここにいる！」と言い張っていたが、皐月の長い説得の末渋々学校に行ったのだった。まだ未練たらたらのなか、数分おきに連絡の返信をしていなくても森澤和人の携帯電話に何らかの電波が届くのだった。もちろん赤ちゃん返りの最中である森澤和人は携帯電話に目もくれず、睦月と現実と悪夢の区別をつけようと人肌恋しく抱き合っている最中である。そんな森澤和人に変わり携帯電話を操作しているのは皐月だった。連絡がこないからと家に押しかけられたら面倒だと、イヤイヤやっている。

そして何度目かになる着信音を聞きながら皐月は嘆息する。

「なあ、和人。明日は絶対に学校行けよ」

「イヤ。睦月と皐月と一緒に居る」

「あのな……。睦月も何か言ってやってくれ」

「イヤ。和人と一緒に居る」

「ダメだこりゃ」

どうにでもなれと肩を落としながら携帯電話に視線を戻す。

昨晚の後、皐月は霜月と森澤佳苗の関係を言う事はなかった。伝えてもよかったが、そうなると森澤和人と睦月との関係も浮上する羽目になると思い、その事実が皐月の胸の中にしまうのだった。

「こ、ち、ら、わ、て、ん、き、も、よ、く、お、か、わ、り、な、く、げ、ん、き、で、す」

現代の文明機械に不慣れな皐月は床に置いた携帯電話を人差し指一本で操作し、文字がディスプレイに映る毎に声を出して読み上げる。ちなみに今までにメールはもちろんだが、手紙なども書いた事のない皐月にとって拷問にも似た作業であつた。

「皐月、メール打つの下手くそ」

「皐月、文章考えるの下手くそ」

遠巻きで見ている森澤和人と睦月は好き勝手に言う。

「うるせえ！ 誰のせいだと思っている！ そう言うなら自分でメール返せよ！！」

「皐月、怒るのイヤ」

「皐月、うるさい」

「あー、もうイライラする！ 普通に話せよ！ 和人は余計に悪化しているし！」

「皐月、イライラするのは」

「カルシウム不足が原因」

終いには一つの文章を半分ずつ言い合う。

「やかましい！ 私がイライラしている原因は全てお前たちだ！」

「皐月、人のせいにするのは」

「よくない事よ」

「人のせいにしないで！」

乱暴にポケットから煙草を取り出し口に銜えたところで、

「皐月、この部屋は禁煙」

「煙草を吸うならベランダで」

「分かっている！」

携帯電話を片手に皐月はベランダに移動し、柵を背もたれにして煙草を吸い始める。

紫煙と髪を風に吹かれてながら、部屋の中で老後の夫婦のようにお茶をすすっている森澤和人と睦月に視線を移す。

「……どうにかならんかねー」

確かに昨日の出来事とは言え、ああまでベツタリしている二人を見てみると今後が不安で仕方がなかった。

今は許そうにもいつかは学校にも行かなければならないし、いつまでもこのままと言えるほど森澤家の面々も寛大な心の持ち主ではない。

そんな時、森澤和人の携帯電話が音楽を奏でる。

ディスプレイに表示されている名前は西尾真琴で、電話のマークが一緒に映っている。森澤和人の彼女からの電話だった。

『和くん！ 今日遊びに行ってもいいよね！』

やれやれと通話ボタンを押して耳に当てると、第一声からハイテ



ンションの声が聞こえてくる。

「お前は仮にも花も恥じらう女子高生だろ？ 二日連続で男の家に外泊なんかしていたら親泣くぞ？」

『あれ、皇月さん？ 和くんどこどこー？』

「人の話を聞けよ。……和人なら今朝と同じ」

『えっ！ あれからずっとですか？』

「ずっとだ」

『今から和くんの家に行くって伝えて下さい！』

「はっ！？ どうそうなる！？」

『それはれっきとした浮気です！ 和くんと琴田さんがラブラブしているのなんて許せません！ ではまた後ほど！』

「ちよつと待て！」

『何ですか？』

「分かった。私が和人と睦月を引き離す。だから今日は家に来るのは止める」

『どっちにしても今日はお泊りする予定ですよ？』

「あんな、最初にも言ったけどお前は花も恥じらう女子高生。その女子高生が毎日のように彼氏の家に泊まりに行くってどうよ？ 両親を心配させるだけだぞ？」

『ふっふーん。それなら問題ないですよ。だって私の両親は旅行中なので、明後日まで家には両親はいませんよー』

「そっちの都合は分かった。だが和人の両親はどうなる？」

『えー、和くんのお父さんとお母さんはいつでも遊びにきてねって言うていたじゃないですか』

確かに昨晚の夕食は森澤佳苗の「お母さん明日は赤飯ね。……だって兄さんは西尾さんとやっちゃったらしいから」爆弾投下で色々とゴタゴタしていた。それでも最後の方は開き直った森澤家の両親が「分かったわ。もうここまでできたら二人も三人も同じよ！ 四人目だろうが五人目だろうが、どーんときなさい！ 西尾さんも我が家と思っていつでも遊びにきてね！」と、宣言したのを食卓につい

ていた全員が聞いていた。それは皐月も例外ではない。

正論を言われて皐月は言葉を詰まらす。

「だ、だけどな！」

『気のせいかな、まるで皐月さんが家に来てほしくないみたいです』  
来てほしくない！　とは言えるはずもなく、観念するしかない  
と頂垂れながら「……和人に伝えとく」と言うしかなかった。

皐月の立場はどちらかと言えば西尾真琴を支援する形となつて  
いるが、西尾真琴が森澤家にきてからというものの騒々しくて仕方が  
なかった。一見は森澤和人を取り合つて些細な言い争いのようにも思  
えるが、皐月が支援している事を睦月も森澤佳苗も知っている。そ  
のため西尾真琴が家に出入りしてからチクチクと地味な言葉の攻撃  
を浴びるようになったのだ。それが第一の理由。

第二の理由はとして、言い争いがエスカレートしないように仲裁  
役が必要となる。その仲裁役が自分自身だと皐月は自任している。  
それが面倒で面倒で仕方がなかった。どちらかの顔を立てれば、ど  
ちらかが落ち込んだり泣きだしたりと、嫌な立場でもあった。

『わーい！　着替えとか取りに家に一度帰るから、少し遅くなるつ  
て伝えて下さいね！』

上機嫌な西尾真琴は『ではまた後ほど』と言い残し、さつさと電  
話を切る。

ツーツーツー。と音を聞きながらため息をついて携帯電話を折り  
たたむ。

「……西尾。お前だけは常識人だと思つていたが、お前が一番の変  
わり者だよ」

やれやれと短くなった煙草を最後に一吸いし、ベランダに常備さ  
れているペットボトルの中に吸殻を放りいれる。

ベランダから部屋に移動し、改まったように正座をして森澤和人  
と睦月の前に座る。

「あのな、後で西尾が家にくるって」

「皐月、分かったよ」

「 追い返してね」

先ほどまではお互い同じ意見で一つの文章を半分ずつ言い合っていたが、今回は少し違う。

森澤和人は歓迎の意味で言ったのだが、睦月は不満で仕方がなかった。唯一森澤和人と一緒に居られる時間をホイホイ削るほど余裕がなかった。本来なら森澤和人の携帯電話を没収だってしたかった。そのぐらい西尾真琴は大きな存在で強敵なのだ。

「睦月は西尾が嫌いなの？」

「違うわ。大っ嫌いよ」

「どうして？」

「だって西尾真琴は私の敵なの。だから会いたくないの」

「え？ 西尾は敵じゃないよ？」

「和人にしたらそうね。だけど私からしたら敵なの」

「どうして仲良くできないの？」

「だって敵だもん」

「それは答えになっていなよ？」

「それが答えなのよ」

「大人の事情ってやつ？」

「そうね、大人の事情よ。和人も大人になったら言えない事が一つや二つでてくると思うの。そんな時に便利な言葉よ」

「なるほど、大人の事情は凄いな」

「だって大人だもん」

誰が大人だって！？ 何が凄いつて！？ ただの逃げ道だろ！

と、心の中では毒ついているものの、それを口に出さずに二人の脱線した意味不明なやり取りを皐月はイライラしながら見守っていた。

「ところで何の話をしていたっけ？ 皐月は覚えている？」

そこで皐月の我慢は限界に達した。

「やかましい！ 霜月に何を魅せられたか知らないけどな、いつまでも甘えるな！ 男ならシャキツとしろ！ いつまでもぐちぐちと女々しいやつだな！」

「今の時代は男女平等だよ？」

「うるせえ！ 女々しい奴に女々しいって言って何が悪い！？」

「皐月、イライラするのは」

「カルシウム不足が原因」

「さっき聞いたし、一つの文章を二人で言うのは止める！ それ以前に何当たり前のように抱き合っている！？ いい加減に離れろうざっいたらしい！」

「だって」

「だってじゃねえーよ！ 夢と現実の区別が欲しいなら私が殴ってやる！ 痛いって事は現実だから文句はないよな！？」

そう言って強引に森澤和人と睦月を引き離す。

お互い手を伸ばし、愛し合っていた恋人が強引に引き離される光景を繰り返す。

「何二人して泣きそうな顔をしている！」

そしてゲンコツを二人にプレゼント。

もう皐月の暴走を止められるのはこの家に誰もいなかった。

\*

\*

今は授業の合間にある休憩時間とだけあり、クラスメイトはそれぞれ好きなように時間を過ごしていた。友だちと楽しそうに雑談をする人もいれば、小腹がを満たすために菓子パンを食べている生徒がいた。

そんな中、皐月との電話を終えた西尾真琴はウツトリと携帯電話を胸に抱いていた。

「ふふふ、今日も和くんのお家にお泊り。楽しみだな」

「余計なお節介かもしれないけど、三日続けて彼氏と泊まりってどうかと思うけど」

今にも歌いだしそうな友人の後ろで呆れ顔の黒崎真奈美が呟く。

「いいの！　だって私と和くんは恋人関係だもん」

「もう何回も聞いたから」

「嬉しいからもっと言っただげるね！」

「遠慮させて。それにさ、そうやって大声で泊まるとか言うのは止めた方がいいと思うよ。クラスの男子とかも聞いている訳だし……」

「どうして？」

「どうしてって言われても……」

黒崎真奈美がそう言うのにはもちろん理由がある。

第一に不埒な事を連想されて噂話が立つ可能性がある。第二に仮にも学校のアイドル的存在の西尾真琴が男の家に泊まると聞けば、そのファンである親衛隊が何かしらの行動を見せる。第三に嬉しいからといって誰にでも言っただいような内容ではない。

友人が嬉しいのを理解はしているのだが、だからこそもう少し自重しなければいけない所もある。今は高校生であり、間違いがあつては遅い時期でもあり、森澤和人に一途な友人が凄く心配で仕方がなかった。

「真奈美ちゃんも好きな人ができたら、いつも一緒に居たいって気が分かるよ」

「いや、だけど……」

「何なら真奈美ちゃんも和くんのお家に行く？」

「行かないし！」

「言っと思った」

ふふふ、と西尾真琴は微笑む。

「それにさ、和くんが浮気しないから見ないといけないし！」

「仮に浮気していたらどうするの？」

「どうもしないよ」

「それって都合のいい女になっちゃわない？」

「それでもいいのっ！　和くんと一緒に居られるだけで今は嬉しいの」

「真琴にここまで言わせるなんて、いったい森澤くんは何をしたのか気になるからね」

「和くん優しいよ!」

「優しさだけで人に好かれるなら恋愛は単純じゃないでしょ?」

「そうだけど……。でもね和くんの良いところはいっぱいあるし、和くんと一緒に落ちつくし……。それにね!」

「はいはい、もう十分わかった。だから落ちつきなさい」

身を乗り出して興奮気味の友人を落ちつかせるように椅子に座らせ、一度しか会った事のない友人の彼氏を思い浮かべるのだった。

それからほどなくして授業開始のチャイムが鳴り響く。

西尾真琴はろくに授業も聞かないで、机の下で携帯電話を操作するのだった。メールの相手が皐月とは知らず、何度もメールを読み返していた。

## 五月 皐月

0

「俺達を祝福するかのように雲一つない空！ 真夏を連想させるギラギラの太陽！ 流れるプールでドッキリハプニング！ そして見渡せば広がる桃源郷！ ところがどっこい！ 上手くいかないのが現実で人生ブヒ……」

お腹に立派な脂肪を蓄えている石井が大きなため息をつく。

さて、俺達 俺、村井兄妹、石井、金田の総勢五人で最近学校が少し離れた場所にできた大型娯楽施設に遊びに来ている。この娯楽施設はプールと温泉をメインにされている。それでも大型とだけあり、ボーリングや映画、カラオケに宿泊施設までも完備されている。こういった娯楽施設があまりない街だけあり、若者からお年寄りまで幅広い支持を得ている。

俺達もそれに便乗してやってきた訳なのだが、あまり満喫できずにいた。

休日だけありプールは人でごった返しており、キャピキャピ遊ぶ女性を眺めながら先ほど買ったばかりのリングジュースを飲む。

今回この娯楽施設に潜入する計画を立てたのはクラスメイトで友達石井だった。

石井は地元の商店街で何気なくやっていた福引大会に参加し、この入場無料のチケットをゲットしたらしい。五名様まで無料だったためお声がかかったという訳だ。ちなみに貴明の妹であるミクがいるのには理由があり、本当はクラスメイトから後一人選出しようとしたが、これがまた参加希望者が多いのなんの。下手に選んで面倒な事になるぐらいならと、ミクに楽しい思い出を作ってあげたいと兄貴心をくすぐられた俺が指名したのだった。……いや、まあ本

当の兄貴は貴明だけど些細な違いだと思ってほしい。

さて、本題であるブルー気味の空気が漂っているのは計画が上手くいかない事にあった。

計画の最重要課題である「ひと夏のアバンチュールを体験したいのっ!」という石井の熱い魂の叫びで、先ほどから手当たり次第に石井は道行く女性に声をかけているのだが、このご時世ナンパが上手いくほど世間は甘くなく、さらには世間様の視線も良いとはお世辞にも言えない。この一時間で何度従業員に追われた事か……。

だが実は何度かナンパは成功しそうな所はあった。俺は言うまでもなく平凡な顔つきで戦力外だが、ちよつと童顔で愛らしい顔つきの貴明。黙っていればイケメンの金田。一見幼女をつれてナンパをするなど論外だと思われるが、その愛らしすぎる顔と甘えん坊の性格で母性本能をくすぐられた女子大生に大人気のミク。このスリートップで掴みはガツチリとれていたのだが、最後の爪が非常に甘いといいますが、このデブはといいますか……。本人には決して言えないが、異常なプレッシャーと鬼気迫る表情を浮かべ、大量の汗を流しながら近づく石井のお陰で全て台無しだった。

過去最高とも言えるため気を石井はつき、重たい空気が五割増しになる。最年少のミクは空気の重たさに気づくはずがなく、つまらなそうに足をぶらつかせている。

「……森澤はいいよな」。可愛い彼女さんがいて、美人と一つ屋根の下……。このリア充め……。世界中のモテない男子から妬まれる……  
「ブヒ」

矛先が俺に向かってきた。

確かにこのグループで唯一彼女持ちは俺だけだが、そんな事を言われても困るだけだ。

「なんかごめん……」

返す言葉が見つからず、取り敢えず謝っておく。

「あつ、西尾様の友達を紹介しろよ!」

最初に浮かんだ顔は真奈美ちゃんとやらだ。それ以外は……誰も



思い浮かばない。あれ？ あいつって友達少ない？

かなり失礼な事を思いながら、流石に俺の今後の信頼にも関わらず遠慮しておきたい所だと結論を出す。無口になった金田なら喜んで紹介するけど、恋愛に飢えている友人を紹介して何かあってでは遅い。それに語尾に「ブヒ」とかつける奴を紹介したくない。いつの間に定着したのやら。確か金曜日に計画を立てていた時は「ブヒ」とか一言もいってなかった気がする。

どうやって断ろうかと悩んでいると、

「和人お兄ちゃん。ミクもうつまんない」

ミクがダダをこね始めた。

その切実な願いを聞かされたとなっちゃん和人お兄ちゃんが行動しないはずがない。だってミクを溺愛しているからね！

「そうだな。んじゃ、お兄ちゃんと一緒にプールで遊んでこよっか」  
その場にしゃがんでおいでおいですると、ミクは嬉しそうな笑顔で駆け寄ってくる。

ああ可愛い。可愛すぎる！ もうロリコンでもいいやマジで。

ムギューっと抱きしめて頬をスリスリし、ミクを抱きかかえて立ち上がる。

「なあ貴明。いつになったらミクちゃんは我が家の子になるんだ？」

「和人は本当にミクが好きだね……。ちよっと妬けちゃうな」

「ミクちゃんも貴明お兄ちゃんより、和人お兄ちゃんの方がいいよなー？」

「うん！ だって貴明お兄ちゃんはミクに意地悪するもん」

「貴明てめえー！ ミクちゃんに手を出すなとあれほど酸っぱく言っただろうが！」

「ええー、マジギレ！？ そこでマジギレしちゃうの！？」

「俺の可愛い妹に手を出してタダで済むとは思ってないよな？」

「ミクは僕の妹だから！ 和人の妹は佳苗ちゃんでしょ！？」

「佳苗ならお前にくれてやる。だからミクは今日から俺の妹だ。文句があるなら佳苗に言え」

「森澤ちよつと落ちつけ。ほら、この携帯ストラップを見ればきつと安らかな気持ちになるはずだ」

まあまあと金田が仲裁に入り、どこに隠し持っていたのか大量のストラップをつけた携帯電話を見せてくる。黙っていればイケメンの金田はアニメオタクで、頬を緩ませながらアニメヒロインのストラップをいじってはニヤニヤしている。ちなみに貴明もその筋の人である。

そうはいつでも、有名どころのアニメは見ても貴明や金田からすれば素人同然の俺である。ストラップが大量にあっても知っているヒロインは皆無だ。

「話が脱線したから戻すけど、西尾様の友達を紹介してくれないブヒか？」

そうだった。

「いや、紹介は別にいいけどさ……。ただ西尾の友達と親しい訳じゃないし、どう切り出せばいいか分からないし……」

「ほう。ならそんなシチュエーションを作れば、後は上手くセッティングしてくれるブヒね？」

「まあそうだな……」

「ブヒヒヒヒ！ そんなヘタレな森澤でも可愛い彼女を難なく誘える最高のプレミアチケットがここにある！」

バン！

机を豪快に叩きながら、そのチケットとやらをお披露目する。

その場にいた全員の視線がそのチケットに注がれる。

「ブーヒッヒッヒ！ 何を隠そうここにあるのは一泊二日の高級ホテル宿泊券！」

腕を組んで高らかに笑っている石井の言った通り、そこには二枚の宿泊券がおかれている。何でも綺麗な海と自然豊かな山に囲まれた有名どころらしく、何でも雑誌で何度か取り上げられたとか……。そこにそう書いてあるが、ちよつと胡散臭い。

チケットを覗きこんでいる貴明は妄想しているのか最高の笑みを

浮かべ、ミクは不思議そうに指をチュツチュツしている。金田は三次元にはそもそも興味がないようで、特に表情の変化は見られなかった。

「一枚で最大四名様、二枚あるから八名様までは無料でお泊りできるって訳だ。リア充の森澤、ご理解いただけたか？」

「これで誘えと？」

「ご名答！ 本当はこのチケットをお金に換えて、夏休みをエンジョイする予定だが背に腹は代えられん。ひと夏のアバンチュールのために犠牲になってもらおう。ちなみに有効期限は来月の中旬までだが、夏休みまで残り五日だ。このチケットは十分に活用できる」

「ちなみにどこで手に入れた？」

「ふむ。確かこのチケットとは別の場所でやっていたガラポン大会で一つ、もう一つは旅行会社らしき人を助けたら貰った。チケットより現金の方が良かったが、今思うところちの方が断然おいしいな」

なにそれ……。お前の方が十分リア充じゃん。こいつの強運を少し分けてほしい限りだ。

そして「ブーヒツヒツヒ！」と高らかに笑う。

「さて、八人分だからな誰を誘うか相談しようじゃないか。まず男性陣はここに居る四人だろ。女性陣は西尾様とその友人。ちなみに今回は村井の妹を許したが、次回のお泊りは流石に責任問題が大きいかから無理だぞ？」

「それは俺も賛成だ。貴明も異論はないよな？」

「もちろんさ。僕としては和人以外の人材こそ不要だと思うけどね」  
「今のところ六人だろ？ 残りはどうするつもりだ？ そもそも皆の都合が合うのか？」

金田の言うとおりだ。金銭的な面ではクリアしても都合が合わないければ意味がない。夏休みといっても、アルバイトやら個人的な用事やら部活やらで、時間が合わない可能性もなくはない。ちなみに俺と貴明はバスの関係でアルバイトは不可能である。

「どうにかなるだろ。俺達四人は今のところバイトも部活もやっていない。残るは女性陣だが、森澤にぞつこんの西尾様は二つ返事なのは確定。西尾様の友達の都合に合わせれば問題はないと思う」

「残りの二人はどうするつもりだ？」

「問題はそこだ。これ以上男が増えるのは華がないから却下とする。西尾様の友達を追加で二人って線もよろしくない」

「どうしてだ？」

「よく考える。仲のいい友達が二人で行動するならまだ何とかなるが、四人で固まられると手の出しようがない。ここは西尾様の友達以外で決める」

「なるほど……。中々賢いな」

「当たり前だ。どういったシチュエーションでも対応できるように、授業中は基本妄想の世界に浸っているからな」

前言撤回。こいつはバカだ。

「なら琴田さんはどうだ？ 森澤と仲が良かったし、森澤は西尾さんと付き合っているから今はフリーだろ？」

睦月かー。理由は知らないけど西尾と仲が悪いから勘弁してほしい。

「金田くんそれは違うよ」

「何がだ？」

「和人と彼女さん えっと睦月ちゃんは親こ、モガモガ」

いらぬ事を言われる前に口をふさいで貴明を黙らせておく。

「森澤、隠し事はよくない。真実を皆に公開するべきだ。今日の事は西尾様に言っていないだろ？ もし公開しないのなら残念だが告げ口をさせていただく。ナンパに出かけた彼氏にどんな反応を示すか楽しみだ」

両肘をテーブルにつき、両手を絡めるように組んで口元を隠す石井。よくドラマなどで幹部の人がやっていそうな格好だ。

確かに今日の事は内緒でプールにやってきた。適当に理由を取ってつけて遊びに行くのも断った。睦月と少し話しているだけで「浮

「気ダメ！」と言うような西尾である。遊びを断ってナンパをしていると知ったら……。

力なく貴明の口元から手を退ける。もうどうにでもなれ。

貴明はどこからともなく三枚の写真をテーブルの上に置く。西尾、睦月、皐月の写真だった。

「……ほう。西尾様は森澤の彼女だと分かるが、琴田さんと謎の美女とはどういった関係かね？」

「全員親公認の和人の恋人だよ。謎の美女は皐月ちゃんって言うってね、睦月ちゃんと皐月ちゃんは和人の部屋で毎日寝泊まりする仲だよ」

ニコニコと秘密情報を漏らす貴明。……こいつは鬼だ。

そう言えば西尾は知っているけど、貴明は睦月と皐月が家で生活するために設定上で付き合っているのだと知らない。一見はハーレムを築き上げていように思えるが、実際は西尾としか付き合っていない。そもそも俺がモテ男に見えるか？

その事をこの場を借りて伝えてもいいが、そうなると睦月と皐月がどうして赤の他人の家で寝泊まりしているのか疑問が浮かび上がる。あまり俺の頭は賢くないし、下手に嘘をついた所で今後ボロが出そうで怖い。ここは流れに身を任せるのが一番だろう。

「けしからん！ 実にけしからん！ 西尾様だけでは飽き足らず、琴田さんと皐月さんも手駒にしているだど！？」 お前は俺達から憧れのアイドルを奪うだけではなく、密かに恋焦がれる琴田さんまでも奪ったのか！ 選択する余地は最初からなかった訳だな！！ この恋愛泥棒があああああ！！」

石井の絶叫が辺りに響き渡った。

「お、落ちつけ。このイベントは西尾と手を組んで必ず成功させると約束するから、な？」

「……その言葉に偽りはないと誓えるか？」

「勿論だ！」

「なら今回は目をつむろう。それで残り二人だが、琴田さん皐月さ

んを誘うのはどうだ？」

「それは止めてくれ……」

「どうしてだ？ 二人とも森澤の彼女なら思い出作りも大切じゃないか？」

「気を使ってくれるのは正直ありがたいけど、西尾と睦月が一緒になると喧嘩ばかりするから疲れる。それにさ、俺の事はどうでもいい。今回は石井の彼女を作る計画だろ？ それなら選択肢を増やす方がいいと俺は思う訳だ。石井の気に入った子、まあ俺の知り合いの中でだけど、他にはいないのか？」

「おお、森澤のヤル気が手に取るように分かる！ ……実はだな、最近ツンデレとお嬢様つてものに興味があつてだな」

「分かった。釜谷と加名盛を必ず参加させてみせる」

釜谷はクラスメイトで、誰もが認めるツンデレ娘だ。以前貴明と一緒にツンデレ喫茶に行った時に、自慢のツンデレで持て成してくれた。そして加名盛は何かと俺にいちやもんをつける美化委員長で正真正銘のお嬢様だ。ただ過剰のヒステリック娘でよく奇声を発するが、なぜか顔はものすごくいい。西尾には負けるが、人気はそれなりにあるらしい。全く世も末だね。

一応二人とも顔見知りだし、何とかなると思う。

「ブヒヒヒヒ。今回のイベントは実に楽しみだ。水着を新着せねばな」

ニヒルな笑みを浮かべる石井だった。

そんなこんなで俺達は一泊二日の海旅行が決まった。

1

休み明けの月曜日。

登校してすぐに俺と石井は西尾のクラスに足を運んだ。

西尾も既に登校しており、ファッション雑誌を真奈美ちゃんとやらと一緒に楽しそうに眺めていた。「この服可愛いね〜」とかキヤピキヤピする空気の中、どうやって切りだそうかと悩む所だ。

踏ん切りがつかない俺の背中を石井が押し、健闘を祈ると親指を立てる。

ドアに身を隠して顔だけ出している石井のためだと言い聞かせ、ゆっくりと西尾に近付く。

俺の存在に気がついた教室にいる生徒から視線を浴びながら、

「あー、西尾？」

おそろおそろ声をかける。

西尾は表情を輝かせ「あっ、和くん！ おっはよー。今日も超好き好き」と過剰の反応を見せる。

うつ。

かなり緊張してきた。

「ちよっと大切な話がある。今時間あるか？」

「どうしたの？ 気まずそうな顔だよ？ それに大切な話って……。も、もしかして、うつ……ふえ、別れ……うつ、話……うえーん！」

朝から超元気な西尾だった。相変わらずのぶっ飛んだ思考回路に少し笑ってしまう。

「ごめん。もう西尾とは……」

大声を上げて西尾は泣いているが、たまには悪ノリもいいかと思った。

その悪ノリのせいで更に西尾は声を上げて「イヤイヤイヤ！」と泣き散らす。その過剰の反応が面白くて、ニヤニヤするのを隠すのが大変だったりする。

「真琴落ちつきなさい。森澤くんも悪ノリしない」

バレていましたか。

「それで、森澤くんはどうしたの？ 本当に別れ話じゃないでしょ？」

「あはははは、ごめん、ごめん。ちよっとぶざけすぎた。それでさ、

もし良かったらだけど夏休みに旅行にでも行かないか？」

「別れ話じゃなくて良かったじゃない真琴。それに旅行だって」

「……グスン。本当？」

「本当だって。俺だって西尾の事好きだし、別れたいとか思っ  
てないし」

その言葉を聞いた西尾はパーっと一気に表情を明るくさせ、「旅  
行絶対に行く行く！」と言いながら俺の腹部に飛び込んでくる。

どこのアットホームドラマだよ。と思いながら俺の制服に涙を染  
み込ませながら、グリグリと顔を押し付ける西尾の頭にそっと手を  
置く……のを途中で止めた。だって教室中から「消えるカスガ！」  
みたいな視線が集まっているからな。自重は大切な自重は。

さて、西尾の参加は決まった。次は最大の難問である真奈美ちゃ  
んを誘う番だ。

「ところでさ、このチケットって四名様まで無料になっている。も  
しよかつたら真奈美ちゃんも一緒にどうだ？」

「私？ いや、さすがに遠慮させてもらう。真琴と二人っきりでし  
よ？ そこに私がいてもお邪魔じゃない」

「その事だけど、実は俺も友達から誘われた口で、その友達が彼女  
と思い出作りに誘ったらどうだって言われて。それで、えっと……  
…何と言いましようか、周りに西尾の知り合いがないし、それな  
ら西尾の友達も一緒になって話になりまして。……どうだ？ 真奈美  
ちゃんも一緒にこないか？」

「……なるほど、入口に隠れている人がどうしてもと」

うつ、そちらもバレていましたか。中々侮れない人だ。

「駄目か？」

「……いいよ。真琴の彼氏さんがどうしてもって言うなら私も行か  
せて」

やれやれといった感じに腰に手を当て、ため息交じりです承して  
くれた。

「真奈美ちゃんも一緒に楽しみ！ ねえねえ、いつ行くの？」



「あー、まだ日程が決まっていけない。夏休みに入ってからだけど、都合の悪い日とかがあってあるか？」

未だに俺の腰辺りにしがみついている西尾が、俺を見上げながら言う。

うつ、可愛い。その表情が凄く可愛くてドキリと胸が高鳴る。

「私はいつでもいいよ！」

「私もいつでも」

「了解。また日にちが決まったら連絡するよ」

「あのね、あのね！ 今日学校終わったら水着買いに行こうよ！」

「んー、放課後かあー。帰りのバスあるかなー」

「もしなかったら私の家に泊まればいいよ！」

「いやいや、それはちよつと……」

「私の家はイヤ？」

「だって両親いるだろ？ 流石にまずいって」

「でも和くんの両親は私が彼女だって知っているよ？」

「いや、それは俺の両親だからだよ。俺が西尾の両親と会うのとは全然違うって」

「どう違うの？」

「どうって言われても……。えつとね、西尾は女の子で、俺は男だからさ、可愛い娘に男を紹介したらきつと西尾のお父さんは凄く心配って言うか、ビックリって言うか……。と、とにかく俺は西尾の家には泊まらない」

「だけどね、だけどね。うちのお父さんとお母さんがね、和くんに会いたって言うていたよ！ お父さんはちよつと機嫌が悪かったのか怒っていたけど、お母さんは凄く嬉しそうだったよ！ だからね、だからね！」

「えつとー、西尾は俺と付き合っているのを両親に言っちゃったと？」

「うん！ だって嬉しかったもん」

「あー、なるほど。西尾のお母さんには会いたいけど、お父さんに

は正直会いたくないかな」

「どうして、どうして？」

「だって西尾のお父さんすごい俺を嫌っているし……。心の準備も必要だし……」

「なら大丈夫だよ！　だって今日お父さん仕事で居ないもん！　決まりねっ！　今日はショッピングデートして、その後は私のお家でお泊まり会だよ！」

「……りょーかい」

俺は言い返せる言葉が見つからず、西尾に従うしかなかった。これって世間的には尻に敷かれると言っのだろうか。さすが俺の父さんの息子って事かな……。

まあ、何はともあれだ。計画通り西尾と真奈美ちゃんの参加は決定だ。後は釜谷と加名盛か……。先は遠い。

俺から離れた西尾は嬉しそうにキャツキャツと飛びはね、ドアの方を見れば石井が親指を立てていた。それに肩を軽く上げてアメリカン風に答える。

「ところで森澤くん。他には誰がくるの？」

「あー、クラスメイトの村井と石井と金田。あと二人は今から交渉しに行くところかな」

「その交渉する相手は男？　それとも女？」

「一応女だけど、なんで？」

「何となく聞いてみただけ。あまり深い意味はないから気にしないで」

「？　了解。んじゃ、俺はもう行くわ。また放課後にでも」

「はい。また昼休みー」

話を聞いていたのか聞いていなかったのか、とんだ間違いの返事をする西尾に軽く手を上げて教室を出ようとする。

「あつ、そうそう。旅行の事は睦月に内緒だからな」

「琴田さんは行かないの？」

「だって喧嘩するだろ？　だから今回は俺と西尾でいっぱい遊ぼう

な」

「うん！……ふふふ、琴田さんに勝った！」

何に勝ったか知らないけど、それで西尾が喜んでくれるなら良かった。睦月には悪いが、夏休みが始まったら睦月の好きな所にも連れてってやるか。そう思いながら俺は教室を後にした。

「西尾様と友達の了解は得た。次のターゲットは釜谷さんだ。よし、森澤今すぐ行つて来い」

一時間目の授業が終わってから俺、貴明、石井、金田が教室の隅に集まり作戦会議をしている。元から仲の良いグループの集まりだとクラスメイトは認知しているが、隠れるようにコソコソ談話している姿は目につき、先ほどから睦月もチラチラと俺達の様子をうかがっている。

誘うのは別に構わないが、睦月に旅行の計画がバレると厄介だ。

もちろん睦月には今回の計画を内密にするよう参加メンバーには言っているが、大根役者の俺達がいっぱ口を出すか分からない。この集まりだって疑問の種になりそうだし、俺としても早めにメンバーの獲得を得て、いつもと同じような学校生活を送りたい所だ。

「分かった。貴明は何とかして睦月を教室の外に連れ出してくれないか？」

念のための保険だ。

「りょうーかいです」

敬礼のポーズをとり、早速貴明は行動を開始する。

睦月に一言二言伝ええると、俺達の方をチラチラ見ながらも渋々貴明と一緒に廊下の方に出て行く。これで邪魔者はいなくなった。まあ、邪魔者扱いをするのもおかしい話だけど、そこは気にしない方向でいこう。

背後で敬礼ポーズをとる石井を尻目に、次の授業の準備をする釜谷の席に近付く。普段は仲のいいグループで固まって談話を楽しんでいる。今日はその友達が次の授業の宿題を友達に借りたノートで

写すのに勤しみ、珍しい事に一人きりだった。

クラスメイトとは言え、俺だって思春期真っ盛りの高校生だ。特別親しい子は別として、時々話す子に旅行の話を持ち出すのは緊張する。もしグループで固まっているなら十割増しだ。だから一人の今、かなり気が楽だ。それでも緊張するのには変わらないけど。

「釜谷、少しいいか？」

「なに？」

ぶっきら棒な返事が返ってきた。

「ここだとちよつと……。向こうで話さないか？」

教室の後ろ、あまり生徒がいない所を指さして言う。

誘うは誘うが、さすがに教室のど真ん中で誘うほどの勇氣を持ち合わせてない。持ち合わせているのはヘタレ根性と……。やめた。自分をけなしても悲しいだけだ。

少しでもリスクを減らし、少しでも騒ぎにならない方法といえば人気のない場所と相場が決まっている。本当は廊下の端にでも連れて行きたいが、廊下で睦月と鉢合わせたら後で何を言われるかわからない。ここは多少のリスクがあっても背に腹は代えられない所だ。「私ちよつと忙しいの。さつさと用件を言つてよねっ」

フンつとそっぽを向くが、俺の後をつんだって来るのは流石ツンデレ娘である。もしかしたらデレ期がこないツンツン娘のまま、一方的に拒絶されるかもしれないけど。

「あ、あのさ、夏休み暇だったりする？」

教室の後ろで辺りを警戒しながら小声で言う。

「はっ？ 忙しいに決まっているじゃない。くだらない用なら席に戻るけど」

不機嫌そうに釜谷は眉間にシワを寄せる。

「毎日じゃないだろ？ それでさ、物は相談だけど海と山に興味ないか？」

「正直ない。私敏感肌だから少し日に当たるとヒリヒリして痛いし、山は虫が多くて気持ち悪いし、それなら家で大人しくしていた方が

マシよ」

「それなら仕方ないな」

「どうしてそんな事を聞くのよ？」

「いや、あのな。石井が宿泊券をもらって、その何だ……」

「誘っている訳ね？ 森澤くんは琴田さんと付き合っているのに、その旅行に女を誘うのはどうかと思うけど」

「別に睦月とは付き合っていないけど……」

「はあ？ 嘘をつくならもっとマシな嘘をつきなさいよね」

「本当だつて。睦月とは仲が良いだけで、付き合っていない」

「まあいいわ。それが本当だとして、どうして私を誘う訳？ もつと仲の良い子でも誘えばいいじゃない」

さつきからイライラした口調なのも原因かもしれないが、それを言われると喉が詰まる。

援護を要求する！ と教室の端にいる二人を見ると、石井からは視線をそらされた。金田はしょうがないと言った感じにこちらに歩み寄る。さすがイケメン金田だ。誰とは言わないけど、どっかの小太りした友達とは紳士レベルが違うな。

金田が何をするのかお手並み拝見で、腕を組んで見守る事にする。「二次元のツンデレ需要はまだあるが、三次元のツンデレは損しかないぞ？ ここはツンデレを止めてデレ谷になったらどうだ？」

紳士だけど、これは悪い予感しかない。

このクラスでは暗黙の了解があり、釜谷に「ツンデレ」の単語を言つてはならないというものがある。釜谷自身、自分がツンデレとは思っていないようで、面と向かって「釜谷ってツンデレだよな」とか言おうものなら怒り狂ってしまう。

「誰がツンデレよ！ ふざけた事言わないでよねっ！」

まさに今のよう。

「あのな、これあくまで俺の意見だが、三次元のツンデレが好きな奴は絶滅危惧種と言つてもいい。そんな需要のないツンデレを演じて得があると思うか？ 普通に考えて損しかない。ツン谷も利口な

生き方をした方がいいと俺は思う」

まあ言っている事は同意できる面もあるが、釜谷を全否定したぞこいつ……。

釜谷の扱いが上手い貴明に任せれば良かったと、ついつい思ってしまった。きつと貴明が一言一言呟けば「了解」の二つ返事が返ってくるだろうに。

「私忙しいから自分の席に帰る！ もう話しかけないでよねっ！」  
フンッとそっぽを向いて足を盛大に鳴らしながら歩く釜谷の後姿を見つめ、余計な援護をありがとうの意味を込めて、俺は金田の肩を叩く。

「せっかく助言したやったのに、どうしてツン谷は怒っているのか俺には理解できない。これだから三次元女は嫌いだ」

「金田！ お前は何をやっている！」

お怒りモードの石井が鼻息を荒くして近づいてくる。これに限っては石井が怒るのも無理はない。誘うどころか好感度を必要以上に下げただけだしな。

「二次元なら今のでフラグが立ったぞ？」

「フラグはフラグでも死亡フラグだけだな！」

「石井は読みが甘い。この指摘によってツン谷を卒業し、デレ谷になる。そうなれば必然的にフラグを立てた俺に歩み寄ってくる寸法だ。これで旅行の件も安泰だな」

「その安っぽいシナリオ通りに行くわけがないだろ！ 仮にフラグを回収しても旅行には絶対に間に合わない！ せっかく森澤のお陰で西尾様とその友達の参加が決まったんだぞ！」

怒鳴り散らすのは一向に構わないが、「旅行」やら「西尾様」やら「参加」の単語を大声で言わないでほしい。睦月に聞かれたらどうするつもりだ。それこそ旅行どころの話ではない。

その魔力を放つ単語を聞いたクラスメイトの目が光ったような気がした。これは非常に由々しき事態だ。睦月にバレルのも時間の問題かもしれない。その前に我先と参加希望者が殺到するに違いない。

「楽しそうな話をしているじゃないか。その旅行俺も参加させてくれよ」

「俺らって友達だろ？」

「クラスメイトのよしみでさー」

そう思った矢先だった。数人の行動力あふれるクラスメイトが歩み寄ってくる。

「チツ……。別に構わないが、女性から金は取らなくても男は自腹だぞ？ 結構なホテルに泊まるからな。高校生の財政状況だと夏休み遊ぶ金が全て吹っ飛んでも足りるかどうか。それでもいいなら大いに参加してくれ。もちろん俺達は無料招待券があるから問題ないがな。わーはっはっは！」

高らかに笑う石井を尻目に数人のクラスメイトは苦い表情をする。「ねえ和人？ その話を私にも詳しく聞かせてくれない？」

「ヒイ……」

背中に嫌な汗がダラダラと流れる。入口の方を見れば笑みを浮かべている睦月の姿があった。

笑顔なのに目が据わっておらず、言葉では表せないプレッシャーが肌を刺激する。そのおかげで変な声が出てしまった。

怒り狂う睦月の後ろでは両手を合わせて「ごめん」と口パクをする貴明がいた。これはもう明日の太陽は拝めないかもしれない。

俺の側までくると胸倉を掴んで軽々と持ち上げる。

十センチほど俺は宙に浮き、それと一緒に息が詰まる。

全体的に細めの体のどこにプロレスラーもビックリな腕力が隠されているのか、その場にいた全員が疑問に思いながら場が静まり返る。

「た、助け、て……」

今にも消えて無くなりそうな俺の声で場の時間が再び進み始めた。

「か、和人を離してよ！ 彼女さんは何か勘違いをしているよ！」

「勘違い？ 私に内緒で彼女と一緒に旅行に行くのが勘違い？ それとも和人が生きている事が勘違い？」

「全部だよ！　ね、石井くん！？」

「そ、そうとも！　琴田さんをビックリさせようって内緒にしているただけだ！　ね、金田！？」

「森澤はサプライズで粋な計らいを計画していただけだとも！　ね、森澤！？」

コクコク。俺は薄れゆく意識の中、最後の力を振り絞って頷く。何だかんだ言っても最後は友達である。こいつらの助け船がなかったら今頃は気を失っていただろう。助けてくれた三人に感動した話を聞いた睦月は胸倉を離す。

数秒とはいえ、突然息を止められた俺の体はフラフラだった。両足で着地する事ができず、そのまま尻もちをつく。

「そうとは知らず……和人ごめんね！」

床に座っている俺の腹部めがけて突っ込んでくる睦月。

フラフラな体ではその威力を受け止められるはずがなく、そのまゝ後ろに勢いよく倒れ、後頭部を強打した俺の意識はそこで途絶えた。

「残り一枠どうする？　釜谷さんにもう一度挑戦するか、それとも加名盛さんを誘うか……。お前達の見解はどうだ？」

三時間目が終わってからの休み時間、俺達四人は再び教室の端で作戦会議をしていた。ちなみに二時間目は気絶したため保健室で過ごす事になった。

怒り狂う睦月をなだめるためとはいえ、当初の計画から少しズレてしまい睦月の参加が確定した。そして現在七名の参加者が決まっております、残りは一人となっている。

「俺はお前の意見に合わせる」

「石井くんの好みの問題だからね。僕も和人と同じ意見」

「以下同文」

俺、貴明、金田は全ての決定権を石井に託した。

「うむ。では加名盛さんを誘おうと思うが、それでいいよな？」



「了解。ただな、あのヒステリック娘を誘うならそれ相当の度胸が必要だぞ？」

「どうしてだ？」

「あいつって風紀に厳しいだろ？ 若い男女がイチャイチャしてみる。すっ飛んで止めに入る。それこそひと夏のアバンチュールとか言ってられない」

下校途中で何度それで追われたのやら。今となっては良い思い出には決してならないが、ヒステリック娘にも仕事があるから仕方ない。

石井は二重アゴに手を置いて考え始める。

「……それはよくないな。よし、なら釜谷にもう一度アタックだ！ 森澤と金田は失敗したから、村井に頼んでもいいか？」

「別にいいよー。んじゃ、ちよつと行ってくるね」

先ほどの失敗は俺達のミスだが、貴明に任せれば何とかなるだろう。かなり機嫌が悪そうに次の授業の準備をしている釜谷に近付き、耳元で何かを囁く。たったそれだけだった。

ほんの少し釜谷が考え、結論が出た所で立ちあがる。それから俺達の方に歩み寄ってくる。

「別にいいわよ」

俺達の目の前でフンッと鼻を鳴らして言い放つ。

「一応聞くが、何が？」

「か、勘違いしないでよねっ！ 別にあんた達なんかに興味はないけど、しょうがないから行ってあげるわ！」

「だから何が？」

「旅行よ！ 他に何かあるって言うのよ！ バ、バイトでいつも忙しいから、たまにはのんびりと旅行もいいかと思っただけよ！ 勘違いしないでよねっ！」

フンっともう一度鼻を鳴らして自分の席に戻って行く。

俺達は顔を見合わせ、軽いステップでこちらに歩いてくる貴明を見る。

「なあ、いったい何を言ったんだ？」

「ん？ 別に対した事は言ってないよ。ちょっと疑問に思っている事の真実を教えたただだよ」

意味が分からない。

再び三人顔を合わせるものの、頭に浮かぶのは「？」のマークだけだった。

「ふふふ、これで全員の了解が取れたんだから別にいいじゃない。それで旅行はいつにするの？」

それもそうだと、再び教室の端で旅行の日程について作戦会議を始めた。

2

今日の授業日程が全て終わり、朝西尾と約束したショッピングデートとやらで一駅先にある大型ファッションビルにやってきた。

以前からこのファッションビルに一度は足を運ぼうかと思っていたが、何せ家からだバスと電車乗り継いで行かなければならない。そのためいつも計画倒れして、今日初めてやってきた。

ファッションビルとだけあり、メインはブランド物の洋服屋となっている。二階と三階でレディース関係の店舗が建ち並び、四階にはメンズ物が売られている。一階にはオシャレなカフェや洋菓子屋で埋め尽くされている。五階には品そろえ豊富な本屋にゲームセンター、その他にも雑貨屋がある。六階は全てレストランなどがあり、見て回るだけでも一日は十分に堪能できそうだ。

駅周辺にあり若い層をターゲットとしているのか、辺りにはオシャレな大学生や学生服を着込んだ学生の姿がメインとなっている。近くのカフェではコップを片手に雑談を交わしている女子高生の姿もチラホラと見られる。

学校を出る時に睦月から色々と探られたが、石井と金田に頼んで口裏を合わせて睦月の手から逃れた。俺には前科があるため、ちょっとやそつと口裏を合わせたところで信用してもらえず、ものすごいジト目で見られたが、結論からいえば貴明の「彼女さんを喜ばせようと旅行の計画を三人で練っているんだよ」その一言で全て丸く収まった。

「へー、いろいろあって面白そうだな」

入口近くにある案内板に目を通しながら呟く。

「和くんは着た事ないの？」

「初めてだ。前から何度か貴明と一緒に来ようと思っていたけど、ぜーんぶ計画倒れ」

「私でよかつたらいつでも付き合うからね！」

「そりゃありがたい」

「うん！……そ、それでね、和くん」

珍しく煮え切らない態度で、そつと俺に手を差し伸べる。

これは……俺に手をつなげと？　こんな公共の場で可愛い西尾と平凡な俺が手をつなげと？　それは拷問というやつですよ西尾さん。俺にも甲斐性が少しでもあるなら、手だろうが何だろうがつかないであげられるけど、骨の髄まで平凡人生を今まで歩んできた俺に甲斐性はまるでない訳で、その気持ちに答えられそうにはまるでない。

どうしたものかとその手を見つめていると、ギュツと目を閉じて素早く俺の手を握ってくる。

「へへ。久しぶりに和くんの手だ」

その時浮かべた西尾の幸せそうな表情が可愛くて、俺は直視する事ができなかった。

「うっ……は、恥ずかしいから手をつなぐのは勘弁してくれ」

「だって和くんから手も握ってくれないし、キスもしてくれないし、ギューってしてくれないもん……。だから今日ぐらいいいでしょう？」

そう言われれば俺から手を握った記憶も、キスした記憶も、抱き

ついた記憶もほとんどない。大抵は西尾からのアプローチがあつての出来事だ。

「……そうだな、今日ぐらいいいかもな」

西尾は頑固だからな。ここは俺が折れないと。恥ずかしいけどこれもこれで悪くはないし、それに誰も俺達なんて見てないしな。

「うん！ 和くん初めてだから今日は私がエスコートしてあげるね！」

俺より頭一つ分小さい西尾に引つ張られるように歩く。これだと恋人というより、休日に仲良し兄妹が遊びにきたような感じかもしれない。いや、高校生にもなつて兄妹で手をつなぐ人はいないか。そしたら周りからどんな風に見られているのだろうか？ やっぱりカップルなのか？ まあ何でもいいや。どう思われても俺達がカップルなのには変わりはないからな。

道行く人から西尾限定で注目を浴びながら、エスカレーターに乗ってレディース物が売られている二階を目指す。

さすがはオシャレを愛す女性と言ったところだろうか。一階にもたくさん人が居たが、それとは比べられないほど人でごった返している。どこを見ても綺麗な大人の女性や学生服を着こんだ女子高生で、俺達のようにデート中のカップルもいるにはいるが、それでもごく少数だった。そんな彼らと違う点があるとすれば、彼らはデート慣れしている事だ。もう少し彼らを見習わないとな。

そして本日の目的である水着が売られている一角にやってきた。シーズン中だけの特設なのか、はたまた年中営業しているのかは分からないが、水着を売っている店舗の中には若い女性がまばらに入っている。

当たり前だがレディース売り場にメンズ品があるはずがなく、男性の姿は俺を含めて二人だった。俺より先に彼女に連れてこられたと思われる男性は、気に入った水着を服に当てている女性から一步引いた位置で気まずそうにソワソワしている。俺も後少ししたら同じ運命をたどるのかと思うと、かなり複雑な気分になる。

「なあ、俺ここで待っていたらダメか？」

後一步で店に入るところで俺からの提案。

「だーめ。和くんが気に入った水着じゃないと意味ないもん」

ですよね。そんな返事が返ってくるのは目に見えていたとも。

腹をくくりウキウキ状態の西尾に引つ張られて店の中に入る。

水着専門店とだけあり、ベビー水着から成人用水着まで幅広くおかれていた。もちろん全てレディース用だ。

種類も豊富そうでメジャーなビキニやワンピースを始めとして、ビキニより大幅に面積の広いが可愛いタンキニ、それこそ誰が着るのと言いたくなるようなセクシーなビキニ。花柄で可愛くあしらった水着もあれば、フリルのついた水着など、普通の水着だけではなく可愛い様々な水着がおかれていた。

子ども用の水着は可愛さがメインだが、西尾が着る成人用水着はちよつと大胆な作りになっており目のやり場に困る。

「和くんはビキニかワンピースどっちがいい？」

あれでもない、これでもないと言っていると水着を物色しながら西尾は言う。

「んー、ワンピースかな」

「ビキニはあまり好きじゃないの？」

「いや、好きか嫌いかと言えば好きだけど、西尾のビキニ姿を直視できる自信がない」

「ふふふ、なにそれ。だけど和くんがワンピースの方が良いって言うならワンピースにしよう。ビキニで悩殺したかったけど、今回は諦めるね」

その時ふと脳裏に以前見た西尾の下着姿が浮かんだ。下着もビキニタイプの水着もそれほど違いがなく、脳裏に浮かんだ姿だけで俺の頭はいつぱいいつぱいになる。「ビキニがいい」と言わなくて心の底から正解だったと思う。

頭の中が落ちついた所で何となく同士の彼の事が気になり、辺りをキョロキョロと見渡す。

名前の知らない彼と目が合う。

お互い口には出さないが、お互い大変だな。と言った感じのアイコンタクトを交わす。

「和くんこれなんかどう？」

最初に手に取った水着は、胸元が白色でそこから下にかけて徐々に黒くグラデーションがかっている。洋服のワンピースの用に横に広くスカートが伸びるのではなく、自分の体形を包むような形のスカートだった。それでも多少の余裕があるようでピチッと完全にくっついてはいない。それこそ洋服のワンピースを大胆にも、腰のあたりで切断したような感じだった。フリルなどは一切ついておらず、お上品なお姉さま系の水着を服の上から重ねるように見せてくれた。今までワンピースタイプの水着と言えば、競泳用水着をちゃちゃっと可愛くあしらった物だと思っていたが、最近ではこういったいかにもワンピースって水着がある事に少し驚いた。

「可愛いと思う」

ちよつとぶつきら棒だったかな。と言った後に後悔したが、それでも本音だ。西尾は俺とは違い顔がものすごく良い。黙っていればお嬢様にも見られなくもない。落ちついた大人の水着も結構合うものだと観察する。

「和くん気持ちがかもってないから次！」

俺の返事が失敗だったようで、ちよつと口を尖らせながら再び物色し始める。

「西尾的には何の水着が着たいんだ？」

あれこれ気に入った水着を探す西尾の背中に問いかける。

「ん？ そうだね……。ワンピースも可愛いけど、やっぱりビキニの方が好きかな」

「ならば、ビキニにしよう？」

「だってそれだと和くん恥ずかしがって見てくれないもん。それだと意味ないの。……。あー！ これどう！？ ビキニとワンピース別々にできるよっ！ 時と場合で変更できる優れものだよっ！」

次に見せてくれた水着は全体的に無地の白いワンピースだった。

それでもシンプルすぎず、胸元についた大きな黒いリボン、トップの上の方には大きすぎず小さすぎないフリルがある。トップからボトムにかけて透けてしまいそうな薄めのワンピースで、ボトムは胸元と同じ大きめのリボンが腰付近についたスカートだった。トップとボトムが別々になっているため、一見するとワンピースタイプと言ふより、ビキニタイプだった。さらにはワンピースとスカートを取り外してビキニとしても使える。その時の場面でワンピースになったり、ワンピースを取り外してトップとスカートにしたりと、はたまたビキニだけになったりと、三種類の着こなし方がある。

さっきのワンピースもよかったが、これはそれ以上にくるものがあった。それに西尾が着たがっていたビキニにもなるしな。

「それ凄く良いと思う。可愛くて似合っているよ、西尾」

「へへっ、ちよつと試着してみるね！」

次の返事は正解だったようで、西尾に手を引かれながら端の方に設けられた試着室まで連れてこられた。「ちよつと待ってね」と言い残して嬉しそうに水着を胸に抱いて試着室に入って行く。

それから直ぐの事だった。もう一組のカップルも気に入った水着が見つかったようで、彼女に手を引かれるように試着室にやってきた。彼女が試着室に入り、俺同様に試着室の前で待機している。

お互い顔を見て「ははっ」と何となく笑いあふ。

「彼女ですか？」

いかにも優男といった感じの彼はニコニコと笑みを浮かべて問いかけてくる。

「一応そのような関係ですね」

「すごく可愛くて羨ましいですよ」

「いやいや、チラッとしか見ませんでした、そちらの彼女も綺麗な方ですね」

「ははっ、外見だけはそうらしいですね。でも中身は酷いですよ。暴力振るうし、男勝りだし……。あと、彼女じゃなくて妹なん」  
直後だった。その妹らしい人の足が試着室のカーテンから伸びて

きて、そのまま優男の腹部にめり込む。優男は「うっ」と小さく呻いてからその場に膝をついた。

何と言う逆ドメスティックバイオレンスだろうか。まるで睦月と皐月を合体したような妹さんのようだ。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ははっ、慣れっこなので大丈夫ですよ」

その言葉に絶句する。

慣れっこだって？ 普段から暴力に物を言わせて兄をいいように使っているのか？ 恐るべし逆DV妹。失礼だが俺の身内には暴力を振るう人がいなくてホッとした。身内じゃなかったら一人心当たりがあるけどね。今日もその人のせいで気絶したし。

「……実は俺の家にも一人暴力を振るう子がいるんですよ。今日だってその子に保健室送りにされましたし」

「ほ、本当ですか!？」

「本当ですよ。お互い苦労しますね」

「全くですよ。どうして暴力を振るうのか僕には理解できません」

「うんうん。我が家の暴力女も西尾 彼女の名前ですけど、西尾みたいに素直な可愛らしい性格になってほしいですね」

「やっぱり女性には可愛らしい性格がいいですよ。ボーイッシュで暴力振るうから異性じゃなくて、同姓ばかり妹には集まるんですよ。全く兄としてアブノーマルな妹で恥ずかしい限りです」

店の床に座りながら二人でうんうんと頷き合っている時だった。

シャーと勢いよく試着室のカーテンが開いたと思うと、そこにはトップだけビキニ姿の鬼が立っていた。

「ヒィ」

優男の口から怯えきった声が漏れる。

実の兄からボロクソに言われて着替えの途中で我慢の限界がきたのだろう。

害虫を見下すように仁王立ちの優男の妹から異常なプレッシャーを感じる。ああ、この優男は確実にフルボッコだな。と人知れず俺



は思っただった。

「へー、お兄ちゃん私の事をそんな風に思っていたんだ。今まで知らなかった」

その声は迫力があり、無関係の俺も少しビビって正座になってしまった。

チラリと隣の優男を盗み見れば、元から色白の肌が蒼白になり、額に一つの汗が流れおちる。

「ははっ、軽い冗談に決まっていますよ」

「ふーん。私も軽い冗談でお兄ちゃんを殴りたくなってきたけど、別にいいよね？ 軽い冗談だし。私が出てくるまで大人しくしてるよ」

そしてカーテンが閉ざされた。中からゴソゴソともの凄いスピードで着替えている音が聞こえる。

「な、なあ、ここは逃げた方がいいと思いますよ」

コソコソと妹さんには聞こえないように呟く。

「それだけはダメです。逃げたら普段の倍以上やられます」

「酷い……。どうして妹さんは暴力を振るうんですかね？」

「愛情表現みたいです。前に一度聞いた事があります」

「なるほど、逆を言えば妹さんから好意を抱かれています？」

「らしいですね。実の兄を大好きって……。それこそアブノーマルですよ」

ははっと優男は苦笑う。

「少し前まで妹には内緒の彼女がいました。その彼女とデート中に妹とばったり会っちゃいまして、それこそ一方的な暴力でした。元彼女ともそれつきりです……。もう勘弁してほしいですよ」

かける言葉が見つからなかった。

それを最後に二人して黙り込んだ。

刻一刻と迫る妹からの暴力を優男は体を震わせて待っており、未来の想像でもしたのだろうか。小刻みに震えだした。

それから直ぐだった。

豪快に試着室のカーテンが開かれ、ちょっと派手なビキニを片手に仁王立ちで優男を見下す。

「お兄ちゃん。この水着気に入ったから買ってくれない？」

「は、はいー！」

優男の妹は未だに座っている優男の腕を握り締めて強引に立たせる。

そのままの状態でレジに行くと素早く会計を済ませ、無言のまま店から出て行った。

薄くなった財布を片手に力なく肩を落とす優男の後姿に合掌する。

「かつずくーん！ どうどう？ 似合う似合う？ へへっ」

さっきまでのやり取りを聞いていなかったのか、嬉しそうにカーテンを開けて西尾がクルンとその場で一回転する。着るまで気がつかなかったが、ワンピースを着ていても背中がぱっくりとセクシーに開かれていた。

緊迫した雰囲気から一変し、今にもお花畑を浮かべそうな西尾の行動にホッとした。

「あれ？ どうして正座しているの？」

「ん、何でもない。それより水着すごく似合っているよ」

「へへっ、ちよつと待ってね」

そしてモゾモゾとワンピースをその場で脱ぎだす。

「どうどう？」

トップとスカートになる。

ワンピースの時はそうでもなかったが、トップだけになると何と言いましょうか、胸が強調されたと言いますか……。ついつい視線が谷間に移るといいますか。いかんいかん。不純な思いで西尾を見るのは良くないな。

「うん、それも似合っている」

「へへっ、んじゃ最後はジャーン！ どうどうー!？」

素早くスカートを脱ぐと、そこには完全にビキニスタイルの西尾の姿が。

うつ、さつきはスカートで下半身を少し隠していたから何とかな  
ったが、それを脱いでしまつと胸の奥から悶々と何かが込み上げて  
くる。

「い、良いと思うよ」

直視する事ができず視線を床に落とす。

「悩殺された？」

「された！ されたから早く着替えてくれ！」

我慢できずカーテンを強引に閉める。

中から「うわっ」とビツクリした西尾の声が聞こえてきたが、直  
後に「へへっ、和くん照れちゃった」と聞こえてくる。

試着した水着をそのまま購入し、その足でせっかくだからと四階  
のメンズ売り場で同様に俺も水着を購入した。ちなみに西尾が選ん  
でくれたトランクスタイプの水着で、西尾とおそろいで可愛いしい  
フリルやりボンのついた水着……ではなく、割とセンスを感じるよ  
うな水着を購入した。

そして今は休憩を兼ねて一階にあるオシャレなカフェで俺はコー  
ヒー、西尾は抹茶ラテを美味しそうに飲んでいる。

長い事水着選びに時間を費やしたと思ったが、実際はそこまでだ  
った。今から帰ればもしかしたら最終のバスに間に合うかもしれな  
い。

「なあ、今から帰ればバスに間に合うかも」

何となく返ってくる返事は予想できるが、一応聞いてみる。

「和くんは私の家でお泊りでしょ？」

「いや、ほらあれだ。突然押し掛けても西尾のお母さんに迷惑かけ  
るだろ？」

「それなら大丈夫だよ。お母さんにはメールしたら喜んでいたよ」

何と強引な……。

「……ははっ、会うのが楽しみだ」

「変な和くん。それでこれからどうする？ せっかくだしもう少し

見て周る？ それとも私の家に行く？」

「その前に家に電話してきてもいいかな？」

「うん、私ここで待っているから行ってらっしゃい」

「りょーかい」

荷物をその場に置いたまま携帯電話を持って、迷惑にならないようにいったん外に出る。

睦月が出ませんように。と心の中で祈ってから家の番号に電話する。一応母さんは携帯電話を所持しているが、まるで機械がダメで電話をしてもほとんど出てくれない。

プルプルと呼び出し音が鳴る。

『もしもし森澤です』

「あつ、佳苗か？ 俺だ」

出てくれたのが佳苗でホッとした。

『兄さん？ 今日帰り遅いね』

「あー、ちよつと野暮用で今日は帰らないから、母さんにご飯いらないうって伝えてくれるか？」

『……お母さーん！ 兄さんが西尾さんの家に泊まるから明日赤飯ねー！！』

「ちよ、お前なに叫んでいるんだよ！？」

『だって本当の事でしょ？ あつ、睦月さーん。兄さんが西尾さんの家でお泊りだってー。明日は赤飯だってー』

さつきドタドタとうるさかったのは睦月の足音か。

背筋に汗が流れた。もう終わった。理由は知らないけど、睦月は西尾を嫌っている。そんな西尾の家に泊まると知ったら……。さつきの優男と同じ末路を歩むことになる。

『……和人？』

ドスの効いた声が聞こえる。

「む、睦月か？」

『帰ってこなかったら分かるよね？』

ミシツと不吉な音が聞こえてきた。

「お、俺は西尾の家に泊まらないぞ？ 石井の家に泊まるつもりだ」  
『なら石井くんに電話代わってもらえる？』

「琴田さん。石井だけど」

『ふざける暇があるなら帰ってきなさい。帰ってきたら許してあげるけど、帰ってこなかったら明日地獄を見る事になるから』

俺のモノマネセンスはまるでなく、速攻でバレてしまった。そして睦月はそれだけを言うと言電話を切った。

ツーツー。

ヤバイ。これは非常にヤバイ。このままでは明日学校で何をされるか分かったものじゃない。何としても帰らなければならない。俺の生命のためにも。

俺は西尾が待つカフェに走った。

「西尾ごめん！ 帰らないと睦月に殺される！ と言う訳でまた明日なっ！」

荷物をまとめて店から出ようとした所で腕を掴まれた。

振り返れば珍しく真剣な表情をする西尾の顔が目に入る。

「和くんは私より琴田さんの方が大切なの？」

「もちろん西尾の方が大切だ」

「なら別に帰らなくていいじゃない」

「睦月の恐ろしさを知らないから、そんな事が言える。今まで睦月に何度気絶させられた事か……。もしかしたら明日は腕の骨を折られるかも」

想像するだけで腕が痛みだした。

「あのね、和ちゃんと琴田さんとは一緒に暮らしているけど、私は学校でしか和くんと一緒にいられないの。デートだってたまにしかできないし、和くんの家に遊びに行っても琴田さんに邪魔される。私と和くんが二人っきりの時間はほとんどないんだよ？」

確かにその通りだ。仮にも俺達は恋人同士なのに、一緒にいる時間はほとんどない。学校でも睦月や貴明が俺の周りにまとわりついて、西尾と二人っきりにはまずならない。自分の体が可愛くて西尾

に酷い事したなと罪悪感を覚えた。

明日は素直に睦月に殴られようと思い、俺は先ほどの椅子に座り直す。

これでいい。俺と西尾は付き合っている訳だし、何を言われても睦月を優先する必要は全くない。

「今日は西尾とずっと一緒だ」

冷めきったコーヒを一気に飲み干す。

「和くん好き好き」

真剣な表情はもうどこかに行ってしまったようで、いつもの笑顔がそこに広がっていた。やっぱり西尾には笑顔が似合う。

「俺も西尾が好き好き」

かなり照れくさいが、別に構う事はない。俺達の会話を聞いている人なんて誰もいないわけだしな。

3

元から若く見えるのか、それとも化粧のおかげなのか区別がつかないが、西尾の母親は若々しく見えた。それでも俺の母さんと似たり寄ったりな年齢のため、二十代の前半とか二次元の特有の若さではない。ほんの気持ち程度の若さだった。

顔つきも西尾そっくりで、西尾が老けたバージョンが母親だった。娘は父親に似た方が美人になると言うが、これは母親に似て正解のように感じる。性格もどこことなく似ている点があり、それはもう二人同時に西尾を相手にしているような感じだ。非常に疲れる。

あの後すぐに西尾家にお邪魔し、歓迎ムードで西尾の母親が出迎えてくれた。それはもう引いてしまっぐらいの歓迎だった。普段の母親はどうか知らないが、彼氏の前で恥をかきたくない西尾は怒ってばかりだった。これはどこの家庭も同じみたいだ。

「ところでさ、森澤くんはマコちゃんどこまでいきました？ 詳しく聞かせてくださいよ」

そしてたたいまりビングで談話中だ。夕食をご馳走になり、先ほどから「マコちゃん」といつ付き合っただんですか？」「やら「マコちゃん」のどこが好きですか？」「やら飽きることなく色々な質問をされてきた。西尾のお母さんは西尾の事を「マコちゃん」と呼んでいるみたいだ。一つ発見した。

今までとは比べ物にならないぐらいストレートな質問に、俺は飲んでいたお茶を嘔き出しそうになる。

それを寸前で我慢して「どこまでいきました？」の意味を考える。先ほどまでのショッピングデートの事だろうか。それともキスまでやら、既に体の関係の仲だとか聞きたいのだろうか。俺の予想では後者だと思う。

「もう！ 変な事言わないでよっ！」

西尾も俺と同じ結論にたどりついたようで、顔を真っ赤にして机を叩く。

「キスしちゃいました？ それともその先までいっちゃいましたか？」

娘の話を全く聞く様子はなく、笑みを絶やさず問いかけてくる。俺にどうしろと？ 体の関係までいっちゃいました。とか何気なく言えばいいのか？ それとも話を濁すのが正解なのか？

全ての判断を西尾に託そうと見れば、何の迫力もない睨みで母親を見ていた。

「ははっ、ご想像にお任せします」

「教えて下さいよー。マコちゃんに聞いても教えてくれないし、母親としてマコちゃんの成長を見守りたいんですよ。私の予想だと、もうやっちゃったと思います。どうですか？」

何が嬉しくて彼女の母親と夜が更ける前に下ネタトークをしなくっちゃいけない。これは新手の拷問か？

「いい加減にしてよ！ 和くん私の部屋に行こう！」

我慢の限界にきた西尾は俺の手を引いて立ち上がろうとする。が、それを母親の手によって阻まれる。片方は西尾に掴まれ、もう片方は母親に掴まれている状態だ。

「ちゃんと話してくれるまで行かせませんよ」

「もう！ 別にお母さんには関係ないでしょ！」

「あるわよ。だってマコちゃんの初めての彼氏でしょ？ やっぱり気になるじゃない」

「キスまでよっ！ これでいいでしょ!？」

「ふふふ、体の関係までいっちゃいましたか」

「キスまでですー！」

「マコちゃんって嘘が下手すぎ。いつつも嘘ついたら顔にでるんだから」

そうだったのか。それは知らなかった。今度一度じっくり観察してみよつと。

母親に何もかも見抜かれて言葉にならない叫び声を西尾はあげる。

「そ、そだよ！ だから和くん離してよっ！」

満足そうな笑みを浮かべ俺の手を離してくれた。

「ふふふ、今夜はお楽しみね。後でパパに報告しなくっちゃ」

リビングから逃げるように出て行く俺達の背中と言い放つ。

「もう！ お母さんなんて大っ嫌い！」

最後にべーっと舌を出してリビングのドアを乱暴に閉める。

ドンドンと足を鳴らして階段を上り、二度目になる西尾の部屋に入る。

西尾は「もう」と呟いてからベッドにダイブする。俺は苦笑つてからベッドを背もたれにして床に座る。

「和くん、変なお母さんでごめんね」

顔だけをこちらに向けてそう言う。

「ははっ、ちよつとビックリしたけど、優しそうなお母さんだな」

「普段はね、あんな恥ずかしい事は言わないよ！ たぶん和くんがきて舞いあがっちゃたんだと思うの……」



「へー、それなら仕方ない。まあ、西尾の話をたくさん聞けて俺は良かったけど。ね、マッコちゃん」

「もう！ お母さんの真似しないでよっ！」

「そう怒るなよマッコちゃん」

「もう！ お母さんも和くんも大っ嫌い！」

「ははははは」

やっぱり西尾をからかうのは面白い。

そんな時だった。制服のポケットに入れてある携帯電話が震え始める。

石井からのメールだった。簡単に説明すれば、旅行の日程が今週の土曜日と日曜日らしい。夏休みに入って次の日から旅行となる。

割と人気のホテルらしくそう簡単に予約が取れないらしいが、運よく他の客からキャンセルが入ったらしい。そこに予約できたとか何とかメールに書かれてあった。

「なあ、西尾。今週の土日に行くらしいぞ。真奈美ちゃんに伝えてもらってもいいか？」

「ん、分かったよ。ところでさ、前々から気になっていただけ、どうして真奈美ちゃんは名前で呼ぶのに彼女の私は名字なの？」

ベッドに寝転がりながら携帯電話を操作し始める西尾。

「真奈美ちゃんの名字を知らないからだ」

「なら真奈美ちゃんの名字を知ったら名字で呼ぶの？」

「今更だからな……。名字を知っても呼び方は変わらないと思うぞ？」

「えー、真奈美ちゃんだけズルイ。……ならさならさ、私も名前で呼んでよ！」

メールを打ち終わったのだろうか、携帯電話をポイツと放り投げて身乗り出すようにベッドの上に座り直す。その表情はワクワクした子どものように輝いていた。

「マッコちゃん」

「ちーがーうー！ お母さんの真似じゃなくて、真琴って呼んで！」

「えー、恥ずかしいからイヤ」

「どうしてどうして！？ 真奈美ちゃんは恥ずかしくないの！？」

「全然。だって別に何とも思っていない人だし。好きな人だと恥ずかしくって名前で呼べるはずがない」

「ふふふ、って事は私が好きだから名前で呼べないって事だね。照れ屋さん」

「男は照れ屋だから仕方ない。マコちゃんなら呼べそうだけど、どうする？」

「もうそれはいいのっ！」

いい加減にしないと本当に西尾が怒りだしそうだし、もう「マコちゃん」と言うのを止めようと思った時、今度は西尾の携帯電話が震え始める。

「あれ？ お父さんから電話だ。どうしたのかな？」

俺の背中に一粒の汗が流れる。

そう言えば先ほど西尾のお母さんが「後でパパに報告しなくっちゃ」と言ったのを思い出す。大切な娘を見知らぬ男に取られ、大激怒の電話に違いない。

「な、なあ、西尾。もしお父さんに電話を変わるように言われても、俺は家にはいないって事にしてくれないか？」

「どうして？」

今にも通話ボタンを押そうとしている西尾に言う。

もちろん俺が西尾家にいると知れたら、娘のためだと仕事から帰ってきそうだし。そうなったらお終いだ。

「どうしてでも。ダメか？」

「別にいいけど……。変な和くん」

そして西尾は通話ボタンを押して携帯電話を耳に当てる。

心臓がバクバクなっているのが自分でも分かった。

「もしもし、お父さん？ ……うん、うん。和くん？ 和くんはいないよ。だって帰ったもん。……本当だって。……もー、お母さんから変な事聞いたでしょ？ あれはお母さんの冗談だって。……妖

精？ 私が妖精かって？ 私は人間だよ？ …… どうして泣いているの？ …… もー、お父さんのバカ！ もう大っ嫌い！」

そして通話終了ボタンを押す西尾。

なるほど、何となく話は見えてきたぞ。妖精とはつまりあれだ。口では言えないあれが未経験かって事で、西尾がそれを理解しないで「人間」と言った。つまり西尾のお父さんは勘違い 実際は勘違いじゃないけど、勘違いして号泣したと。その後に泣いた理由、つまりストレートに言った訳だな。お父さんの下ネタトークに怒って電話を切った。つまりはそういう事だろう。

西尾のお父さんが怒って泣いてしまう事に少し共感できる。もしミクちゃんに害虫が近寄って、何も知らない清き心に土足で入り込んだら俺だってブチ切れる。それこそ正義の鉄槌を浴びせても罪になるはずがない。うん、明日にでも貴明にミクちゃんの近況を教えてもらわないと。

それはもうプンスカ怒っている西尾は再びベッドに寝転がった。さて、いったい俺はどうしたものか。テレビもなければゲームもないこの部屋で、何をして時間を潰せと？ トーク限定？ 絶対に間が持たない自信がある。

そう言えば西尾が家に着た時は何をしていたっけ？ ああ、そっか。いつも睦月と喧嘩して気が付いたら寝る時間になっていた。

コンコン。

ドアがノックされる音が響く。

「マコちゃん。お風呂沸かしたから、森澤くんと一緒に入ってきたかい」

「もー！ お母さん変な事いわないでよ！」  
また怒りだした。

この家に入ってから常に西尾は怒っているような気がする。まあ彼氏がいる前で、ここまで親が暴走していたら怒りたくもなるか。  
「なあ、西尾。たまには一緒に入るか？」

「もー！ 和くんまで！」

「冗談だ。ほら、入ってきなよ。俺はここでボケーっとしているからさ。それに怒ってばかりで疲れただろ？」

「……うん。ちょっとお風呂に入ってくるね」

少し元気がない足取りで部屋から出て行く。

本格的にやる事がなくなった今、携帯電話を取り出して佳苗に電話をかける。

数秒呼び出し音になり、『どうしたの兄さん』すぐに機嫌が悪そうな声が聞こえてきた。佳苗は睦月の事が友達として大好きらしく、何かあれば睦月の肩を持つ。そのため西尾の事も得意ではないらしい。

「あー、睦月どうしている？」

『ご機嫌斜め。私の隣で和人のバカって言っているよ。睦月さんに代わろうか？』

そう言われれば確かに後ろの方で『和人のバカ』と何度も聞こえてくる。

「ん。代わってくれ」

『和人のバカ』

第一声がそれかよ。

「あー、睦月？ 旅行は今週の土日に行くらしいぞ」

『うつさいバカ』

「俺が嘘ついて西尾と出かけたから怒っているのか？」

『黙れバカ』

「確かに嘘をついたのは悪いと思っているよ。だけど正直に言ったらどうせ西尾と喧嘩するだろ？」

『西尾真琴は大っ嫌いだからする』

「あのなー、どうして嫌いなのか知らないけど、もう少し仲良くできないのか？」

『無理。だって大っ嫌いだもん』

だめだこりゃ、全く話にならない。

「そうかい。……あのさ、西尾に二人っきりの時間がほとんどない

って言われた」

『だからなに?』

「西尾とは付き合っているわけで……」

何て言えばいいか分からず言葉を詰まらす。

『イチヤイチヤしたいから邪魔するなって言いたいよね?』

「そうじゃないけど、たまにでいいから西尾と二人っきりの時間が必要と言うか……」

『へー、二人っきりで口では言えないあんな事やこんな事をしたいのね?』

「だからそうじゃないって。一緒に買い物に行ったり、喋ったり、ただ普通の恋人らしい事がしたいだけだ。ダメなのか?」

あれ? どうして睦月に了解を取ろうとしている訳だ?

そう言えば西尾に「和くんは私より琴田さんの方が大切なの?」

とも言われた。西尾と付き合っているのに、俺はどこか煮え切らない態度をとっている。こうやって睦月にも良い顔をしようとする。それも踏まえて言われたのかもしれない。俺って彼氏失格だよな……。

「やっぱり今の無し。西尾と二人っきりの時間を増やす。文句あるか?」

『開き直るのね』

「違う。俺と西尾は付き合っている。だから普通の恋人関係みたいになるだけだ」

『……話はそれだけ?』

「いや、これから本題だ。睦月って水着もってなかったよな?」

『だからなに?』

「あのさ、明日学校が終わったら買いに行かないか?」

彼氏失格とか思った矢先にデートの誘いとはえらく矛盾しているが、何せ睦月はパートナーだ。パートナーのご機嫌取りもたまには必要だ。そう自分自身に言い訳を言い聞かせる。

たっぷりと五秒ぐらいの沈黙。

『……別にいいけど』

ちよつと機嫌が直ったのか、声が少し弾んでいるように感じた。やれやれ、お姫様のご機嫌取りも楽じゃないな。

「りょーかい。んじゃ、また明日」

『私がいらないからって、西尾真琴とえっちー事したらダメだからねっ！』

「しねーよ！ 家に親いるんだぞ！」

『どーだか。男って隙あればオオカミになる生き物だしね』

「長いこと睦月と生活しているけど、一度も手を出してないだろ！？」

『それは私に隙がないからよ。心の中では毎晩ムンムンしているでしょ？ だってこーんな美人と毎日一緒の部屋で寝ていたら誰だってムンムンするって。自分に正直になっただらどう？』

「してねーよ！ 用件はそれだけだし切るな！」

返事を待たずに通話終了ボタンを押す。

やれやれ、機嫌が直ったらこれだよ。睦月は本当に俺をいじめるのが好きなようだ。まっ、これでいつも通りの関係に戻ったみたいだし良しとしましょう。

何事も平和が一番ですよ平和が。

電話を終えてから大体四十分ほど退屈な時間を過ごし、西尾が風呂から帰ってきた所で交代する。

普段から長湯するタイプではないが、何があっても対処できるようにと、それはもう体の隅々まで綺麗に洗った。睦月に親がどうのこうのと言ったが、下心がまるでないとは言えない。一般の男子高校生なら当たり前だ。許されるならどこぞの怪盗のように、「まっことちゃーん」と言いながらダイブだってしてみたい。

体を何度も洗いながらピンク色の妄想が頭をよぎり、湯船につかれば「さっきまで西尾が……」と中学生みたいな事を思い、その結果すっかりのぼせてしまった。

ボーっとする頭で西尾の部屋に帰還する。ちなみに服は西尾兄のを借りている。その西尾兄の姿を見ないので、今日は帰ってこないらしい。

西尾の部屋には布団一式が追加で敷かれていた。ホッとした反面、少し残念のような気もする。

特に何かをする訳でもないのに、今は電気を消してそれぞれの布団の中に入っている。ただ、普段ならバリバリ活動している時間帯なので、眠気は全くない。西尾もそうなのか、先ほどからモゾモゾと寝返りばかりうっている。

「なあ、西尾？」

「なーに？」

「いつも家で何しているんだ？」

最近すっかり忘れていたが、西尾は勉強がとてできる。テレビがないのもそれが理由かもしれない。

「ん、宿題とか予習復習とか？　今まで気にしてなかったから分かんないや」

「ははっと恥ずかしそうに笑う。」

「和くんは？」

「そうだな……。俺も普段考えないから分かんないけど、睦月とゲームしたり、屋根から星空を見たり、後はそうだな……。ミクちゃんに会いに行ったりかなー」

「ミクちゃんって誰！？」

「貴明の妹。これがすっごい可愛くてさ、写メあるから見てみるよ！」

ミクちゃん専用のフォルダを開く。そこには俺がミクちゃんを抱っこし、お互い頬をスリスリしている姿がディスプレイに映っている。その後ろにこっそりと石井がピースしていた。昨日プールの帰りに撮ったやつだ。プールで写真を撮ったら事務所に連行されるかな。

ベッドの端に腰かけ、西尾の顔に携帯電話を近づける。

「昨日さ、ミクちゃんをプールに連れてってあげてさ、その帰りに撮った！ な、可愛いだろ！」

「ちよつと待って、昨日って確か用事があるから遊べないって言うてなかった？」

あつ、そう言えばそうだった。

「ははっ、溺愛する愛娘をプールに連れて行きたかった父親心と言いますか……」

「あり得ないと思うけど、和くんってそっち系？」

「いやいや、それはないから安心しろ。ミクちゃんは愛娘のカテゴリに入るから大丈夫だ！」

「なにそれ……。だけど浮気じゃなくてよかったー」

「浮気は絶対にしないから安心しろ。西尾も浮気だけはダメだぞ？ するならするって事前に言ってくれ」

「言ったら許してくれるの？」

その場面を想像。うん、絶対にショックを受ける自信があるな。

「……もう寝る」

携帯電話を枕元に置き、西尾に背を向けてタオルケットを被る。

「怒った？」

「違う。西尾が浮気する想像して落ち込んでいるだけだ」

「ぷっ、和くんカワイー。……私も浮気しないから大丈夫だよ」

その返事を聞けて俺はホッとした。

「ん。……おやすみ」

「おやすみなさい、和くん」

たまにはこんな風に違う夜を送るのもいいかもしれない。

眠くはないけど目を閉じていたら知らぬ間に寝ているだろう。そう思いギュッと目を閉じる。

「普通に寝ちゃうとかつまんない」

「！？」

ドアの方から声が聞こえたような気がする。西尾も勢いよくベッドから体を起こしている。



「お母さん！」

悪そびれた感じはなくニヤニヤしながらドアを開けて顔だけ覗かせる。

「あら、別々で寝ているのね。ふふふ、お母さんの事は気にしなくてもいいのに」

「もう！ 何やっているのよっ！」

「森澤くん！」

えっ？ 俺ですか？

夕食時もそうだったが、西尾のお母さんはあまり話を聞かないようだ。

「……なんでしょうか？」

「マコちゃんは待っているよ！ 男の子だったら行かなきゃ！」  
そうだったのか！

「早く出てっ！」

またプンス力怒った西尾はドアに向かって枕を投げる。

「ふふふ、お母さんはもう寝るからね。もうこないから安心して。おやすみー」

ドアを閉めて直撃を回避し、トントンとリズムよく階段を下りて行く。

そうだったのか。西尾は待っていたのか。

「なあ、西尾？ 待っていたのか？」  
ついつい聞いてしまった。

「もう！ 和くんも変な事いわないでよっ！」

「だって西尾のお母さんが……。実際はどうだ？ そういった経験全くないから分からなくて……」

「ないですー！ お母さんがくる前だったらありだけど、もう絶対ないです！」

「なるほど、次から気をつけます」

本音を言えばちよつと残念だったかな。

まあ恋愛は体の関係が全てじゃないからな。ここは気を長くして

待ちましょう。

4

それから旅行前日の金曜日まで瞬く間に日がすぎていった。

約束通り睦月と一緒にファッションビルまで水着を買いに行ったし、違う日には旅行に必要な物まで買いに行った。

そして寝る前に睦月と旅行の準備をしている訳なのだが、

「私ってひ弱で湯飲みより重たい物をもった覚えがないの。だから和人の鞆に私のも入れてよ」

睦月は準備する気がないようで、お決まりのメイド服でお茶をすすっている。

「あのなー、俺達は別々の部屋だぞ？ それなのに俺の荷物に睦月のがあつたら不便だろ？」

「いつもみたいに和人と一緒に寝るから大丈夫」

「大丈夫じゃねーよ！ 男と女の部屋は別々、どうしても分かるよな？」

「睦月わかんない。どうして別々なのか詳しく教えてよー」

それはもう憎らしいほどのぶりっ子だった。

「この似非メイドめ。俺をからかって面白いか？」

「からかってないもん。ねーねー、教えてよー。和人お兄ちゃん」

ミクちゃん限定だとグツとくるが、睦月が言っても何も感じない。

睦月は妹キャラとしては落第点だな。まあ実の妹がいる兄は高確率で妹属性はないと言える。なぜなら妹の暴君ぶりに世の兄は手を焼いているからな。

やれやれと、準備をいったん中止して睦月に向き直る。たまには悪ノリにマジになって返してみるか。

「あのな、もしだ。もし俺と睦月が一緒にベッドで寝るとする。そ

のベッドの近くにはクラスメイトの男子がいる。あり得ないだろ？」

「見せつけばいいじゃない」

「……おーけー。分かった。そっちがその気なら俺もとことん説明してやる。まず正座しろ正座。……ストレートに言えば、付き合ってもいない男女が一緒のベッドで仲良く寝るのはおかしい。仮に俺達が付き合っていたとする。それでも人目つてもものがある。それがクラスメイトなら尚更だ。分かるな？」

「ならどうして普段は大丈夫なの？」

「そうきたか……。よし、こうしよう。今日から別々の布団で寝る事にしよう。親の目を欺くために今まで一緒に寝ていたが、もう欺く必要はないと思う。睦月と皐月はベッド、俺は床で寝る。そもそも一人用のベッドを三人で使うこと自体が異常だったな。これで普段通り別々になる」

「睦月もう和人お兄ちゃんが隣にいないと寝られない体なの」

「お前だったら一日もあれば克服できるだろ？」

「睦月できなーい」

「……なあ、いつまでこの茶番に付き合わないといけないんだ？  
いい加減飽きてきた」

「和人お兄ちゃんが一緒に寝るって言ってくれるまで」  
なんてこった。

こんな時に限って皐月は留守　詳しく言えば三日ほど見てないし、どう收拾すればいいのか俺には分からない。いつそ一緒に寝るか？　そうなれば西尾とは破局するだろうな。

「……もしかしたら寝ている睦月にイタズラするかもよ？」

「和人お兄ちゃんはヘタレだからしないよ」

真実だけど面と向かって言われるとグサツとくるな。

「俺がしなくても必ず石井はするぞ？　きつと寝たふりして、こうモミモミと」

エアーモミモミを実演する。

「和人お兄ちゃんならいいけど、もし石井の変態が私に指一本でも

触れたら屋上から吊るす」

目が真剣だった。「石井の変態が」の辺りから恐ろしくドスの効いた声になり、思わず情けない声を上げてしまった。

睦月が嘘や冗談で言っているのではないと直ぐに分かる。

「む、睦月さん。今後一切、何があっても睦月さんには決して触れないし、俺からは決して話しかけないので、どうか勘弁して下さい」  
触らぬ神に祟りなし。

俺がここまで嫌がるのには理由がある。高い場所が得意ではないからだ。家の屋根ぐらいなら大丈夫だが、それ以上の高さとなると話は変わる。足がすくんでその場から動けなくなる。ついでに息もつまるおまけつきだ。そんなに酷くはないが、どちらかといえば高所恐怖症だ。もしホテルの屋上から吊るされたら……考えるだけで手足が震えてくる。

「だから和人お兄ちゃんはいいつて言っただじゃない」

なるほど、それは俺を落とし入れる罠だな？ 言葉では優しい事を言っても、なんたつて暴力女だ。きつと佳苗から高所恐怖症の事を聞いたに違いない。

それから無言で荷物をテキパキとまとめる。もちろん睦月が用意した荷物もまとめてだ。適当にそこらへんに放置し、一階の客間に行く。無言になっても「和人お兄ちゃん」と甘えた声で何度も話しかけてくるが、知らない顔をして回避した。

客間の押し入れから客用の布団を取り出し、この家唯一の安全地帯に向かう。

コンコンコン。

「ちよつといいか？」

安全地帯。それは佳苗の部屋だった。

どういうわけか、佳苗の部屋だけ鍵がある。きつと元が両親の部屋だったので、そのせいだと思う。

ガチャリと施錠が外れる音がし、ゆっくりとドアが開かれる。

「兄さんどうし うわっ！」

有無を聞かず強引に部屋に侵入。

久しぶりにこの部屋に入ったが、なかなか整理されていた。かなり前に入ったきりだったが、部屋に置かれたぬいぐるみも増えているような気がする。後は全体的にメルヘンチックといえますか、ちよつとピンク色の割合が多い。それに部屋に入った途端に香水の匂いがした。このド田舎の古びた家には不釣り合いな部屋だった。

手際良くコタツ机を足で壁際に移動させ、開かれたスペースに布団を敷く。それからドアの力ギを施錠し準備は整った。

「そういう訳で泊めてくれ」

布団に腰をおろして言う。

「はあ！？ 意味分かんない！ どうして私の部屋にくるわけ！？」「うむ、これには深い理由があつてだな。取り敢えずお茶くれるか？」

「ある訳ないでしょ！ それよりさつさと出て行けー！！」

「分かった。お茶は諦めるから、今日は泊めてくれ」

「いや！」

「理由だけでも聞いてくれ？」

「……話してみ」

「ん。睦月がな、指一本でも触れたらホテルの屋上から吊るすつて言うんだ。鬼だろ？ だからここに避難してきた」

「そう言えば兄さんって高いところ苦手だったね。睦月さんは知らないの？」

「的が外れた。てつきり佳苗が言ったのかと思つたが、それは誤解だつたようだ。」

「すまん。心の中で謝罪しておく。」

「分からん。どうあれホテルの屋上から吊るされる訳にはいかない」「どうしてホテル？」

「うむ、言つてなかつたが明日から睦月と旅行だ」

「はあ！？ 睦月さんと二人で？」

「クラスメイトも一緒」

「……そりやそうか。兄さんに甲斐性ないからね」

コンコンコン。

ドアがノックされる音が響く。

「何があつてもドアを開けたらダメだぞ！」

「睦月さんがせっかく迎えにきたんだから、少し話してみれば？」

「ダメに決まっているだろ！」

「あのね……睦月さんは兄さんが高いところ苦手って知っていたら言わなかったと思うよ？」

「それでも俺は睦月に宣言したからダメだ！」

いつまで経つてもドアが開かない事に苛立ちを覚えたのか、乱暴にガチャガチャとドアを開けようとする音が聞こえる。

「和人お兄ちゃ〜ん。早く開けてよぉ〜」

睦月の声に俺は急いで布団の中で丸まった。

「えっ、兄さんって妹萌？　ちよつとこの部屋から出てってくれない？」

「断じて違う！　睦月が勝手に言っているだけだ！」

かなり引いている佳苗に声を荒げて言うが、はたして俺の切実な想いが伝わったのかは分からない。

しつこく「和人お兄ちゃ〜ん」と言う睦月の声が聞こえるたびに「ひい」と怯えた声を発する。

ガチャリと施錠が外れる音が聞こえる。

布団の隙間から覗けば、佳苗がドアを開けているところだった。

「兄さんなら布団の中だよ」

鬼だ。ここにも鬼がいた。

「さーて、部屋に戻るよ和人お兄ちゃん」

終わった。俺の人生ここまでだ。明日は思い残す事無く西尾と遊んで、それから遺書を書かないと。後は睦月にホテルの屋上から吊るされると。さようなら、長いようで短かった俺の人生。

「ひい！　……佳苗助けて！」

「睦月さん、あまり兄さんを怒らないであげて。兄さん高いところ苦

手だから、少し敏感になっっているんだよ」

ナイスフォローだった。妹との付き合いは長いが、初めて俺を庇ってくれたような気がする。

「ぷっ、和人って高いとこダメだったんだ。良いこと聞いた」

「止めてくれ！」

「どうしようかなー。和人お兄ちゃんが一緒に寝るって言わないと、ホテルの屋上から吊るしちゃうぞー」

「ひい！」

「それとも西尾真琴と別れないと吊るそうかなー」

俺の反応を面白がっているのか、笑いながら脅してくる。

「む、睦月さん。いい加減にしといた方がいいよ」

「ん？　なんで？　だって和人お兄ちゃんおもしろ」

「もう睦月とは喋らん。睦月なんて嫌いだ」

睦月の言葉を遮って呟く。

ちよつと子どもっぽい反応にますます面白がって睦月の笑い声が響く。

「遅かったか……。睦月さん、それ笑い事じゃないよ」

「どういうこと？」

「兄さんって普段はあまり怒らないけど、一度怒ったら根に持つタイプなの。聞いた話だけど、中学の時もそれで友達と卒業まで一言も喋らなかつたらしいよ。友達が謝っても無視して、それっきり」

間違いない。今では顔も名前も覚えてない。

「えっ？」

「冗談とかじゃなくて、兄さんと睦月さんたぶん破局するよ」

「ちょ、ちよつと和人。冗談だってば、謝るから機嫌直してよ」

睦月は焦ったように声を震わせ、布団を揺する。

もう知らん。今まで何度も暴力を振るわれたり、からかわれたりしてきたが、もう我慢の限界だ。やってられるか。

「佳苗！」

「はいはい、兄さん。……えつとね、兄さんは私に任せて睦月さん

は兄さんの部屋に戻ってもらってもいいかな？」

「でも！」

「睦月さんの気持ちも分かるけど、ここは私に任せて。何とかしてみるからさ」

「でもね！」

「睦月さん！」

佳苗の強めの口調に「……うん。和人ごめんね」としょんぼりした声音で言い残し、ほどなくしてドアが閉まる音がする。

大きなため息をついて佳苗は俺の側に腰を下ろす。

「睦月さんに原因があつたけど、兄さんも少し大人気なかつたんじゃない？」

「ふん、俺は悪くない」

「そりゃそうだけど……。睦月さんだつて反省していると思うよ？」

「もう知らん」

「睦月さんとのままでいいの？」

「西尾がいるから問題ない」

「ほんとに兄さんは……。そのお怒りが収まったら一度睦月さんと話し合つてみなよ」

「イヤだ。俺はもうあいつとは喋らない」

「あいつねー。まっ、今日はここで寝てもいいけど、旅行から帰ってきたら自分の部屋で寝てよね」

「あいつが俺の部屋から出てったらそうする」

「ほんと兄さんはいつまでたつても子どもなんだから……」

「うっせー」

\*

\*

耳を澄ませば隣の部屋から聞こえてくる森澤和人の声を聞きなが



ら、睦月はベッドの上で膝を抱えて落ち込んでいた。

こんな事になるぐらいなら「和人お兄ちゃん」と言って遊ぶんじやなかったと、今になって後悔が押し寄せる。

最近なにかと 詳しくは森澤和人が彼女の西尾真琴の家に泊まった日から、二人の時間を増やすようになった。学校の中でも、放課後でも、こっそりと会っては楽しそうに談話している。二人は隠しているつもりでも、元から目立つ西尾真琴と大根役者の森澤和人だ。周囲には二人が密会している事はバレバレだった。

家では一緒だが、それ以外では一緒にいる時間がほとんどなかった事に睦月は動揺し、そして嫉妬していた。

何度二人を邪魔しても、何度酷い事をして、森澤和人は諦める事無く彼女の元に向かい、そんな睦月を非難せずたまに気を利かせる。

和人なら、きっと和人なら、と自分に言い聞かせて何をしてても笑って許してくれる森澤和人に睦月は甘えていた。

最初はほんの出来心だった。森澤佳苗から「高いところが苦手」と聞いた時、今回も許してくれると甘えていた。だけど結果はどうだろう。苦手な事に物を言わせて森澤和人を怒らせてしまった。

心の奥底で西尾真琴から森澤和人を奪い取ろうとしていた。

それはとても醜い方法だった。ギョツと森澤和人の匂いが残っている掛け布団を握り締める手に力が入る。

以前霜月と戦った時、森澤和人が好きなのだと自分の思いに気がついた。

本来なら学校と休日での付き合いの西尾真琴より、一緒に生活する睦月の方が断然有利だった。それでも森澤和人の想いは常に西尾真琴に向いている。

家で二人っきりの時は甘えてみたり、先ほどのような茶番で遊んでみたり、一緒にゲームをしてバカ笑いしたり、晴れた日は屋根に上って星空を見たり、色々な事をしてきた。それでも睦月の理想とする結果にはならなかった。

それに明日から旅行も控えている。

もしかしたらそれが一番の原因だったかもしれない。

海水浴の時は必ず西尾真琴と一緒にいるだろう。一日中一緒にいる訳だし、夜に密会だってするかもしれない。そうなれば森澤和人の心に睦月の居場所はどこにもなくなる。それが怖くて、これ以上二人の仲が良くなるのがイヤで、睦月は焦っていた。

「……兄さんと睦月さんたぶん破局するよ」

先ほど言われた森澤佳苗の言葉を口にする。

そして中学生時代にあつた出来事を思い出す。

もう好きな人と喋る事さえできないかもしれない。そう思うと途端に胸が締め付けられて涙が込み上げて、掛け布団を頭から被って膝で顔を隠す。

その後は考えたくもない未来を想像してしまう。

最も考えたくない未来、それは唯一の通じ合っている契約を切られないかだった。契約を切られれば、それこそ森澤和人の側にいる意味を無くしてしまう。

怖かった。

霜月に魅せられた世界より、西尾真琴とイチヤイチヤしている姿を見るより、どんな事よりもそれが一番怖かった。

「……ダメ元で和人に謝りに行こうかな」

ボソリと呟く声は震えていた。

森澤佳苗の言った通り、何も行動を起こさなかったら二度と森澤和人が喋ってくれないかもしれない。手遅れになる前に、さっさと行動に出た方がいいような気がして睦月は立ちあがる。

充血した瞳をゴシゴシと袖で拭い、森澤佳苗の部屋のドアをノックしようとする。

が、それは寸前で止まった。

行動を起こすにしても何て言えばいいか全く分からなかった。

下手に言って意地になっては取り返しがつかない。それこそ終わりである。

「和人は私の気持ち知っているのかな……」

睦月が好きだと言ったのは、初めて自分の気持ちを知った時だけだった。その時の森澤和人はほとんど眠っていて聞いておらず、そのため睦月が西尾真琴の事が嫌いな理由も知らない。

「私の気持ちを知ったら、今の関係が少しは変わるかな？」

ギュツと拳を握る。

「……決めた。私の気持ちを伝えよう。それでダメだったら……その時にまた考えよう」

気持ちが揺らぐ前にドアをノックする。

返事を待たずにドアを開けた。

森澤和人は未だ布団の中に引きこもり、その隣では驚いた表情の森澤佳苗の姿があった。

「む、睦月さん」

「ちょっと和人借りるね」

「だけど兄さんは……」

「いいの」

丸まっている森澤和人を布団ごと持ち上げると、いそいそと部屋から出て行く。

森澤和人の自室のベッドに優しく置いて、ベッドの縁に腰かける。ゆっくりと布団を退かそうとすると、布団を握り締めて森澤和人は反抗する。それを強引に引き離す。

いかにも話を聞きませんよと、睦月に背を向けるように寝転がる森澤和人の腹部に手を置く。

「さつきはごめんなさい」

「……」

つい先ほどの出来事のため、森澤和人の決意は固いかのように思われるが、心のどこかで許そうかな。と思う部分があった。それでも直ぐに、ダメだダメだと心の中で首を振る。

「ねえ、どうして私が西尾真琴を嫌っているか知っている？」

「……」

無言だが体をビクツと振るわせる。

今までどうして睦月が西尾真琴を嫌っているのか考えた事があり、考えても考えても森澤和人には分からなかった。何度も「仲良くしろよ」とも言った。それでも結果が変わらない。その答えが聞ける事に内心興味津々だった。

「女の私から見ても可愛いからム力つく。性格だつて素直に甘えられてム力つく」

くだらない。そんな理由だったのか。

予想外……いや、ほとんど予想通りの答えに森澤和人は毒つく。

「だけど一番ム力つくのは……」

そこで睦月が黙る。

自分の想いを伝えるのが直前で怖くなったのだ。

彼女がいるから拒絶される。そしたらもう元の関係には戻れないかもしれない。怖くて怖くて睦月の手が震える。

「あのね……」

また今度。今日はもう無理だから今度にしよう。逃げる言い訳を言い聞かせ、終いには逃げ道を探し出そうとしていた。

「だけど本当にそれでいいの？ 今言わなかったら次はいつ？ 同時に逃げようとする自分を非難する思いも出てくる。」

言い訳と、それを非難する思い。

睦月が出した結論は後者だった。

「……」  
「だけど一番ム力つくのは西尾真琴が和人と一緒にいること」  
「勇気を振り絞って言う。」

その言葉に森澤和人の反応は当たり前だがない。だけど心の中ではその意味を考えていた。

「和人と西尾真琴がイチャイチャすると泣きたくなる。和人と西尾真琴が二人で話しているとイライラする。和人と西尾真琴と一緒にいると胸が苦しくなる……。言っている意味、分かる？ もう私の中は和人でいっぱいなの。耐えきれないの……」

「……………」

その言葉の意味を理解して森澤和人の頭の中は真っ白になる。

それはつまり、

「俺の事が好き？」

睦月の顔は見えない、睦月と喋らないと思っていた森澤和人だが、その不意の事実にてを起して睦月の真つ赤な目を見据えながら呟いていた。

「んーん、大好き。……和人の弱みを知った時、もしかしたらそれで西尾真琴から和人を取り返せるって思った……。私ってズルイよね？」

「……………」

「和人は私の事どう思っている？」

「俺は西尾と……」

「そうじゃなくて、私のこと好き？ それとも嫌い？」

「好き……だけど……」

その言葉に偽りはなかった。

ただその好きは異性としてなのか、それとも友達からしてなのか、それは答えた本人にも分からなかった。それともその言葉は偽りで、雰囲気ですべてしまったのかさえ、頭の中が真つ白の森澤和人に区別はつかない。好きという単語だけが頭にあつたから答えたのだ。

「良かった」

ホッと安堵する睦月の表情にドキッと森澤和人の胸が高鳴る。

「だから、だからね。和人に嫌われたくないの。話せないのはイヤ。

……………だから許して」

「……………うん」

無意識に頷く森澤和人がそこにいた。

嬉しさからギュッと抱きついて森澤和人をベッドに押し倒し、頬と頬がくっつくほど密着する。

「これが私の気持ち」

耳元で呟き、やさしく森澤和人の頬にキスをする。

「これが今の私の精一杯。絶対に西尾真琴には負けないから」

最後に「おやすみ」と呟き、呆然と天井を見上げる森澤和人を置いて睦月は部屋から出て行く。

嬉しいか嬉しくないかの二択なら嬉しいと森澤和人だつて即答できる。

それでも彼女がいるのに、自分に好意を寄せる人と同居している。その事実が変わらず、それが言葉として理解した途端どうやって睦月と関わればいいのか森澤和人には分からなかった。

ただ未だに天井を見上げる森澤和人の胸の中は悪い気どころか、嬉しさで満たされていた。

「兄さんと仲直りできました？」

一時は不安だつた森澤佳苗も、頬を緩めて部屋に入ってきた睦月を見てつられて頬を緩めます。

「うん、できたよ」

森澤和人の部屋から出て数秒は思う事がたくさんあり、ドアに背を預けて気持ちの整理をしていた。

自分の気持ちを打ち明けて恥ずかしい気持ちと、仲直りができて嬉しい気持ち、それから西尾真琴に負けないという決意の気持ち、それぞれの想いが胸の中で交差する。

それでも睦月の表情は笑顔だつた。

言えて良かった。仲直りできて良かった。これで西尾真琴の邪魔をする理由が伝わった。それは今の睦月にとって全てプラスになる出来事だつた。

そして今はその高揚感に浸っていた。

満更じゃなさそうな森澤和人の表情を思い出し、睦月はクスリと笑う。

「どうやってあの頑固者を説得したんですか？」

「頬っぺにチューしてあげただけ」

「えっ？ それだけですか？ 唇じゃなくて頬つぺた？」

実に意外そうな表情で森澤佳苗は睦月を見る。

「それが今の私には限界だから……。その先は西尾真琴から和人をとつてからの楽しみ」

「そうですね。なら明日は兄さんにアタックですね！ 一日中兄さんの大好きなポニーテールにして、ビキニで悩殺すれば頑固者でも簡単に落ちますよ！」

「そうかなー。そうだと嬉しいかな」

えへへ、とにやける睦月。

「私は睦月さんの味方ですから、今から明日の作戦会議ですよ！ あの浮気者を睦月さんだけメロメロにしちゃいましょうね！」

「うん！」

それから打倒西尾真琴の旗を掲げ、世が更けるまで二人で作戦会議をしていた。

時々未来の想像をしては睦月の下品な笑い声が部屋に響いたのは内緒である。

\*

\*

森澤和人と睦月が喧嘩した頃と同時刻の西尾家。

「パパは許しません！ マコちゃんが旅行に行くなんて、ぜーったいに許しませんよっ！」

修羅場と化していた。

母親には前もって旅行に行く事を伝えてあったが、父親には前日の夜になつても秘密にしていた。

理由は簡単である。

西尾真琴の父親は超がつくほど甘く、超がつくほど溺愛しているからだ。それは森澤和人が村井ミクを溺愛しているのと同義でもある。

る。

そんな愛娘がクラスメイトと一緒にとは言え、彼氏と一緒に旅行に行くのを許すはずがなかった。

それを見越して今まで秘密にしていたが、母親の失言「明日から森澤さんと一緒にしょ？ 早く寝ちゃいなさい」の一言で秘密が表に出てしまった訳だ。

いい歳になつてダダをこねる実の父親を、面倒くさそうに西尾真琴は見つめてため息を一つ。

夕食の途中に母親の失言から秘密がばれてしまつてから、もうあれこれ三時間ほど父親のダダが続いている。

そんなに長い時間イスに座っているため、いい加減お尻が痛くなっているのを我慢する。

「どうしてパパはマコちゃんを旅行に行かせたくないの？」

もう何度目かになる母親からの質問だった。

「だってパパ寂しいもん。それにパパのマコちゃんを奪つた変態野郎と、可愛いマコちゃんと一緒にしたら不安で不安で夜も眠れないもん」

それもまた何度目かになる父親からの答えだった。

「あらあら。でもね、パパ。マコちゃんのファーストキスと初体験は森澤くのだし、ここは許してあげたら？」

何をどうすればそれで許されるのかは分からないが、その禁句によつて父親はプルプルと小刻みに震える。そして西尾真琴も違う意味で震えていた。前者は怒りによるもので、後者は恥ずかしさからくるものだ。

「パパは許しません！ こうなつたら変態野郎をこの手で葬つてくれるわっ！」

「いい加減にしてよっ、お父さん！」

「だってマコちゃんはパパとママの大切な娘だし……」

「お兄ちゃんはどうなの！？ お兄ちゃんが家に帰らなくても何にも言わないくせに！」



「だってお兄ちゃんは男の子だし、少ししか愛してないし……」  
何とも酷い言いようである。

これではらちが明かないと、西尾真琴は乱暴にイスから立ち上がる。

「明日絶対に旅行いくもん！　おやすみっ！」

フンッとそっぽを向いてリビングから出て行こうとする娘に「マコちゃん」母親が呼びとめる。

「どこに行くのかは分からないけど、あまり羽目はずしすぎて怪我をしないようにね。だけど森澤くんとはちゃんとして、夜にはめ合うのよ」

下ネタ全開の母親であつた。

顔を真っ赤にした娘の反応を楽しむかのように、母親は薄らと笑みをこぼす。

実は父親に内緒で森澤和人が西尾家に泊まってからというもの、どういう訳か母親の調子はこのような感じだった。以前の母親からは想像もできないほど、今はぶっちゃけトークを楽しんでいる。

父親もそうだが、これだけ下ネタトークを言う実の母親。これは娘として悲しくもあり、恥ずかしさもあり、不憫であつた。

「なっ、パパはぜーったいに許しません！　マコちゃんの体に指先でも触れようもんなら、変態野郎をボコボコにしちゃう！」

「そんな事を言っていると、マコちゃんに嫌われちゃいますよ？」

「それでマコちゃんの清き体が守られるならいいもん！」

「もう、パパったら……」

そんな二人のやり取りをドア付近で見守り、大きなため息をつく。

「こんなことなら和くんの家に泊まればよかった」

ボソリと呟いて、「マコちゃんがぐれちゃったー」と切なそうな父親の声を背中で聞いてリビングを後にする。

向かった先は自室だった。

電気もつけないでベッドにダイブし、そのまま瞳を閉じる。

「……明日は和くんと海」

遠足前日の小学生のように瞳を閉じても、楽しみから頭が冴えて睡眠は全くない。

旅行先での妄想をしては「うへ、うへへへへ」と気味悪い笑い声をあげる西尾真琴だった。

\*

\*

森澤和人と睦月が喧嘩した頃と同時刻の石井家。

コタツ机に二人の青年が肘をついて頭を抱えていた。

一人は小太りで家の住人である石井直人。もう一人は重度のアニメオタクである金田祐輔だった。

「これは難題だ……」

額に汗を流し険しい表情で石井直人が呟く。

二人の視線の先にあるのはタイムスケジュール表だった。

旅行前日になって今更？ そう思うが、これは普通のタイムスケジュールとは一味違う。チラシの裏に書かれてあるが、そこにも達筆で「恋愛スケジュール」と書かれている。

なにせ黒崎真奈美と釜谷美羽を攻略するため、恋愛シミュレーションゲームを愛す金田祐輔の力を借りて作っているタイムスケジュール表なのだ。

現実の世界において、ゲームのように上手くいくほど甘くないのは先日プールで学んだのだが、それでも「ひと夏のアバンチュール」を実現するために行動していた。

最初は景気よくお互いの意見を合わせながら書いていたが、夕食と入浴が終わった所で鉛筆がピタリと止まったのだ。

「なあ、ここの自由時間はどう有効活用すればいいと思う？ 意見を聞かせてくれ」

「うむ……。昼間にどちらかと急接近できたら浜辺に誘えばいい。」

だけど微妙な仲で誘うと失敗に終わるから、ここはベタにどちらかの一室に集まって遊ぶのが手じゃないか？」

「だがそれだと一度きりの深夜が……」

「慌てるな。そこで先走ったら失敗に終わるからな。ゲームの世界でもそうだろう？ 恋愛ポイントが不足した状態で告白はできない。皆と一緒になくても慌てず騒がず、下心がないことを理解してもらった上でこっそり誘えばいいじゃないか」

「……そうだな。それでいこう」

ようやく夕食後のスケジュールが埋まる。

「次も難題だぞ……」

夕食も終わった、自由時間も終わった、次はいよいよ就寝の時間となっている。

下心全開の石井直人にとって、これが何より重大な時間帯であり、そして「ひと夏のアバンチュール」を実現させる通過点だと思っている。これが失敗に終わる。イコール旅行の失敗とも言えるほど彼には重要な事だった。

こんもりと太った鞆を尻目に鉛筆を持つ手に力が入る。

「部屋割だが、ここは男女混合でいこうと思う」

額に薄らと汗を浮かべ、どんな妄想をしたのか心なしが息が荒げて石井直人は呟く。

友人の異変に気付いた金田祐輔は机を叩く。

「それはやめろ！ それこそ死亡フラグだ！」

そして静寂が部屋を包む。

たつぷりと十秒ほどの沈黙に終止符をうつたのは石井直人だった。鉛筆を机に置いて指をからませ、その上に二重アゴを乗せる。

「……お、俺だって薄々感づいている。俺にはひと夏のアバンチュールは無理だ……。言いたくはないが、俺には女性の免疫どころか誰かに好意を寄せられた経験がない。女性を目の前にしたら息が荒くなって、ついつい下心が出てしまう。頭の中だって真っ白になる……なあ、こんな俺に彼女ができるかと本気で思っただろう？ だ

から俺は……ひと晩のアバンチュールに変更しようと思う」

「い、石井お前ってやつは……」

その言葉に心打たれた金田祐輔は薄らと涙を浮かべる。

「それにさ、西尾様と琴田さんも森澤と一緒にの部屋がいいだろ？」

俺のためにも、そして美しい彼女らのためにも、これは現実にした  
いと思う。……そう思う俺は間違っているか？」

「お前ってやつは……このバカ野郎。お前は何も間違っちゃいない  
！俺達で実現してやろうぜ！」

グツと涙をこらえて金田祐輔は石井直人の手を握る。

ここでもまた男同士で茶番が繰り広げられていた。

「そうと決まれば部屋割の時に何て言って説得するか考えようぜ！」

\*

\*

森澤和人と睦月が喧嘩した頃と同時刻の村井家。

「ぐふ、ぐふふふ」

ここでもまた文字で埋め尽くされた紙と睨めっこする青年がいた。  
先ほどは「恋愛スケジュール」に対し、こちらは「和人奪還計画」  
と題されていた。

平たく言えば恋敵である睦月と西尾真琴からいかにして、幼馴染  
の森澤和人を奪い取るかというものだ。

「ここ最近僕の出番がないのは二人のせいだからね。もう容赦はし  
ないよ……ぐふ、ぐふふふ」

そして不敵な笑みを浮かべる。

計画の全貌が書かれた大学ノートを手元に、間違いがないかも  
う一度チェックする。

その計画を簡単に説明すると、電車の中でペアシートに座る。ホ  
テルについたらベッドをくつつけ、誰にもその場所を取られないよ

うに荷物を置く。着替えて海に行ったら女性陣がくる前に海に連れ込む。入浴の時は邪魔者がいなくなるため攻めあるのみ。食事の時は森澤和人を壁際に誘導し、その隣にちゃっかりと座る。食後の散歩に誘って浜辺を二人並んで歩く。就寝の時はベッドがくっついていするため、さりげなく森澤和人のベッドに転がり一緒に寝る。

そんな感じの計画だった。

本人は必ず成功すると思っているが、女性が好きで何があっても男に恋する森澤和人ではない。絶望的な計画とも言える。

だが美化された未来予想図は止まる事を知らず、「これで完璧だ」と何度も頷くのであった。

「おっと、カメラのチェックもしないと！」

荷物とは別に用意した少し大きめのカメラバックの中を見始める。そこには立派な一眼レフカメラを始めとし、水中でも撮影可能なデジタルカメラ、さらには水陸両々のビデオカメラまでもがあった。将来の夢がカメラマンとか、写真に収めるのが好きな訳ではない。

森澤和人を撮影するのが好きなのだ。

ただそれだけのために買いそろえたカメラである。

「うん、カメラの方も準備は大丈夫そうだね。これでまた和人との思い出が作れるよ」

コンコンコン。

嬉しそうに頷いている時に、突然部屋がノックされる。それから直ぐにゆっくりと部屋のドアが開かれる。

まだまだ身長が小さい村井ミクが背伸びをして、ぶら下がるようにドアを開けている姿があった。

「貴明お兄ちゃん。ミクね、ママと一緒にお守り作ったの！」

嬉しそうにはしゃぐ村井ミクの手には、確かに二つのお守りが握られていた。

「勝手に部屋に入るなんていつも言っているじゃないか」

そんな妹を尻目に苛立ちで顔を歪め、村井貴明は文句を言う。

どうしてここまで実の妹を邪険にするのかといえば、やはり森澤和人が村井ミクを溺愛している所にいきつく。

普段はニコニコと誰にでも笑みを浮かべるが、森澤和人が絡むとあからさまに態度にでてしまうのが村井貴明である。もちろんそれは実の妹も例外ではない。

そんな兄を気にすることなく村井ミクは兄の元に駆け寄る。

「和人お兄ちゃんにもあげてね！」

母親がミシンを使ったため、見た目は本格的なお守りだった。お守りの中央には「たかあきおにいちゃん」「かずとおにいちゃん」と、母親の手を借りながら不慣れながらも一生懸命書いた文字がある。

これを森澤和人の元にしっかりと渡れば、それはもう大喜び間違いなしの一品だった。

用はそれだけだったようで、お手製のお守りを渡すとさっさと部屋から出て行く。

「……やれやれ、明日の朝は僕が霞むじゃないか」

そうは言うものの、しっかりとカメラバックにお守りを結ぶ兄だった。

それぞれの想いを心の中に秘め、夜が明けて行くのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2075f/>

---

12粒のラブソディー

2010年11月27日20時10分発行